
旅立ちはある日突然に

密林系紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅立ちはある日突然に

【Nコード】

N3689P

【作者名】

密林系紳士

【あらすじ】

ある日気がつくとその処はモンスターハンターの世界。けれど主人公は記憶を失っていて……。しかも（裏技で）ハンターとして実力を付けたと思ったら今度はさらに異世界に召還。俺の人生はどうなってるんだ！という主人公の魂の叫びをお聞きください。

概ね勢いだけで書いてますので読みにくい上に更新が不定期になるかと思いますが生暖かい目で見守ってください。

あるものより無いものの方が重要だ！(前書き)

処女作ですがよろしくお願ひします。

あるものより無いものの方が重要だ！

初めての思考は、ここは何処だろう？という疑問符。

俺は今、大自然の真っ只中にいる。

実に緑が豊かで眼によさそうだ。

太陽は燦々と、草木は生い茂り、遠くには山々と滝なんかも見える。しかし俺が知る限り、登山の趣味は持っていないなかつたはずだ。うん、俺はそんな男だった。

現実にそんな場所で横になっているのだが、しかし俺はこんな場所を知らない。

ああ、夢か。

そう結論することが出来ないのは、やたらと強い日差しにじりじりと皮膚を焦がされているからだ。

たしか、今つて冬じゃなかつたっけ？

だとするとここは日本ではない可能性が高い。

現実逃避に失敗して立ち上がると視界の隅になにか動く物が見えた。すわドツキリかと（希望的観測により）思い、そちらを向くと、今度は絶句する破目になった。

灰色を基調とした、ずんぐりとした体格の、インド象くらいの大きさのなにか。

放熱板（だっけ？）の無いステゴサウルスの頭に後ろに伸びた角を足せば、こんな姿になるだろうか。

数匹のそれが、俺の眼前で草を食んでいた。

幸い、大人しい気性の生き物らしく、俺が視界に入っても近づかないためか、あまり警戒していないようだ。

実に癒される。

草食動物特有の落ち着きというか、攻撃性を感知させない佇まいがどうにも見ているものを癒してくれる。実際はそう優雅なものでもないんだろうけど。

ていなかった。

とはいえ、ジッポライターだけでもあったのはありがたい。

それ以外に何か認識と違う部分とは言えば・・・

せいぜいが控え目ながらもその存在を主張する胸と、

やたらと喪失感のある股間と、

あとは短くなったような気がする手足くらいか。

・・・はい？

今、何かに気がついたような気がしたが気のせいだ。気のせいのはずだ。気のせいであって欲しい。

そう思いべつとりとした冷や汗をつつ、右手を胸に、左手を股間にやり、意を決してまさぐってみる。

上（胸）・・・ある

下（股間）・・・ない

かつて、腋臭の拳銃使いは言った。あるはずの無いものがあるのは問題だ。しかし、『それ以上に無くなつちまったものが重要だ』と！

「なんじゃこりゃー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！？」

まさかのセカンドインパクトに、俺はついに意識を手放した。

途中、何度か目をさましてはいたが、その度に夢から覚めるために自分で自分を気絶するまで殴っていた。

現実を認めたくないがための行動だが結局、夢から覚める前に大きな川やお花畑が見えてきたので自重した。

太陽はもう真上である。

ふと、冷静に自分のおかれている状況を省みてみると、非常に不味いものなのではないだろうか、と思えてきた。

記憶喪失 今は仕方無い

性別変化 今は仕方無い（血涙）

現在位置不明 かなり危険

見渡すかぎり人や民家なんてものは存在しない。それが、不便だか

ら、という理由だけなら（それはそれで不味いのだがまあともかく）
まだしも危険な何かしらの理由があるのだとしたら自分はその中に
無防備な状態でいることになる。

ただの人間が肉食動物の集団の中に入れられたら、結果は火を見る
よりあきらかだろう。

・・・とりあえず、崖の遙か下の方に川が見えるから、そこから下
流を目指そう。運が良ければどこかの集落を見つけれられるだろう。
そんなことを考えていると、進行方向の向こうからステゴサウルス
もどきが三匹ほどやってきた。あれに乗れたら楽なだけだなあ、
でも野生動物（恐竜の可能性は意図的に無視）を乗りこなすのは無
理かなあ。

思考は一瞬影がさしたことで中断させられた。

周囲を見回すが何も変わったところはない。ただ、ステゴサウルス
もどきが慌てて踵を返している。大きな動物がちょこちょこ足を
動かしている姿は和んだが、しかし違和感がある。

先刻、増設された危険感知器が警報を鳴らす中、はたしてそいつは
やってきた。

100メートル以上の上空から一気に急降下したそれは、全長で2
0メートルを超える大きさの翼を生やした爬虫類、所謂、竜の姿を
していた。

焦げ茶色の甲殻を纏った巨大な翼。

おそらくは得物を殺傷するためであろう、筋肉の発達した足と硬く
て鋭そうな爪。

そしていかにも「自分、肉食です。」と言わんばかりに凶悪な面構
え。

足の下敷きにされたステゴサウルスもどきはあまりの衝撃に絶命し
たようで、ランチになっている。

さて、それを見ている俺はというとショックのため腰を抜かしてい
た。失禁しなかったのが奇跡だ。

幸い、竜は獲物に食らいついており、俺には気付いていない。

視線を背けるのが怖いので、竜のほうを向いたままズリズリと腕の力だけで後退りするが、ここで問題が一つ。どうにも、腕の力だけで進んでいるせいか、遅いのだ。対して竜は物凄い勢いでランチを食べている。

それでもなんとかが背の高い樹の生えた茂みの近くまで来たとき、ふと竜がこちらを見ていることに気付いた。

鼓動が、胸を突き破りそうになるほど速くなる。口がカラカラに渴き何かアンモニア臭がする、と思ったら失禁していた。

竜は威嚇するように口を開け、数秒間咆哮をあげるとその健脚を生かし、こちらに走ってきた。

ああ、俺はデザートなのね、というのが気絶する前の最後の思考だった。

いきなり記憶喪失になって知らない場所にいた挙句、性転換している、なんてどんな層を狙った物語なんだろう？

そんなことを考えながら目を覚ました。

太陽の位置からして一時間ほど意識を失っていたらしい。

次の瞬間には視界一杯に竜の頭があっただのもう一回気絶しそうになっただけ。

竜は俺が目を覚ましたことに気付くと、俺の腕よりも太い舌で舐めてきた。

こうなると、半ば観念して、喰う前にテイステイングがこのヤロー、と思い唾液でべとべとになりながら竜を睨みつけた。

・・・契約

奇妙な声が、頭の中に響いた。周囲を見回すが、人はいない。

「誰かいるのか？ いるんなら人肉ステーキ一歩手前の俺を助けてくれると嬉しいんだけど？」

食べる、ない。契約する、欲しい。

「・・・まさか、お前が喋ってるわけないよなあ。アッハッハー」

舐められるのもだいぶ慣れてきたので竜に話掛けてみる。どうにもおかしい画だが俺を取り巻く状況が、おかしくない部分のほうが少ない、という事実は無視しておこう。

しゃべる、いる。助ける、欲しい。

「どっちかかっていうと俺の方が助けて欲しいんだけどな。まあ、喰わないでいてくれるなら何だってするけど」

契約する、欲しい。

「具体的にはどうすればいい？」

手、頭当てる。自分のもの、思うだけ

なるほどねえ。いかにもファンタジーだな。そんなどうでもいいことに感心しつつ、素直にザラザラとした表面の頭に手を当て、この竜が自分の所有物だと念じた。

なにせ喰われたくないので必死である。

竜に触れている左手の甲にどこからともなく赤い光が集まったかと思うと、十字架に牙を足したような意匠の形になり、次に霧散した。

「今のは、なんだ？」

切れぬ、絆。分かってぬ、願い。その、証

よくわからん。

というかこいつはなんで片言の癖に表現が詩的なんだ。

だが、取りあえずこの竜は俺を喰う気は無いらしい。

ため息をついて座り込んだ。

これからどうしよう？

やれば出来る子なんです！今まで充電してただけ。（前書き）

多分4話くらいでモンハン編は終了すると思います。ゼロ魔編はそこからになりますのでそれまでお付き合い頂けたらと。

やれば出来る子なんです！今まで充電してただけ。

俺は今、ポツケ村というところに来ている。

雪山に近いところにあるらしく、村の所々に雪の積もった部分があり、気温もそれなりに低い。

あの後、レウに（いつまでも竜、と呼んでいたら 名前、付ける、欲しい とあの強面で脅迫もといお願いされた。）一番近い人間の集落まで連れてきてもらったのだが、当然そんな寒いところの上空をパジャマ一枚で飛ぶことに、人間の身体が耐えられるはずが無い。そう気がついたのはすでに離陸した後である。

レウに着陸してもらおうように頼んでみたが、寒さで上手く喋れなかったせいか、通じなかった。

結局村の外れにレウが到着した頃には、俺は朦朧とする意識と凍傷寸前の身体で、何故か傍にあつた鎧と武器一式と一緒に村人に発見されることになった。

すぐさま村人は風呂に入らせたり風邪を引いた俺を看病してくれたりと、色々とお世話になった。不覚にもホロリときそうにもなった。因みにレウは村人には見つからなかったらしい。

寝込んでいる間も、頭は通常通り働いていたので村人と話をして知つたのだが、レウの種族であるリオレウス、という飛竜は所謂害獣であるらしい。

言われてみれば至極納得できる話であるが、事実上野放しの、飛行能力のある超大型肉食獣なんてどうしようもないだろう。

尤も、人間も完全に放置しているのではなく、モンスターハンターと呼ばれる狩人たちが様々な相手からギルドを通して討伐依頼を受け、駆逐しているらしい。

ポツケ村にもそのギルドがあるらしいので、見つかったいたら狩られていたかもしれないことを考えると、姿を消したのはベストな選択である。

契約云々のことについてはまた今度あったときにも聞こう。そのあたりは村人も知らないらしく、皆一様に分からない、と言っていたし。

「あらく来てくれたのねえ。」

「ふむ、きてくれたかの。」

集会所に入った俺を出迎えてくれたのは、ギルドマネージャーと村長だ。

見た目は異様に福耳な妙齢の女性と、肌色のヨードだが2人ともこの村の実力者である。

さて、何故俺がこの2人に呼ばれていたかというと、理由は簡単。

この村のギルドに所属していないとはいえ、持ち物からして露骨に狩人だと思われる（不思議なことに、俺と一緒に発見された鎧は俺の身体にぴったりのサイズだった。）人間が、半死半生の体で発見されたのだ。それは村の近くに危険な害獣が生息しているからに他ならない。しかし話を聞こうにも本人はショックで記憶喪失（ということにしておいた。いくらなんでも異世界から来ました記憶喪失の元男です、なんていうわけにもいかないし）になっている。抜本的な対策が無い以上村の防備を行うことになるが、その場合足手まといにならないハンターは一人でも多いほうがいい。その為、記憶を失った俺を鍛えることでそれに充て、また、途中で俺の記憶が戻った場合はすぐさまその相手を万全な状態で討伐することが出来る。

どちらに転んでもこの村に損は無い。

勿論、記憶を失った人間がフラフラと生きていけるほどこの世界は甘くない。

一応、ハンターが嫌なら、女性であることだしギルドの受付嬢なんかも募集中よ、とは言っていたが。

「早速ですがあれから色々と考えてみましたが、やっぱりハンターになります。」

「問題は無いが、理由を聞いてもかまわんかね？」

「自分の目でこの世界ってものを見てみたいんです。そのためにはハンターになるしかないって。」

正確には、世界を回る職業は一つではない。

行商人や旅芸人といった職業はもともその仕事のために世界中を放浪している。だが、元手ゼロで何の技術も無い人間が出来ることはといえばハンターくらいに限定されるのも事実。

「残念だわ。せつかく可愛いのに。考えなおさない？お給料奮発しちゃうわよ。」

ギルドマネージャーが言うが、俺は苦笑いを返すのに留めた。

そう、今の俺の容姿はそれなりに人目を引くものらしい。別段謙遜しているわけではないが、本人としてはよく分からない、というのが本音ではあるが。

「それでは、お主は正式にポケケ村のハンターとして働く前に訓練所に通ってもらうぞ。これも慣例じゃて。なに、お主ならすぐにも教官のお墨付きがもらえるじやろう。」

村長はそういうと、コートの中から紹介状を取り出した。これを見せれば、訓練所を利用できるらしい。

俺は2人に礼を言うと、集会所をあとにした。

「よく来たな。ここがポケケ村訓練所だ！ここでハンターとしての基礎や武器の扱い方をみっちり叩き込んでいくといいだろう。」

紹介状を見せると、教官は開口一番そう言った。

教官は暑っ苦しそうなオツサンだった。だが、その身体つきは完成されており、彼が熟練の腕前を持つことを伺わせる。

「それでは早速訓練を開始するか！ついて来い！」

挨拶をする暇も無く、教官はすぐに馬車の方へ手招きした。どんだけ忙しいんだよこの人。

馬車に乗ると、少量の水と食料（それでも2人の人間が3日は食べることが出来る程度は量がある。）を積んで程なく出発した。

「紹介状では記憶を失っている、とあったがどうなのだ？その、狩りについては。」

「いや、どうにも覚えがないんで完全な初心者だと思ってもらえるとは有り難いです。この装備だって分不相応な感じがするし。」

「ふむ。まあそう思うのも無理はないかもしれんな……。レウス系統一式にバーンエッジ。下位クエストで作られる装備とはいえ、充分に一線級の代物だ。今の見習いの状態ではそう思ってしまっても無理は無い。」

「これって俺の持ち物にしても良かったんですかね？持ち主不明ってことで有耶無耶になってますけど。」

「問題は無いだろう。それに、装備に位負けしているように感じるのならお前自身がハンターとしての実力をつければいい。そうすれば自然と馴染んでくるものだ。」

所々妙に力が入っているように感じる部分はあるが、面倒見のいい性格らしい。

その眼は優しげに俺を見守っている。……のだが微妙に湿度の高さを感じなくも無い。

なんなんだろう、これ。記憶には無い感覚だが。

やや居心地の悪さを感じながらも、その後一時間ほど馬車は走り続け、目的地である雪山の麓に到着したのだった。

ここを訪れたハンターが使用するベースキャンプで荷物を降ろすと、すぐさま訓練が始まった。

本来のクエストではチームを組まない限り、基本的に一人で挑むことになるのだが、今回は訓練であるため、教官がついて一緒に回る。青いボックスに入れられた支給品を取ると、湖の近くまで移動した。ここはまだ麓なので水は凍り付いていないが、近くには雪山がある。小一時間もそちらに進めば一面銀世界だろう。

さて、教官に出された最初の仮題は「生肉を二個手に入れる」だ。

そして目の前には大型の草食動物、イメージとしては鼻の無いマンモス、といった感じの”ポポ”がいる。

ハンターになることを決意してここまで来たものの、狩人というのは狩る獲物がいてこそ成り立つ職業だ。当然、生き物の命を奪うことが必要になる。

別段博愛主義や動物愛護上等を気取るわけではないが、又ルイ21世紀の日本で生きてきた人間がいきなり動物を殺せ、と言われて嬉々として実行できたら、それは単なる犯罪者予備軍だ。

だが、ここで躊躇しては何処にも行くことは出来ない。

結局のところ、したいこと、そのためにしなければならぬことが解っていてそれを優先するのは自明なのに、こうしているのはエゴでしかないのだろう。こと、この弱肉強食の世界においては。

アプノトス（ステゴサウルスもどきの名前）と同じく、人間を全く警戒していないポポの前まで来ると、片手剣を振りかぶった。

そのまま振り下ろし、ポポの頭部を深く深く抉る。

バターを斬るようにほとんど抵抗が無いまま片手剣は地面に食い込み、肉が焼ける臭いが漂いはじめると、ポポはようやく自分が死んでいることに気がついたかのように倒れこんだ。

二、三回痙攣すると、完全に沈黙した死骸に、今度は切り分け用のナイフ（といっても日本では確実に銃刀法違反で捕まる大きさである）を食い込ませる。

ナイフは思ったよりも抵抗が少なく入り込み、肉を切り分けていく。普通、いくら切れ味の良いナイフだとしても生き物の肉を切り離すのはそれなりに苦勞するはずだが、今の俺の身体はそれなりに筋力があるらしい。

大きな肉の塊を二つ取り出すと、抱えて教官の元に持っていく。教官は「よくやった！」と言ってその場で肉を焼き始めた。

そのうち「上手に焼きました〜」という教官の声とともに骨付き焼肉が完成したが、その掛け声は何ですか？と尋ねるとどや顔で

「様式美だ！」

と言っていた。あれは俺にもそれを期待する視線だったような気がしたが、そうですか、と返事をするだけにした。

それから焚き火をかこんで教官と一緒に昼食にした。
肉がやたらとしょっぱかったような気がしたが、涙は、出ていなか
ったと思う。

伏線を回収できるかどうかは運しだいです。(前書き)

妙に長くなりました。本当はこの三分の二くらいの予定だったんですけど。
アレー？

伏線を回収できるかどうかは運しだいです。

「せいっ！」

掛け声とともに片手剣をランポスに叩きつける。ジュツと音がして、ランポスの頸は半ばまで切り裂かれ、絶命した。

すぐさま周囲に散らばっている数匹の死骸から剥ぎ取りを始めるが、時間が経過したため肉も皮もクズクズになって使えなくなったものもあつた。

鱈みたいな魚と同じく、死ぬと体内の分解酵素のはたらきで自分自身の身体を腐敗させてしまうのかもしれない。だとしても数分でそうなるのはどう考えても異常な気がするが。

「フー……。疲れたー。」

ため息をついた後自分のいるエリアのランポスを駆逐した俺は、地面に座り込んだ。

この世界に来てからもう一ヶ月が過ぎた。最初はハンターの仕事に抵抗を感じる部分もあつたが今では下位クエストを順調にこなしている。適応というか、妥協というか。自身の心のうちで何らかの変化があつたのか、今は生き物を殺す、という行為を忌避する感覚は無い。

その変わり、考えさせられる部分もある。

生きるといふ行為に対する真摯さ、といふべきだろうか。

ヒトは、簡単なもの、安易なものに対して価値を認め辛い。見逃しがち、といふべきかもしれないが。

スーパーで買ってきたパック入りの肉と自分の手で生きている動物を仕留め、部位ごとに解体してさらに食べやすいサイズに分解した肉は両者が客観的に同じものであつたとしても、受け取る価値はまるで違う。

手間がどうかという話でもない。

文字通り生を実感する、という感覚。

今でも元の世界に帰りたとは思っているが、もしもこの世界で生活をしていたらこんなことは考えることもなかったかもしれない。まあ、未だに変える方法すら分からないんだけど。

それはともかく、今回の依頼はある森丘で目立ってきたランポスの群れの討伐である。鳥竜種、と分類されるこいつらは、その小さな体格に対して、高い繁殖力と群れでの狩りの特徴とする。

数の力というものはけっして馬鹿にならないもので、実際ポツケ村にくる行商人の中にも、襲われて殺されかけたことがある者が少なからずいる。

もつとも、こういつた動物は群れが大きいうちは好戦的だが、そうでなくなってくると、逃げ出してしまふ、という習性があるので、出来るのは精々が間引きくらいになってくるが。

勿論、ギルドもそのあたりを見越して依頼を取ってくるのだろう。ふと、そういえばリウと会ったのもこんな場所だったなと思った。

あれつきり全く会わないので何処に行ったんだか分からない。取りあえず、リオレウスの討伐依頼がきたら本来受けられないランクのものであっても教えてもらえるように頼み込んでいたので、狩られたわけではないのだろう。

「・・・まったく絆だとか言ってくせに何処行っちゃったんだか・・・」

あの時、赤い紋章のようなものが浮かび上がった左手を翳してみる。今は手甲につつまれているせいで見ることはできないが、赤い紋章はあれつきり現れない。

それが、あの竜との距離が少し開いた証明のようで少し寂し・・・

呼んだ？

アッレー？

なんだか聞き覚えのある声が、また頭の中に。

周囲を見回すが、それらしき姿は無い。当然、上空にも影は無い。よし、空耳だ。

最近忙しかったからなー。明日は休もう。そうしよう。

レウ、心配する、した。

おかしいな！。また空耳が聞こえたぞー？

「レウ、何処にいる？まさか、アレか？遠く離れていても契約した相手とは会話ができるテレパシー的な効果があるとかか？」

レウ、近く、いる。とても、近く、見てる。

話が平行線です。

「あー、具体的に何処だ？少なくとも俺にはお前の姿が見えないぞ？頼むからキミの心の中で生きているとかイタいのは無しな。」

レウ、着る、いる。持つ、いる。

ふむ。言っている意味がよく分からなかったが、レウの身体の構造からして、何かを着たり持ったりするのはほとんど不可能だ。つまり『着ている』ではなく、『着られている』という意味で言われた可能性が高い。

つまり、この鎧と剣がレウということか！。アツハツハ！。確かに手に入れた経緯からすると納得だ！。

「マテマテマテ。レウさん？貴方が鎧で剣が貴方で？何言ってるんだ俺は？いや、違うレウ、冗談はいいから出て来いよ。」

いいの？

「いいから出てきてくれ。そろそろ俺の精神耐性がいっぱいいっぱいだ。」

実際、誰も見ていないと思って自分の家でしていた奇行の数々を誰かに見られていた、と言われるのは心臓に悪い。した俺も悪いんだけど！

そう考えていると、突然全身から赤い光が放たれ始めた。

後から考えると、それはスロー映像のように引き伸ばされていたが、実際はとても短い時間であったのだと思う。

赤い光が焦点を結ぶように、一箇所に集まり、それと同時に鎧や剣が風化するように形を失っていく。

そして焦点の先には、大地を踏みしめる巨大な足が。

航空工学や揚力なんて言葉を無視して物理法則を吹き飛ばす翼が。

ありとあるゆる動物から『威圧感』『捕食者』といった単語を抽出して、さらに煮詰めたような頭が。それらの全てが集まって一頭の威風堂々とした火竜の形をとっていた。

対して、俺はアンダーウェア姿で頂垂れていた。

つまり、俺の奇行は全て見られていたというわけか。

普通に考えて、物凄いことがおきていることは理解できるが、しかし心的外傷になりかねないショックを受けた今の俺には、外国の株価並みに興味がわかない。

なんとなく手鏡でアレの中を覗いてみたり。なんかこう、男だったときの違和感から胸を触ってみて我知らず「ンツ・・・」とか言っってしまった。股間の喪失感から突然夜泣けてきたこととか。

そんなこと全てが・・・。

ぐわーーーー！！死にたい！

大丈夫？

大丈夫じゃないのは概ねお前のせいなんだがね。

「な、なんとかな・・・。それで、なんでお前はずっと鎧と剣になっただんだ？」

レウ、契約、する、した。そば、いる。守る、役、立つ。

言っていることはじつに可愛いのだが、プライバシーという概念を知ってください。今度から使用時以外はボックスに入れておこうか・・・。それとも他に何か方法は無いのだろうか・・・。

「あんな、レウ。人間というのは常時見られていると落ち着かないものなんだ。特に、それを正しく認識してしまうとな。だから、鎧になる以外で俺の傍にいられる、目立たない方法は無いか？」

レウは、小首をかしげると、鼻先を俺に近づけてきた。小鳥なんかがやれば愛らしいんだろうが、こいつがやると、メンチを切ってるヤーさんの1000倍怖い。

絆、証、考える。共に、在ること。鎧、成る、同じ。

共に、あることねえ。なんだろう。俺とレウが同じ体を共有してい

るようなものだろうか。

まあ、こいつが俺に嘘を言ったことは無いから、多分本当のことなんだろう。

目をとじて俺とレウが一つの器の中に共生しているイメージを作り上げていく。

器は俺を。

中身にレウの入れる隙間を作って。

しかし決して自分という形を失わないように。

目を、開ける。レウの姿は何処にも無く、そのかわりに契約したときに浮かび上がった十字架に牙を足したような意匠の赤い光が、左手の甲にあった。

「レウ？」

何？

「今、どんな感じだ？視覚とか聴覚とか所謂五感は？」

共有、できる。しない、思う、出来ない、なる

ふむ。それならプライバシーの問題は解決できるか。しかし、そうになると、一切の感覚が無い状態でレウを放っておくことになる。それは忍びない。

「五感の共有を切ったらどうなるんだ？お前の感覚が無くなるのか？」

眠い、なる。共有、する、目、覚める。

「なるほどねえ。なら大丈夫か。他にはこの状態で変化することなんかは無いのか？」

身体、力、上がる。ただし、契約する、数、多い、なる、制御、難しい。

「へえ！そりゃあ凄い・・・って契約ってお前以外とも出来るの？」

出来る。人間、以外、知性、ある、生き物。

てつきりレウだけが特殊の竜で、たまたま俺がそれに選ばれた（改めて考えるとそれはそれで大概アレだな・・・）んだと思っていたが、契約は俺の持ち物なのか。

ということとはウチで働いてるゴジロー（アイルー）やムサシ（メラルー）なんかとも契約できるのか？帰ったら試してみよう。

何か、来る

今は俺と五感を共有しているんで、俺が考え事をしていてもレウが教えてくれる。超べんりー。だんだん人間離れしてるような気がしないでもないが。

恐らくは1000メートルほど離れたところだろうか。上空を飛んでいる姿がよく見える。

ピンク色の鱗に包まれた身体に、青い翼膜。黄色い嘴の真ん中を縦断するようにそだけ赤い模様がある。

村長に聞いたり、資料から集めた情報からすると、あれは怪鳥イヤンクック。

俺の実力なら、もう少ししたら討伐することになるであろう、飛竜だ。

「なあ、レウ。あいつも契約できるんだろ？」

出来る、いる。ただし、相手、野生、敵意、ある、駄目。

「ふーん？でもお前も野生だったのに出来ただろ」

レウ、特別。いい子。

「まあお前がいい子なのは認めるけど、なら野生の敵意を持つてるヤツと契約するにはどうしたらいい？」

相手、自分、強い、思う。戦う、屈服、契約、出来る

成程。そうこうしているうちにイヤンクックが、一本だけ生えた木の向こうに着陸した。周囲を警戒しているので、見つかるのも時間の問題だろう。

「じゃ、最後の質問だ。お前が協力してくれたら、あいつを屈服させられるかな？」

余裕。

レウのいい返事と共に俺はスタートダッシュを切った。

速い速い。こっちに気がついたイヤンクックが驚いてるよ。

そりゃそうか。普通、人間はこんなスピードじゃ走れないもんな。

・・・ってあれ？

こんなスピードで走ってどうやって止まるんだ？

止まる、無いと、前、崖。

イヤーーー！！！！

俺はスライディングの要領で倒れこむが、かなりスピードがついていたようで、10メートル以上を滑ってようやく止まった。崖まであと1メートルくらいだ。

助かった〜と生きていることの素晴らしさを改めて噛み締めていると、イヤンクツクが、頸をかしげて俺を見ていた。

微妙に気まずい空気があたりをつつむ。

救世主はレウだった。

今、攻撃！、今！

よし来た！と思いつつ、腰をさぐる・・・が無い。片手剣が無い。

あれ？バーンエッジは？

ごめん、アレ、レウ、一部

そうでしたー！！というかお前も忘れてたっことは焦ってたんだな。

俺が動いたことで、イヤンクツクも硬直が解けたのか、嘴を何度も振り下ろしながら突進してくる！

だがその頃には俺は、崖とは反対の、山の岩肌近くまで逃げている。それに気付いて追ってくるが、無手のまま距離をつめて、あるいは離して観察を続ける。

5分ほど経ったころ、観察が終了した。少し距離をとり、レウを鎧と武器として呼び出す。

防御、高い、なる。かわり、力、戻る、いい？

「だいじょーぶだ。あいつのパターンは理解した。」

そういうと、俺はイヤンクツクに斬りかかった。嘴に当たり、少し表面を削りながら火の粉をあげる。さすがにランポスみたいに簡単にはいかないか、と思いつつ前転し、股の間を抜けて非難した。立ち上がると、さっきまでいたところに向けて火の玉を吐き出してい

た。当然、その無防備な背中に斬り付けつつ、右半身の方へ移動する。後ろに回りこまれたことを知ったヤツは、今度は身体を回転させて尻尾を振り廻す、が安全な位置に逃げているためまるで当たらない。

片手剣の真髄は、ヒットアンドアウェイにこそある。そういう意味で、行動のパターンを読まれることは、実に俺を有利にしてくれていた。

しばらく斬りつけていると、とうとう音を上げたのか、イヤンクックが飛び立つ体勢に入った。おそらく、そのまま逃げるつもりだろう。そして、それが正解だ。他のハンターが、相手ならな。

「レウ、頼む。でも殺すなよ」

鎧が解け、空の王者が再生する。イヤンクックは突然現れたレウに度肝を抜かれた様子だったが、それでも必死に逃げようとしていた。尤も、体中に負傷を負ったイヤンクックと万全な状態のリオレウスでは、やはり分が悪かったのか、ほどなくレウは、イヤンクックを連れてきた。足で捕まえて。

どう見ても瀕死の重傷を負ったイヤンクックに、話しかける。

「お前、このまま死にたいか？」

死ぬ、嫌。従う。

ありや、凄く聞き分けがいいな。

まああんな目にあえばそれも当然か。今だって妙な動きをしないようにレウに踏まれてるし。

レウの時と同じように口に触れると、こいつが自分の所有物だ、と念じる。

イヤンクックは赤い光になって俺の左手首に収束し、円に縦線を一本加えただけの、簡単な紋章になった。

まあ、一軒落着かな、と思った瞬間、依頼の制限時間をオーバーしかけていることに気付き、レウと同化してベースキャンプまで全力疾走することになった……。

「都合主義？いえいえこれがデフォルトです。」（前書き）

連休中にどうにかここまで書きあげました。明日からは更新が遅くなると思いますが、どうか見捨てないでやって下さい。

「都合主義？いえいえこれがデフォルトです。」

この世界に来てから、5年が経った。

とはいっても、俺は相変わらず元の世界に帰る方法が分からず、ハンターを続けている。

ギルドにおけるハンターランクは既に最高のG3になっているのだが、実際のところ、俺のハンターとしての評価はあまり良くない。

ごく稀に、という枕詞がつくが、俺が参加したクエストでは、何故か害獣の死体が見つからないことがあるからだ。

当然、成功報酬を貰うとき、もめることになるが、一応、害獣のものだと思われる大きな血痕が発見されたり、以降は近辺で同じ害獣の姿が確認されなかつたりで、黙認されている。

だが、そうなると損をするのはハンターが狩った獲物の死骸からさらに素材を剥ぎ取ることと利益をあげているギルドである。

俺自身、何度かその事情聴取を受けたことがあるが、その場合、「俺は倒せって言われたものを倒しただけですよ？その後のことは知りません」と言うだけに留めた。

尤も、ギルドマネージャーはそれで納得してくれたものの、他の既得権益を持つ連中は齒軋りをしていたが。

当然、俺の秘密をさぐる者も出てきて、わざわざクエスト中に尾行をする馬鹿（今思えば、あれはギルドナイツだったのかもしれない）もいたが、その場合は、普通に害獣を倒すか、撒いてから契約しておいたので、誰も知らない。

今では、大抵の連中は俺のことを黙認していて、なかにはポケット村の七不思議の一つに数えるやつなんかもあるが。

さて、俺が隠している契約の方はどうなっているのか、というと、バリエーションがかなり豊かになっていて数も40くらいになっている。

そのため、インナーウェアは妙に露出度の低いものしか着る事がで

きないが。

他にも、武器はイメージで、鎧は経験することで成長することが分かった。レウは最初、片手剣バーンエッジにしか成れなかったが、それによって大剣”炎剣リオレウス”やランス”プロミネンスピラ”になれることがわかつている。

また、契約した者たちもある種、生物という法則に従う存在から開放されたためか、本来ならありえないはずの、亜種へと進化した者もいる。

かくいうレウやイアン（イヤンクック）がそれで、二頭とも、現在は体色が蒼に変化している。根本的に種族自体が違うはずなのだが、本人たちは至つてのん気で「まあ、ありなんじゃない？」くらいに受け止めているらしい。いいのか、それで。

俺自身の変化は、というところに来た時点で結構若い年齢の身体になつていたせいか、この5年ですくすく成長し、手足も伸びている。いらん所まで成長したのは、動き辛かったり、現在も崩壊中の雄としてのアイデンティティの関係上、あまり嬉しくないのだが。

さて、そんな状態の俺が今、何をしているのか、というと走っている。

悲鳴を上げながら。

後ろから追いかけてくるのは、砕氷船もかくや、という勢いで足場の氷を砕きながら進んでくる真つ白な竜。

崩竜ウカムルバス。

俺が既に契約した、霸竜アカムトルムと対になる、と言われている、”この世を打ち崩す白き雪神”の異名をもつ飛竜である。

勿論こいつ自身、かなりタフで攻撃力も並の飛竜、どこるか古竜すら上回っているのだが、それ以上に厄介なのはこいつの生息している場所である。

雪山の奥にある凍りついた湖。

そんな場所を主な活動区域に選ぶモンスターは、他にはいない。

最初は雪山に生息するヤツを呼んで援護させようかと思ったが、崩

竜がガンガン足場を砕いていくところを見て、断念した。呼んでも溺れるだけだ。

かといって空から攻めようにもかなりレンジの長い氷プレスで射ち落とされそうだ。

苦肉の策としてガノス（ガノトス）を呼び出そうかと思ったが、本人曰く、気温のせいで活動能力が大幅に低下するらしい。

そういう訳で、今は逃げつつテオ（テオ・テスカトル）の変化した太刀”テスカ・デル・ソル”を使ってちくちく攻めているのだ。

足場自体はウカムルバスが砕いた端から、気温のせいですぐに凍り付いていつているので、人間がその上に乗って走るくらいは問題ない。

しいて言うなら、固まる前に湖に落ちれば、その時点でアウトなところらいか。

契約のことを他人に知られたくないがためにこれまでずっと一人で依頼をこなしてきたことが裏目にでたのか。

はつきり言って今の俺は焦っている。ギルドは失敗した依頼を、すぐに同じハンターに受けさせるほど無能ではない。下手をすれば、

俺以上に熟練の腕を持っていて、準備は完全にして、尚且つチームを組んだハンターがやってくるかもしれない。

そうなれば、いくらコイツでも討伐される可能性が出てくる。

猫の手も借りたと言って言うのにウチのアホ猫どもは家にいるし……ってあれ？

そういえば、契約って決して切れない絆だったっけ？

だとすれば、現状を打破する鍵になるかもしれない。

側転して氷プレスを避けつつ、意識を契約したアイルー達に集中していく。

『テストス、本日八晴天ナリ、じゃなくておゝい、お前ら。』

うにゃ？旦那さん？

声が聞こえたニヤ。

でも何処にもいないニヤ。

つまり空耳ニヤ。

きつと疲れてるせいだニヤ。もつとお給料上げてもらうニヤ。結論早えよ！そんな所だけ一致団結すんなよ！

『あゝ、キミたち？皆の大好きな旦那さんが今、絶賛ピンチなんだけど？』

あれだけ言ったのに準備を面倒くさがるからニヤ。

凄い力を持つてても使いこなせなきゃ、意味が無いニヤ。

完全な正論が心に痛い。とはいえ、

『助けてくれたら特別ボーナス出しちゃおっかな』

それを早く言うニヤ！

旦那さん、大丈夫かニヤ？

今すぐボクたちを呼び出すニヤ！

きつと旦那さんを助けてみせるニヤ！

ボクたちがいれば、何だつてできるニヤ！

ここまでがめついののどうかと思う。一応、全員の了承が出たので、紋章に呼び出す。鎧の下に現れた肉球の似た形の紋章を経由して、五匹を呼び出した。

「コジローとムサシはあいつの前方から引き付けてくれ。ヨシツネとベンケイは合図をしたらこの閃光玉を投げる。マサムネは俺と一緒に行動して、大タル爆弾で吹っ飛ばせ。」

「了解ニヤ！」「」「」

俺はマサムネと一緒にウカムルバスの右後ろ足に向かった。観察した結果、そこが一番攻撃され辛そうだ。当然、相手もこちらを気にして方向転換をしようとするが、コジローとムサシが歌ったり踊ったりして囃し立てているので、そちらを注意するために中断している。

その隙に俺とマサムネは右後ろ足の周囲に大タル爆弾をセットしていく。

最後の一個を仕掛けた頃、ようやくそれに気付いて、あわてて氷の中に潜り込もうとするが、俺の合図により、ヨシツネが閃光玉を投

げた。

それと同時に火のついた小タル爆弾をセットして、離れる。

閃光。

目を焼く光に、ウカムルバスが身体を擦っていると、右後ろ足の辺りで大規模な爆発が起きた。

足への今までに無いダメージと足場に使っていた氷が砕けたことで、巨体が崩落に飲み込まれていく。

まあ、まだ死んではいないだろう、と思っていると、案の定、数秒後に氷を砕きながら出てきた。

今度はベンケイに合図をして、閃光玉を投げさせると、「総攻撃！
！」と指示を出す。

猫たちが閃光の中、麻痺攻撃を始めると俺も、ヤマ（ヤマツカミ）の太刀”龍木ノ古太刀【神斬】”やゲーネ（ドスゲネポス）の片手剣”デスパライズ”、麻痺属性攻撃の出来ないマサムネ（アイルー白）とラージ（ラージャン）によるハンマー”きんねこクラッシュ”を叩きつけていた。

程なく、ウカムルバスの動きが止まる。全員に合図して、今度はいっぺんに十個以上の大タル爆弾を仕掛ける。

ウカムルバスはまだ動けない。まあ動いてももう一回閃光玉を投げさせるだけだ。

「さあ、どーする？もう一回痛いの食らってみるか？因みにあと5回は同じことが出来るけど？」

ウカムルバスは目の前にいる俺たちに対し、怒りを感じていたようだが、しかしさっきの爆弾にはそれなりに堪えていたらしい。俺のあと5回という台詞を聞いた瞬間、身体が麻痺以外の理由で緊張し次に諦めたように弛緩した。

ヨシツネがわざとらしく閃光玉でお手玉をしているのも、利いたのかもしれない。

・・・従う、契約、する。

よしきた。顎に左手を置くと、いつものように崩竜を自分の所有物

だと念じた。崩竜の身体が形を失っていき、最後には消えた。多分、またどこかに赤い紋章が刻まれていることだろう。大きな達成感と嬉しさがこみ上げてきた。

「いいよっしやぁー！！！！」

歓喜の叫び。自分の衝動の発露。それは、嘘偽りの無い、俺の勝鬨だった。

・・・そのまま終わっていれば。

まず俺が急に叫んだことに、猫達が驚いた。

他はともかく、ヨシツネは未だ閃光玉でお手玉をしていた。

そしてその手が滑った。

「あ」

ヨシツネを含めた全ての猫達が、示し合わせたように同時に自分から紋章に戻った。

滑った閃光玉は、不思議なことに、狙ったかのごとく、大タル爆弾の上に落ちた。

閃光玉は、使用すると、その名の通り閃光と小さな衝撃波と少量の熱を生み出す。

それは、害獣に通用するようなものではない。

しかし、至近距離でそれを受けた大タル爆弾は熱にも衝撃にも弱い。ようやくそれに気付いた俺は、とっさに氷の上に伏せた。

直後、鎧を着ているので外傷はほとんど無いとはいえ轟音と衝撃波、それに身体の上を炙って行く熱で俺の意識はいい感じにシャッフルされる。

当然、それだけで済むはずも無く俺の乗っている一帯の氷が崩落を始めた。が、あまりのダメージに動けない。

どうにかしようとするが、何も出来ない。

氷の下の水は思ったよりも冷たくなかった。

ウカムルバスと契約したお陰か？まあいいや。急いで上に戻るか誰かを呼び出すかしなければ。

そう、思ったとき、唐突に背後から淡い光が照らされた。

何だ？

と思つて体を振つてみると、そこには楕円形の、輝く鏡のようなものがあつた。

そして、それは水の流れの関係上、どんどん近づいてくる。

いや、俺がああ鏡？に近づいているのか。

なんだこりゃ？

そう思う間もなく、俺はその鏡？に正面からぶつかり、そしてその中に吸い込まれた。

何も見えなくなると同時に、全身が激しいショックに襲われ気絶した。

そして目を覚ますと、草原にいた。

助かった、というよりはむしろここは何処だ、という疑問が出てくる。

空は青く、雪雲は全く見えない。

まるで5年前みたいだな、と若干現実逃避しながら、周囲を見回すと、ようやく自分の目の前に一人の少女がいることに気がついた。

桃色がかつたブロードと、鳶色の目をしたかなりの美少女である。

しかし、理由は分からないが虫の居所が悪いらしく、眉根をよせている。

少女が意を決したように、口を開く。

「あんた誰？」

俺が知るかよ。

キャラクター（主人公）紹介でお茶をにごしましょう。（前書き）

なんかこう、客観的に見ると自分の趣味が所々入ってるのがわかり
ますねえ。

キャラクター（主人公）紹介でお茶をにこみましょう。

主人公 ナナシ

人種 日本人

性別 女性（元男性）

日本で生活していた一般人男性であったはずが、気がつくとも記憶喪失になったあげく、性転換して異世界（モンスターハンターの世界）にいた。一人で部屋の中になると、偶に奇行をしてしまう癖がある。男だった時の癖が抜けていないらしく、基本的に性に関しては無防備。性的嗜好は女性だが、今の自分がそれをしようとすると、同性愛者にしか見えないことが悩み。

謎の契約能力を手に入れているが、本人は至って気にしていない。が、それが異常なものであることを理解し、他人から隠そうとする程度の冷静さは持っている。

本編（ゼロ魔編）開始時点でアイルー、メラルーや鳥竜種のボス、飛竜、古竜、牙獣、魚竜の全てと一通り契約し終えている。

契約については、

1 契約できるのはナナシに対して、敵意を持っていない、あるいは屈服させられた人間以外の相手のみ。

2 知性の無い生物とは契約できない。よって、甲虫種や甲殻種とは契約できない。

3 契約したモンスターは、元の姿か、鎧の姿か、同化状態（紋章化）のどれかに、任意で（お互いの意志でなれるが、ナナシの意志がより優先される）成ることが出来る。また、一部だけ（武器のみ、など）変化し、他の大部分は別の状態をとることも出来る。

4 契約した時点で、それまでの生物としての枠から外れるので、亜種や希少種への進化や変化をすることが可能になる。

嘗ての（羞恥心の有った）私は摩耗しきっていた。（前書き）

今日は絶対無理！と思っていましたが、人間やればできるモンですね！

その分次の話が遅れそうなので本末転倒ですが。

嘗ての（羞恥心の有った）私は摩耗しきっていた。

そもそもこれはどういう状況なんだろうか？

俺はさつきまで雪山の奥地で、人知れずピンチになっていたはずだ。それが、気がついてみれば草原で寝ていたのだ。

助かったと言う以前に、俺の人生はどうなってるんだと言いたい。今も自分ではそれなりに修羅場はくぐってきたと思っていたのだが5年前と同じくパニックを起こしそうになっている。

『ナル（ナルガクルガ）、大丈夫か？』というか、何が起こった？』

大丈夫、ある。ナル、判る、無い。

鎧になつてゐるナルに聴いてみるが、俺と同じく何がなんだかわからないようだ。

目の前の少女は容姿は美しいのだが、それ以上に興味を引くのはその服装だ。

白いブラウスに、グレーのスカートまでいい。

しかし、その上に黒いマントと、手には木の棒を持っている。

苦笑いをしつつ「独特なセンス（精一杯のオブラート表現）ですね」といつてあげたくなるようなコーデイナーだ。

俺も俺の中にいる奴らも何故自分がここにいいのか判らない以上、誰かに教えてもらう必要があるが、それが判りそうな相手はというと、取りあえずは俺の前で仁王立ちしている少女だ。少し離れた場所に少女と同じような格好の集団があることから、（妙な宗教団体だとか、珍奇なコスプレ集団の可能性を考えなければ）何処かの学校の生徒なのかもしれない。

「俺は、・・・ナナシ。ナナシだ。君は、誰だ？」

「どこの平民？」

俺の質問は無視か。

だいたい平民つて・・・ああ、この子は貴族か王族か、それに連なる血筋の人間なのか。ギルドに来る依頼は基本的に裕福な人間が行

う場合が多いのだが、その中に一定の割合で含まれているのが、貴族や王族といった特権階級のものだ。概ね、そういう奴の依頼は金払いがいいものの、無理難題であることが多く、依頼書の内容すら見下して書かれていたりする。

重要な収入源の一つではあるものの、己の腕一つで生活しているハンターにとっては面白い相手ではない。

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してどうするの？」

誰かがそう言うと、俺とルイズと呼ばれた少女以外の人間が笑い出した。ふむ、サモン・サーヴァントねえ。直訳すると「召使いを呼び出す」か。してみるとルイズが俺をここに移動させたのか？まさか。そんな魔法みたいなことがありえるわけが無い。

ルイズは周囲の侮辱（というか、ルイズの反応で侮辱されているのだとわかった）に耐えかねたのか、顔を真っ赤にして言い返している。

ふと横を見ると、そこには少年が倒れていた。ルイズよりは少し年上、多分今の俺と同じくらいの年頃だろうか。気絶しているらしく、起こすために身体を揺さぶってやると、「母さんあと5分」とか言っている。そこでようやく、少年の格好に気付き、すぐに起こすために手加減したビンタをした。それに気付いたルイズが「ちょっと、何やってるのよ」とか言っているが、今は無視だ。

「い、いてっ……ってなんだよ、あんた。っていうかここ何処だよ。」

目を覚ました少年は頬を押さえながら、ぶった俺を睨んでいるが、そんなことはどうでもいい。

「はじめまして。俺はナナシ。何時までも寝ているわけにもいかないだろうと思うて多少手荒な真似をしたが、すまなかつた。」

「あ、いや、いいつすけど……。」

俺が素直に謝ったので少年は責めることもできず、黙った。俺は真面目、というよりは切羽詰った顔をしているだろうから、ただごと

ではないことを察してもらえたらしい。

「キミには今から私がする質問に答えてほしい。恐らくはキミにとて実に馬鹿馬鹿しいと思うようなものだろうが、真面目に答えてほしい。いいかい？」

「はい。」

「ありがとう。では、キミの名前は？」

「平賀才人です」

「平賀源内の平賀に、才能のある人、と書いて才人？」

「そうです。」

「その証拠になるものはあるかい？」

「えっと・・・財布の中に学生証が・・・あつたあつた、コレです。」

差し出されたカードを見ると、確かにサイトの顔写真が載っており、名前の欄には平賀才人とある。発行年月日は平成22年・・・。俺が5年前、異世界にきたときと同じ年だ。

間違いない。俺と同じ日本人だ。

しかし・・・平成22年だと？

どういうことだ？やはり、異世界は時間の流れが違うのか？

物理学なんか大して詳しくも無い俺には、よく理解することも出来ない。

「あつあの・・・俺も一ついいっすか？」

「なんだい？」

「ナナシさんって女の人ですよね？俺って言ってたけど。」

初対面の相手にいきなりそれかよ、と思ったが、あれだけ質問攻めにしたのだ。答えてやらないと、悪いだろう。しかし、それは俺の精神を深く抉る言葉でもある。

「そ、そそっだ。おれは、お女だが、何か疑問でも？」

「いや、問題っていうか、うわ！どうしたんですか？そんなに歯を食いしばって。」

お前が精神的攻撃を仕掛けてきたからだよ。そう言いたかったが今

はただひたすら何も考えたくない。俺は自分のアイデンティティが崩壊していく苦痛に、蹲ってひたすら耐えていた。

さて、一方ルイズはといえば召還した使い魔が2人とも自分の話を聞かないので、憤慨して担任教師に抗議していた。実際のところ、ナナシの高性能な聴力は一語一句聞き逃さず全てその話を聞いていたのだが、本人が他のことに集中しており、次いで大きな精神的打撃を受けたため、気付かなかった。なので、これはナナシの中で感覚を共有したものが聞いていた話しである。

「ミス・ヴァリエール！」

「なんだね。ミス・ヴァリエール。」

「あの！もう一回召還させて下さい！」

「それは駄目だ。ミス・ヴァリエール。」

「どうしてですか！」

「決まりだよ。二年生に進級する際、君たちは『使い魔』を召還する。今、やっている通りだ。」

「それによって現れた『使い魔』で、今後の属性を固定し、それにより専門課程へと進むんだ。一度呼び出した『使い魔』は変更することはできない。何故なら春の使い魔召還は神聖な儀式だからだ。好むと好まざるに関わらず、彼らを使い魔にするしかない」

「でも！平民を使い魔にするなんて聞いたことありません！」

「これは伝統なんだ。ミス・ヴァリエール。例外は認められない。彼らは……」

「ただの平民かもしれないが、呼び出された以上、君の『使い魔』にならなければならない。古今東西、人を使い魔にした例はないが、春の使い魔召還のルールはあらゆるルールに優先する。彼らには君の使い魔になってもらわなくてはな。」

「そんな……」

「さて、では、儀式を続けなさい」

「えー、あの平民たちと？」

「そうだ。次の授業が始まってしまっじゃないか。君は召還にどれ

だけ時間をかけたと思っっているんだね？何回も何回も失敗して、やっと呼び出せたんだ。いいから早く契約したまえ。」

一方、本人置き去りで話を進められていた二人はというと、片方は力なく仰向けに寝転がっており、もう片方は相変わらずテンパっていた。

なにせ、パソコンを修理した帰り道にいたはずなのに、知らない場所まで目を覚まし、そこで話をした女の人（というかこの人も格好が奇抜なので判らなかつたけど多分同年代なので、女の子、というべきかも知れない）がいきなり調子が悪そうに蹲り、今度は仰向けになつたのだ。

周囲の人間は完全にほつたらかしで訳の判らないことを口論しているし、修羅場なんか見たことも無い普通の17歳にとってはいっぱいっぱいになるには充分すぎる状況だと言える。

「ねえ」

「はい」

「あんた達、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから。」

なので、このときのサイトは本当に何も考えておらず、ただ機械的に返事をしたり頷いていただけなのだが、それに気付かないルイズは予想外に素直なサイトに少し気分を良くし、呪文を唱えた。

「我が名はルイズ・ルブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

呪文と共に、2人の唇が触れ、そして離された。

続いて、ナナシとの儀式だが、そもそもナナシはダウンしているため、拒否も出来ないのので、特に何の問題も無く終了する。

「終わりました。」

さすがにキスされたことで再起動したサイトが喚くが、ルイズは無視して他の生徒と口論をしていた。

その全てが今のナナシにとっては遠い。

たかが、それくらいのことです、と思うかもしれないが、ナナシにと

「ああ、悪い悪い。ここに来る前に氷結湖の中に落ちちまってるな。寒くはないんだが、気持ち悪くって。ホラ、濡れたままだ。」

「い、いや・・・むしろいいもの拝ませてもらったっていうか・・・」

「ききききききにしてないわよ。うづうづうづう羨ましいなんて思っていないだから！」

重ねていうが、悪い意味で羞恥心は無くなっている。

さて、さっきの同級生との口論から察するに、どうやらルイズは魔法使いとしては劣等生で、空を飛ぶことが出来ないらしい。

どうせ、異世界だし、まあ大丈夫かな？と思いつつ、同郷の人間に会えた嬉しさもあってか5年間頑なに誰にも教えなかった契約の力を他人に見せる気になっていた。

「レウ、来い。」

左手の紋章が喪失すると反比例に巨大な質量を持った飛竜がそこに現れた。鼻先を撫でてやると、目を細めて嬉しそうに、ぐるると鳴いている。

レウを見た2人の反応はといえば、片や驚愕、片や好奇心まるだしである。

「まあ言いたいことはわかるけど、せつかくこいつが乗せてくれるんだ。もう少し落ち着いて話が出来るところに行こうや。」

二人が何かを言い出す前にそう言うと、ルイズは「それなら女子寮の私の部屋が良いわ」と言った。

そして一行は、レウに乗って女子寮まで移動したのだった。

嘗ての（羞恥心の有った）私は摩耗しきっていた。（後書き）

因みにナナシは裸族ではありません。自分が男だ（男の娘のあらず）
と思っっている部分が大きく、かつそれまでの状況が、羞恥心を気に
出来るようなものではなかったがため、今のような状態になりまし
た。

サイト君については、その処遇で少し悩みました。ヤムチャさんの
ポジションか、そもそも登場させないかで。結局ガンダールヴ二名
体制でいこうと思いますが、それだとただでさえ強いナナシの活躍
の場が減りますので、追々裏設定という名の後付けをしようかなと。

異世界から来たO T O K O。(前書き)

ある程度は原作に沿っていこうと思っっているんですが、オリキャラを絡ませるのが難しいですね。特に会話。

あと、薄々お気づきの方もいらっしゃるかも知れませんが、私はモニターハンターをPSPでしかやったことが無く、まだ3rdも買っていません。欲しいとは思っていますが、遊ぶ時間が無くて・・・。

異世界から来た O T O K O。

さて、場所は女子寮の一室、ルイズの部屋である。

お互いに自己紹介なんかをしているが、どうにも俺以外の2人は不貞腐れたような顔つきではなしている。あの後、この部屋に来てから、サイトがこれは夢だ、とか言ってるルイズに詰め寄って夢から覚めたいから、と殴ってもらい、その威力で気絶したのだ。どうやら二つの月で現実感が揺らいだところに、レウがとどめを刺したかたちらしい。最初は好奇心旺盛にレウを珍しがっていたが、ふと我に返り自分を取り巻く状況に怖くなってきたのだろう。

因みにルイズよりも先に、俺に「思いつき殴ってくれ」と言ってきたが、丁重にお断りした。俺が本気で殴ったら首が吹っ飛ぶ。

そして出来上がったのが目をさまし、どうにか現実を拒否しようとしているサイトと、無礼（本人はそう思っているようだ。）をはたらいておいて、誤りもしない使い魔に、「私だってあんななんか召還したくなかったわよ。」と言わんばかりの秀囲気を纏ったルイズ、という構図である。

当然、お互いが気にくわないのだろうか、もう少し仲良く出来ないものか。

とすっかり傍観者気分でその様子を見ていたのだが、お互い充分に矛先を向け合ったので、今度は俺にお鉢が回ってきたらしい。

「それで？あんたは何者なの？あんたもまた異世界から来た、とか言うの？」

「ざっくりと言ってしまえばその通りなんだが、全部を話すと多少時間がかかる。それでもいいか？」

「省略して要点を話して。」

一秒以下で返事をしたルイズに、もう少し考えろよ、と思ったが妄想の話はもうたくさん、という顔をしているので仕方無いのかもしれない。・・・まあ、それは裏の意味を考えればあまり落ち着いて

もいられないのだが。
そして、話し始める。

自分が元はサイトと同じ世界の人間であること。ある日異世界にいて、自分が誰なのか、という記憶を失っていたこと。その世界は巨大な肉食獣が跋扈する弱肉強食の世界で、それを狩るハンターとして生計を立てていたこと。ある竜との戦いで勝利したものの、凍結した湖に落ちたとき、召還されたこと。

サイトは純粹に驚いているようだったが、ルイズは最後の話以外は胡散臭そうにしていた。

「なら、私があんたの命の恩人つてわけね。感謝しなさい。」
自身満々に言うルイズはどうにも空回りしているように見える。

「お前は自分の聞きたい話しか聞かないんだな。あの程度で死ぬようなら俺は今までに百回以上死んでるよ。」

俺の言葉に、ルイズは不愉快そうに眉をひそめた。まあ実際、落ちるところまで落ちてからウカムルバスを呼んで氷を砕くことも出来たので嘘では無い。今の俺の水圧耐性とか無呼吸活動可能時間は人類よりは、飛竜種と比較すべきものだし。

「信じられないわ。」

まあそうだろうな。俺だつて何も知らない一般人だった頃、会ったばかりの人に「自分は異世界の人間なんだ。」とか「異世界の狩人なんだ。」なんて言われたら笑顔でそうですか、と言いつつ携帯で救急車をチャーターしただろう。この学校の建物からして中世的な雰囲気（いや、まあ実際そうというのは見たことは無いんだけど空気のなアレで。）がすることから、心理学が発達していないせいでのあたりに鷹揚なのかもしれない。

ルイズの言葉でサイトの中でなにかが再燃したのか、再び口論が始まった。仲のいいことで。

というか、こいつら多分レウのこと忘れてるな。他のことでもいいっぱいいいいになってるからか。

「わかった。」

「何がわかったの？」

「ドッキリだな。ドッキリテレビだ。皆して、俺をはめようとしてる。そうだな？」

その結論はどうなんだ？現実を認めたくないが故だろうが、自分でも無理があると思ってるんじゃないか？

「ドッキリつてなによ。」

「怪我人が出て中止になってたが、最近ネタが無くなって始めやがったな。カメラは何処だ！」

あれ？大物芸能人が訴訟を起こしたからじゃなかったっけ？まあいいか。

「何言ってるのよ。」

サイトはルイズに飛び掛った。何時の間に十八禁タイムになったんだ？というか一応、自分の中で矛盾の無い結論を出したのだろうが、あまりにも暴力的すぎるだろ。主に考え方が。あんまりアレなようだったら適当なところで止めるが、正直あの乱戦には加わりたくない。

「きゃあ！なにすんのよ！」

「マイクは何処だ！ここか？」

ルイズの服を脱がせようとするサイトは最後に見えた光明を逃すまいと目を血走らせており、興奮のためか鼻息も荒い。さながら性犯罪者である。が、ルイズもただやられているわけではなかった。

サイトが指先に意識を集中した瞬間、したたかに股間を蹴り上げる！全く迷いの無い非常にいい蹴りだった。効果のほどは、奇声をあげて蹲ったサイト自身が証明している。男としてその痛みには同情はするが、しかしとばっちりが怖いので、何も言わない。ただ、腰の上をトントンと叩いてやった。

その後、サイトがノートパソコンを見せたり、異世界人であることをしつこく主張することにいい加減辟易したのか、ルイズはヤケクソ気味にサイトのいうことを認めた。やっと認められたことでサイトは満足気だが、お前はそれでいいのか？

それから口論が続いたが、内容は俺の予想したものと大差は無かった。とはいえ、やはり異世界の人間を召還するというのが常識である、というのには少し参った。つまり俺とサイトはその常識なまぐれでたまたま召還されたのか。あまり嬉しくない。

しかも使い魔は一生主に仕えろとか、労働基準法も真つ青なことをルイズは言っている。ふむ。死なない限り、ねえ。まあ対策出来ないこともないか。今度ためしてみよう。

「それで、使い魔はどんな仕事をするんだ？」

「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ。」

「それは、比喻表現ではなく？」

「うん。使い魔が見たものは、主人も見ることが出来るのよ。」

「はあ。」

おい、現実逃避するなサイト。

「でも、あんたたちじゃ無理みたいね。わたし、何にも見えないもん！」

「君、ついてないなあ。」

「それから、使い魔は主人の望むものを見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね。」

「秘薬って？」

多分、俺の持っている秘薬とはちがうんだろうけど。

「特定の魔法を使うときに使用する触媒よ。硫黄とか、苔とか……」

「あんたたち、そんなの見つけてこれないでしょ！秘薬の存在すら知らないのに！」

そもそもこの世界の地理だとか植生以前に常識を知らない俺たちにそんなことを言われても。というか、やはり俺の話は信じていなかっただな。それが狩人という職業のすることをまるで知らないのか。

「そして、これが一番なんだけど……、使い魔は、主人を守る存在であるのよ！その能力で、主人を敵から守るのが一番の役目！で

も、あんたたちじゃ……」

「人間だもん……。」

「お前が記憶障害になるのは自由だが、自分がさつき何に乗ってここまで来たのかも忘れたのか？」

「そうよ！あんたさつきの火竜はどこから出したのよ！だいたいなんで平民が火竜なんか乗りこなせるのよ！」

「いつぺんに質問するなよ。えーと、まずどこから出したのかっていうと、ホレ、赤い紋章がいくつもあるだろ？」
袖をめくりながら言う。

「……痣じゃないわよね？」

「俺の居た世界では発光する痣なんて存在しない。ここがどうかは知らないけど。それで、コイツをよく見てろ。」

一瞬後には、指差した肉球のような紋章が消え、そこには黒い体色のアイルー、ヨシツネがいた。2人はいきなり二足歩行する巨大な猫が現れたことに驚いていたが、おれはヨシツネの首筋を摘み上げると自分の目線まだ持ち上げた。

「ヨシツネ、なにか言わなければならぬことがあるんじゃないか？」

「ごめんなさいニヤ、旦那さん。」

「よろしい。俺だったから良かったけど、普通の人間だったら死んでたからな？」

「なにそれ！可愛いじゃない！貸しなさいよ！」

硬直から解けたルイズはそう言うのと、俺の手からヨシツネを引っ手繰った。引っ手繰られた本人はルイズの、相手のことを考慮しない可愛がり方に嫌そうにしている。あれは絶対ペットを飼ったらストレスで禿げさせるタイプだ。まあヨシツネも、許したとはいえない薬になるだろう。

「そいつみたいに、この紋章の数だけ、身体の中にモンスターを飼ってるんだよ。火竜、レウもその内の一匹だ。」

「へえ、そんな魔法聞いたこともないわ。もしかして、あんたの言

つてたことつて本当なの？」

「俺には妄想話を長々と言う暗い趣味は無い。因みにサイトの言っ
てたことも本当だぞ。」

話を振られたサイトはと言うと、ヨシツネを見ながら指をくわえて
いた。うらやましいのか。

しよがないのでベンケイを呼び出して渡してやると、こちらは落
ち着いて頭を撫でたり、喉をくすぐったりしている。

「でも、あんた自身が強いかどうかは別なんじゃない？」

意外に鋭いが、妙に疑り深いな。その明晰さを別の部分にまわして
くれるとありがたいんだが。

「こいつらみたいにもともとが攻撃的じゃない奴らならともかく、
他のは大抵人間を見た瞬間に襲い掛かってくるような奴ばかりだ。

そんな奴らを倒すのに、弱くてやっていけるはずがないだろう。」

「そう。それじゃ、あんたは？」

「ただの人間だもん……。」

「だったら、あんたにできそうなことをやらせてあげる。洗濯、掃
除、その他雑用。」

「ふざけんな。その内絶対帰る方法を見つけてやるからな！」

話はそこでルイズが眠気を訴えたことでお開きになった。今、ヨシ
ツネとルイズはベッドの上で寝息を立てており、俺とサイトとベン
ケイはというと、床に敷かれた藁束の上で眠っている。最初、サイ
トは落ち着かないようだったが、何時の間にか眠っていた。ついで
にルイズの下着も床に散らばっている。ペット感覚とはいえ、年頃
の男二名（精神的な意味で。）の前で着替える、というのはいかが
なものか。

ふと、自分の顔に射す光に、窓を見た。

窓から見える夜空に浮かんだ月はやはり大きく、そして俺の知るそ

れとは数が違う。

それを見ながら思うのは、自分が生まれた世界。帰りたい、んだと思う。

最初にいた場所に。それがどんな場所だったか、どんな思い出があるのかもわからないけど。

ただ、判らないままにしていたくない。

自分を取り戻したい。

何も無いところに後付けされた狩人としての自分ではなく、ただの人間としての自分を。

だが、今はその思いを封じていよう。

ただ、その刻を待つために。

一度あったことは二回以上ありえるという事です。(前書き)

まだ始めて一週間未満ですがなんのканので一応毎日更新できてます。(更新不定期フラグ)

一度あったことは二回以上ありえるということですよ。

目を覚ますと其処は異世界だった。いや、目を覚ます前からそんなんだけど。

朝の日差しに目を覚ました俺は、ルイズとサイトを起こさないように寢床から起き出すと、そのまま音を立てないように下着を持ち、部屋から出た。ヨシツネとベンケイが目を覚まし、付いて来ようとしたが手で制し、小声でもう少し寝ているように指示してから部屋を出た。昨日、入った時と逆に廊下を通り、外に出る。

朝日が心地よいのはどの世界でも同じなんだな、と思いつつ、軽く柔軟運動をした。一年の半分近くを野宿で過ごしていた身としては寒い風を防いでくれるだけでも有り難くなっているが、毎日ちゃんと布団で寝ていた人間には藁があるとはいえ、床はきついだろう。またぞろ喧嘩の種にならなければいいのだが。そこまで考えたところで運動を終了した。

下着を拾い上げ、洗濯場を探す。

数分ほど探していると、一人の少女を見つけた。清潔感のある白いヘッドドレスとエプロンを身につけ、黒い肩の部分とスカートの膨らんだ形のワンピースを着ている。所謂メイドである。

昨日までいたところでもそういう感じの服を好んで着るものはいたが、それはファッションとしてであって、いかにも制服です、といった感じの飾り気の無いメイド服は逆に新鮮だった。

「おい、そのキミ。ちょっといいかい？」

「はい？なんでしょうか？」

俺の声に振り向いた少女は、黒髪の素朴な感じのする少女だった。綺麗、というよりは可愛いといった感じの。

「すまないが、洗濯場を教えてもらえないだろうか。ちょっと洗わなくてはならないものがあるんで。」

「まあ！貴族の方にそんなことをさせるなんて畏れ多い！代わりに

私が洗濯しておきますのでどうぞお申し付けください。ええと・・・

「ああ、まだ名乗っていなかったね。俺の名前はナナシだ。それと俺は貴族じゃ・・・」

「ではミス・ナナシと。私はシエスタと申します」

シエスタの攻撃！ナナシは9999ポイントの精神的ダメージを受けた！ナナシは（精神的に）死んでしまった！

「・・・ただのナナシにしてくれ。お願いだから。あと俺は貴族じゃないから敬語もいらぬよ。昨日、ルイズって娘に使い魔として召還されたんだ。知らないかもしれないけど。」

ほら、といって袖をまくりレウの紋章の上に描かれたルーンを見せる。そういえば、これってなんか形がアルファベットに似てるな。

「あ、そうだったんですか。ミス・ヴァリエールが召還の授業で平民を呼んでしまったって噂になってますわ。」

そう言つてシエスタが笑つた。自然と俺も笑い返す。そういえば最近苦笑以外に笑つてなかったような気がする。

シエスタに案内してもらつて洗濯場まで行くと、意外と近い場所にあった。

シエスタと一緒に洗濯をするが俺がルイズ一人分なのに対し、シエスタは籠一杯の洗濯物である。手持ち無沙汰になったのでどうしようか（手伝いを申し出たのだが丁寧に断られた。まあ、会ったばかりの奴に許可もなく仕事を手伝わせるはずもないか。）と考えていると、自分が着ている服が目に入った。昨日濡れたので絞りはしたが、考えてみると、ウカムルバスの生息地に向かう前に洗ったつきりなので一週間近く洗っていないことになる。そこで、上下共に脱いで洗い始めた。おお、見る見るうちに汚れが落ちていく。アンダーウェアはギルド謹製のものなので、吸湿性に優れながらも乾燥しやすい材質で出来ている。こうしてしっかりと絞つて一分もバサバサ振り回していればすぐに乾くだろう。そう思いながら服を乾燥させていたのだが、そこには一人同席している人間がいた。

「ナ、ナナシさん、何をしてるんですか！」

「ん？ああシエスタ、驚かしてしまっただか？すまない。」

「い、いえ別に驚きはしませんでしたけど・・・ってなんで裸なんですか、ナナシさん！」

「いや、最近忙しくて自分の服を洗っていなかったことを思い出してね。ついでに洗っておこうかと。」

「だからって裸にならないで下さいよ。必要なら私の服を貸しますから。」

「有り難いが、それではキミに迷惑じゃないかい？」

「いえ、どつちかって言うところで裸になれるほうが。」

「見苦しいものを見せてしまったか。すまない。」

そろそろ乾いてきたのでアンダーウェアを身に着ける。しかしシエスタはいい子だな。

さて、そろそろサイトたちが起き始める頃だろう。戻っておくか。

俺はシエスタに礼をいってから、女子寮のほうに帰って行った。

サイトたちは既に目を覚ましていたらしく、部屋の前の廊下で出くわした。どうやら他の女子生徒と話しているらしい。相手はルイズの口調からして同級生のようだが、パツと見では信じられないな。身長はルイズより頭一つ分近く高く、褐色の肌と炎のような赤毛の長髪、スタイルは言わずもがな。しかも挑発するようにブラウスのボタンを二つ目まで開けており非常に色っぽい。対してルイズはいえばちんちくりんという言葉が似合いそうな幼児体型。顔立ちが好き好きだろうが、それ以外の面では惨敗だな。そう思っていると突然ルイズがこちらを見た。

「今なんか考えた？」

「エスパーですか？」

「いや、何にも。」

そう、と言って口論を再開する。うちのご主人様は意外と直感が鋭

いみたいだ。とりあえず、顔に出てなくて良かった。

俺とサイトの名前を聞いた後、「じゃあ、お先に失礼」と言ってその女性（ルイズの話ではキュルケというらしい）は赤いトカゲのような何かを連れて食堂に歩いて行った。

「ふん、なによあの女。自分が火竜山脈のサラマンダーと契約したからって。」

「いいじゃねえかよ。召還なんかなんだって。」

「良くないわよ！メイジの実力をはかるには使い魔を見るって言われているぐらいよ！なんであの馬鹿女がサラマンダーで私があんた達なのよ！」

「悪かったな、人間様で。でも、お前らだって人間じゃないかよ。」

「メイジと平民じゃ、オオカミと犬ほどの違いがあるのよ。」

この間、俺はというと、ヨシツネとベンケイを紋章に戻して、退避していた。対岸の火事というのは、自分に関係が無いからこそ楽しめるのであって、当事者になってしまうと洒落にならない。

「・・・はいはい。ところで、あいつ、ゼロのルイズって言ったけど、『ゼロ』って何？苗字？」

「違うわよ！私の名前はルイズ・ド・ラ・ヴァリエール。ゼロはただのあだ名よ。」

「あだ名か。あいつが微熱ってのはなんとなくわかったけど。お前は どうしてゼロなの？」

「知らなくていいことよ。」

「むね？」

昨日会ったばかりだがサイトの、こういう地雷原があるのが判っていてあえてそれに突進しようとするような無謀さはある意味、見ていて清々しいな。全く真似をしたくないが。今も、ルイズに殴れそうになって避けている。ぎゃあぎゃあと騒ぐ二人と周囲の視線を引き連れつつ、俺たちは食堂に向かった。

アルヴィーズの食堂とかいうところに入った瞬間、来たことを後悔した。なんだこの成金趣味丸出しの妙にゴテゴテとした内装は。やたらと広いのは認めるが、（おそらく、だが席に着いている人間の服装からして大して的外れでもないだろう）学年を分けるだけのために何故ここまで広い空間と、それを照らす証明があるんだ？

おまけに料理も無駄に脂っこかったり多かったりするので、全員が食べきれぬわけでもないだろう。俺の不愉快そうな表情とは対照的にサイトはただ驚いているだけだったので、ルイズも得意げにしている。とりあえず貴族の知り合いはルイズしかいないので彼女を基本として考えるが、プライドがやたらと高い彼女が残り物に再び口をつけるとも思えない。

そこは、狩人としての生活に馴染んだ俺にとっては全く異質の価値観が支配する場所だった。

「なあ、ルイズ、聞いていいか？」

「何？あんたもここに入ることが出来て感激してるの？」

「この魔法学院ってもしかして国立か？」

「国立？・・・ああ、王立かどうかってことね。うん、そうよ」

「この食堂も？」

「当たり前でしょ？さあ。行くわよ。」

つまり国が主導でこんな無駄をさせているのか。ますます正気じゃないな。ルイズが貴族の食卓に相応しいものでなければならぬと云っているが、だとすればこれがさらに国内全域で行われていることか。ここにいる人間はあらゆる資源が有限であることを知らないらしい。

俺の視力はルイズが行こうとしている席の近くの床に中身の入った二枚の粗末な皿が置かれているのを感じ。気分が優れないからサイトに付き添ってもらって外に出た。実際、俺の価値観ではありえないことが平然と行われている場所にいたせいで、少し胃のあたりがムカムカするのは事実だ。サイトは残念そうにしていたが。

食堂から少し離れた場所まで来ると、地面に腰を下ろした。サイト

もそれに倣う、が未だに未練がましく食堂の方を見ている。

「そんなに腹が減ってたのか？」

「いや、腹は勿論減ってるんだけどさ、あんな広いトコで豪華な飯を食べるなんて滅多に出来ることじゃ無いだろ？」

「多分、お前が思ってるようにはならなかったと思うがね。」

「なんで？」

「ルイズが行こうとした席の近くの床に皿が二枚置かれてた。多分、中身は薄いスープかなにかだ。」

「マジで？」

俺が頷くと、サイトは齒軋りをして「あのヤロウ・・・」と言って怒り始めた。

とはいえ腹が減っていることに変わりはないので、俺は持ち物の中に残っていた最後のこんがり肉を2人で分けることにした。朝から少し重いか、とおもったが本人は感激している。食べたあと、井戸水で喉を潤すと、サイトは授業に、俺は近辺で狩りを行うことにした。

ルイズは授業に出るように言っていたので、サイトが出ていけば問題無いだろう。

門から出ようとすると衛兵に質問されるだろうから、適当に堀の近くを歩き、人目が無いあたりで飛び越えた。近くにお詔え向きの森があったので、そこで罾を仕掛ける。蔓植物を使ったもので、刃物と蔓さえあれば出来るので実に簡単に作ることが出来、設置も容易だ。本来ならさらに自分の足で探したりもするのだが、今回は見送ることにする。まああれだけ仕掛けたんだし、なんとかなるだろう。サイトには、代わりに授業にでもらう報酬として、たくさん食わせてやらなきゃな。

さて、獲物がかかるまでに試しておくことがある。俺が契約しているモンスターの種類は多岐にわたるが、それらは紋章化すると、俺

の身体能力の強化、という形で恒常的に貢献してくれている。そして、ここが重要なのだが、契約したモンスターの能力の中で、一部俺にも使用可能なものがあったのだ。もちろん、口から火の玉を放ったり、風を纏って鎧にしたり、水をビームのように吐き出すようなことは出来ない。それは、人体の構造上、不可能だからだ。今更のような気がしないでもないが。

さて、飛竜種の中でも、怪鳥属と分類される種族のモンスターがいる。その名の通り、鳥に似通った外見や性質を持つ特徴があるのだが、その中でも毒怪鳥ゲリヨスが今回の試みに無くてはならない能力を持っている。ゲリヨスの能力を有名なものから挙げていくと、まず、その名前にも冠されているように毒液を吐き、次に頭の上の鶏冠同士を打ち合わせて目晦ましの閃光を放ち、さらにはゴムのような皮膚で外部からの衝撃を逃がしやすい身体の構造になっていることか。

そしてあまり知られていないのが、所謂”死んだふり”である。倒したと思って油断して近寄ってきた敵に全力で痛撃を与えるために使っているが、これはただぐったりとしているだけではなく、自分の意思で身体の代謝を極端に下げ、時間制限つきで仮死状態になる、ということがわかつている。

再度塀を飛び越えて学院の中に入ると、今度は校舎の影の人目につかない場所に行つて地面の上に寝転んだ。森でやらなかったのはどんな肉食獣がいるのかも判らない処でこんなことをするのは自殺行為だからだ。そして、リース（ゲリヨス）の死んだふりを使用する。すぐに身体が重くなってきた。

目を開けているが視界が徐々に狭まっていく。

身体感覚が末端から凄い勢いで消失している。

頭が重い。

段々何も、考えられなーーーーー

「……目が、覚めた。途端に息を荒くしながら自然と上体を起こす。強烈な光に目が開けられない。」

「落ち着け、動悸が激しいがこれは一時的なものだ。急激に代謝が上がったせいで身体が悲鳴を上げているんだ。」

「深呼吸をして息を落ち着け、さらに動悸が治まるまで待った。」

「落ち着いてきたころ、目を開け、左手の袖をめくり、そこにあるものを見る。」

「一つは、赤い光で描かれた十字架に牙を足したような意匠の、レウの紋章。」

「そしてもう一つは、紋章の上に描かれたルイズの使い魔のルーン。」

「だが今、そのルーンは大部分が消失し、アルファベットのAのような形の部分のみを残すだけになっていた。」

「ルイズが言った、使い魔が死なない限り、次の使い魔を召還できない、という話。それはつまり死ぬような目、或いは死ねば使い魔としての拘束から開放されるのではないか、という疑問が今回の実験の発端だった。別段使い魔の印をどうとも思わないのなら問題は無いが、しかし俺の価値観からすれば、これは奴隷の焼印にも等しいもので、到底受け入れられるものではない。」

「別段それを吹聴するつもりも無いが、かといってそのまましておくのも気に入らない。」

「なら、それをどうにかできないか。結果としてそれは可能だった。一部は残ってしまったが。」

「さて、あれから多少時間も経ったことだしそろそろ罫を確認してみよう。」

一度あったことは二回以上ありえるということですが。(後書き)

これを書くためにゼロ魔の一巻を読み直してはるんですが、思ったのが、ゼロ魔の世界の貴族とモンハン世界のハンターの常識の乖離ですかね。そういうわけで本編ではサイト君が流してたところをナナシに突っ込ませてみました。次回はキングオブかませ犬ことギーシユ君が登場予定です。

ゼロは関係ないだろう！ゼロは！！（前書き）

そろそろペース的に苦しくなってきましたねー。というか多少書き溜めてから投稿すればいいじゃないと6日前の自分に言いたい。

ゼロは関係ないだろう！ゼロは！！

罨にはウサギのような小動物が二匹、掛かっていた。しかも、今はまだ春ごろだと聞いたが、丸々と肉付きもいい。

思ったより簡単に食事を確保出来たので、拍子抜けしてしまう。いざとなったら烏竜種の奴らを使って搜索しなければならぬかと思っていたが、考えて見れば王立の貴族が通う学院の傍の森に狩人が入ることは少ないだろうから、罨に対する警戒心も薄いのかもされない。

そのまま持っていくと、サイトの食う気が薄れても良くないので先に肉にしていくことにした。

二匹をシメると、頸を裂いて木に吊るし、血抜きをした。

ナイフで皮を削ぎ落とし、部位ごとに解体する。

数分もすると、そこには立派な食用肉があった。予想通り、それにサシも入っていて実に旨そうだ。

そのまま焼こうかとも思ったがふと、厨房で料理にしてもらえないだろうか？と閃き、意気揚々と食堂に向かった。

食堂の前には何故か悄然と頂垂れるサイトがいた。どうしたんだろうと思うと話掛けると、気落ちしたまま、俺がエスケープした授業の話しを始めた。

それによると、ルイズが授業中指名されて唱えた魔法が失敗し、爆発。教室が滅茶苦茶になったせいで授業は中断し、ルイズとおまけのサイトは片付けを命じられた。当然、そんな雑用をやることをルイズがよしとするはずも無く、サイトがほとんどの重労働をしている横で、ただ見ているだけだった。

召還された後からずっと腹に据えかねるものがあったサイトはこれ幸いと、自分の鬱憤を晴らすために、ルイズが魔法が出来ないこと

を（魔法成功率ゼロが、『ゼロのルイズ』というのがあだ名の真相なんだとか。）馬鹿にしてやり、その結果激怒したルイズに当分の間の食事抜きを宣言されたんだとか。

それを聞いた俺はというと、相変わらずのサイトの地雷踏みに若干呆れていた。ルイズの性格からして、そんなものは充分予想できる反応のはずだが。

とはいえ、不満を持ちながらも最後まで片付けをやったことから、意外と面倒見のいい性格かも知れないな。

俺も朝出そうとしていた食事には思うところがあるしここで慰めてやってもいいんだが、しかしサイトの為にも少し話しておくか。

「サイト、少しいいか？」

「何だ？」

「お前にだってコンプレックスはあるよな？ 因みに俺にはある。わざとそこに触れられたら相手を殺しかねないのが。」

「・・・まあ、あるけど。」

「んじゃ、それを何の遠慮も無く突つつく奴ってどう思う？」

「・・・俺が悪いって言うのか？」

「まあ聴け。ここは魔法のある世界だし、貴族なんて黴の生えたモンが未だに存在して、それが当然だと思われてる。当然、ルイズもそれに沿った教育をされてきてるだろうし、実際あいつは普段からやたらと偉そうだ。けど、考えてもみる。使えて当然の魔法が使えないあいつのコンプレックスの大きさを。ましてやルイズは女の子だ。態度が気に食わないからってそんなことを言ったりしたら、そりゃ怒るさ。」

俺の言葉に多少なりとも考えるところがあったのか、サイトは黙りこんだ。自分でも、言い過ぎたと思える部分があったのかもしれない。

サイトにあとでルイズに謝ることを言い含めてから、2人で厨房に向かった。中では忙しそうにコックやメイドたちが働いている。これでは頼めそうにも無いので、やはりその辺で肉を焼くかな、と思

つっていると後ろから声を掛けられた。

「あら、ナナシさん。どうされたんですか？」

振り向くと、そこには大きなトレイを持った黒髪のメイド、シエスタがいた。彼女も給仕をしているのだろう。

「いや、このアホがご主人様をからかつてね。食事を抜きにされて俺が持つてる生肉を調理してもらえないか聞きにきたんだが、生憎忙しそうだから、断念していたところだ。」

「では、こちらの方が？」

「ああ。俺と同じくルイズに召喚された使い魔のサイトだ。」

「シエスタですわ。宜しくお願いします。あ、ナナシさんとサイトさん、ちょっと待っていてくださいね。」

俺たちを厨房の隅に置かれた椅子に案内すると、シエスタは奥の方に入ってしまった。少しして戻ってくると、手には二つの皿を抱えている。中には温かいシチューが入っていた。

「貴族の方々にお出しする料理の余り物で作ったシチューです。よかったです。」

「いいのか？」

「ええ。賄い食ですけど……。」

その申し出に不満があるはずも無く、ご馳走になることになった。賄いという割りに、シチューは実に旨い。野菜と肉の旨味がじつに良く出ている。貴族の子弟の食を預かる以上、料理人の腕前は伊達では無いのだろう。

俺とサイトは何度もお代わりをして、腹一杯になるまで食べ続けた。サイトはこの世界に来て初めて優しくされたためか、感動している。何か自分に出来ることは無いか、と聞いているので義理堅いところもあるのだろう。下心は無さそうだし。

強く言うサイトに、じゃあ、と言って料理長の許可を得てから、ケーキ運びの手伝いを頼んできた。俺もサイトも二つ返事で了承する。役割分担は、サイトと俺がトレイを一つずつ運び、シエスタが配っていく、というものだった。2人とも勝手がわからないので、小難

しいことよりは、こういう単純作業のほうが有り難い。

途中で配り終えたサイトは俺たちと別れて、厨房に戻っていく。

今は仕事をしなければならぬ、という頭があるせいか、俺も朝ほどの不快感を感じないので、自然と仕事はスムーズに出来た。

一年生のテールを配り終えた頃だろうか。二年生のテールの中で騒ぎが起きた。金髪の少年が栗色の髪の少女にビンタをもらい、次に金髪ロールの少女にワインでシャンプーをされている。2人の少女の様子から事情を知らなくても、よっぽどの馬鹿じゃない限り「ああ、こいつが二股をしたんだな。」ということが判る、典型的な修羅場だった。

金髪の少年（うわ、よく見ると変なシャツ着てるよ。）は体裁を取り繕うためか、強がっているが、俺の視力は目尻に微量に浮かんだ涙を捉えていた。まあ、自業自得ってことで。

唐突な娯楽も終わったのでさて、残りの仕事を片付けるかね、と思っている。金髪の少年が近くにいたサイトを呼び止めた。不思議に思っただけを聞くと、どうもサイトが親切心で落ちていた香水のビンを取ってやったのが修羅場の発端らしい。

なるほどね。強がってはいたものの、腹の虫が収まらないってところか。

しかし、不味いな。無礼討ちなんかはさすがに無いだろうが、サイト自身も魔法がどんなものか理解していない可能性が高い。

少なくとも、それが穏便なものだけでは無いことは、貴族が平民の上のさばっていられることから想像はできそうなものだが。

案の定、ギーシュとか呼ばれている金髪君がサイトを連れて食堂から出ようとする。一緒に歩く、と言っても和解したわけではない。ことはお互いの表情から明らかだ。

ふむ、お互いの心情を察するに、ギーシュは自分に醜態を晒させた無礼者の平民を相手の了承のもと、叩きのめしてやる、サイトは二股なんて羨ましいことをしゃがって気に入らないからぶん殴ってやる、と言ったところか。

おーい、サイト君？貴族が魔法を使っつてことと平民を見下していることから考えれば、相手が殴りっこをするつもりが無いことくらい判らないか？

内心でそう思いつつも、ここで多少は痛い目にあっておくのもいいかもしれないな、とも考えた。俺もサイトも元居た世界に帰る、という目標をもっているが、それがどんな方法か判らない以上ある程度の期間はこの世界で生活しなければならぬことになる。

しかし、魔法というものの危険性を肌で理解できなくては、より危険な事態に陥ったときに判断を誤ることもありえる。

今なら俺もいるから命の危険がある場合は強制的に止めることも出来るし、なにより学生、ということは一般的な魔法使いのそれよりは弱いことが予想される。

そう結論し、俺は狼狽するシエスタに「いざとなったら止めるから大丈夫。」と伝え、トレイを渡してサイトたちのあとを追った。

「諸君！決闘だ！」

ギヤラリーに向けて、ギーシュが造花を掲げてアピールしていた。歓声があがり、俺以外の観衆には意外と受けている。

ギーシュの奴が案外人望があるのかと思ったが、即座に否定した。

こいつらの表情を見れば、だいたい判る。ただ、メイジが平民をいたぶるといふ光景を確信し期待しているだけだ。

可哀想だがこの場でサイトが勝つと思っているのは本人だけだろう。決闘（という名を借りた私刑）の場所選ばれたのは近くに二つの塔が見える中庭だ。

日陰になっているので目立たないからここを選んだんだろうが、これだけぞろぞろついて来たら、どこに行ったって同じだ。

観衆から十メートルほど離れて位置につくと、ギーシュの「では始めるか」という声と共に始まった。

サイトが先手必勝、とばかりに走って距離をつめる。動きは並だが、

ギーシュは線が細いので、殴り合いに向いているとは思えない。判断はまあ、及第点と言ったところか。

だが、そこから先がいただけない。
ギーシュが造花を振った先の地面から青銅製の女性像が現れると、驚いて動きを止めてしまったのだ。

おい、お前はヒーローの変身中は決して攻撃しない親切な悪役か。魔法を使っている内に距離をつめればなんとかあったのに。

おまけにその”ワルキューレ”の攻撃を避けることも出来ずに腹に食らった。あんな大降りの攻撃を食らってどうする？

「いい加減にして！」

倒れこんだサイトを、ようやく騒ぎを知って追いついたルイズが飛ばした。

さすがにギーシュもルイズを攻撃するほど我を失っていなかったのか、今度は口論している。その隙に俺はサイトの近くに移動した。

「大丈夫か？ なんならタッチ交代できるが？」

「おれはまだ平気だっつの。」

結構足に来てる気がするんだけど、それだけ言えるんならまだ大丈夫だろ。

「ま、頑張れ。別段お前が負けても俺は困らないが、ここにいる傲慢と矜持を履き違えている糞虫以下の連中に自分を曲げたくないならな。」

周囲に聞こえる声で言ってから笑うと、サイトは一瞬きよんとしたあと、大声で笑い始めた。対照的に、観衆は不快そうにしており、俺に殺気を向ける者までいる。

「なんなんだね、キミは。」

ギーシュが俺に言ってくるが、無視してラオ（ラオシャンロン亜種）の片手剣、”独竜剣【藍鬼】”を手渡す。盾はいらないだろうし、使えないだろう。突然現れた蒼い刀身の、ナツクルガードの付いた剣に驚いた者もいるようだが、その正体がわかるものまでは居ない。サイトは無言でそれを受け取ると、立ち上がった。

「おやおや、立ち上がるとは思わなかったな……。手加減が過ぎたかな？」

「寝てなさいよ！馬鹿！どうして立つのよ！」

ギーシュは挑発し、ルイズは心配しているが、対してサイトは平然としていた。既にサイは振られている。あとは、どれだけそれを実行できるかだ。

「俺は、元の世界にや帰れねえ。ここで暮らすしかないんだろ」

「そうよ。それがどうしたの！今は関係ないじゃない！」

「使い魔でいい。寝るのは床でもいい。飯は不味くたっていい。下着だって、洗ってやるよ。生きるためだ。しょうがねえ。」

「でも……」

「でも、なによ……。」

「下げたくない頭は、下げられねえ」

俺が「始め」と言つて暴れるルイズを連れて下がった瞬間、サイトの左手のが輝き始めた。

一息に移動しフルキュールを射程圏内に入れたサイトは、一撃で胸を薙ぎ払った。

その上半身が地面に落ち、派手な音を立てたことでギーシュの顔色が変わり、慌てて造花をふる。

新たにフルキュールが6体現れ、しかし時間差こそあれど、すぐに切り捨てられた。

サイトはへたり込んだギーシュに剣を向け、ギーシュはそれを見て戦意を喪失した。

「ま、参った。」

そのギーシュの言葉により、余りにも一方的な、しかし余りにも明確な勝者と敗者の姿によって、決闘は幕を下ろした。

その、決闘は。

ゼロは関係ないだろう！ゼロは！！（後書き）

なんかナナシがヒロインっぽかったような気がしたのは私だけでしょうか？因みにサイトは永遠にナナシフラグは立てられません。あんなことを言ったのには意味があるんです。多分。

貴方の真実は？・・・有罪（ギルティ）！！（前書き）

徹夜明けでキーボードを叩くのがこんなに疲れるとは・・・。
休日中になんとか書き溜めておきたいですねー。

貴方の真実は？・・・有罪（ギルティ）！！

勝負がついてすぐに、サイトは倒れた。

ラオを紋章に戻しつつ、さっきのサイトの動きを考えてみる。

左手が輝いた、と思ったなら一般人には捕らえられないようなスピードで動けるようになっていた。

が、動き自体は元のままだった。

ただサイトだけが一人だけ倍速再生をされたような、そんなイメージ。

そして、その後の電池が切れたような、失神。

考えられるとすればあのルーンの力の影響か。

とすれば、現状にも説明がつく。

一般人だったサイトがいきなりあんな身体能力を発揮したんだ。負担があつて当然だろう。

俺は未だに呆然としているルイズを呼び、サイトを背負うと、歩き始めた。

ま、予定とは違ったがそう悪くも無い結末だ。

そう、思っていると、いきなり炎が襲い掛かってきた。俺は慌てずに、盾を展開し、防御する。

まあ予想はしていたがいきなりここでやるかね？

あまりにも短絡的すぎる。まあその方が都合がいいんだけど。

炎が消える前に盾を紋章に戻すと、揺らめく空気の先にはひよる長い、一人の生徒がいて、こちらに向けて杖を構えている。

マントの色からして、コイツも二年生か。

「なんの御用ですか？挨拶にはいささか無粋ですが。」

俺が片眉を上げていうと、そいつはまるで悪臭を放つ汚物に声を掛けられたような顔をし、口を開いた。

「貴様はさっき、私を含めたこの場にいる全員を侮辱しただろう。」

誇りも持たず貴族の情けで生きている平民ごときがそんな口を利く

ことは許されない。そしてそちらの平民も貴族の誇りに泥をつけた。それも、許されることではない。よってこの私、テスラキヤ公爵家次男、”火迅”のウキテトが誅殺するのだ。」

うつへー。いかにもな奴が出てきたよ。なんだこの一人最高裁判官は。

俺はあまりのことに事態についていけないルイズにサイトを押し付けると、下がらせた。勿論視線はアレな人からは外さない。いや、どうせ見なくても迎撃くらいは出来るんだけど、判り易く隙を見せてやるとすぐにそれに飛びつくだろうし。

観衆はといえば、ルイズのように事態についていけないのが3割、残りのほとんどは口では静止を呼びかけながらも、口元が歪んでいることから、ありや内心はアレな人と同じだろう。

まあ、こういう身の程知らず共に”己の分”って物を教えるためにも演出つてものが必要になってくるのだが。

「・・・ああ、それはそれは申し訳ありませんでした。え〜と、”見下している平民を卑怯にも後ろから狙って傷一つつけることが出来なかった自称お偉いお貴族様”。」

「貴様!!!!」

俺の長々とした挑発に、奴は激怒したのか再び火球の呪文を唱えた。すこぶる遅い。なんだこりゃ?もしかして、威力や難度が高くなるほど、呪文も長くなるのか?でも、その間に攻撃されたら意味無くないか?

そこまで考えていると、ようやく呪文が完成したのか、ウキテトは最初より一回り大きな火球を放ってきた。威力があるのは認めるが、馬鹿の一つ覚えだな。火球が俺の目の前まで迫り、爆発。

多分、死んだと思っているのだろう。耳障りな笑い声が聞こえた。だが、十秒もすれば、それも消える。身の丈を超える長さの大剣が7つ、おれとアレな人を隔てるように、地面に突き立っていたからだ。そして、それを紋章に戻すことで消失させると、今度はウキテトは喚き散らした。

「貴様！何だそれは！！そんなマジックアイテム、聞いたことも無いぞ！」

「己の無知を誇るなよ、無能貴族。俺だけが楽しくてお前が無様を晒す時間は、まだこれからだぞ？」

そう言うと、指を打ち鳴らす。5メートルほど上から、俺を中心に半径一メートルほどの円を描くように大小様々な剣が落ち、地面に突き刺さる。その中の一本、蒼い刀身の七支刀、キーリ（キリン）の大剣”召雷剣【麒麟帝】”を片手で引き抜くと、肩に構える同時に周囲の剣陣が消失し、俺のアンダーウェアの上に、神々しくもやたらと露出度の高い白銀の皮鎧、キリンXシリーズが纏われていく。

あっけにとられて呆然としているが、いいのか？それで。そのあたりが俺がお遊戯だと思えない要因なんだが。

「そう言えば、さっきお前は平民には誇りが無い、とか言っていたか。」

「それがどうした？平民など、いくらでも湧いてくる虫と同じだ。

その生まれからして祝福されるべき貴族とはちがう。お前たちは醜く地べたを這いずり回っているのがお似合いだ。」

アッハッハー。

予定変更して殺しちゃおっかなー。

いやいや待て待て。人死にが出るのは不味い。特に平民が貴族を殺す、というシチュエーションが。

「そう、か。いいことを教えてもらったお返しにこちらも少し教授してあげよう。」本当の殺し合い”と、”絶対の恐怖”ってモノを。」

そう言うってから、初めて殺気を向けてやると、ウキテトは面白いくらいに狼狽している。多分、今までとは違う反応をする相手に怒りを感じ、それこそ虫を潰す感覚で魔法を放っていたんだろが、今になってようやく相手がただ自分に潰されるのを待つだけの平民ではないことを悟ったのだらう。

「とりあえず十回でいいか。」

具体的に何をかは隠したまま俺はそう言うと、一瞬で距離を詰め、大剣を片手のままウキテトの真横から首筋にぴたりと固定した。

「十回」

ウキテトはその言葉を待たずに後退し、俺はあえて微動だにせず、その様子を見送った。慌てて魔法を唱えようとしているが、それを待つ必要も無い。再び、今度は正面から追いかけて、両手に持ち替えた剣を大上段に振り上げ、下ろす。このまま振り下ろせば二枚に下ろすのは簡単だが、それもやはり髪の毛に触れるほどの距離で固定。

「九回」

目を閉じていたウキテトはやはり寸前で止まっている剣を見、また俺の発言から言っているのが死刑執行までのカウントダウンであることに気が付いたのだろう。

顔を屈辱と怒りで赤く染めるが、止まっていれば何時俺が心変わりをするか判らない、と思ったのだろう。慌てて後退した。

正解だ。無駄なお喋りなんかしようとしたら、さらにカウントが減るだけだ。

「フライ！」

ウキテトがそう言うと、奴の身体が浮かび上がった。確かに上空にいれば剣は当たらなくなるが、攻撃してこないのは何故だ？あー、もしかして魔法を同時に複数使用することは出来ないのか？だとしたらそれは、悪手以外の何者でもない。

無言で大剣を戻すと、今度は白いヘヴィーボーガン、”クイックシヤフト”を呼び出した。通常弾Lv.1を装弾し、狙いをつけ引金を引く。この間五秒程度。ウキテトは何も出来ないままこちらを見ていて仰天し、自分の頬をかすっていった弾に戦慄している。

「八回」

俺は無表情にそう言うと、次弾を装填、再び狙いをつけ、発射する。今度は股の間をかすってやったら青い顔がさらに蒼くなっている。まあ其処を狙われる根源的な恐怖からは逃れられないか。

「七回」

恐怖に耐え切れなかったウキテトは高度を下げると、地面に降り立った。狙い撃ちにされたくないんだろが、どっちにしるお前の身体能力じゃ弾を避けることは無理なんだがそれはいいのか？

俺は再び大剣を構えると、跳んだ。

空中を走るように低い角度で奴の頭上まで到達すると、身体を半回転させ、背中に沿って地面に突き立てるように大剣を投げつける！寸分変わらず、奴の尻をかすめるように突き立つ大剣。何の反応も出来ていなかった奴は、振り返って余計に顔色を悪くしていた。

「六回」

ふと、奴は何か気付いたのか、顔色は悪いながらも元のいやらしい笑みを浮かべている。まるで、お前がいい気になっていられるのもここまでだ、と言わんばかりに。

なんだろ？ まあ何でもいいけど。その余裕ごと全てを播り潰すから。

そう思ったが、しかしそれは勘違いであつたらしい。奴は手を伸ばし、地面に突き立ったままの大剣を引き抜こうとしている。

あー、そっか。こいつさつきマジックアイテムがどうとか言ってたっけ。多分、俺があんなでかい得物をブン回せるのは何かの仕掛けがあると思っっているのだろう。

そういう意味で俺は期待を裏切られた形になつたがまあウキテトという男が何処までも道化であることが確認できたのでいいか。

仕掛けがあるのは俺の身体のほうで、鎧や武器は一般的なそれと重量が変わらないから・・・。

あ、やっぱり。引き抜こうとして四苦八苦した拳句、今度は倒れてきた大剣に押し潰されている。ハンターすら振り廻すのに苦労するものをこんな見るからに貧弱な奴が扱えるはずもない。

「五回」

大剣を片手で持ち上げると、無表情にそう言う。そのまま紋章に戻すと、今度はラス（ドスランポス）の双剣”ハイランポスクロウズ

”を構えた。

ウキテトは荒い息をつきながら、顔を土気色にしている。そろそろ折り処か。

杖を持ち上げるのもやっとになっているウキテトに近寄りながら特殊な呼吸法を始めた。

陰をより深き陰に。陽をより高き陽に。

自然と体内が活性化していき、徐々に全身のリミッターが外れていく。

そのまま使つとミンチにしてしまうので、強化しつつも制御により重点をおき、虚ろな目をした奴が逃げることも出来まいま射程圏内に入った瞬間。

俺の腕は消えた。

正確には、そう見えるであろう人知を超えた動きをした。

斬！

「四回」

斬！

「三回」

斬！

「二回」

斬！

「一回」

斬！

一瞬にしてウキテトの服が杖ごと切り裂かれ、風に吹かれて散らばっていく。パンツを残したのは俺なりの慈悲だ。嫌がらせ、というルビをふってもいいが。

因みに回数に関してはズルのように聞こえるが、一応本当に乱舞をしている最中、寸止め（それ以外は服を大胆カット。）をしているので、嘘というわけでは無い。

さて、服ごとプライドも切り裂かれたウキテトは、といえは何も映していない目で地面をぼんやりと見ている。ん？口が動いているが・

・・・うわ、誰にも聞こえないような小声で「これは夢だ。夢に決まっている。」とか言ってる。思った以上に打たれ弱い奴だな。さて、それではもう一押ししておくか。

そう考え、双剣を仕舞うと手加減しつつ側頭蹴りをかました。

なんの抵抗もしなかったウキテトはゆるい放物線を描き、吹っ飛んだ。中身が無いせいかな、よく飛ぶな。

「呆けていいなんて俺は言ったつもりは無いが？」

弱弱しく起き上がるうとする姿を見ながら、指を打ち鳴らす。十以上の数の剣やランスが奴のいる場所の上空に現れ、重力に従って落下した。

地味な音と共に、サーカスなんかでやるナイフ投げのように剣はウキテトの身体をかすめて地面に突き立つ。

「あ、う・・・。」

あまりの恐怖に、奴は満足に喋ることも出来なくなっていた。その目から、まだ壊れていないことを確認し、そばまで歩いていく。俺から逃げたいのだろうが、剣が牢代わりになっているため不可能。俺は近くまで来ると、にっこりと笑い、奴に視線を合わせながら、その恐怖に濁った目に噛んでふくめるように言う。

「忘れるな。」

「お前が生きている理由は俺の気紛れでしかないことを。」

「忘れるな。」

「お前はお前が見下した平民に勝つことすら出来なかったことを。」

「忘れるな。」

「次に俺の逆鱗に触れたときが、お前の死ぬときだということ。」

「忘れるな。」

「お前が忘れても、俺が覚えていることを。」

「忘れるな。」

「忘れるな。」

「忘れるな。」

俺がそう言つと、ウキテトは哀れなくらい必死に頷き、ストレスの

せいか、気絶した。あ、口から泡を噴いてる。あの様子じゃ、間違
いなくトラウマになっただろう。多少は平民に対する侮蔑が無くな
ればいいんだが。まあ俺のいない場所でサイトにちよっかいを出し
てきても不味いので徹底的にやったが、観衆の奴らにもそれは伝わ
ったのだろう。今は俺に視線を向ける者は皆無で、それどころかチ
キンのように震えている奴が大半だ。つてうわ、さらに失禁かよ。
汚れるのが嫌なので剣を消し、踵を返す。

パンツ一丁で気絶する敗者と最初から息すら乱していない勝者。
最初からほぼ完全に結果が見えていたとはいえ、これもまた一つの
結末である。

ハーレム願望など、お前には（年齢的に）まだ早い！！（前書き）

オスマンさんとコツパゲールの会話を入れようか？と思いましたが、基本主人公の一人称なので、ざっくり省略しました。

ハーレム願望など、お前には（年齢的に）まだ早い！！

あれから数日が経った。

決闘騒ぎを起こしたことで、あの後目を覚ましたサイト（一応、心配になったので俺の秘薬を飲ませた。）とギーシュは頭の薄い教師に連れて行かれて説教を食らったらしい。らしい、というのは俺は何も言われていないからだ。

特別、口止めをしたわけでもないのだが、どうやら俺とあのアホ貴族（名前なんだっけ？）の一件はあの場にいた者たちの間では禁句になっているらしい。まあ、無理も無いのかもしれない。これまで平民とは、罨や人数、策略をもってしか貴族を倒すことが出来ない、という常識を完全かつ圧倒的にぶち壊してしまったのだから。お陰で学院の敷地内を散策などしていると、露骨に恐怖を込めた視線を感じることも少なくない。

それでも知っている奴は知っているだろう（実際、サイトはその頭が焼け野原の教師に俺のことについて聞かれたらしい。まあ奴は気絶していたので、主に話したのは同席していたギーシュの方らしいが。）が、今のところ、積極的にアクションを起こしていないのは、俺を刺激しないためか、それともルイズの実家であるヴァリエール公爵家を考えてのものか。

ともかく、今のところ、少しの変化以外はこれまでとは変わったことも無く生活している。ルイズはといえば、怪我をしたときはサイトを心配していたが、あっさり回復するとすぐに元の（召使並みの）扱いに戻した。

サイトも洗濯や掃除を俺と交代制にしたせいか、多少はその生活にも慣れてきたようだ。偶にやはりルイズの扱いに腹を立てて復讐に出ることがあるが、俺はそのときには避難している（ルイズは虫の居所が悪くなると理不尽な連帯責任を持ち出すからだ。）ので、実害はあまり無い。以前のように精神的な手段に訴えない限り、俺も

何もいうつもりは無い。

とはいえ、サイトは俺が感心した地雷踏み以外にも、『基本的にアホ』という持病も患っているらしく、今日もルイズに強制されて一緒に出た授業でルイズと18禁的なアレをする寝言をピンポイントで言い、かつ怒って起こしたルイズの態度に腹をたて、さらに怒らせるような一言を口走ったせいで不思議なことに同席しただけの俺にまで被害が出た。ここまで来ると一種の芸術のようにも思えてくるから人間の感性とは不思議である。

だからといって腹が立たないはずも無いので、その後でサイトに剣を教えてやる時間に散々肉體言語で説教してやったが。

多分、あの決闘騒ぎ以来、食事を厨房で貰っていることがサイトが懲りない理由の一つなんだろう。料理長のマルトーというオッサンは貴族が大嫌いなようで、それを倒した自分と同じ平民、ということと俺とサイトはまるで英雄扱い。あれからずっとただ飯を食わせてもらっている。因みにサイトは「我らの剣」、俺は「我らの刃」と呼ばれている。食わせてもらっていて悪いが、その呼び方だけでもどうにかならないものか？

さて、俺はサイトをポコツてやったお陰でストレス解消が出来たが、ルイズは当然そうではない。それが判明したのは部屋に帰って暫らく経った頃だ。ルイズはおもむろにサイトの藁たばを廊下に出し、部屋の外で寝ることを命じたのだ。当然、サイトは抗議したがルイズは「夢のなかの私があつたためてくれるわ」とにべもない。すごすごと廊下に出て行くサイトだったがその目つきからして反省している、というよりは次の復讐方法を考えている、といったところか？

とりあえず巻き込まれないように気をつけよう。

とぼっちりの怖い俺はヨシツネとベンケイ、マサムネでルイズの機嫌をとると、早々に藁たばに潜り込んだ。外見だけでも寝ているふりをしておけばルイズもあまり無体なことはいらないだろう。

そうして、しばらく経った頃だろうか？

突然誰かの怒鳴るような声が聞こえると、窓の外が一瞬明るくなっ

た。多分、火系統の魔法。声が男のものだったことから、キュルケがまた男をニアミスさせたのか、と納得した。外見通り奔放なところのある彼女は自分の虜になった男をそうやって試したりするらしい。もつとも、飽きっぽいところもあるのか、試練を見事クリアできたからといって彼女の歡心を得ることは難しいようだが。正直あまりいい趣味とは思わないが、それでも最後の一線はちゃんとまもっているあたりは、ただの色馬鹿とは違うのだろう。我らがルイズはそんな些細なことはどうでもいいようだが。

さて、その彼女はといえば、今の音で目を覚ましたのか、マサムネを抱えたまま上体を起こしている。どう説明したのか（ルイズはキュルケの名前が出ただけで不機嫌になることは経験則上、間違いない。）と思案しているとまた男の怒鳴り声が聞こえた。さっきとは違う声だ。それも、やはり窓の外が一瞬明るくなった後聞こえなくなった。

それで完全に目を覚ましたルイズはそのそとベッドから出ると、まっすぐにドアの方へ歩いていった。

その間、三回目の怒号が響き、ってこれ声からして三人はいるぞ？しかも一人目とも2人目とも違う奴！キュルケのやつとんだけニアミスさせてんだよ！

ルイズは躊躇うことなくドアを開けると、そこに置かれた主が不在の藁たばを確認。そのまま流れるようにキュルケの部屋のドアを物凄いい勢いで開けた。こういうとき、生まれつき女の子との違いを一番感じるな。女の勘ってやつか、全く迷いが無い。現実逃避気味にそう思いながらルイズの後についてキュルケの部屋に入ると、果たしてそこにはサイトがいた。キュルケとキスをしている状態で。キュルケはサイトを離すと、（彼女の視点では）不埒な侵入者に向き合った。

言い争いをしているキュルケとルイズに挟まれてサイトはおろおろしている。やるときはやるけど、それ以外はホント駄目だな、こいつ。

「来なさい。サイト。」

「ねえルイズ。彼は確かにあなたの使い魔かもしれないけど、意思だつてあるのよ。そこを尊重してあげないと。」

「そ、そうだ。誰とつきあおうが俺の勝手だ。」

「あんた、明日になったら十人以上の貴族に、魔法で串刺しにされるわよ。それでもいいの？」

「平気よ。あなただつてヴェストリ広場で、彼の活躍を見たでしょう？」

「ふん。ちょっとはちゃんばらがお上手かもしれないけど。後ろから『ファイヤーボール』を撃たれたり、『ウインド・ブレイク』で吹き飛ばされたりしたら、剣の腕前なんて関係ないわね。」

「大丈夫！あたしが守るわ！」

最初は部屋を追い出された恨みからキュルケの話に乗っていたサイトだったが、ルイズの言葉で冷静になつたらしい。ルーンの力があるといつてもサイトはこの前初めて剣を握つた全くの素人だ。今は基礎鍛錬をやらせているが、まだまだ成果が出るまでは時間が掛かるだろう。

当然、嫉妬に駆られたメイジたちがその間親切に待つてくれるはずも無い。正面から、一対一なら、まだギーシュくらいの使い手なら大丈夫だろうが、ルイズの言つたようなことになれば抵抗らしい抵抗も出来ないだろう。

自分の未来予想図に暗澹たるものを見たのか、サイトは立ち上がるのと、少々名残惜しそうにしながらもルイズの部屋に帰つた。

ルイズは部屋に全員入ると机の引き出しから乗馬鞭を取り出してサイトに折檻を始めた。なんで机の中に乗馬鞭が？と思つたが、ここで不用意な発言をすると今度は俺まで巻き込まれる。それは勘弁願いたいので再び藁たばの上に戻つた。

サイトの悲鳴を聞きながら、明日からは防御も教えてやるかな、と

遠い目をしつつ考える。

ルイズも自分のものを他人に盗られる、しかも相手が仲の悪いキュルケであることから今こんなことをやっているんだろっし、ま、そのことをサイトに追々教えていけば問題無いだろう。

つと、ルイズの隙をついてサイトが両手を捕まえた。でもあの調子じゃ手を離れた瞬間にまた再開するだろうし、どうするんかね？

「えっと、お前、もしかして……。」

サイトは何かに気付いたようだ。ま、自分から気付いたなら問題無い。他人から答えを貰うことに慣れたら、自己判断能力が失われていくし。

「嫉妬？俺に惚れてた？」

アレ？

「もしかして、俺がキュルケのベッドに座って、お前のベッドに忍び込まなかったから怒ってる？いや、気付かなくてごめん。」

おいおいおい。どういう異次元論理展開だ？どんだけ自分を過大評価してるんだお前は。

「俺もお前のこと、ちょっといいなって思ったことあるよ。……」

俺は男だからきちんとアプローチするよ。今晚、お前のベッドに忍び込む。お前が俺の藁たばに忍び込む必要は無い。」

キメ顔で言ったサイトは自分が男としての誠意を見せているつもりなんだろっしが、俺から見ればこれ以上無いくらい空回りしている。

だいたい言われてるルイズだってそんなこと……。

うわ。肩がわなわなと震えてる、と思ったら爪先がサイトの股間に突き刺さった！どうやらサイトは『地雷踏み』『基本的にアホ』以外に『空気読めないこと山の如し』の持病も患っているんだな。可哀想に。

悶絶するサイトの顔面を踏みつけたあたりで気が済んだのかルイズは椅子に座り、キュルケと自分の家の先祖代々の因縁を語り始めた。ははあ。ルイズとキュルケの仲が悪いのは本人たちの性格の相性プラス、実家の歴史があったわけね。

隣り合っている敵国の貴族。憎しみあい殺しあう歴史か。

まあ恋人や奥さんを取られた云々についてはヴァリエール家の人間が迂闊だったとしか言えないが。相手の心変わりに気付かない男の方に問題があるだろう。してみると、キュルケの家系はその辺が敏感なのか。

話をしていると、ようやく危機感を持ったのか、サイトがルイズに剣をねだっている。

「ナナシに借りればいいじゃない。この前もそうしたでしょ？」

「俺の武器は全て生きてるんでね。まだ剣の使い方すら判ってない奴に貸したくない。この前は応急的措置ってやつさ。だいたい、俺がいないときに剣が必要になったらどうするんだ？常時剣を貸せっていうのも無理だぞ。あれ、長時間やると俺が疲れるんだから。」

「ふーん。じゃあサイトにも専用の武器が必要ね。わかったわ。明日は虚無の曜日だから、街に連れて行ってあげる。」

虚無の曜日？ああ、休みの日か。

「んじゃ、ついでに俺とサイトの服も買ってくれ。二人ともずっと着たきりだし。」

サイトはどのようなかは知らんが、俺はあれからもシエスタに着替えを借りて洗濯している。だが、いい加減いつまでも借りるのも心苦しくなってきたので、せめてもう一着くらいは欲しい。

「わかったわ。行き帰りはあんたの竜を使うわよ？」

まあそれくらいは構わんだろう。二つ返事で了解すると、話は終わり、サイトが廊下に出ようとした。

「どこに行くのよ。」

「どこって廊下。」

「いいわよ。部屋で寝なさい。またキュルケに襲われたら大変ですよ。」

「お前、やっぱり俺のこと……。」

再び鞭を掴もうとしたルイズを見て、サイトはそれ以上を口にする愚を避け、藁たばと毛布を部屋に入れてその上に横になる。

その後、左手のルーンを見つめていた。自分の生活を良くも悪くも変えた一因であるそれを見て、サイトは何を考えるのか。それは判らないが、俺は眠気に逆らわず、意識を手放していた。

フラグ立て、フラグ折りは計画的に、さりげなく。(前書き)

今日からの再開になりますので、また宜しく願います。

休み中にコメントくださった方、本当にありがとうございます。励

みにして頑張っているかと思えます。

フラグ立て、フラグ折りは計画的に、さりげなく。

俺とサイトとルイズの三人組みは城下町を歩いていた。学院からレア（リオレイア希少種）に乗ってきたので、時間も大してかかっておらず、また空の旅は2人にはそれなりに楽しいものだったようだ。まあレアの背中には鞍なんて無いし、表面がゴツゴツとしているのでそれなりの距離を乗ろうとしたらクッションは必須だが、乗れてしまえば、あとはほとんど揺れも無く、概ね快適だ。

スピードも段違いなので、馬で三時間はかかる距離をその半分で移動できる。本当はもっと速く動けるらしいが、それ以上は風除けでも無いかぎり乗っていることができなくなるので安全運転にしても良かった。

さて、王都トリステインの城下町であるが、雑多な人間が入り乱れていて、中々活気がある。見たことも無い食材や道具を売る商人、足を止めてそれを見ていく人たち。ちよつとした観光気分も味わえるだろう。

サイトはその光景に物珍しさを感じながらも、「狭いな。」と言っている。確かに、自動車が通る道路が基本の元の世界の日本に比べれば、この道幅5メートル程度しかない道は狭く感じるだろう。俺はポツケ村で慣れているので、あまり気にならないが。

当然、そんなに道が狭くて人が多いと、混雑する。しかも度々サイトが露店の商品を珍しそうに覗き込むので中々前に進めない。

そんな中で一目で貴族と判る格好のルイズがいれば間違いなく目立つ。本人が減多にいない美少女であることも無関係ではないんだろうけど。

そして貴族＝金持ちの図式は概ねこの世界でも健在なので、今俺の腰に吊るしてある袋に手を伸ばしている阿呆のような手合いも出てくる。俺はその手を掴むと骨を折らない程度に捻り上げ、悲鳴を上げる背中に向かって相手に聞こえる程度の声で囁く。

「貴族の従者に手を出したということはその貴族の財産に手をだしたのと同じことだ。つまり君は死刑なんだが、それは嫌だね？」
相手は怯えながらも無言で頷く。荷物検査は・・・あった。腰に吊るしてあるこの袋か。

「なら、コレは勉強料として受け取っておくよ。因みに次に来たら、問答無用で衛兵に引き渡すのでよろしく。」

手を離してやると、スリは一目散に人ごみの中に紛れ込んで判らなくなった。俺のハツタリが効いたんだろうか。袋の中を確認すると数枚の銀貨と後は十枚以上の銅貨が入っている。中身だけを抜き出してポーチに入れ、残った袋は道の隅にポイ捨てした。禁止条例は無いだろうから大丈夫だろう。

そこに2人が近づいてきた。ルイズは俺が硬貨を手に行っているのを見て不思議そうに言った。

「そのお金、どうしたの？」

「さっき、スリから没収した。」

「どうして逃がしたりしたの!？」

「ま、そう言うなよ。何か事情ってモノがあるかもしれないだし、貴族みたいに生まれつき衣食住を心配しなくていい人間なんて少数派なんだぞ?」

「だからって悪事を見逃していいことにはならないわ。」

「悪事、ねえ。実に判り易い正論だ。じゃあ聞くが、あのスリが犯罪に手を染めるまで追い詰められた理由が判るか?」

「そんなこと・・・判るはずがないわ。」

「そう、わかるはずが無い。唯一判るのは、あの男にはそこまで墮ちてしまうほど、助けてくれる相手がいなかったことだけだな。誰も好き好んでリスクの高い事をしたがりはない。」

実際、あのスリの技術は拙かった。あの程度の腕なら、俺が相手ではなくとも、早晚捕まるだろう。

「でも、また来たらどうするのよ?」

「仏の顔は三度まで、って言うが俺は其処まで気が長くないんでね。」

次に来たら容赦はしないさ。脅しつけたし、まずは無いと思うがね。

「ルイズはなおも何か言いたげだったが、言葉を飲み込んだ。多分、俺が言った衣食住の保障が無い生活のことを考えているのだろう。いい子だな、と思うと、自然とルイズの頭をポンポンと柔らかく叩いていた。するとルイズは顔を赤くして、「なによ！」と言ってサイトの耳を摘んで引きずっていく。

なんかすまん、サイト。

初めて俺のとばっちりでサイトが被害を受けた瞬間だった。

「ピエモンの秘薬屋の近くだったから、この辺なんだけど・・・。」
服よりも先にサイトの武器を買うことになったのだが、しかし考えてみれば武器を必要とするのは平民、それも荒事が本業の連中である。当然、後ろ暗いところの一つや二つ、持っている。対して、ここは王家のお膝元。客層に店も順じたのか、その武器屋は薄汚い路地の一角にあった。

店に入るが、中も薄暗い。壁一面に大小様々な武器が展示されており、なかなか迫力がある。しかし、サイトのように武器の存在が珍しいわけでもない日本出身の俺としては、こんな置き方で地震が起きたときどうするんだ？と少し不安になっていた。もしかしたらこの星にはプレートが無いんだろうか。

「旦那、貴族の旦那。うちはまっとうな商売してまさあ。お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽっちもありませんや。」
店主の言葉は丁寧なんだが、どうにもドスが利いている。まあ普段用が無いはずの貴族（店主はルイズの格好をみてから喋った。）が来店したのだ。クレームをつけて金をふんだくろうとしているのは、とか思われてもしょうがないか。それだけこの国では平民にとって、貴族とは恐怖や嫌悪を向けられる対象なのだ。

「密よ。」

「こりやおつたまげた。貴族が剣を！おつたまげた！」

「どうして？」

「いえ、若奥様。坊主は聖具をふる、兵隊は剣をふる、貴族は杖をふる、そして陛下はバルコニーでお手をおふりになる、と相場が決まっていますんで。」

要するに貴族が剣を欲しがるなんて、普通はありえないと言いたいんだろうが、中々うまいことを言うな、このオッサン。

ルイズが剣を注文している間、俺は壁に飾られた剣や長柄の得物を見ていたが、どうにもこの店はあまり武器の質が良くないらしい。

単に薄利多売なのか、それとも店主が放埒営業しているのか。不思議と後者だと思えた。

その証拠として、中には二、三良い品もあるのだが、それは例外なくやたらとゼロの数が多い値札が付いている。まあ今の段階なら多少良くない剣でも、使い潰すと見切りを付ければそう悪くは無いのかもしれない。とりあえず剣の重量に慣れさせることも必要だし。そうこうしていると店主が一本の大剣を持ってきた。見た目は、柄が長く、両手持ちも出来るようになっており、鏡のように光を反射する、磨き上げられた刀身にいくつかの用途不明の宝石が着けられている。

店主は店一番の品、と豪語しているし、サイトはその剣の優美さに感心している。ルイズも満足気だ。そう、見た目は立派なんだよ。見た目だけは。

「ちよつといいか？」

ルイズが買ったたりする前にその剣を店主にことわって見せてもらおうと、確信する。ああ、これ鑑賞用の剣だ。この店がやってるみたいに、壁にでも掛けておけば、中々見栄えがするだろう。もっとも、コレを持って戦場に立ったりしたら、それはあの世への片道切符をかうことに他ならないのだが。

俺が親切にそのことを伝えると、店主は例のドスの利いた声で猛反発した。

「冗談いつちやあいけやせんぜ、お客様。この剣はかの有名なゲルマニアの錬金魔術師シュペー卿が鍛えた一振りで、魔法がかかってますから鉄だつて一刀両断できやす。ごらんなさい、ここに名前が刻まれているでしょう?」

知らねーよ。そんな異世界貴族。

そう口走りそうになつたのを堪えて、まあ店主も自分の店の儲けと信用がかかってるから必死だな、と思い直した。

が、あまりにもしつこく食い下がってくるので段々鬱陶しくなってきた。

「んじゃ、ちよつと貸してもらえますか?」

俺の言葉に店主は一瞬いぶかしんだが、売り込むチャンスだと思つたのだらう。あっさりと渡してきた。

俺はその剣をしげしげと見たあと、徐に刀身を両手で持ち、次の瞬間、それをへし折つた。

店主は言葉にならない罵声を口にしたあと、その場にへたり込む。折れた剣の断面には、どうにも不純物が多く含まれているとおぼしき黒いブツブツが浮かんでおり、見た目だけであつたことを証明していた。

さて、俺は何かを言おうとするルイズを手で制し、店主にさらに追いつちをかける。

「あつれー? 貴族様に売ろうとした剣が簡単に折れちゃつたなー。貴族様に売ろうとした剣が。これってやっぱアレかな? 何も知らない貴族様に値段だけ高い不良品を売りつけようとしたのかなー? そこんとこどうです、店主?」

俺のわざとらしい言い方に、店主は地獄からさらに下層地獄に突き落とされたように自身の立場がかなり不味いものであることを理解する。必死に自分とこの店が無実であることを弁解している。まあその辺はどうでもいい。

結局、俺は剣を一本、高くないものをただで貰うことで、記憶喪失に(この比喩は俺にはあまり楽しくないのだが、まあそれはともか

く。）なることを約束した。

店主は半泣きで了承した。ルイズとサイトは何故か引いている。実際、あんな剣を実用品として貴族や他の金持ちに売ったりしたら大問題なので、今回はその授業料だと思って涙を呑んでもらおう。

「はは、こりゃ一本とられたな！なあオヤジ！」

そうして剣を物色していると、その場にいない者の声が唐突に響いた。

周囲を見回すが、俺たち以外に新しい客が入ってきたわけではない。サイトとルイズは不思議そうにしている。店主だけがうるせー、と気落ちした声で言っていた。

「なんだ？いつもの憎まれ口も売り切れか！あんなナマクラ売りつけようとしたんだ、コレくらいで勘弁してもらえてよかったじゃねえか！」

確かに姿は見えない・・・が、この店主の傷口に塩を塗りこむような言葉は、俺の目の前から響いている。（自分がその傷を作ったことは諸事情により忘れていきます。）

なんとなく目の前にあった、いくつもの剣の突っ込まれた箱の中から、一本の薄手の長剣を抜き取った。表面には錆びが浮いて、ボロボロだ。

「おでれーた！お嬢ちゃん、あんた、使い手か？・・・いや、違う？でも使い手と共通する部分がある。なにか、そう欠けたものを無理に補おうとして、別物になっちまったみてえな・・・。」

「勝手に考え込むのは構わんが、俺をお嬢ちゃんとか呼ぶんじゃないえ。」

「それって、インテリジェンスソード？」

「そうでさ、若奥様。意志を持つ魔剣、インテリジェンスソードでさ。いったい、どの魔術師が始めたんでしょうかねえ、剣を喋らせるなんて・・・。とにかく、こいつはやたらと口は悪いわ、客に喧嘩は売るわで閉口してまして・・・。やいデル公！これ以上失礼があつたら、貴族に頼み込んでてめえを熔かしちまうからな！」

「おもしろい！やってみる！どうせこの世にやもう、飽き飽きしてたところさ！溶かしてくれるんなら、上等だ！」

機嫌が悪い店主が売り言葉に買い言葉でヒートアップするが、サイトがその剣を買う、ということとで落ち着いた。ボロ剣はサイトのことを使い手と呼んでいる。ルーンのことか？ルイズは反対するが、俺は賛成票を入れておいた。あんまり高い剣を選んでも（断れないだろうけど）悪いし。まあ実戦には使えなくても、練習用にはいいか。サイトは生まれて初めて手にした自分専用の剣にご満悦そうだ。

店から外に出ると、今度は服屋に行く予定だったのだが、途中でキルケに出会った。というか、どうやら学院から後をつけてきたらしい。隣には、さっきからずっと本を読んでいる、明らかにルイズよりも幼く見える少女を連れている。

またぞろ始まったルイズとキルケの口論を尻目に、俺とサイトはその少女（一瞬だけ顔をあげてタバサと名乗った。）の傍で一休みすることにした。

することも無いので、タバサのことを見てみるが、全く気付かれない。

しかし、ルイズやキルケとは違った意味で気品を感じさせる子だな。なんとというか、無表情の中にも芯の強さがある、というか。

それにしても魔法学院の入学年齢ってどうなってる？どう控え目に見ても中学生、いや、忌憚の無い意見を言わせてもらえば、小学生にすら見える。

そういう傾向のある方には大いに好かれそうだな。そう思った瞬間タバサの澄んだ瞳が俺を見つめていた。何を考えているかバレた？イヤイヤ違うだろ。ここでボロを出すな。緊張するな！。よーし深呼吸！。（注：充分緊張しています。）

「どうした？」

「私はこの前の決闘騒ぎを見ていた。」

「へー、それで？（目をそらす）」

「あの剣はどうやって出していたの？相手の貴族も言っていたけど、あんなマジックアイテム、聞いた事も無い。」

「いや、あれは俺の秘密っていうか……。　（遠い目をして誤魔化す）」

「そう。」

それっきりタバサは俺に興味を失ったように本に視線を戻した。おかしい。なんであそこまで適当な嘘が出てこなかったんだろう？小さな子供に嘘をつくことに罪悪感を覚えた？まさか。

俺が人知れずそんな葛藤に苛まれ、サイトが雑踏を眺め、タバサが本を読んでいた頃、放置されて気の赴くまま口論をしていたキュルケとルイズは、何故か俺とサイトに服をプレゼントしてどちらを選ぶか勝負する、ということに落ち着いていた。

フラグ立て、フラグ折りは計画的に、さりげなく。(後書き)

いきなりなんかナナシが外道ですね。
そしてデルフの扱いが空気に近い。

流れというものは、概ね流されるためにある。(前書き)

ナナシを会話に参加させるのがやっぱり難しい・・・。

流れというものは、概ね流されるためにある。

どうしてこんなことになったんだろう、と思うことがある。そういうことを考えるのは、概ね人生に迷ったときであり、俺にとっては5年前のあの日がそれにあたる。

そして今も俺は、不思議なことに、ロープでぐるぐる巻きにされて吊るされながら、同じことを考えている。俺の人生何処をどう間違っただんな目にあっているんだろう、と。

視線の先には俺と同じように縛られて吊るされたサイトがいる。その顔にはどこか達観したものが見受けられた。おい、十代で人生に見切りをつけるな。

場所は学院の本塔の半ばほど、高所恐怖症の人間ならすぐに意識を手放せるあたりだ。人間が自由落下したらすぐに人型の染みとしてジョブチェンジすることになるだろう。どんな斬新な職業システムだ。

口論の結果、何故か本人抜きで俺とサイトの服を作った気になった方を選ばせる勝負になったのだが、サイトはどちらもそれなりに気に入って、俺はどちらも気に入らなかった（両方ともスカートとか、やたらと可愛い生地をつかっていた）で、どんな罰ゲームだ、と思ったからだ。因みにサイトは試着した姿を見て笑っていたのでボコッた。最初は決闘、ということになっていた。

2人とも、自分の矜持の為に争っているのであって、誰かへの贈り物の為に決闘するのは馬鹿馬鹿しいと考えたのだろう。そのまま決闘が流れる方向を期待した俺は甘かったようだ。今度は、そもそも当事者である俺とサイトをこうやって吊るし、それを魔法でロープを切って落とされた方が勝ち、という勝負になったらいい。出店の射的かよ。

なのでルイズとキュルケははるか下の地面の上でこちらを魔法で狙

うために待機しており、タバサは青い体色の竜に乗って俺やサイトの近くで飛んでいる。こんなときも本を読んでるけど、タバサさん？決闘を止めたとき、二人に何か言っていたけど、もしかしなくてもコレ、貴方のアイディア？

そう考えながら見つめていると、タバサが一瞬だけこちらを見て、握り拳から親指だけを伸ばした。

いや、サムズアップされても。グッドラックか？グッドラックとかいう意味か！？

俺はタバサにリアクションを返すかどうか迷い、結局断念した。その代わり、彼女が乗っている青い竜を見る。ルイズの説明では、風竜、という種類の竜の幼生らしいソイツは、何故かじつとこちらを見ている。ふむ。同じ飛竜種でも、レウやレアと違って顔は威圧感よりはどことなく愛嬌を感じさせる。体つきが小さいから（レウ基準）かもしれない。

そうこうしていると、始まったらしい。因みにルールはキュルケとルイズが一人二回ずつ魔法を行使してロープを切り、その数を競うというものだ。勝った方の選んだ服を使用することになるらしい。

「そのルールだと、どっちにしても俺は罰ゲームなんじゃ？」という俺の頭の良い意見は黙殺された。こうして頭の良い平民の意見は闇に葬られていくのだろう。貴族社会に呪いあれ。

ルイズが呪文を詠唱している。キュルケがハンデとして先攻を譲ったのだろう。多少ゆっくりとだが、確実に魔法を完成させようとしているのだろう。そうして呪文が完成すると、ルイズは杖を俺の少し上のロープに向けて、振り下ろす。

轟音。

俺の背後の壁が爆発した。なかなかの威力だ。効果範囲は狭いが、炎王龍の粉塵爆発並みの威力があるんじゃないだろうか。直撃すれば人間の一人や2人、簡単にミンチにできるだろう。しかしコントロールが絶望的に甘い。こんなモンで人の近くを狙うんじゃないよ。サイトは爆発した壁を見て啞然としていたが、次に自分がそれで狙

われる（本当はロープなんだが、あの顔じゃすっかり忘れているだろう。）ことを思い出し、「殺す気か！」と怒鳴っている。ルイズはそれを無視して次の呪文の詠唱に入った。鬼かよ。

二度目の轟音。しかしそれは、やはりロープではなく背後の壁を破壊するだけに留まった。しかし、なんでルイズの魔法って爆発ばかりするんだろ？ルイズの話じゃ、家族の中でも爆発するのはルイズ一人だけらしいが……。

あ、ルイズが目に見えて落胆してる。キュルケは笑ってルイズを馬鹿にしている。今その的にされたばかりだし、今回はフオローできかないな！。

さて、今度はキュルケの番らしい。さっきのルイズと同じように呪文を詠唱すると、小さな火球が杖の先に生まれ、一直線にサイトのロープへ向かい、外れることなくぶつかって焼き切った。

そして、サイトが落下し始めるとタバサが杖を振り、直後落下のスピードが緩やかになった。たしかに威張るだけはあって魔法というのは便利だ。

お次は俺の番か、と思っていると、なにかの音が聞こえた。その音は規則的にこちらに近づいてくる。なんだ？と思っていると、それが姿を現した。子供が人間の形を粘土で作ろうとして、失敗したものを単純に巨大させたような、土の塊。土の歪なヒトガタ。

それが、足元にいるルイズたちを無視して、こちらにやってくる。どうやら目的はこの塔か？

そこまで考えると、俺は慌ててロープを引き千切り、落下を始めた。タバサは逃げ惑うキュルケたちを助けようとしているので、気がつかない。勿論、それを判りきった上で落下しているので、途中、塔の壁に接近して着地。停滞なく重力に引っ張られつつ壁を地面に向かって垂直に駆け下り、地面が近くなったところで壁を蹴って空中に出、そのまま身体を丸めて七回転し、スピードを殺す。直後、体操選手がやるように、身体をYの字にして、地面に着地した。

普通の人間には百パーセント無理だが、半ばそれをやめている俺に

は、そう難しいことではないので、試してみた。しかし、可能かどうかとやるかどうかはまた別の話なので、正直あんな曲芸はもうしたくない。

そしてよくよく考えてみると、飛べる奴を出せば、あんな思いもすることは無かったんじゃないかと気付く、少しげんなりした。

ゆっくりと落下してきた糞虫状態のサイトを回収して退がろうとすると、そこにルイズが来た。そのまま一緒に逃げるが、ふと俺に担がれているサイトが、何故逃げなかったのか気になったのか、ルイズに聞いた。

「使い魔を見捨てるメイジはメイジじゃないわ。」

特に気負いも無く言うルイズは、何処か眩しく見えた。

不意に、俺たちの身体が浮き上がり、そこに来たタバサの飛竜が回収した。どうやらタバサが魔法で助けてくれたらしい。

「ありがとう。」

礼を言うと、タバサは無言で頷いた。

視界の隅ではゴーレムが塔の壁を拳で破壊し、その穴の中に誰かが入っていくのが見えた。その人物は一分もしないうちに何かを抱えて出てくると、ゴーレムの頭に戻り、再び動き出したそれは、しばらく学院の外を歩いていくと、突然崩れ土の小山になった。

「あいつ、壁をぶち壊してたけど・・・、何したんだ？」

「宝物庫。」

「あの黒ローブのメイジ、壁の穴から出てきたときに、何かを握っていたわ。」

「泥棒か。しかし、随分派手に盗んだもんだな・・・。」

そこにはヒトガタになっていた土があるだけで、誰の姿も無かった。

翌朝、学院は凄い騒ぎになっていた。なにせ、巷で有名な怪盗”土くれのフーケ”が、まんまと秘宝を盗んでいったのである。しかも、馬鹿でかいゴーレムで物理的に押し入る、という非常に大胆な方法

で。

昨日、あの場にいたから、というわけで宝物庫の前まで俺たち5人は呼び出されたのだが、来てまだ5分も経っていないものの、既に帰りたくなっていた。

それは何故か？

解答 目の前の教師陣はこれからの方策についての検討ではなく、責任の追及なんかをやらかしているからです。部外者の俺だって、そんなことをやっている状況じゃないことくらいは判るぞ？

「土くれのフーケ！貴族たちの財宝を荒らしまくっているという盗賊か！魔法学院にまで手を出しおつて！随分と舐められたもんじゃないか！」

「衛兵はいつたい何をしていたんだね？」

「衛兵などあてにならない！所詮は平民ではないか！それより当直の貴族は誰だったんだね！」

「ミセス・シュヴルーズ！当直はあなたではありませんか！」

「も、申し訳ありません・・・。」

「泣いたつて、お宝は戻つてはこないのですぞ！それともあなた、『破壊の杖』の弁償できるのですかな！」

「わたくし、家を建てたばかりで・・・。」
「いや、その言い訳もどうよ？空気読めない政治家じゃないんだし。」
馬鹿

しかし、他の教師はそのオバチャンが悪い、ということ結論しようだが、それでどうするつもりなんだ？

「なあ、ルイズ。」

「なによ。」

「帰っちゃ駄目か？」

「駄目。私だつて我慢してるんだから。」

俺の願いをバツサリと切り捨てたご主人様は、再び教師陣の威厳もへつたくれも無い言い争いに向き合った。我慢強いのはいいことだが、それを俺にまで求めなくても・・・。

さて、暫らくすると、長い白髪の老人がやってきた。立派な杖を持

つており、いかにも魔法使い、といった風情である。オールド・オスマンと呼ばれたその老人はオバチャンのことをとりなすと、俺たち、というかルイズとキュルケとタバサに説明を求めた。どうやら俺とサイトはこの場では居ない者あつかいのようだ。

他の二人が面倒臭がつているので、ルイズが要点をしぼって説明する。当然、犯人に繋がるような手掛かりや証拠なんかは無いので話は早速暗礁に乗り上げた。

どうにかして出ない結論を出そうと教師陣が四苦八苦していると、今度は緑色の髪をした、中々綺麗な女の人が歩いてきた。教師陣の言っている話からすると、彼女は学院長であるオスマン氏の秘書で、ロングビルというらしい。

「ミス・ロングビル！どこに行っていたのですか！大変ですぞ！事件ですぞ！」

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの。」
「調査？」

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして宝物庫はこのとおり。すぐに壁のフーケのサインを見つけたので、これが国中の貴族を震えあがらせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査をいたしました。」

「仕事が早い。ミス・ロングビル。」

「で、結果は？」

「はい。フーケの居所が判りました。」

「な、なんですと！」

「誰に聞いたんじゃね？ミス・ロングビル。」

「はい。近在の農民に聞き込んだところ、近くの森の廃屋に入っていた黒ずくめのローブの男を見たそうです。おそらく、彼はフーケで、廃屋はフーケの隠れ家なのではないかと。」

「黒ずくめのローブ？それはフーケです！間違いありません！」

「そこは近いのかね？」

「はい。徒歩で半日。馬で四時間といったところでしょうか。」

ロングビルがそう言うと、再び教師たちが王室に報告するべき、と騒いでいるが、オスマン氏に一喝されている。

・・・というか、おい。今の話、露骨におかしかったよな？

それとなく周囲を見てみるが、誰もそのことに気付いた様子は無く、むしろ真剣にどうするかを話し合っている。だからこそ、痛々しい。さて、どうしようか？ここで種明かしをしてもいいが、言い間違いだ、と開き直られると、それ以上ボクを出さなくなるだろう。当然そのままお宝を持ってドロン。見つかりませんでした、で終わりそう。

そもそも、俺個人としては、別段秘宝が盗まれようが、貴族の看板に泥が塗られようがどうでもいい。

そう、俺が自分の内面に没入して思考していると、外側では、何故かルイズ、キュルケ、タバサの三人が杖を持った手を掲げて、周囲の教師たちに諫められている。なんだ？

『なにがあつたか聞いてたか？』

フーケ、搜索、志願。教師、皆無。

うっへえーい。レウの断片的な言葉だけで何が言いたいのか完全に判っちゃったぞー。それもこれもさつきまで目の前で醜い言い争いをしてくれた先生方のお陰です。威勢がいいのは口だけだったんですね！逆の意味で感動しました！

オバチャンや他の少数の教師はルイズたちが行くことに反対しているが、しかしオスマン氏に「なら、代わりに行く？」と水を向けられると、途端に意気消沈している。どうしようもねえな、こりゃ。

そしてジーサン、あんたもなんで生徒が行く方向で話をまとめてんの？

ルイズたちの行動は若さゆえ、でいいだろうが、その許可を出して実際何かあつたらどうすんだ？そのときになつてモンスターペアレントも真つ青の貴族の父兄がでてくるんじゃないのか？

この学院の人間は突っ込みどころの多い人間が多くて困る。

「彼女たちは、敵を見ている。その上、ミス・タバサは若くしてシ

ユヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いているが？」

シユヴァリエって何だ？称号とかいう以上、功績によってもらうものだろうが、割ともらうのが難しいものなのかもしれないな。

「ミス・ツエルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を数多く輩出した家系の出で、彼女自身の炎の魔法も、かなりの威力と聞いているが？」

あー、そういうえば、キュルケって外国人なんだっけ？だとしたら、よけいに不味いな。なにかあつたら外交問題だ。得意げに髪をかきあげている彼女自身はそれを理解しているんだろうか？・・・してないだろうな。

「その・・・、ミス・ヴァリエールは数々の優秀なメイジを輩出したヴァリエール公爵家の息女で、その、うむ、なんだ、将来有望なメイジと聞いているが？しかもその使い魔は！」

家は褒めても本人の実力を具体的に褒めていないところがミソだな。ルイズは誇らしげにしているが、キミ、今、えんきよく婉曲的に馬鹿にされたんだよ？

「平民でありながら、そちらの少年はあのグラモン元帥の息子である、ギーシュ・ド・グラモンと、そちらの少女はテスラキヤ公爵家次男のウキテト・ド・テスラキヤと決闘して勝ったという噂だが。」
ジーサンの言葉にそういえば、そんな奴もいたっけ、と思った。便所紙の芯を何処に捨てるのかよりもどうでもいいのですっかり忘れていた。

それに、言っていることは概ね事実だが、俺の方は決闘というよりは、一方的な蹂躪だったような。あと少女とか呼ぶんじゃないよ。

「そうですね！なにせ彼らはガンダー・・・」
何かを口走ろうとした教師（たしか・・・コツパゲールだっ・・・け？自信ないけど、そんな名前だったような・・・。）がジーサンに口を抑えられた。なんだ？と思ったが、どうやら何も言つつもりは無いらしい。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する。」

そう締めくくられ、唯一場所をしているロングビルが馬車で連れて行くことになった。

俺、貴族じゃないんで帰っていいですか？とは言えない雰囲気だった。

流れというものは、概ね流されるためにある。(後書き)

次回で一卷分消化、なるかな?ととりあえずしたいとは思っています。

あるいはそれさえも平和な狩人の一日。(前書き)

無理でした！

何だろう、映画のエンドロールだけが切れてる感じですかね。取り合えず対フーケ戦をお楽しみください。

あるいはそれさえも平和な狩人の一日。

馬車がそれなりのスピードで進んでいく。気分は売られていく仔牛だ。

これが100パーセント罾である以上、あながち間違いないのがなおさら嫌だな。

時間はすでに出発して3時間以上が経っている。まず言い間違いじやあるまい。この場で捕縛するか？いや、別に俺が気張る必要も無いか。こいつらが怪我をしないように立ち回ればいいか。

因みにサイトはあのボロ剣、デルフリンガーを背負っている。どうもこの剣、ただボロい訳ではないらしく、訓練でどれだけ打ち合ってもそれ以上刃こぼれしないし、一応、握っていればルーンも作用するのでそれなりに使い道はある。

あの後、すぐに出発したのだが、デルフを部屋に置きっぱなしにしていたサイトの代わりに、ベンケイとヨシツネに取りに行かせたのだ。前から思っていたが、こいつら、使い勝手がいいな。

それだけなら、アイルー達はそのまま残していつて、見えなくなつたあたりで紋章に戻せばいいのだが、キュルケとタバサが興味を持つたようで、何故か同行している。敵に手札を見せるわけにもいかないの、今から戻すわけにもいかない。サイトやルイズ、アイルー達には口裏をあわせるように指示しているので、問題は無いだろう。とりあえず、前に俺がいたところで雇っていた使い魔みたいなもの、ということにしておいた。こいつらは本業は戦闘じゃなくて家事だから、ま、ばれることも無いだろう。

「旦那さんには四年くらい前から雇ってもらってるニヤ。」

「へえ。そんなに長い付き合いでもないのね？」

「でも無いニヤ。普通、旦那さんみたいな仕事の人に雇ってもらつと、長くても一年くらいで転職することになるニヤ。」

「なんで？」

「仕事の内容に雇い主さんが納得しなかったり、リストラだったり、雇い主さんが亡くなったり、まあ色々ニヤ！」

キュルケがヨシツネと話をしている。この大きな喋る猫が珍しいのだろう。因みに人に友好的なアイルーが転職する理由で一番多いのは、雇い主であるハンターがなんらかの理由で死亡、または長期間行方不明になる場合だ。猫バアから雇うとき、そのあたりは誓約書を書かされたので覚えている。

タバサは珍しく本を読むのをやめて（酔うからか？）何処からか見つけてきた猫じゃらしを使ってベンケイで遊んでいる。ベンケイは猫としての習性からか、その毛の塊から目を離すことが出来ない。

人語を理解して会話するくらい知能が高いんだけどなあ。

しかし猫たちと美少女が戯れる姿はなかなか癒される。

反面、ルイズの顔は少し暗い。これから戦う可能性のある相手のことを考えているのか、アイルー達がキュルケにとられたからか、それとも俺とサイトがキュルケの選んだ服を着せられているからか。とりあえず最後では無いのは確かだな。

事の発端はアイルーたちである。ジーサンから出発を命じられてから、すぐに馬車で行くことになったので、慌ててアイルー達に昨日買ってきた物を持つてくるように指示したのだ。そしてヨシツネとベンケイは俺の指示に忠実に、剣以外に買った服も持つてきた。フーケの騒ぎで有耶無耶になっていた昨晚の勝負の結果をキュルケが持ち出し、今の状況が出来上がったというわけだ。

俺とサイトはキュルケのコーディネートした服を着せられている。

サイトは派手になり過ぎないものの、中々高級さが感じられる青の上下（夏をイメージしたんだとか）。俺は妙にフリルやレースがついたワンピースで、所謂ロリータファッション、という奴だ。一応俺だって自分の顔の系統くらい理解しているので、これがまったく似合わないことくらい判る。ルイズに感想を求めたら、顔を赤くしてそっぽを向いていたので、多分笑いを堪えなくなるほど似合っていないかったのだろう。キュルケやタバサも似たような反応だったし。

というかコレを着てから、妙にスースーする股の間が心許無い。

案内役兼御者のロングビルは、特に顔色を変えず前方に注意している。フーケか。多少聞いたことのある程度の噂では、貴族を専門にする盗賊なんだとか。ただ盗むわけではなく、自分のサインを残していくらしい。盗んだついでに不正の証拠をばら撒かれて失脚した貴族もいるらしいので、むしろまっとうではない貴族にはそちらの方が怖いのかもしれぬ。

平民を傷つけたという噂も無いので、メイジでありながら平民の中には英雄視するものもいるんだとか。

まるで石川五右衛門かなにかのようだ。

平民云々については単純にそうする機会が無かったただけだろう。捕まれば司法を預かる貴族から極刑を言い渡されることが判りきった身分だし、子供が相手だからって手加減はしないだろう。そもそもなんで俺たちを連れ出してるとんだか。

話の流れとして一番いいのは、誰も傷つかずに、恐らくはフーケの出してくるゴーレムを倒し、尚且つフーケの正体がばれない、と言うことだろう。まあ無理だけど。

それから一時間ほどして、目的地にたどり着いた。周囲は木で囲まれている、森の中なのだが、そこら一帯だけが切り開かれていた。それなりに広く、その中ほどには潰れかけた小屋がある。あれが隠れ家（という設定の廃屋）か。俺たちは小屋からは見つからないように、茂みに実を隠している。

「わたくしの聞いた情報だと、あの中にいるという情報です。」
ロングビルが言って小屋を指差す。

完全に行き当たりばったりでは死ぬ可能性を増やすばかりなので、作戦会議をする。その結果、タバサの考えた作戦が一番現実的であることから、採用になった。

1、斥候が小屋の中を確認。フーケがいる場合はこれをおびき出す。

(小屋の中では昨夜のゴーレムは創れないので出てくるしかない)

2、前もって魔法を詠唱しておき、フーケが出てきたところで攻撃。無力化した後、可能なら捕縛。

シンプルで手堅いが、その分、要となる斥候は責任重大だ。その役をサイトに押し付けると、俺はロングビルに尋ねた。

「生徒のメイジとしての実力はある程度把握しているが、貴女の実力は知らない。なので、戦力として期待しても？」

「私は土のドットですが……。そうですね。生徒の安全の為に、出来る限りの助力はしましょう。でも、あまりあてにはしない方がいいですよ。なにせ相手は、トライアングルですから。」

ロングビルの返答に満足したふりをし、サイトに行くように指示する。ガンダールヴの力で加速したサイトは滑るように小屋に近づいていった。

さて、失敗するとわかってる作戦とはいえ、どうしたもんかね？ フーケは単独犯らしいので、まず小屋の中には誰もいないだろうし……。っと、思っていると、サイトが手招きした。やれやれ。

俺たちが中に入ると、なるほどその中には誰もいなかった。薄く溜まった埃が主の不在を証明している。ロングビルはすぐに小屋を出ると、辺りを偵察してきます、と言って森の中に消えていった。

何か手掛かりが無いか、と小屋の中を搜索していると、タバサがチエストの中から『破壊の杖』を発見した。おいおい、フーケは本当に何考えてるんだ？ と思いそれを見た瞬間、思考が凍りつき、次の瞬間には氷解した。なるほどね。使い方が判らなかつたのか。それで、魔法学院の人間なら知っているかもしれない、と考えて誘導したのか。俺たちが判らなかつたら、どうするつもりだったんだろう？ 皆殺しにするにしても何度もするとどんな無能者だって怪しむだろうし。

しかし、それよりも何故こんなものがここに？

見ると、サイトもこれがなんなのかを判っているようだ。この世界の人間だけが、それを判っていない。『破壊』の名を冠していても、

これがどれだけ危険なものなのかを。
轟音が響く。

まず、屋根が吹っ飛び、次いで小屋全体が激しく揺れた。無くなつた天井な代わりに見えるのは、昨夜も見た巨大なヒトガタ、ゴーレムだ。

なるほど、使わなくてはならないシチュエーションまで作ってくれるのか。ありがたくって涙が出るね。

小屋から出たタバサとキュルケが呪文を詠唱する。大きな竜巻と炎がゴーレムに襲い掛かるが、びくともしない。

「無理よこんなの！」

「退却。」

魔法を使った2人は早々に実力差を感じたのか、あるいは相手の姿は見えないのに自分の行動は丸見えの状況が不利であることに気付いたのか、戦闘を避けることにしたようだ。ま、目的の『破壊の杖』は回収できてるしね。

しかし、それでもルイズは退かず、呪文を詠唱していた。お前の魔法は威力はともかく、効果範囲がせまいんだから、このゴーレムは一番苦手な相手だろうが！

なにせ、生き物なら身体の一部が吹っ飛ばされれば、痛みや恐怖で動けなくなったり逃げたりするだろう。だが、それはこのゴーレムには何一つ当てはまらない。

「逃げる！ルイズ！」

「いやよ！あいつを捕まえれば、誰ももう、私をゼロのルイズとは呼ばないでしょ！」

サイトが必死に呼んでいるが、ルイズは続けて詠唱を始めた。実力差って単語を知らないのかこのアホご主人様は！

ゴーレムはキュルケを追うのか、ルイズを踏み潰すのか考えるように首をかしげた。サイトは未だにルイズの説得に成功していない。

一応、俺も大剣を上空から落として牽制しているのだが、すぐに再生する相手には効果薄だ。こりゃ、いよいよになったらモンスター

を開放して援護させなきゃならんかな。俺だけなら逃げるのも簡単だが、そういうわけにもいかんし。

「わたしは貴族よ。魔法が使える者を、貴族と呼ぶのよ！」
敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶんじゃないわ。

ルイズは見得をきつて杖をふるが、やはり小規模な爆発が起こるだけで、ゴーレムはびくともしない。直後、ルイズを先に排除することにしたのかゴーレムの足がルイズにむかって振り下ろされる。ルイズが踏み潰されそうになった瞬間、左手を輝かせたサイトが間に入り、ルイズ抱きかかえ、地面に転がって逃れた。

サイトは簡単に自分の命を擲とうとしたルイズに怒ったのか、ピンタをしている。普段を知っている人間からすると、珍しい光景だ。それだけ怒ったということか。

「貴族のプライドがどうした！死んだら終わりじゃねえか！ばか！」
「だって、悔しくて……。わたし……。いつもバカにされて……。」

「ま、ポツケ村の諺で言うところの、『思慮深さと臆病が違うように、勇敢さと無謀さは違う』。『栄光も誇りも金も、墓までは持っていけない』ってことだ。」

俺はそう言つと、ルイズの頭を昨日と同じように二度、ポンポンと柔らかく叩いた。

そこにタバサとキュルケが乗った青い飛竜が降りてきた。

「乗って！」

タバサが言ったので、ルイズをその上に乗せ、代わりに彼女が持っていた『破壊の杖』を借りた。驚いていたが、「これがあればどうにかなる。」と俺が言つと、信用してもらえたようで、持っている手から力を抜いた。

ルイズが何かを叫んでいたが、飛竜はそのまま飛び立ち、俺とサイトは地上に残った。タバサはああ言ったが、乗る人数が増えれば当然、飛竜の飛行速度は下がるだろうし、標的が一塊になればゴーレムも狙いやすい。そういう意味でこの人選はベストだ。俺は問題無

いいし、サイトもルーンを使用すればそう難しくはない。それに、こいつにはやってもらわなければならぬことがある。

「ほれ、持ってみろ。」

サイトに『破壊の杖』を渡すと、やはり左手が輝き始めた。サイトが言うには、その左手のルーンは武器の使い方なんかも教えてくれるらしい。

「弾は？」

「問題無い。まだ未使用だ。」

「ま、タイラントだってぶっ飛ばせるんだ。あんな土の塊くらい、どうってこと無いだろう。」

ゴーレムの足が地面に振り下ろされた。

轟音。

その頃には俺もサイトも十メートル以上移動している。サイトは俺の横で『破壊の杖』、いや、『ロケットランチャー』をいじると、肩に乗せて構えた。

次の瞬間、そこから放たれたロケットが、ゴーレムに着弾、轟音とともに凄まじい爆発を起こす。

もうもうとする煙が晴れ、そこから現れたゴーレムは身体の半分近くを吹っ飛ばされていた。それでも近づいてくるが、さすがにもう再生は出来ないようだ。

「にやろう!」

俺は土には水が有効か? と思い、ゴーレムが振り下ろした拳にガノス(ガノトトス亜種)の大剣”流刃剣ガノトトス”を叩きつける。もう少しで倒せる。それに、俺の予想が正しければ、フーケはもう戦う必要も無いはず、と考えた・・・が、そのとき、不思議なことが起こった。

大剣の剣先から、何かが凄い勢いで噴出し、その延長線上にあったゴーレムが真っ二つになっている。

・・・何が起こった?

そのとき、左手に残ったルーンがぼんやりと光っていることに気付

いた。

サイトのもののように激しく輝くわけでは無いが、確かにレウの紋章にかかる形で残ったルーンが、光を放っている。

サイトと同じように、武器を持ったら発動した？いや、それだとこれまでの決闘騒ぎのときやサイトとの訓練で何度も機会があったはずだ。

俺が、多少なりとも力を出そうとしたからか？

ならこの世界に来て今が初めてだ。

さすがに、俺の一撃がとどめになったのかゴーレムが完全に崩れ落ち、沈黙する。

「あんなこと出来るんなら最初からやってくれよ。」

「いや、俺も今初めて知った。多分、ルーンの力だ。」

「けど、ナナシの剣を持っても、オレはあんなことできなかったぞ？」

「見てみる。刻まれた翌日にほとんど消したんだ。その影響かもな。」

「おでれーた！自分でルーンを消せる使い魔がいたとはな！そうか、初めて会ったときの違和感はそれか！」

「そういえばそんなことも言っていたな。」

デルフに返事をする、ゴーレムの残骸の見る。あの凄まじい水圧で相手を切断するのは、間違いなくガノスの水プレスだ。本人はよく分からないようだが、それから必死に逃げたことがある身としては間違っはすもない。

そうしていると、ルイズたちを乗せた飛竜が降りてきた。

キュルケはサイトに抱きつきながら、「2人も！凄いわ！」と言っている。タバサは珍しく驚いたような顔をしていた。しかし、フリーケは何処に行ったんだ？

周囲を見回すと、茂みの中からロングビルが現れた。とりあえずは無傷らしい。まさか、さっきの水プレスで斬ってしまったのでは？とか思っていたので、良かった。

キユルケが、フーケが何処にいるか知らないかロングビルに聞くが、彼女は首を横に振るだけだ。

まあ当然か。

なんとなく、全員がゴーレムの残骸を見ていると、ロングビルが手を伸ばしてサイトから『破壊の杖』を取り上げる。

俺以外の皆が啞然とする中、彼女はサイトがそうしたように、ロケットランチャーを肩に乗せて構えた。俺たちに向けて。あー、やっぱりこうなったか。

「そう、『土くれ』のフーケ。さすがは『破壊の杖』ね。私のゴーレムがばらばらかないの！」

まあ、現代兵器とただ集めてるだけの土じゃな。

「おっと。動かないで？破壊の杖は、ぴったり貴方たちを狙っているわ。全員、杖を遠くに投げなさい。」

三人は言うとおり、杖を投げた。さっきの爆発をみれば、投降するしかないと思うのかもれないが、しかし相手が国中を荒らしまわった盗賊であることを考えると、そうしたところで殺されるのがオチだと思っただがな。まさか言うとおりにすれば解放すると思っっているのだとしたら、見通しが甘すぎる。

「その使い魔くんたちは武器を捨てなさい。どうやらあんたたちは武器を持つてると普通じゃないみたいだからね。」

サイトは言うとおり、デルフリンガーを投げ捨てる。デルフはくるくると回転した後、3メートルほど先の地面に突き刺さった。もつとも、その顔にはルイズたちが浮かべるような悲観的な色は無い。

「あんたも速くしな！」

「ま、落ち着けよ。どうせ最初っからこうなる事は判ってたんだし。」

「どっついうことよ!？」

「あー、ミス・ロングビル？それともフーケって呼べば？」

「好きにしな。でも、妙な真似をしたら、その瞬間にドカン、だよ。」

「そりゃどーも。・・・最初に彼女が言っただら？フーケが隠れたアジトは学院から馬で4時間はかかるところにあるって。」

「それがどうしたっていうの？」

「彼女は近在の農民にそのことを聞いたらしい。さて、ここで問題だ。学院から片道4時間でかかる場所に朝、その騒ぎを知った彼女がどうやってそのことを調べてあの時間に戻ってくることが出来たのか？」

「・・・あ！」「」「」

「そういうことだ。そしてあの場で嘘をついて得をする人間は一人だけ。因みに、俺たちを呼んだのはその『破壊の杖』の使い方が判らなかつたからだろ？」

「ご名答。振つても、魔法をかけても、この杖はうんともすんともいわないんだもの。困つてたわ。持っけていても、使い方がわからないじゃ、宝の持ち腐れ。そうでしょ？」

それには同意するね。今のあんたを見てみると、特に。

「じゃあ、おしゃべりはお終いよ。さっさとあんたの持つてるマジックアイテムを出しな。」

俺にロケットランチャーの砲口が向けられる。まったく、知らないっていうことは悲劇だな。今の彼女は自分から喜劇役者になってしまっているが。

「それじゃあ、武装を解除しよう。『出て来い。』」

俺が紋章のいくつかを解放すると、同時に少し身体が重くなった。解放するほど、俺の身体能力は常人に近づいていく。普通の状態が人外になっている今の俺には、一般人の身体能力では力なく感じるのだろう。

俺がそんなことを考えている頃、その場にいる俺以外の人間はそれどころではなかつた。

なにせ、俺が喋った瞬間、周囲をぐるっと取り囲むようにモンスターたちが突然現れたからだ。

青怪鳥が。眠鳥が。岩竜が。雪獅子が。帯電竜が。黒鎧竜が。角竜

が。白一角竜が。蒼火竜が。金火竜が。ただ、フーケを見つめて
いる。

「耳を閉じる。」

俺は言った瞬間、指を打ち鳴らした。それに呼応し、モンスター
たちが大きく口を開ける。フーケは既に俺たちを見ていない。どいつ
を狙っても、次の瞬間に殺されることが判るのだろう。しかし、現
実は、彼女の予想の斜め上で状況が悪い。

十匹のモンスターによる同時の咆哮。それは、人間の聴覚で耐えら
れるものではない。

その場の全員が蹲り、耳を押さえる。

3秒ほどでそれが終わると、俺はまだ蹲っているサイトの尻を蹴り、
フーケの方に顎をしゃくった。

意味を理解したサイトは走りながら地面に突き刺さったデルフを抜
き、フーケに走り寄る。ようやく気付いたフーケはロケットランチ
ヤーを構えるが、スイッチを押しても何も起こらない。それを落と
しながら、ようやく杖を取ろうと腰に手を伸ばした瞬間、その腹に
デルフの柄がめり込んだ。フーケが気絶し、崩れ落ちる。

「フーケを捕まえて、『破壊の杖』を取り戻したぜ。」

そう言うサイトに、三人が走り寄り、抱擁する。サイトは複雑そう
な顔をしていたが、竜達を紋章に戻した俺が「よくやった。」と言
うと、ようやく苦笑を浮かべていた。

あるいはそれさえも平和な狩人の一日。(後書き)

次回は一卷エンド タバサの冒険編の予定です。

エ は日本が世界に誇る文化だろうが！！（前書き）

サブタイトルは特に意味無く付けてますので、私の魂の叫びとかでは無いはず。多分。

エ は日本が世界に誇る文化だろうが！！

「ふむ……。ミス・ロングビルが土くれのフーケじゃったとはな。美人だったもので、なんの疑いもせず秘書に採用してしまっただ。」

場所は学院長室である。フーケを捕縛したあと、馬車で帰ってきたのだが、その道中、やたらと聞かれたのは、やはり俺の使役していた竜たちのことだ。さすがに、異世界の人間云々は話せないので、召喚される前にいた地域であった、大型の幻獣を身体に住ませるかわりに、使役できる術だと言っておいた。

サイトたちにしたように、コジローを紋章を見せながら解放すると、信じてもらえたようだ。その直後、紋章がどれだけあるのか知りた、とタバサに言われたので服を脱いで見せてやると、何故かサイトが鼻血を噴いて倒れた。まさか病気か？と思って心配したのだが、なんともなかったようで良かった。

しかし、それから学院に帰り着くまでルイズが親の仇でも見るような目で俺を見ていたのはどういうわけだ？

因みにジーサンは居酒屋で給仕をしていたフーケをスカウトしたらしい。いや、たしかに美人だけど、それでいいのか？とりあえずこのジーサンを学院長にした奴はよっぽどの無能だな。実務と魔法使いとしての能力はあまり関係無いだろうに。ハクをつける意味で学院長にしたのなら、余計に頭が悪すぎる。それを決定した奴も、それが通じる貴族社会も。

同席していたコツパゲ教師も思わず本音が出たのか、「死んだほうがいいのでは？」とか言っている。まあ、自分の趣味でわざわざ学院を狙っている盗賊を招き入れたあげく、自由に歩き回らせ、しかも尻拭いを生徒にさせて死なせるような目にあわせる。簡潔に要点をまとめると、とりあえず教師のやることじゃないな。

「今思えば、あれ（尻タツチで怒らない）も魔法学院に潜り込むた

めのフーケの手じゃったに違いない。居酒屋でくつろぐ私の前に何
度もやってきて、愛想よく酒を勧める。魔法学院学院長は男前で痺
れます、などと何度も媚を売り売り言いおつて……。終いにや尻
を撫でて怒らない。惚れてる？とか思うじやろ？なあ？ねえ？」
「そ、そうすな！美人はただそれだけで、いけない魔法使いです
な！」

「そのとおりじゃ！君はうまいことを言うな！コルベール君！」
ああ、この教師の名前、コルベールだったか。しかし、同意すると
いうことはコイツもなんかフーケに漏らしたことがあるな。態度が
露骨におかしいし。

俺の視線の温度が氷点下になり、他の面々が呆れていると、それに
気付いたジーサンは咳払いをして空気を変えるためか、厳しい顔を
する。

「さてと、君たちはよくフーケを捕まえ、『破壊の杖』を取り戻し
てきた。フーケは、城の衛士に引き渡した。そして『破壊の杖』は、
無事に宝物庫に収まった。一件落着じゃ。君たちの、『シユヴァリ
エ』の爵位申請を、宮廷に出しておいた。追って沙汰があるじやろ
う。といっても、ミス・タバサはすでに『シユヴァリエ』の爵位を
持っているから、精霊勲章の授与を申請しておいた。」

ルイズたち三人の顔が輝く笑顔になった。うん、元から三人とも美
少女だけど、笑顔になると、余計に可愛いな。

因みにルイズが俺たちの処遇について聞いていたが、貴族ではない
ので何も無いらしい。サイトはいらぬ、と言っているし、俺もど
うでもいいが。

「さてと、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。この通り、『破
壊の杖』も戻ってきたし、予定通り執り行う。」

「そうでしたわ！フーケの騒ぎで忘れておりました！」

「今日の主役は君たちじゃ。用意をしてきたまえ。せいぜい、着飾
るのじゃぞ。」

三人が退室していき、俺とサイトは残った。ルイズが心配そうに見

ていたが、俺は手をひらひらと振って、サイトは「先に行つていいよ。」と言つたのでドアの向こうに出て行く。

「なにか、私に聞きたいことがあるようじゃな。言つてごらんない。出来るだけ力になろう。君達に爵位を授けることはできんが、せめてものお礼じゃ。」

ジーサンが言い、コルベール教諭に退室を促した。教諭はひどくがっかりした様子で部屋から出て行つた。

「あの『破壊の杖』は何処で誰から手に入れた？」

「アレは、俺達が元いた世界の武器です。」

「ふむ、元いた世界とは？」

「俺達はこの世界の住人じゃない。地球という星から来た者だ。」

「本当かね？俄かには信じがたいが……。」

「本当です。俺達はあるルイズの『召喚』で、こつちの世界に呼ばれたんです。」

「なるほど。そうじゃったか……。」

「あの『破壊の杖』は、俺達がいた世界の武器だ。あれをここに持つてきたのは、誰だ？」

「あれは私の命の恩人の形見なんじゃ……。」

「形見？」

「今から、30年も昔の話じゃが。森を散策していた私は、ワイバーンに襲われた。そこを救ってくれたのが、あの『破壊の杖』の持ち主じゃ。彼は、もう一本の『破壊の杖』で、ワイバーンを吹き飛ばすと、ぱつたりと倒れおつた。怪我をしていたのじゃ。私は彼を学院に運び込み、手厚く看護した。しかし、看護の甲斐なく……。」

「死んでしまった、わけか。しかし、30年前だと？どこかの戦地からここ、ハルケギニアの地に迷い込んだのか？いや、俺とサイトが元いた世界の年代のこともある。異世界という壁は、時系列など無意味なものにしてしまうのかもしれない。」

「私は、彼が使つた一本を彼の墓に埋め、もう一本を『破壊の杖』」

と名付け、宝物庫にしまいこんだ。恩人の形見としてな……。彼はベッドの上で、死ぬまでうわごとのように繰り返しておった。『ここはどこだ。元の世界に帰りたい』とな。きつと、彼は君達と同じ世界から来たんじゃないやろうな。」

「いったい、誰がその人を呼んだんですか？」

「それは判らん。どんな方法で彼がこつちの世界にやってきたのか、最後まで判らんかった。」

結局、謎は未だ闇の中、か。サイトは悔しがっているが、5年間、何一つ判らなかつた俺には、多少なりとも前進したようには思える。思えるだけで、実際は何も判らないままなんだろうが。

「おぬしらのこのルーン……。」

「ええ。こいつも聞きたかつた。この文字が光ると、何故か武器を自在に使えるようになるんです。剣だけじゃなく、俺の世界の武器まで……。」

「……俺は、武器が本来持っている機能を、その構造を無視して引き出せるようだ。」

「ナナシ君とிட்டたか。君の方はよく判らんが、サイト君の方なら知っておるよ。ガンダールヴの印じゃ。伝説の使い魔の印じゃよ。」

「伝説の使い魔の印？」

「そうじゃ。その伝説の使い魔はありとあらゆる『武器』を使いこなしたそうじゃ。『破壊の杖』を使えたのも、そのお陰じゃろう。」
それなら、確かにサイトのあの力の説明もつく。だが、その前に一つ、疑問が生まれた。それはサイトも同じだったらしい。

「どうして俺がその伝説の使い魔なんか？」

「わからん。」

伝説というだけあって、ジーサンにも詳しいところは判らないらしい。だが、異世界を渡る方法について、調べることが快諾してくれたのは、数少ない収穫か。

最後に、恩人の形見を取り戻したことの礼を言われてから、俺とサイトは退室した。

舞踏会は食堂の上の階のホールで行われていた。生徒や教師達が思
い思いの格好に着飾って歓談している。俺とサイトはといえば、そ
の隅のほうでやたらと豪華な料理をかつ喰らっている。サイトは帰
る方法があつさりと判らなくなったシヨックからか、ワインをばか
ばか飲んでる。俺も別に酒は嫌いじゃないが、大して強くもない
ので、今回はやめておいた。

「お前、さつきから、飲みすぎじゃねえのか。」

「うるせえ。家に帰れるかも、と思ったのに・・・、思い過ごしだ
よ。飲まずにいられるか。」

壁に立てかけられたデルフが心配して言うが、サイトはご機嫌ナ
メだ。ま、一縷の希望が露と消えたのだから、荒れるのも判らんで
もないが。急性アルコール中毒にならない内に止めておくか。

三人娘のうち、ルイズはまだ舞踏会に来ていない。

キュルケは舞踏会が始まると同時にホールの中のほうへ入っていつ
た。今は大勢の男達を侍らせて談笑している。

タバサは同じテーブルで、上に盛られた料理と格闘している。この
小さな身体の何処にあれだけ大量の料理が入っていくんだか。

因みに俺とサイトはキュルケが買ってくれた服を着ている。一応、
パーティーに偶つこのほうで、とはいえ参加するので普段着では不
味い、と考えたのだ。『破壊の杖』奪還のときに身につけていたが、
2人とも大した汚れが無かったのが幸いした。何故ルイズの方を選
ばなかったのか、というと、どうにも彼女の選んだ服が前衛的すぎ
たからだ。

なのでそれほど場違いな格好はしていないはずだが、さつきから妙
な視線を感じる。主に男共からは、湿度の高い視線。女共からは、
憎い仇でも見るような視線。俺、何かしたっけ？

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・
ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな~~~~り~~~~。」

ようやくルイズが到着したらしい。ルイズは白いドレスを着ており、普通の攻撃的な性格が表に出ていないせいか中々似合っていた。さつきまで酔っ払っていたサイトはそれを見ると、完全に酔いが醒めたようで、ワインを手酌するのも忘れて見入っている。

事件解決の立役者が揃ったためか、音楽が演奏され始めた。ルイズの周りには男子生徒たちが纏わりついてしきりにダンスを申し込んでいる。どうもあの中には、以前ルイズを馬鹿にしていた奴もいるような気がするな。一々顔を覚えるような真似はしないが、ルイズのことを馬鹿にしない生徒の方が少数派であることを考えると、あながち間違いでは無いだろう。

ルイズはその誘いを全て断ると、こちらのテーブルの方へやって来た。

「楽しんでるみたいね。」

「別に……。」

「ま、それなりにな。そっちはどうだ？踊らないのか？」

「相手がないのよ。」

「いっぱい、誘われてたじゃねえかよ。」

モテ期到来、とか思ってたんだが、本人は全く興味が無いらしい。ルイズはサイトに手を差し伸べた。

「はあ？」

「踊ってあげても、よくつてよ。」

「踊ってください、じゃねえのか。」

「今日だけだからね。」

「わたくしと一曲踊ってくださいませんか。ジェントルマン。」
「おや、可愛い。」

ルイズは言った後、顔を赤らめている。それに脳をやられたのか、サイトはふらふらと前に進むと、その手をとった。2人は並んでホールへと向かっていく。

ご馳走様。

そう言っつて、俺はパーティー会場を後にした。これ以上見ているの

も、野暮というものだろう。

パーティー会場から抜け出すと、俺はぶらぶらと学院の中庭を散策していた。先に部屋に帰ってしまったでもいいのだが、なんとなくこの月夜を楽しみたくなつたのだ。そうして歩いていると、いつの間にか使い魔たちが暮らしている小屋の前まで来た。特別、用は無いのだが、せつかく来たのだから寄っていか、と思ひ、近づくと、普段はそこで見かけない使い魔がいた。

月明かりに照らされて青い体色が判りやすい、翼を持った巨大なトカゲ。タバサの使い魔、風竜シルフィードだ。

不思議に思つて近寄ると、パーティー会場の方を見ている。ご主人様が気になるのか？と思いきや、次には目の前に置かれた空の皿を見てきゅい〜と物悲しげに鳴いている。

・・・食事が足りなかつたのか。

「よう、シルフィード。腹が減つたのか？」

俺が声をかけると、シルフィードはすぐに顔見知りだと気付いたのか、俺の頭の中に声を響かせた。

「ご飯もらつたけど、ぜんぜん足りなかつたのね！お姉さまもどっか行つちやうし、あつちから美味しそうな匂いはしてくるし、お腹すいた！きゅい！」

いつもなら、厨房でご飯をもらっているらしいが、今日は舞踏会だから特別忙しいのだろう。このままだと、シルフィードがご飯を改めて貰うのは、暫らく後になりそうだ。

因みに、使い魔というのは基本的に、主人の言葉を理解するために総じて知能が高くなるらしい。もっとも、人語を理解できても発声する器官が存在しない者がほとんどなので、意思疎通は一方通行になりがちらしいが。

シルフィードにはルイズを助けてもらつたり色々世話になつていゝるし、これからも世話になるかもしれない。なら、ここでほんの少

しでも借りを返しておくのもいいか。そう思い、ポーチの中から、燻製にした肉を取り出した。以前、狩ったウサギっぽい生き物の肉を、あれから食事の心配も無くなったので長持ちするように燻製にしたものだ。ほとんど食べていないので、それなりに量がある。

「ほら、これでも食って元気出せ。」

お肉！いいの？いいのね？ありがとう！きゅいきゅい！

俺が開けた口の中に肉を放り込んでやると、すぐに肉と骨を噛み砕くぼりぼりという音と、それを飲み込む音が聞こえた。

多少は空腹がマシになったシルフィードは、お礼なのね！と言
うと、俺を背中に乗せて空に飛び上がった。

おー、月が地上で見えるよりも大きく見える。

どの世界でも月が綺麗なことは変わらないか。

そう思っていたときだった。その、口笛が聞こえてきたのは。

エ は日本が世界に誇る文化だろうが！！（後書き）

今回は一巻消化の記念で何か企画をしたいな、と思っています。

まあ大したことは出来ないんで、キャラ同士の対談か、インタビュー形式かになると思いますが。

ナナシってどんな奴？（前書き）

インタビュー形式になりました。

ナナシってどんな奴？

某使い魔

「んー、すげえ奴だよな。いや、剣の腕とかモンスターのこともそうなんだけど、なんていうか、同じ年だとは思えないっていうか。ここと地球とも違う世界で五年も生きてきたからなのかな？ 剣の訓練をしてもらってるけど、でかい竜を相手にしてたから、基本的に手加減は苦手だっていつてたな。あのでっかい剣を振り回せる時点で人間の限界を超えてるし。スパルタだし。ま、それ以外にもあの脱ぎ癖はどうにかして欲しいな。素晴らしいものを持つてるけど・・・イヤ、ヤメテホシイノハホントダヨ？」

某虚無

「平民のくせに、強いことは認めるわ。色々助けてもらってることもね。戦いでも、誰も寄せ付けけない実力を持つてるし。でも、あああの脱ぎ癖はどうにかなならないのかしら？ ちぢちぢちぢとおおおきいからってふざけるんじゃないわよ！！」

某メイド

「ミス・ヴァリエールとは違うタイプの美人ですよ。面長っていうんでしょうか？ あの褐色の肌と高貴な顔立ちには羨ましく思います。でも、以前女性扱いしたら、とても悲しそうにされてもうしないでくれ、と言われました。よく判りませんが、外見はともかく、中身はいい意味で男の子みたいな方ですわ。」

某公爵次男

「はあ？ 誰だ、それは？・・・なに、ああああの決闘のときの・・・いいいいいいいや、私は何も聞いてないぞ！！いや、違う違う違うんだ。だからその剣先を私に向けなくて刺さないで突かないで斬ら

「わたしはよく知りませんが、ミス・ヴァリエールの使い魔の彼女のことですね。彼女の噂は何度か耳にしたことがあります。火のラインメイジを半殺しにしたとか、同じ使い魔の少年を剣でどつくの目録にしているとか、主に物騒なものを。どうやら9割以上が事実のようですし、今度話をしてみるのも良いかもしれませんね。」

某学院長

「ふむ。胸は今のままでも良いが、まだ成長の余地がありそうじゃない。尻はもう少し寝かせれば完熟じゃ。最近、秘書が捕まったせいで職場に潤いが無かったんじゃが、彼女のような人材がいれば、より一層、僕は仕事に身が入るじゃろう。問題は、ミス・ロングビルにしたようなことをすると、首を捻じ切られかねない腕力をもっていることかのう……。」

某青銅

「ボクは美しい女性の奉仕者、一輪の薔薇さ。つまり彼女に奉仕することもボクの義務なんだが、そのボクだって気後れしてしまうこともある。特に、ボクとサイトの決闘の後の、一方的な蹂躪を見せまうとね……。しかし、普段の彼女は気さくで好人物のようだ。日課のサイトとの訓練をしていた後、話しかけたら、普通に友達になれたし。ただ、彼女と話をする、なにか違和感を感じるのだよ。いや、別に話すのが嫌なわけじゃない。居心地はいんだけどね。ただ、何故か同い年の少年と話しているような気になってくるんだ。」

某疾風

「ふん。最近調子にのっている平民の使い魔か。そもそも厳粛なる貴族の学び舎にあのような異物が入ってくることも問題だが、それに敗北してしまうようなメイジにも問題があるのだ。やはり、”風”こそが最強の系統。他の系統など、”風”の力の前ではまるで無

力なのだ。所謂……。(以後、2時間にわたって風系統の贅美が続きますので、省略します。)

某土くれ

「あたしは『破壊の杖』を盗むために学院に潜り込んでたけど、ここで二度と会いたくない相手が2人できたよ。一人は学院長の工口じじい。毎日セクハラしてきやがって！これだから地位のある男の貴族ってのは！もう一人はあの使い魔の女さ。あんなにたくさんの幻獣を出してきて、「もつと強いのを見てみたいか？」とか聞くんだよ？無表情で！あるときばかりは殺されると思ったね。」

某閃光

「土くれから聞いたり、色々と手を廻して調べてみたが、どうやらルイズの使い魔の内、少年の方はガンダールヴのようだが、少女の方は判然としないな。最初は幻獣を使役していたことから、ヴィンダールヴかと思ったが、それだと剣を使ったときにルーンが光つた理由が判らない。それに、その少女に刻まれていたルーンは”A”^{アイ}だけだったというし、もしかすると、虚無とは無関係な使い魔である可能性も考えられる。虚無とは無関係な『人間の使い魔』というのも妙な話だが、知られていないだけで、その使い魔の足跡も歴史にあるはずだ。……もしや第4の使い魔か？いや、それにしては……」

某武器屋の店主

「厄病神の話はしないでくれ!!!」

ナナシってどんな奴？（後書き）

次回は『タバサの冒険』編です！。

勘違い＋うつかり＝冤罪？（前書き）

フーケ戦を書いているときに、そういえば『タバサの冒険』って時系列でいうと本編のどのあたりなんだろう？と思って三冊買ったのがきっかけです。

順調に進めば、不自然にならないように各巻の間に一つずつ挟んでいけたらなーと思っています。

勘違い＋うつかり＝冤罪？

シルフィードは一直線に急降下すると、食堂の上の階、パーティー会場になっていているホールのバルコニーの外側まで降りた。そこに、小柄な影がバルコニーから飛び降り、しかし途中で落下速度が緩やかになった後、シルフィードの背に降り立った。

「タバサ？」

その人影は黒いドレスを着たタバサだった。まあ、シルフィードが有無を言わずに従う相手といえ、主人であるこの子くらいか。しかし、何故こんな方法で出てきたんだ？

「どうして乗っているの？」

不思議そうに言っている少女は、さっき一歩間違えれば大怪我をするようなことをあつさりやっただようには見えない。とりあえず、いつまでもこの場にいると不味い、と判断したのか、タバサはシルフィードに飛ぶように指示し、シルフィードはゆっくりと上昇し始めた。

「あー、さっき、パーティーから出てきてな。ぶらぶらしてたんだが、偶然シルフィードを見つけて、話をしたら、腹が減ってるって言うから、持ってた燻製をやったんだよ。そしたらお礼ってことで背中に乗せてくれたんだ。」

俺がそう言っていると、タバサは普段の無表情にさらに冷たい視線を加えて、シルフィードの頭の方に向き直る。つかつかとそちらの方に歩み寄ると、徐に、背中に持たせていた荷物から自分の身長よりも長い杖を抜き出し、その頭をぶん殴った。

うわ、痛そうなお音。しかし、何でだ？他人から餌を貰っちゃ駄目、とか言っているのか？

「痛いよね！急になにするのね、このちびすけ！」

もう一発ゴツン、という音がして、タバサが口を開いた。

「人前で喋っちゃ駄目。」

「そんなことしてないのね！お姉さまは横暴すぎるのね！シルフィはせいとーな、使い魔のけんりを、しゅちようするのね！きゅい！」
「あれ？シルフィって人語を喋れたのか？」

俺が当然の疑問を口にする、シルフィードはハツとして俺の方を見る。タバサも何時の間にか俺の方を見ていた。

「貴女はさつき、シルフィードと話した、と言っていた。アレは嘘？」

「いや、別に嘘でもなんでもないんだけどな。俺は、知性を持つている人間以外の生き物と、頭の中で会話することが出来るんだよ。ま、俺がそれを望んでいて、尚且つ相手が許可しないと無理なんだけどな。」

「そ、そういえば、ナナシとお話をするとき、シルフィは喋ってなかったのね！」

気付いてなかったのかよ。まあ喋ったのは学院に帰ってからパーティーが始まるまでの短い間だけだが、それでも判らない、というのはどうなんだ？

胡乱な視線を向けると、シルフィは誤魔化すように「急がないといけないのね！」と言って前を向いた。

なんて言うか、頭はいいんだけど、どうにも子供っぽいな。

対して、見た目は子供でも中身は冷めているご主人さまは、というと俺の方をじっと見ている。

「これから私は行かなくてはならない場所がある。貴女は引き返して欲しい。」

「パーティーから抜け出してまで、か？その顔つきからして、尋常な用事じゃないんだろ？」

俺が問うと、タバサはこくりと頷いた。

「荒事か？」

その質問には、少し躊躇した後、「貴女には関係無い。」と言うに留めた。なるほど。荒事なのね。

俺はイアンを解放してシルフィの横に並ぶように飛行させると、次

にマサムネ以外のアイルーを足元に呼び出した。

「ちよつと俺は出かけるから、お前たちは俺の留守中にサイトとルイズの世話を頼む。後、伝言でサイトには『あんまり馬鹿をするなちゃん』と訓練をしておけ』って言つといてくれ。やばくなつたら知らせてくれよ。」

「……了解ニヤ。」「……」

それから俺はアイルーを一匹ずつイアンの上に投げていく。四匹とも背中に乗ると、イアンは方向転換し、来た方向に飛んでいく。アイルー達はそろって敬礼していた。

「どうして？」

「ま、お前みたいな可愛い女の子が思いつめた顔でいるのは良くないと思つてな。それに今日は助けてもらったろ？」

「私の方が貴女たちに助けられた。」

「お互い様、つて奴さ。誰だつて一人じゃ生きれないだし。」

自分で言っていて耳に痛い言葉だ。誰ともチームを組まず、ずっと一人きりで狩りをしていた人間の言うことじゃないよな。

「それで納得できないなら、これからかけることになるだろう迷惑の、先払いのお詫びつてことで頼む。」

俺が片目を閉じてそう言うと、ようやくタバサも納得してくれたようだ。そろそろ学院の近くに降り立った頃か、と思い、確認してからイアンを戻した。

「判つた。でも、これから行くところで知つたことは、他言無用。」

「ついでにシルフィードが喋ることも、な。よく判らんが喋る竜つてのはあまり一般的じゃないのか？」

「風竜なんかとはぜんぜん違うのね！シルフィたち韻竜はお喋りできるし、精霊の力だつて使えるんだから！きゅいきゅい！」

「そうなのか、たいしたもんだな。で、それ言つてもよかつたのか？」

シルフィードはまたハツとしている。またそろタバサが杖を持ち上げようとしていたので、「まあ調べれば判つたことだし……。」

と一応フォローを入れておいた。

言わなきや誤魔化しようもあつたから、結局は言わないほうが良かったんだが。

それ以降はタバサはずっと本を読んでいたので、俺はもっぱら、シルフィードと話をしていた。多分、全速力のレウくらのスピードが出ている筈だが、不思議と風はあまり気にならない。魔法で風を避けているのだろうか。

そうして半日ほど、空を旅してからだろうか。その、やたらと大きな城に着いたのは。

城の一角に降り立つと、タバサはシルフィードをその場に待機させて、俺を伴って中に入って行った。因みに俺は姿を見られるのは宜しくない、というタバサの意見から、姿を消している。学院に戻ってから試したのだが、このルーンはどうやら鎧にも適応するようだ。試してみた範囲では、解放した状態で口から出すものが剣や武器の先から、それ以外の部分で発揮するものは鎧一式を装備すれば使用可能らしい。なので、今俺はオーナ（オオナツチ）のミヅハ【真】シリーズを着用している。こいつの不可視化状態は最初からそこにいることを疑ってかかり、尚且つ触れない限り、まず判らないだろう。

今も、数人のメイドとすれ違ったが、彼女達はタバサだけにしか気を払っていない。

因みに、風の系統には、周囲の索敵を行うものがあるので、それを使われたらすぐにバレるらしい。なら、もし風系統のメイジと戦うことになったら、ナルのナルガ×シリーズの気配遮断を使ってみるか。

さて、しばらく石造りの城内を進むと、広間と、その奥にある豪華な飾りの椅子に座った少女が見えた。近くにメイドがいるが、何故かその顔には恐怖の色が張り付いている。少女は底意地が悪そうに

顔を歪めている。

タバサと同じような、しかし少し色の薄い青い髪をした少女だった。着ているものからして、かなり位の高い貴族の娘か。顔立ちは可愛らしいが、今はそれが歪んだ笑みで台無しになっているが。

「珍しく着飾っているじゃないの。」

少女はそう言っただけ何も言わないタバサに丸めた書簡を投げつけた。タバサは無言のまま受け取り、そのまま出て行く。あっさりとしてるな、と思っっていると、その少女が歩いてきてタバサのドレスの裾をつまみあげた。

「ずいぶんいいものを着てるじゃない。こんなものを買えるほど、手当てはもらっていないはず。盗んだんじゃないだろうね。」

「母様のお下がり。」

意地の悪いことを聞いた少女はタバサの言ったことに、何故か一瞬ひるんでいたが、すぐに持ち直した。ポケットから取り出したコインをタバサに見えるように手のひらで弄んでいる。

「今度の任務の予行練習に、わたしとゲームをしようじゃないか。表か裏か。うまく当てたら、金貨百枚やろうじゃない。でも負けたら、その服を貰うわ。どう、受ける？」

タバサは横に首を振った。彼女の着ている服がどんな値段のつくものなのかは知らないが、余興で賭けの対象にしていいものではないことはたしかだ。

「あつはつは！臆病だねえ！あんたみたいな臆病の能無しに、どうして北花壇騎士の任務が務まるのか、わたしには理解できないよ！あつはつは！あは・・・。」

少女は笑っているが、タバサは無言のままだ。最初は馬鹿にしていたが、その目をみている内に、その無言の圧力に耐えられなくなったのだらう。少女は黙り込んだ。

そして、俺はそこでようやくその少女の目の奥にあるものに気付いた。

嫉妬。

恐怖。

理由までは判らないが、目の中にあるのはその二つの感情だ。だからこそ、必要以上に尊大に構えて、タバサを軽視した発言をするのだろう。私はお前のことなど怖くない、私はお前のことなど気にしていない、と。

「ふん。今回の任務を直々にわたしが説明してやる。ベクルート街に賭博場ができてね、馬鹿な貴族どもから派手に大金を巻き上げているのさ。軍警を使って店を取り潰したっていいんだが、そうなたら恥をかいちまう貴族が何人もいるんで、おおっぴらに取り締まるわけにもいかない。で、あんたの出番ってわけ。小生意気な賭博場を、潰してくるんだ。儲けるカラクリも、きっちり暴いてくるんだよ。」

そして、少女は軍資金だ、と言って金貨の入った財布をタバサの足元に放り投げた。タバサがそれを拾う。

「賭博場で、お前はド・サリヴァン伯爵家の次女、マルグリッドを名乗りな。いいね。」

そう指示して、俺達はその部屋から追い出された。

勘違い＋うつかり＝冤罪？（後書き）

トレニヤーの出発のときの敬礼が好きで、あんな風に書きました。
少し反省。

でも後悔はしていない！

あとシルフィードの話し方も難しいですね！。

イカサマはバレなきゃただの技術です。(前書き)

今回のサブタイは某濃いオタク君の台詞を参考にしてみました。特に意味はありません。多分。

イカサマはバレなきゃただの技術です。

さつき知ったが、ここはトリステインの隣国、ガリアという国らしい。シルフィに乗っているうちに何時の間にか国境線を越えてしまっていたのか。

俺たち三人はその国の首都、リュティスの繁華街を歩いている。俺とタバサと一緒に歩いているのは、当然飛竜、ではなく青い長髪の女性だ。20前後くらいだろうか、顔立ちは整っており、体つきも相応だが、表情がどうにも幼い。

それもそのはず、彼女はシルフィードが魔法で人間に化けた姿なのだ。俺もさつき変身する姿を見て、不覚にも魔法というものが自分の常識を軽く超えているものだということを再認識させられた、が、しかし、中身までは変わらなかったらしい。さつきから歌いながら歩いているのでやたらと悪目立ちしている。

因みに、タバサはドレスから乗馬服に、俺とシルフィはタバサにお金を借りて、俺は男物の黒と青の服を、シルフィは普通の女物の服を買って身につけている。俺とシルフィードはタバサの従者という設定でいくが、従者がロリータファッションや全裸など不自然にすぎる。おかげでパツと見は男、に見えなくても多少は様になると思う。

タバサもシルフィもよく似合っている、と言ってくれたし、俺自身も中々満足している。

なんでも最近、貴婦人の間で男装が流行りなんだとか服屋の店員が妙に張り切っていたが、何故だろう。

「究極の男装モデルキターーーー！」とか「ミスマッチによるケミストリーも悪くは無いけど、ここは王道一直線ね。」とか言っておもちゃにされていた1時間はさりげなく俺の精神防御力を奪っていた気がする。

そうして途中に消したい類の記憶を作りながらも、俺たちはとある

宝石店までやってきた。ガラスで出来たウィンドウの向こう側には、色とりどりの宝石や、金、白金で作られた細工物が飾られている。あまり興味の無い俺の目から見ても中々綺麗なことがわかる。シルフィも女の子（今の姿のときに雌、と呼ぶとなんか変な感じだし。）なのか、その輝きに感嘆している。

一方、タバサはそのまま店の中に入り、奥に飾られていた一際大きなブルーダイヤをじっと見ている。たしかにこの色ならタバサの髪の色と相まって似合いそうだな、とその横顔を見ながら考えていると、店員が駆け寄ってきた。

「いらっしやいませ。お嬢様。本日は何をお探しですか？」

「これ。」

タバサは見ていたブルーダイヤモンドを指差した。命令書を読んでもらったときは、合図とはなんととも古風な、とは思ったがこの世界ではこういうものが普通なのかねえ？

「お嬢様、失礼とは存じますが、その宝石は売り物ではございません。」

「これが欲しい。」

「二千万エキユーはいただきますが……。」

物価や貨幣の価値はまだよく理解出来ていないが、とりあえずその値段が法外なものであることくらいは判る。普通の客がもしこの宝石を欲しがったとき、カジノの客と勘違いしないためにこの異常な価格設定があるのだ。一般の客は、その値段を聞けば、断念するか憤慨して店から出て行くかの二択だ。

そして、タバサはそのどちらでもなく、カジノの客だ。

「買った。」

「では、手付けをいただきますが……。」

タバサが銅貨三枚を渡すと、店員はにこやかに店の奥に案内した。カーテンの奥にある部屋の中、そこにある大きな棚の隣に付けられた紐を引っ張ると仕掛けが作動し、棚が横にずれて、大きな扉が現れた。忍者屋敷みたいだな、と思いつつ扉の向こう側にあった階段

を下りていく。

「地下の社交場、”天国”へようこそ！」

「当カジノの支配人である、ギルモアです。」

そこではきわどい格好の女性達とでっぷりと太った中年がいた。中年は熟練の商人らしく、表情は笑顔だが、その奥の目だけは笑っていない。周囲には色々なギャンブル台と、そこでの快楽に興じている連中がいる。皆一様に整った身だしなみをしていることから、貴族か、豪商のどちらかなのだろう。

「どうしてこんな地下にカジノを造ったのだ？といった顔をされていますな？いやなに、こんな商売をしている内に、顔色で思っていることがわかるようになってきましたな。・・・知つての通り、カジノは合法ですが、賭け金には上限が定められています。しかし当カジノは、裕福な商家の旦那様や、名のある貴族の方々にも満足のいくような賭け金を設定させていただいておるのです。したがってこんな地下で細々と営業させていただいている次第。ですから、お嬢様のような貴族のお客様は大歓迎・・・。」

その後、杖を預け、名（あの少女、シルフィの説明ではイザベラといったか、が決めた偽名）を名乗り、まずは、サイコロ賭博を始めた。最低のレートが金貨一枚なので、その額をちびちび賭けて勝ったり負けたりを繰り返し、頃合を見計らって数十枚を賭ける。それは必ず当たり前、持ち金は段々と増えていった。

ふむ。素人考えだが、ギャンブルは熱くなつて自分を省みることができなくなつた者から負けていく。

ポツケ村にもここほど盛況でないにしても賭場はあつたが、概ねそういう場所ですつていくのは、熱くなりすぎた馬鹿ばかりだった。その点、タバサは全くの冷静だ。シューターの癖を観察し、まず外れない、と確信してから大枚を賭けている。さて、ご主人様が頑張っている間、シルフィはといえば、最初はタバサの意図が判らなかつたのでハラハラして後ろで騒いでいたが、チップが増え始めると、自分もやってみたくなつたのか、チップの山から数枚を貰つて他の

ギャンブル台へ突撃していった。おい、お前は護衛の役じゃなかったのか？

疑問を感じながらも、俺は一人で胸を張ってタバサの勇姿を見ていたのだが、少しすると、当のタバサ本人から、「暫らくは問題無い。貴女も好きな場所で遊んでいて。」と言われ、チップを数枚渡された。

そう言われると、タバサの傍で待機しているわけにもいかないのになにかあつたらすぐに合図をすることを言い含めてから、ポーカーの台に移った。

ディーラーにカードを五枚配ってもらい、その中身を見る。ジョーカーありの3のスリーカードか。

チップを一枚だけベットし、他の参加者を見る。どうやら良い役が出来ているのか、笑顔で数十枚を賭けている貴族らしきオッサンがいた。ポーカーフェイスとは縁が無さそうなオッサンだな、と思いつつ、ディーラーに2枚を配ってもらう。オッサンは一枚だけ換えていた。

7が二枚。

周囲を確認するが、俺以外の役は総じて低い。そのため、ベットされているチップも小額だ。大枚を賭けていたオッサンは何故かツィペアだった。どれだけ自分の運に自信があるんだよ。

さて、フルハウスの完成だ。俺のポットから全額をベットする。周囲のプレイヤーは冷笑を浮かべて俺を見ている。初回で全額を賭けていることから、良い役ができた、というよりは駆け引きの判らない素人だと思われているのだろう。

だが、俺はこの場で楽しくギャンブルをするつもりは全く無い。プレイヤーやディーラーたちの目を見て、そこに反射したカードの裏側を見て堂々とイカサマをしていることからそれは明白だ。

つまり、このゲームで俺は負けることは無いのだ。何の奇蹟も起きず、俺が勝ち、そのままそれは続いていく。オッサンは俺のことを睨んでいたが、（いや、そもそも俺以外にもスリーカードとかあつ

たやつもいただろ？」3ゲームほどすると、素寒貧になったのか、自動的にゲームから外れていった。

しかし、このイカサマ、杖が無いことで魔法が封じられているため、単純に視力が人間離れしていることの結果、ということとはバレないだろうが（ポーカーフェイスという言葉があるように自分以外のプレイヤーの表情を見て心理戦を練り広げるのはれっきとしたルールの内である。）しかし俺が全く楽しめない、という欠点がある。

賭け事というのは結局のところ、勝つか負けるか判らないからこそ、スリルやそれに付随した達成感が生まれるのだが、俺の場合は唯の作業になっている。

俺はまず負けることはないし、負けそうになってもフォールドするだけなので、チップを大量に失うことも無い。ゲームが進むたびに俺のポットには加速度的にチップの山が増えていき、他のプレイヤーは俺がイカサマをしていることを確信しつつも、それがどんな手段か判らずにいる。ディーラーが疑われたこともあり、2回入れ替えだが何一つ変わらないので、俺の方におはちが回ってきたかたちだ。取り合えずチップが三千枚を越えたあたりでやめて、タバサの元に戻ろうとする（因みに他のプレイヤー達は既に見破ることが無理だと諦めており、引き止められるようなことは無く、むしろ安堵の表情を浮かべていた。）と騒ぎが起きた。

客の一人がギャンブルの結果に難癖をつけて、騒ぎ始めたのだ。しかも、ご多分にもれず、どこぞの貴族らしい。ギルモアが対処しているが、俺の場合のようにイカサマの入る余地も無いようだし負けた腹いせだろう。何処の貴族も同じだな、と思っていると、ギルモアの一見誠意がありそうに見えながらもどこか小ばかにしたような反論に発言を封じられ、その貴族は大股でカジノから出て行った。あれだけで終わると思えないので、タバサの後ろに待機していると、はたして、その貴族はすぐに戻ってきた。それも、入場するときに預けていた杖を持って。

「この、平民風情が・・・、貴族をナメくさりおって！」

杖の先から火球が生まれ、よほど腹に据えかねたのだろう、ギルモアの方へまっすぐに飛んでいく。無力化するべきか、とも思ったがなるべくなら目立ちたくは無いので、こちらに被害が出そうになるまでは無視することにした。

ギルモアまで火球が後一步、という距離になった瞬間、そこに割り込んだ影がギルモアを抱えて転び、助け出した。どうやらあの影はさつきまでタバサに話かけていた美形の給仕らしい。

貴族はなおさら激昂し、さらに魔法を放とうとするが、一瞬で近づいた給仕が袖から出したナイフで杖を真つ二つにする。魔法の媒体となる杖が無くなれば、いくらメイジでも魔法が使えない。貴族は一瞬にしてただの尊大なオッサンになった。

「賭博場内は、魔法の使用が禁じられております、閣下。」

「うお・・・、おのれ・・・。」

「お引取りを・・・。」

「貴様、貴族にこんなことをしてただですむと思っておるのか！」

「お言葉ですが、平民ごときに杖を切り落とされたことがお上の耳に入れば、そのお立場が危ういことになるかと・・・。」

給仕はにっこりと笑いながら、貴族の喉元にナイフを突きつけている。貴族は顔を紅くしたり、黒くしたり中々忙しいようだったが、魔法が無い状態では喉元のナイフをどうにかできないことを理解する程度には冷静だったのだろう。今度こそカジノから出て行った。

給仕は客からの拍手をもって迎えられた。多少は出来るようだし、顔もいい。タバサとの話を聞いた限りでは人当たりも良いようなので、人気も高いのだろう。シルフィもしきりに感心している。

しかし、このタバサの任務、下手をすれば、あの給仕とも交戦することになるのか。

少しばかり、厄介そうだな。俺はともかく、タバサにはきついんじゃないか？

唐突にルート開拓。ロリか！ロリなのか！！（前書き）

今回で一回目のタバサの冒険編は終わりかなー、と思ったんですが、
まだ少し続きます。

唐突にルート開拓。ロリか！ロリなのか！！

騒動の後もタバサは勝ち続け、夜にはチップはとくに一万枚を越えていた。いつしか周囲にはギャラリーが囲んでいる。俺のときはただのイカサマだったが、彼女は正攻法で増やしているため、目を引くのだろう。

しかも、この段でまだ彼女は冷静さを保ち、集中力を途切れさせていなかった。

冷静に、冷静に、シューターの癖を見抜き、タイミングを見計らって大金を賭ける。

相手をしているシューターの方が何倍も辛そうだ。基本的に賭場というのは胴元が勝てるように出来ているとはいえ、客にこれほど勝ち続けられたら、経営に差し障りかねない。

客の利益＝店の損害という方程式はどうやっても変えようが無い。そのストレスがシューターの状態を追い詰めているのだろう。俺のようにイカサマであることが誰にでもわかるような内容なら、それを探せばいい、と思うことが出来るが、タバサは正攻法で勝っている。

頃合と判断したのか、タバサがチップを一気に二千枚も賭けた。

シューターはさらに顔色を悪くしながらサイコロを振る。

三つのサイコロが全て2になり、ついにシューターは頭を抱えている。ギャラリーは人事ながら、スリルのある勝負を楽しんでいる。

しかし、この年にしてやたらとギャンブルが強いな。それも、運なんて不確定なものではなく、それ以外の要素で、というのが凄まじい。ま、手放して褒められるようなことではないのだが。特に、そんな技術を手にしなればならなかった彼女のこれまでを考えると、

「お嬢様・・・、これはこれは大変な大勝でございますな。さて、そろそろ夜もふけてまいりましたが・・・。」

「続ける。」

擦り寄ってきたギルモアの言葉に、タバサは相手が望むように返事した。そう、ここまで勝ってしまうと、胴元の本音は『帰ってくれ』から『負けるまで続けてくれ』に変わる。持久戦では圧倒的にあちらに分があるのだから。

ギルモアが指を鳴らし、シューターが奥に引つ込んだ。その顔は重圧から解放されたことで判り易い安堵を浮かべている。

「申し訳ありませんが、このテーブルはシューターが体調を崩してしまったので、お開きとさせていただきます。さて、そろそろ小さな賭け額にも飽きた頃ではございませんか？」

タバサが頷くと、後ろでシルフィが喚いた。

「お姉さま！勝負は引き際が肝心なのね！きゅい！」

「・・・シルフィ、お前はちよつと空気を読みなさい。」

「どうして止めるのね、ナナシ！あれだけあれば、お肉どんだけ買えると思ってるのね！」

「あー、俺が換金したお金で買ってやるから、とりあえず落ち着きなさい。」

「ほんと！ほんとなのね？きゅいきゅい！」

既に換金し終えた金（とりあえず三千エキューくらいあるらしい。

日本円でどれくらいになるんだろう、これ？）から肉を買ってやることを約束してやると、シルフィはようやく大人しくなった。

因みにタバサはシルフィを無視して続行の意思を告げ、ギルモアに少し休憩する意思を伝えている。

案内された部屋は、豪華な家具が嫌味にならない程度に置かれていた。趣味も統一されているため、中々居心地がいい。多分、そうやって客を引き止めるために造られてるんだろうな。

タバサはいつものように、椅子に座って本を読んでおり、シルフィはまたきゅいきゅい言っている。

「まったく・・・勝っているうちが華だと思うのね。ああ、こん

な部屋に釣られて、勝った分をそっくり吐き出すのがせきの山なのね！きゅい！」

その為の部屋だろうしね。

コイツは、薄々気付いてはいたが、目的を完全に忘れてるな。目的と言えば、俺が稼いだお金は、タバサは目をつぶるつもりらしい。

俺としても、なにが必要になるか判らないので貰えるものは貰う主義だが、しかしいいのかね？まあ、元はいけ好かない貴族どものお金であることを考えると、不思議と躊躇いが消えていくが。

「勝ちにきたわけじゃない。」

「負ける勝負なんかしちゃだめなのね！」

俺はシルフィの頭を押さえつけると、その耳に口を近づけた。

「俺たちはこの賭博場をつぶすのが目的だろーが。」

小声でそう言うと、ようやく思い出したのか、「きゅい」と言っている。小さな声で言うのは、盗聴を警戒してだ。タバサに、カジノに入る前に注意されたが、そういう魔法もあるらしい。

「タバサみたいに勝負所を見極めるんならともかく、そんなもの無しで勝ち続けられるほど賭け事ってのは甘くないの。なら、どうにかしてイカサマをしてるんだよ。」

「でも、それならナナシはなんであんなに勝てたのね？」

「決まってる。イカサマしたんだよ。ばれないように、な。」

俺にあわせて小声になったシルフィに言っていると、少し驚いた顔をしている。くるくる表情が変わって中々面白い。

「それなら、シルフィがなんとかしてあげるのね！イカサマとやらを見つけてやるのね！」

あ、早速大きな声で言ってるし。まあ任務云々を口走らないかぎり問題無いか。タバサもその方向で黙認するみたいだし。

「あなたには無理。今回は頭脳戦。」

「ま、無理だろ。誰にだって向き不向きはある。」

「それはつまり、シルフィの脳が足りてない、と言いたいわけなのね？」

「そうは言っていないけど、近い。」

「こ、この、古代種のシルフィをつかまえて、足りないとは上等なのね!」

「そういう意味じゃなくて……。イカサマを見破るには、いかに相手の行動を見てその一瞬だけの不自然さを疑えるかどうかが必要なんだよ。お前、出来るか?」

「多分、根っこが違うシルフィじゃ人間のやってることの何が不自然なのかは判らないのね……。でも、シルフィだってお役に立ちたいのね。」

「気持ちだけもらおう。おとなしくしてて。」

シルフィなりにタバサの手伝いがしたい、という気持ちがあるのだから、本人はにべも無い。シルフィは気分を害して部屋から出て行った。散歩をしてくる、と言っていたからそんなに遅くはならないだろう。

2人きりになると、とたんに会話が無くなった。余計なことに意識を散らして負担になっても良くない、と考えることだが、どうにも空気が重い。

ベッドに座ってなんととはなしにタバサを見ていると、ふとその手が止まっていることに気付いた。なのに視線はずっと本のページに落とされたままだ。

「あー、マルグリッドお嬢様?」

最初、自分が呼ばれたことに気付かなかっただろう。タバサはそのままだったが、数秒すると、いつもの澄んだ目でこちらを見た。

「何?」

「ちょっとこっちにおいで?」

「何故?」

「ま、いいからいいから。」

タバサの手を引くと、ベッドの上に座り、その膝の上に座らせた。

後ろから包み込むように抱きしめてやりながら、出来るだけ優しい声になるように話した。

「君はいい子だよ。それに、凄い子だ。」

「意味が判らない。」

「だからって、傷つかないわけじゃないし、心がいつまでも重圧に耐えられるわけでもない。そんなことわかってたはずなのに、ごめん。気付いてやれなくて。」

「どうして?」

「ん?」

「どうしてそんなことを言ってくるの?」

「んー。ポツケ村の諺で言うなら、『咲かない蕾が無いように、溶けない氷もまた存在しない』ってところかな。」

「難解。」

「ははっ。ま、そうかもな。」

俺が笑うと、タバサは無表情なままだが、少し身体の力が抜けたようだ。その頭を撫でてやりながら、童話を話してやった。

少し子供扱いしすぎたかな?と思ったが、聞き入ってくれている。

選んだのは、「シンデレラ」に「白雪姫」だ。

タバサは身体を俺に預けて、目を輝かせている。このくらいの子にはこういうお話が受けがいいな。

俺は、話しながら、ずっと頭を撫で続けている。何と云うか、最初は少しでやめるつもりだったのだが、あまりの触り心地の良さになんとなく続けているのだ。

二つ目の話が終わった頃、ドアがノックされた。

思えば、油断していたんだと思う。何の疑問も抱かず、シルフィが散歩から戻って着た、と思い込んでいた。この時点で、あの竜がドアをノックする、などという繊細な気遣いをするか、ということをよく考えていれば。

「いいから、入れよ。」

俺がそう言つと、ドアが開いた。しかし、その向こう側にいたのは、例の美形の給仕だ。三人が互いの姿を認識し、空気が凍りつく。最初に動いたのはその給仕だった。

「・・・大変失礼いたしました。」

「待った！あんた何か大きな誤解をしてるぞ!？」

ドアを閉めてこの空間から脱出を図ろうとする給仕を制し、叫ぶ。
もう盗聴とかなんとか気にしていられなかった。

タバサも自分の格好に気付き、少し慌てて椅子に座って何でも無かったように本を読んでいる。ただ、その耳が赤く見えるのは俺が色覚障害になったせいだろう。きっとそうだ。

給仕は恐る恐る、といった様子で部屋に再び入ってきた。

唐突にルート開拓。ロリか！ロリなのか！！（後書き）

レートが判らないのでとりあえずチップ1枚＝1エキューくらいと
して書きました。

多分、1エキュー＝1万円くらいですよね？

あと、タバサが慌てたのは子供の頃の知り合いにあんな姿を見られ
たからです。多分。

ローリーから兄的存在への回避。ロリコンは皆そう言っただよー！（前書き）

とりあえずタバサの冒険編一つ目が終了です。

次回からは二巻の内容になるんですが、よく考えてみれば二巻の最後から三巻の冒頭って続いているんですよね。次は三巻の途中で入れようかな・・・？

ローリーから兄的存在への回避。ロリコンは皆そう言っただよー！

なんだか痛々しい沈黙が続いている。どうやら給仕はタバサに用があつてこの部屋に来たようだ。

それが入った瞬間、あんな状態の俺たちに出くわしたのだ。そりゃ気まずい。

俺のいる手前、口に出しづらそうだが、さっきからチラチラとタバサを見ている。

タバサは無表情なままだが、こころなしに焦っているようにも見える。

どうにも、2人とも俺がいると話し辛そうだな。

俺は取り合えずタバサに近寄ると、その耳に口を寄せた。

「少し時間を潰してくる。・・・よく判らんが、あちらさんもタバサに用がありそうだしな。」

タバサはその言葉にハツとした後、こくりと頷いた。情報は少しでも多く有った方がいいだろう。

ドアの近くまで寄ると、振り向く。

「では、マルグリッド様。私は少しシルフィを探してまいります。

ご歓談が終わるころには戻る心算ですので、お気をつけて。・・・

給仕君。私の主人をいじめないでやってくれよ?」

しゃちほこぼりながらも、片目を閉じて言うと、給仕は困惑したように、「滅相もない・・・。」と言っていた。

ドアを出て、通路を外に向かって進み始める。

さて、それじゃああのお子様童を探すかね。

マサムネに協力してもらつて探してみると、しばらくしてシルフィは一人で宝石店から離れた場所にある公園にいることが判った。

長椅子に座つて空をぼんやりと眺めている今のシルフィは使い魔の

韻龍、というよりは突然リストラに遭って途方にくれているOL、といった感じだ。

使命感や仕事の意欲があるのは良いことなんだが、コイツの場合、なんか空回りしてるんだよなあ。

多少時間を食ったので、少し驚かしてやれ、と思い俺は後ろから気付かれないように近付くと、至近距離で「シルフィー！！！」と怒鳴った。

ビクン、と痙攣するように身体がはねた後、錆びた歯車のごとくギギギと音をさせて顔を振り向かせる。俺は別段怒ってはいないのだが、彼女はそうは思わなかったらしい。まあ、後ろめたい部分があるのなら仕方が無いか、と思いつつ、逃げようとしたシルフィの襟首をつかんで止まらせる。

「ナ、ナナシ！離して欲しいのね！」

「んー。シルフィが落ち着いて話せるんならな。」

「お、お安い御用なのね！」

俺が襟を離すと、シルフィは長椅子の場所まで戻りそこに座った。俺もそれにならって隣に座る。

「ナナシは人間なのになんでそんなに力が強いのね？シルフィもそんな力があれば、あのちびすけに馬鹿にされないのに！きゅいきゅい！」

「俺の力は俺の中にいる奴らから借りてるものだからな。俺本来の持ち物じゃない。それに、タバサは決してシルフィを軽視してるわけじゃないと思うぞ？」

「ならなんでシルフィは役立たず扱いされたのね！」

「適材適所だと思っただろう。シルフィの頭が悪い、と思ってるんじゃないかな。いいか？イカサマを見破るには謀略の才能も必要だ。いかに相手を騙すか、ということに長けているのは、逆に言えば、相手が自分をどうやって騙そうとしているか、読みやすいつてことだ。」

「シルフィは・・・、確かに、騙したりするのは苦手なのね。」

「なら、他の部分で助けてやればいい。それに、な。あの用心深いタバサが、信用していない者の背中に乗って逃げ場の無い空を飛ぶとでも思うのか？」

「それもそうなのね！・・・じゃあ、お姉さまにあやまらなくちゃ、なのね・・・。」

「そーいうことだ。ちゃんと判ってるじゃないか。」

俺はシルフィの頭を撫でてやり、笑いかけた。ちゃんと、コイツは判ってる。

元々、タバサに対しての敬愛ぶりは高いのだが、今回はそれが発揮できないことでジレンマに陥ってああいうことになったのだろう。

俺達がカジノの奥の部屋に戻ると、給仕は既に退室しており、タバサは椅子に座ったまま何かの紙切れを持っていた。

「お姉さま、ごめんなさいなのね！」

シルフィは部屋に入って開口一番にそう言った。タバサは予想以上にシルフィが素直になったせいも、少し驚いた顔をしている。

元よりタバサは怒ってもいなかったので、俺がシルフィの後ろで片目を閉じて合図をしてやると、その謝罪を受け取った。

それから、俺はタバサが持っていた紙切れについて尋ねた。タバサは無言でそれを差し出す。俺が覚えた、拙いハルケギニア文字の知識と元の世界での記憶を総合すると、小切手に見える。実際、そのものずばりらしい。しかも、かなりの金額だ。

タバサの話では、さっき来ていた給仕は、昔の知り合いで、これからタバサが受けることになっている勝負はイカサマをされる為、決して勝つことが出来ないそうさ。それをどうにかしようと思った給仕は、タバサの持ちチップの9割を換金可能な小切手にして、これを持ってすぐにここから帰ることを勧めたんだとか。

残りの一割はここが貧民を助けるための金銭を確保するための施設、ということを手数料なんだろう。

親切なんだが、俺達の目的を考えると、意味が無いな。そもそも不正を判っていて見逃している時点でそいつも同罪だし。

しかし、ギルモアは、カジノの儲けを貧しい者に分け与えているという。だからこそ、あのトマという給仕もあのオッサンに忠誠を誓っているのか。まあ、主のために火の魔法の前に飛び出すような奴だ。それなりに忠誠の理由もあるのだろう、と思っていたが、しかしそこについては疑問を挟まずにはいられない。

「あのギルモアってオッサン、そんな義賊気取りで法を犯してまで他人を助けようとするようなタマかねえ。」

「人は見かけによらないとも言う。」

「まあな。けど、人間ってのはえてして耳障りのいい言葉に惑わされ易いのも確かだ。特に、相手のことを信用してる場合は、な。」

「トマが騙されてる？」

「さあ？そこまではな……。でも、あいつがお人よしなのはそれ（小切手）を見れば判るから、もしかしたら、本当のことなのかもしれない。ともかく、依然としてイカサマをやっていることは判っても、それを見破る方法が判らないってのが実情だな。さて、どうしたものか……。」

小切手云々はともかくとして、取り合えずは目前に迫った問題であるギルモアのイカサマについて考えるべきだろう。

ギルモアの自信満々な様子から、絶対にばれない、という確信があるのだろう。客層はメイジが多いことから、魔法をつかつてのトリックである可能性は低そうだ。かといって、純粹な技術だけでやっているとも思えない。少なくとも、イザベラの渡した書簡に書かれていたような事例は、不可能なように思える。

タバサも俺も考え込んだが、やはり有効な方法は思いつかない。そうして、いつの間にか数時間が過ぎていた。

結局、その場で不自然なところを見つけれ、という実に行き当たりばったりな方法しか思いつくことができないまま、休憩にとった三時間が過ぎていた。

その部屋は俺達を通された部屋と同じような造りだったが、中央にテーブルが置かれ、向こう側にはギルモアが悠然と座っていた。その隣には、トマが立っており、俺達、というかタバサを見た瞬間、その美しい顔が苦しそうに歪む。部屋の外まで聞こえていた2人の会話からして、トマは知らぬ存ぜぬでギルモアに通す心算だったのだろう。

ギルモアは逃げたと思っていた金貨袋がまだ手元にあったことが判り、喜色を浮かべている。

うん、トマには悪いがどう見ても悪党にしか見えない。

「おやおや！これはこれは！お待ちしておりましたぞ！いやはや、お帰りになられたかと心配いたしました！もつともつと、お嬢様から賭け事のコツを教えていただかねば、私どもなど干上がってしまいますからな！」

ギルモアに対比するように、トマは今からでも帰るように心変わりして欲しそうだったが、タバサはそれを無視し、ゲームを始めようとしたギルモアに、場所を厨房に移させて始めるように要求する。

これで、何らかの仕掛けがこの部屋にあったとしても、それは無効化される。

当初、あつげにとられた様子のギルモアだったが、別段焦ることも無くその要求に応じたことから、この部屋とイカサマは関係無かったのか？

コックたちは既に厨房から追い出されており、俺達とトマも公平をきすために退室することになった。

カードを切るのはイカサマ防止（内部の人間の言質がある以上、この言葉も空しいが。）のためにタバサがやるらしい。限りなくイカサマなどという要素の入り込みにくい状況だ。

なにか、ルールの裏を突くようなことでもしていない限り。

さて、厨房から出た俺達はというと、その扉の前に立ち尽くしている。結局タバサを一人で困難に立ち向かわせなければならぬ自分の立場が歯がゆいが、しかし彼女のことを考えると乱入して余計な

ことをするわけにもいかない。シルフィもそれについては同じよう
で、さつきからずつと扉を心配そうに見ている。

物見高い客達は数人、俺達の後ろで固まっていた。

一方、俺達と一緒にいるトマはずつと苦しそうにしている。多分、
昔と今の主が対立していることで板挟みの感情を抱えているのだろ
う。

数分、そのまま待っているが、扉の向こうから小さく聞こえる声
から、タバサが大口に賭けて負けていることが判る。おかしい。あ
れほど冷静だったタバサが急に読み間違えた？それこそありえない。
「なあ、トマ、と言ったか。お前さん、マルグリッドお嬢様とは知
り合いなんだろう？」

「・・・はい。幼少の頃、お屋敷で庭師の仕事をさせていただいて
おりました。」

「へえ。じゃあ、今はなんでこんなところに？」

「とある事情から、お暇を頂戴しまして・・・。恥ずかしながら、
しばらくはゴロツキのような生活をしておりました。その折、ギル
モア様に拾っていただきまして、私のような者に読み書きを教えて
いただき、またこのような仕事をさせていただいている次第でござ
います。」

「ふーん。じゃあ、支配人は君にとって恩人というわけだね。」

「ええ。今の私があるのも、ひとえにギルモア様のお陰なのです。
そう言くと、トマは憂い顔で黙り込んだ。

忠誠心は高いが、その相手がイカサマをやっていることや、敵対し
ているのが元の主人である、ということ。それに、知らないだろう
がもしかしたら忠誠心の前提となる部分が嘘であることを考えると、
中々に複雑な心中のようだ。

トマから情報を引き出せないか？と思ったが、自身の内面すら平定
できていない今の調子では、あまりにも現実的ではない。おそらく、
聞き出す頃には全てが終わっているだろう。

.....

八方塞りの状態に、物理的にここを潰すことを考えていると、何かの音が聞こえた。だが、トマは気付いていないようだ。代わりに、シルフィが周囲を見回している。

目配せをすると、それに気付いたシルフィが頷いた。間違いない。近くに何かがある。それも、人間以外の何かが。

俺とシルフィが周囲を見回しながらその声の主を探すと、それが気になったのだろう。トマがついてきた。

「どうされたのですか？」

ちよūdōいい。コイツに吐いてもらおうか。とは言え、素直にはいかないだろうから……。

「いや、何かの音が聞こえてね。小動物でも入り込んだんじゃないか、と思つて。」

「それはないでしょう。当店はそういった物が入り込むような造りにはなつておりませんので。」

そうかね。それなら、今お前が一瞬視線を向けた俺の斜め後ろの部屋は関係ないんだな？

そちらに向かうようにシルフィに指示すると、途端にトマはそれに追いつがるうとした。が、俺がその額に鈍い打撃音を響かせると、昏倒した。

「今、何したのね？ ナナシ。」

「秘拳”でこピン”だ。」

微妙な空気が俺とシルフィの間に流れる。言つて後悔した。

「……なんでそれが秘拳なのね？」

「手加減が結構難しいから、滅多に使わないので。因みに本気でやると、多分人間程度なら頭蓋骨を突き破つて脳味噌を抉れるぞ？」

「いきなり怖いことを言わないで欲しいのね！ きゅい！」

怒つたシルフィと一緒にその部屋に入る。造り自体は休憩していた部屋と同じだが、内装や家具らしき物がほとんど置かれていない。

その代わり、部屋の片隅には頑丈そうな檻が置かれていた。それだけではなく、檻の外側には妙に目の細かい金属製の網まで取り付け

られている。

近付いてその中を覗くと、そこには一匹の小さなイタチが入れられている。その目が青く光っていることから、どうやら普通の動物ではないらしい。

コイツがさっきの声の主か？

「エコー」！

「何だそれ？」

「偉大なる古代の幻獣なのね！このエコーの持つ”精霊の力”を利用して、あくどい金稼ぎの片棒を担がせるなんて、”大いなる意志”への侮辱も甚だしいのね！」

ふむ、やはりこのイタチがイカサマに関わっているのか。

助けて、子供たち、囚われ、人間、協力。

エコーの声が頭の中にはつきりと響く。契約していないと、距離が遠くなると聞こえなくなるのか？

網を引き千切り、檻の柱を素手で抉じ開けながらそう考えたが、今までの契約では大抵その前に話そうとしても屈服する前は会話に応じないので、参考にならない。

屈服する＝重症を負わせる頃には、充分に近付いている事が常だったし。

シルフィが見つけた籠にエコーを入れてやり、それに笑いかける。

「だーいじょうぶだ。お前の子供はきつちり取り返してやるから。籠の蓋から頭を覗かせていたエコーは頷くと、籠の中に収まった。」

厨房で行われている茶番を止めさせるために、部屋から出る。部屋のすぐ傍に放置したはずのトマがない。手加減しすぎたか？もしかすると、タバサが危ないかもしれない。

大股で厨房の前に行くと、扉を蹴破る。

中にいたのは、タバサの持っていたチップの全てを自分の物にしたギルモアと、俺達がいなくなったことで厨房に入り込んで勝負を見ている野次馬と、あと何故か服をほとんど脱ぎ捨て、残り少ない下着に手を掛けようとしているタバサだった。

・・・なんだこれ？

ギルモアが勝っているのは判る。そしてタバサがチップを全て失っているのも。

だが、何故タバサが脱いでいる？熱くなつて脱いだ？まさか。

可能性として考えられるのは、ギルモアが（タバサはそこまで阿呆な提案はしない。）チップの代わりに、服を脱ぐことを提案したところか。

・・・下種が。タバサの目の前で無ければ適度に後悔させてやるものを。

「おやおやお連れ様ではありませんか。今は大事な勝負の最中です。水を差さないでいただきたい。」

ギルモアの耳障りな声を無視し、俺はタバサに近寄ると、着ていた上着を脱いで羽織らせた。

俺の方を見る澄んだ目に、大丈夫、と笑いかける。

シルフィは籠を見せつけ、ギルモアのイカサマを暴露している。エコーが籠から顔を出すと、タバサとギルモアの持っていたカードが小さなエコーに変化し、親の元へ走っていく。

動かぬ証拠を突きつけられ、ギルモアの顔がさらに醜く歪んだ。

しかし、精霊の力、ねえ。魔法とは違うものみたいだが、無生物にも変身できるなんて、かなり便利だな。タバサがカードの重さに気付かないわけも無いから、多分、重量も変化するんだろう。質量保存の法則を完全に無視か。やはりファンタジーだな。俺の常識がまるで役に立たない。

野次馬達はいきり立ってギルモアを取り囲んでいる。少なからず同じ手口で搾り取られた者もいるのだろう。

しかしこれではギルモアを拘束出来ない。野次馬共を掻き分けて進むべきか？と思案していると、奥の扉からトマがやって来た。俺を一瞬だけ視界に入れると、袖口から例のナイフを取り出し、素早くギルモアの前に立ちはだかる。

「ギルモア様に手出しはゆるさん。」

トマがそう言つて威嚇すると、その実力が判つている野次馬共は踏^た鞆^{たら}をふんで立ち止まる。その瞬間、トマは袖から出した紙製の筒のような物の先端を食いちぎると、床に叩き付けた。激しい煙が立ち上り、何も見えなくなる。

その煙が消える頃には、トマとギルモアは姿をけしていた。

そこからのタバサの行動は迅速だった。そのままの格好で、カジノ客に見られることも厭わずに入り口まで戻ると、今度は煙に混乱する客を尻目に、厨房まで戻った。手にはいつもの背丈よりも大きい杖を持っている。

そして、2人が奥の扉からでたのではない、ということが判明し、雑多な匂いが有る中で強化嗅覚を使用するべきか（悪臭も強化されるので、きつい匂いには凄まじく弱い。なので普段は使用していない。）思案している俺の前に来ると、杖を持ったまま、詠唱を開始した。

地下なのに不自然な、しかし心地よい風が吹き、周囲を探っていく。これがタバサの言つていた周囲の策敵をする魔法か。風が止むとタバサは厨房の一角にあつた、野菜入れ用の籠を退かせた。下から何かの蓋のようなものが出てくる。

「この下の道を逃がっている。」

「上出来だ。さて……。」

タバサの言葉に、鉄製の蓋を持ち上げてその下に続く階段を下りる。道はそれなりに広く造られており、大人一人くらいなら余裕で走ることも出来そうだ。

さて、とっ捕まえに行くかね、と考えると、タバサとシルフィが階段を下りてきた。おまけにエコーまでいる。

なんで付いてくるかね、こいつらは。

「トマとの決着は私がつける。お願い。」

「……危なくなったら、すぐに止める。それでいいのなら。」

タバサがこくと頷き、俺達は走り始めた。多少混乱していたのか、それとも走るのには向かない体格のギルモアがいるせいか。2人はすぐに見つかった。

「どうして、この抜け道がおわかりになったのですか？」

「風を辿った。シレ銀行の鍵。」

そう、イカサマを見破ったからといってタバサの任務は終わりではない。巻き上げられた大金を力モにされた貴族に分配して返さなければならぬのだ。正直、自業自得だとは思うが、彼女にも任務を遂行しなければならぬ理由がありそうなので仕方無い。

ギルモアは何かに気付いたようで、必死に頭を地面にこすり付けるように土下座した。

俺はそれを見ても何の感慨も無く、異世界でも土下座ってあるんだな、と思うだけだった。タバサみたいな年頃の女の子にあんなことをさせようとする輩にかける慈悲なんてものは俺の中には存在しない。

「あなたさまは、もしや政府のお役人ですか？それならば、どうかお見逃しくださいます！我らは義賊でございます。富める方々からほんの少しお金を頂戴し、それを貧しい人々に……。」

「そんなの大嘘なのね！エコーたちが言ってるのね！お前は、施しなんか一切してないのね！全部自分の懐に入れて、好き放題の生活をしていたのね！」

「当たり前だ！誰が貯めた金を配るようなまねをしようとしている！トマ！こいつらをやってしまえ！」

シルフィによつて一分と経たずに鍍金の剥げたギルモアは顔を歪め、ポケットから木製の棒を出した。ふむ、こちらに向けている先端に金属製の穴が開いていることから、拳銃かな？

小型だが、火打石式で、命中率はあまり良さそうにない。それでもこの地下道内では通用すると思っただらう。

やれやれ、実力差という単語を知らない馬鹿が多い。多少はそれが判っているトマは貧民を救っている、ということが嘘であったこと

もあり、辛そうだ。

それでもタバサに向かっていくのは、見上げた忠犬ぶりだが。俺は一秒以下でギルモアを秘拳で沈めると、タバサの戦いを見守った。

トマは投げナイフをフェイントに、さつきも使った煙幕を地面に叩きつける。なるほどね。メイジは同時に二つの魔法を使うことが出来ない。タバサが視界を確保するための魔法を使った瞬間、畳み掛けるつもりか。情報の収集を視覚に頼るメイジ相手には実に有効な手段だ。

俺は投擲するための片手剣を呼び出しながら、そう感心した。トマの戦法は合理的で無駄が無い。故に次にすることは、タバサを人質にとつて彼女とギルモアを交換することだろう。既にギルモアから鍵は没収しているので別段トマを放っておいてもいいのだが、それではタバサが納得するまい。

なら、トマが血迷ったときのために準備をしておかなくては。そう思っていると、タバサが煙の中に突っ込んだ。あっけにとられたまま見ていると、それは煙の向こうにいたトマも同じだったらしい。無防備なその鳩尾に、タバサの杖の先端がめり込む。

「呪文を唱えずに、杖を剣のようにお使いになるとは・・・、貴族の戦い方とは思えませぬな。」

「手品のコツは、見せている手が囷。あなたが教えてくれた。」
「なるほど、逆に魔法が誘い手でしたか・・・。」

トマが微笑んで崩れ落ち、それを見たタバサは悲しそうにしている。その瞬間俺は、奇妙な確信を得た。

宮殿から出た俺達は、シルフィに乗って学院へ戻っている。結局、あの後俺達は気絶した2人を他の客の私刑にかけさせないために、街外れの安宿の一室に放り込むと、その足で銀行に向かった。別段イザベラの命令書には今回の首謀者を捕らえよ、などとは書かれて

いなかったもので、そのあたりは自由裁量でいいだろう。報告するかどうかも含めて。

イザベラは報告を受けると、憎々しげに睨みつけ、「運がいいね。」
と言うだけだった。

彼女とタバサの間に何があったのかは判らないが、少し悲しくなっ

それがどんなものなのかは判らないが、タバサがこんな任務に赴かなければならない理由にも、イザベラみたいな女の子があんな顔を歪めてタバサを憎まなければならぬ理由にも。

「しかし、あいつら許せないのね！シルフィの遠い遠い、いやもう遠すぎるけど親戚みたいな仲間たちを使って酷いことするのね！あのギルモアって男、昔森で偶然あのエコーの子供を拾ったそうなのね。枯葉に化したエコーの子供を見て、その能力に気付いたと。

でもって、返してやるから言うこと聞け、なんつって、そのインチキをやらせていたらしいのね。」

シルフィの言葉を聞きながら、タバサはカードをいじっている。多分、今回自分でイカサマを見抜けなかったことを反省しているのだろう。彼女に落ち度は無かったと思うが、本人はそうは思わないようだ。

その思いつめた視線で何を考えているのか。それは、まだ俺が聞けることではないのだろう。

「ところで、お姉さま、あずかったお金はどうしたのね？百エキユ
ーくらいはあったのね。」

「返してきた。」

「ええ〜〜！信じられない！どれだけお肉が買えたと思ってるの
ね！きゅいー！」

「.....」

コイツは、なぜお金を肉基準で捉えているんだろう？

「まあ、その内俺が奢ってやるから、そう怒るな。」

「本当！そういえば約束してたのね！にく、おにく〜〜。」

シルフィが機嫌を直すと、タバサが甘やかしちや駄目、と言って再びテンションがただ下がりした。

トリスティンまでの距離はまだ長い。

タバサは眼前の風景を見ながら、何かを決意するようにその目の力を強めた。

俺は、それを見ながら、もしかしたら自分は、タバサの笑った顔を見たいのかもしれない、と思った。

あのとき、得た確信は、この娘が気になっていた理由だ。

この氷のような無表情を融かして、その奥にある花のような笑顔を。そんなことを考えている俺達を乗せて、シルフィは飛んでいく。

ローリーから兄的存在への回避。ロリコンは皆そう言っただよ！！（後書き）

なんか綺麗に纏めようとして全然纏まってませんね。自分の文才の無さが憎い！百合っぽいというご意見をいただきましたが、とりあえずナナシはタバサのことを子供扱いしているだけ・・・だと思いません。（遠い目）

あと、今回と前回のサブタイトルは世のタバサファンの皆様に喧嘩を売っているわけではありません。というか、私自身、ゼロ魔ヒロインの中ではタバサがイチ押しですし。

アレ？でもエヴァのレイやハルヒの長門も好きだから・・・もしかして無表情キャラ萌えな人なのか？私は！？

自分の新たな一面に少し呆然としつつ、また次回を宜しくおねがいします。さて、今日は二年仕事という名の大晦日の当直だ！。

愚者(ザ・フール)のスタンド(使い魔)、サイト。(前書き)

今回から二巻スタートですので、よろしくお願いします。
いや、風邪って意外と辛いですね。

愚者（ザ・フル）のスタンド（使い魔）、サイト。

早朝の学院にシルフィは降り立った。

その背から降り、タバサとシルフィに礼を言ってから、女子寮に戻る。まあ数日空けていたが、アイルーたちを残しておいたし、特に問題は無いだろう。ルイズが多少文句を言うかもしれないが、数時間もすればまたサイトが地雷踏みを発揮してくれるだろうし。

逆の意味でサイトに期待しつつ、ルイズの部屋がある階まで階段を上る。まだ起きていないだろうから、何食わぬ顔で寢床に入っているようか、と思案しながらドアノブに手を伸ばすと、中から声が響いた。

「・・・いいわね。あんた自分それをつけてなさい。あ、あああんたがご主人さまにしたことを考えれば、当然よね！！」

また何をやらかしたんだ、あいつは。こう、もう少し利口になれば、とサイトに要求するのは無理な話なんだろうか？

「わかった？わかったなら返事は！？」

「わん」

「そそそうよね。ごごごご、ご主人様のベッドに忍び込むような躰のなっていないバカ犬には、人間の言葉なんか必要ないわ！！・・・それじゃあ確認するわ。『はい』のときにはどうすんだっけ？」

「わん。」

「そうよね。『わん』が一回。『かしまりましたご主人様』は？」

「わんわん。」

「そうよね。『わん』が二回。『トイレに行きたいです』は？」

「わんわんわん。」

「そうよね。『わん』が三回。バカ犬はそれだけ言えば上等だから、余計なこと言ったら・・・わかってんでしょよね。」

「わん。」

緊急事態。緊急事態。

同室者が人間としての尊厳その他をごみ箱に捨てられて犬扱いされてます。しかも、さつきからチャリチャリ音がするから、喋っている内容からして、サイトは鎖か何かをつけられているのかもしれない。というかなんだこの朝っぱらから特殊なプレイ空間は？

サイトはルイズの暴力を恐れて従順になっているのだろうか、ルイズはルイズで我を忘れるほど頭にきているのか。

聞こえる限り、完全にサイトが原因のようだが、夜中にそんなことをしようとするほど体力が余ってるってことは、多分自主訓練で、手を抜いてやがったな？

とりあえず、後でチェックして、進歩が無いようだったらトレーニングメニューを増やそう。そう考えるが、現実逃避しても、状況は何も変わらない。確実にとばっちりを受けることになるだろうから、訓練メニューの追加は絶対するけど。

しかし、これからどうしよう？さすがにこの空気の中、入っていく自信は無い。

とりあえず、散策でもしていようか、と思い、逃げ出し・・・もとい転進した。

特別あてがあつたわけでもない俺は、とりあえず、厨房に挨拶に行った。マルトーのオツサンたちは久しぶりだな、どこに行っていたんだ、と言ってくれた。タバサとの約束があるので、本当のことは言えないため、少し旅行に行ってきた、と答える。

帰ってきたらこういうことを言われるのが普通だよな？とりあえずうちの主従がやっていたようなSとかMとかのプレイ空間に出くわすのは一般的ではあるまい。

少し早い朝飯をもらって、今朝はサイトは来れないかもしれないことを伝えてから、厨房を後にした。ルイズの性格上、鎖なんかをつけるまで怒ったのなら、まだ暫らく折檻が続くだろうし、自由時間など与えないだろう。

理由までは、サイトの些細な人権上の問題で（些細な、がどちらの言葉にかかるのかは、ご想像におまかせする。）言えないので、料

理人たちは少し不思議そうにしていたが、一応伝えておいた。
俺は腹が膨れたことで眠くなってきたので、取り合えずルイズのク
ラスが使用している教室で休むことにした。

騒音が聞こえる。

俺の眠りを覚ましたのは、優しい朝の日差しではなく、どこかで聞
いたことのある罵声と、どこかで聞いたことのある悲鳴。そして鞭
かなにかで（なんの、かは判らないが）肉を叩くような音だった。

「ンツ・・・？」

腕を枕にして机にうつ伏せていたので、その上に落ちた涎を拭いて
からその音がなんだったか見ると、教室の入り口の辺りに人ばかり
が出来ている。

どうやらその中から聞こえるらしい。

不思議と、その姿も見えていないのに、ああ、サイトがルイズに折
檻されているんだな。と確信した。しかし、ルイズもこんな人目が
ある場所でやらなくても。

さらに少し離れた場所では、金髪巻き毛の、ええと名前は知らない
が、ギーシュに二股をされてワインでシャンプーをして差し上げた
少女が、ハンカチを噛みながら、「不潔よ。汚らわしいわ。これだ
から男は・・・。」などと言っている。

なんだこの混沌とした風景は？

キュルケはサイト（あ、やっぱり鎖をつけられてる。しかも箒で作
った尻尾とか、ボロ布で作った耳とか、無駄に芸が細かいな。）を
心配そうに見ているが、本人はルイズの過激な”躰”という名の別の
なにか”で気絶している。

「し、しっけはここまで！」

「熱があるのはあなたじゃないの？ヴァリエール。」

ようやく周囲の視線に気付いたルイズが焦ってそう宣言するが、隣
でキュルケが冷静に突っ込んでいた。

ルイズはなにか言いたげにキュルケを睨んだが、俺としては彼女の言っていることは正論だと思うが。

結局何かを言う前に、教師が入ってきたので、その場はお開きになった。

ルイズが気絶したサイトを鎖で引っ張ってこちらにやってくる。ふむ。魔法使いというからにはひ弱なイメージが一般的かと思っていたが、少なくともそれはルイズには当てはまらないらしい。

距離が3メートルほどになった頃、ルイズが顔をあげ、俺に気付いた。すぐさま何かを言おうと口を開くが、俺が口元に人差し指を持つてきて”静かに”というジェスチャーをすると、授業中であったことを思い出し、サイトを放置して俺の隣の席にドスンと音がするくらい勢いをつけて座り込んだ。

不機嫌そうにこちらを見ているが、教師も私語をする生徒には厳しい評価をする（温厚そうなオバチャンでも、生徒の口に土の塊をねじ込むくらいのことをやるらしい。ましてやそれよりも厳しい教師など、言うまでも無い。）ようなので、何も言わない。

さて、教壇に立った教師は、たしか、風の系統を教えるギトーだったか。先日、フーケの一件のとき、他の誰よりも執拗に責任の所在を説明しようとした教師だ。名前を知っているのに授業内容を覚えていないので、多分実にならない内容の授業をする教師だろう。（俺は出席した場合、基本的に魔法の授業は興味深いので聞いているが、系統自慢のような聞いても意味の無い授業中は寝ているのだ。）本当のことを言えば、まだ多少の眠気があるので寝ていたいのだが、そうするとルイズからさらに怒りを買いきそうだ。

どうしたもんかな？

「では授業を始める。知つての通り、私の二つ名は『疾風』。疾風のギトーだ。」

教師がいつが、誰も何も言わない。他の教師のときはまだ小さなざわめきくらいはあるのだが、全くの無音だ。この教師は恐れられているのか、嫌われているのか。取り合えず生徒に慕われていないの

は確かか。

「最強の系統は知っているかね？ミス・ツエルプストー。」

「『虚無』じゃないんですか？」

「伝説の話をしているわけではない。現実的な答えを聞いているんだ。」

「『火』に決まっていますわ。ミス・ギトー。」

「ほほう。どうしてそう思うね？」

「すべてを燃やし尽くせるのは。炎と情熱。そうじゃございませんこと？」

「残念ながら、そうではない。試しに、この私にきみの得意な『火』の魔法をぶつけてきたまえ。」

なんか話が変わった方向になってきたな。この教師は経験の差とか位階（たしか、ラインとかトライアングルとかあるんだっけ？）の違いを考慮しないことを教育理念にしているのか？あとこれは睡眠不足のせいかもしれないが喋り方が一々気取っててなんかムカつく。

「どうしたね？きみは確か、『火』系統が得意なのではなかったかな？」

「火傷じゃすみませんわよ？」

「かまわん。本気でできたまえ。その、有名なツエルプストー家の赤毛が飾りではないのならね。」

ギトーの挑発にキュルケの顔から笑みが消え、彼女は胸元から杖を（なんでそんな所から？）と思ったのは俺だけじゃ無いはずだ。というか、それを見た瞬間にルイズの怒気が膨れ上がったような気がする。ルイズコワイ。）取り出すと、呪文の詠唱を始めた。

最初は小さな火球が現れ、詠唱が続くほどに、それは大きくなっていく。直径が一メートルを越えた頃、キュルケが杖を振ると、その火球は狙い変わらずギトーに向けて直進していく。

あんなものが直撃したら大火傷は免れないと思うんだが、ギトーは何を考えているんだ？そう思っていると、ギトーが杖を抜き、そのまま振り払う。突如風が巻き起こり、その延長線上にあった火球は

掻き消え、その勢いはキュルケにまで迫ろうとした、が一瞬で距離を詰めた俺が呼び出した盾で防いだ。

この程度の風、風翔龍に比べれば、玩具みたいなものだ。競り負けることも無い。

だが……。

「生徒にこんなことをして、何考えてやがる！このノータリン教師が！！」

『少し危ないですから、もうちょっと落ち着いた授業をお願いします、先生。』

……アレ？

俺が言った言葉に、何か言おうとしたギトーは口を開けたままぼかんとした表情で固まっている。

おかしいな？ちゃんとオブラートに包んだ表現をしたはずだが。

よく判らないまま後ろを向いて、キュルケに大丈夫か？と尋ねると、

「ありがとう。でも、あんなことを言って貴女こそ大丈夫？……

その、ノータリン教師なんて。」と言っている。

「やべっ、つい本音が！？」

どうやら睡眠不足によるイライラと状況認知能力の低下により、思っていたことを素直に言ってしまったようだ。その事に気付いたという意味の他意の無い一言だったが、しかしその一言が最終スイツチになっただけらしい。

ギトーは怒りのためか、顔を紅潮させぶるぶると震えていたが、俺を睨みながら口を開けた。

「……そこまで言うのなら、君が今度はかかって来たまえ。『風』は全てをなぎ払う。『火』も、『水』も、『土』も、そして試したことは無いが、おそらくは『虚無』さえも吹き飛ばす。それを身をもって体感させてあげよう。」

「あ、はははー。いや、つい口が滑ったというか、なんというか、まあそんなに本気で怒らないで下さいよ、先生。」

「おや、勢いが良いのは威勢だけかね？ふん、所詮平民などそんな

ものか。」

今回については俺が悪い部分もあるので、下手に出るが、その分、ギトーが調子に乗っている。

「君達も見てみたまえ。これが平民の平民たる所以、吠えるしか能が無いところだ。我々メイジとは何もかもが違う。媚びへつらうことでは生きていけないのに、その相手に時として噛み付こうとするところなど、実に理解に苦しむね。」

俺は笑顔を浮かべている。

「そもそも、私は平民などというものは、貴族に奉仕することだけをその人生の糧とするべきだと常々思っている。彼らは高貴さのなんたるかを、歴史のなんたるかを、そして支配する者のなんたるかをまるで理解しない。ならば、せめてその無意味な生に一欠けらでも意味を見出すというのなら、貴族の慈悲にすぎるべきだろう。」

俺は笑顔を浮かべている。

「由緒正しい貴族だけが通うことを許されるこの学院に平民などという異物が紛れ込んでいるという事実は実に嘆かわしい。だがそれでもせめて、我ら高貴なる者の視界に入らぬよう、彼らには努力する義務があるのだ。」

俺は笑顔を浮かべている。

「下等な者は下等な者同士で寄り集まっているのがお似合いだ。無理をして高貴な者に近付こうとしても、物笑いの種になるだけだ。・おつと失礼、君はミス・ヴァリエールの使い魔だったか。なら、ある意味お似合いと言えなくも……。」

俺は笑顔を浮かべている。

ギトーの背後の黒板と床に、六本の剣がほぼ同時に突き刺さった。正面にいたギトーも、周囲にいる他の生徒も、俺の背後で怒気に身を凍らせていたキュルケも、それを目で追えていなかった。

突き刺さった後、その轟音でようやくそれに気付く。

俺の投擲速度に反応できる者がいるとすれば、それは間違いなく人間以外だ。逆に言えば、人間には対応できない。

「えーと、何でしたっけ？『風』は全てを吹き飛ばす？残念ながら、俺は『土』は無理ですが、『火』と『水』と『風』の真似事なら出来ます。せつかくだからいつちよ教授しちゃくれませんかね。」俺は笑顔を浮かべたまま、全く笑っていない目でギターを見つめ、そう言った。

無駄無駄無駄アアアアアアツ！！そして時は（ある意味）止まる。（前書き）

風邪が少し酷くなってきました。

無駄無駄無駄アアアアツ！！そして時は（ある意味）止まる。

俺達は今、最初に俺とサイトが召喚されたときにいた草原にいる。周囲にはクラスの生徒たちと、そこから少し離れた場所にギトーがいる。

ギトーが”貴族に対する礼儀”という蛆虫の糞以下の戯言を口から吐いた後、これ以上教室を破壊するわけにもいかないので、多少普段よりも力を振るってもいい場所、ということどこにやってきた。最初は俺の『火』『水』『風』の系統っぽい攻撃をギトーの自称最強の風防御で防げるかを実験してやろうかと思っていたが、俺が剣を出した瞬間、その頃蘇生していたサイトや他の三人娘が必死に止めた。

こいつらはフーケ討伐のときにガノスの水プレスを見ているから、その危険性が判っているのだろう。

ギトーはいぶかしげに見ていたが、俺が直前に、「授業中に怪我人や人死にが出ても、それはあくまで不幸な事故ですよね？」と言質をとっていたのが聞こえていたのも不味かったか。

チツ・・・命拾いしたな。いや、別に殺す気はない。それに近いことをしたいだけだ。

処刑執行が知らないうちに免れていた教師は相変わらずこちらを見下したような視線を向けている。実に不愉快だ。

直接防御に当てるのが無しになったので今度はどうするのか？という、生徒の中で、土系統の数人に金属塊を作らせた。材質はばらつきがあるが、底面およそ1メートル四方、長さ4メートル程度の長方形が4個横に倒された状態で出来上がっている。

勝負方法は簡単。あの長方形にどれだけの深さの穴をつくることができるのか？というものだ。

因みに4つあるのは、ギトーが1回、俺は3回やって、一番貫通力の高い系統と比較するためだ。ま、意味無いだろうけど。

それに、俺の予定通りにいけば、一つは余るし。

俺はラビ（グラビモス亜種）の片手剣”炎神剣アグニ”を呼び出し、右手に持つと、ギトーの「始めたまえ。」の合図と共に一つ目の金属塊に向けて構えた。

剣先から、ラビの熱線が放出するイメージ。

左手のルーンがぼんやりとした光を放ち、同時に片手剣の赤熱する刀身が一際輝いた。

ラビと同じ、しかし刀身の大きさの関係か、小さな熱線が剣先から生まれ、金属塊の中央に吸い込まれていく。元々不純物が多かったためか、すぐに金属塊はとけだし、程なくして反対側まで突き抜けた。

突き抜けた熱線は草をあぶり、火をつけている。すぐさま、水系統の生徒が消火した。

次は双剣”対剣ヴォルトス”の水属性の方だけを構え、振り下ろす。貫くというよりは上から水で袈裟斬りにしたので、『火』のときよりも短時間、というか一瞬で終わる。完全に真つ二つになった金属塊は派手な音を立てて、その切断面を晒した。

最後の『風』はクーラ（クシャルダオラ）の片手剣”ミストラル・ダオラ”だ。それだけは小さく振って風を起こすと、それで終わった。

そのまま剣を左手で持ち、後ろで見ていたギトーの方を振り向くと、度肝を抜かれながらも、どこかこちらをあなどったような顔色をしている。

貴族っていう連中は、俺が撒いた餌に狙った通りに食いついてくれるが、今度は逆に簡単すぎて張り合いが無いな。

「ふむ、確かに『火』と『水』は中々の威力のようだ。だが、肝心の『風』が何も起こってはいないではないかね？」

ギトーが俺の予想した通りに予想した質問をした。さすがは『風』系統の最強を妄信するだけあり、他の系統はどうでもいいらしい。順当にいけばそれが今頃自分に向けられていたことには気付かない

のかね？

「何が、ですか？」

俺は落ち着いたまま、そう尋ねる。さあさあ後で恥になる発言をするがいい。

「見てみたまえ！君が風系統で攻撃すると言った的は傷一つついてはいない！なるほど、君の持っている剣は確かに風を操ることが出来るマジックアイテムなのだろう。だが、所詮はメイジの魔法を模倣しただけの品だ。本物のメイジの魔法には敵うはずもー」

俺はその台詞を聞きながら右手の指を打ち鳴らす。

まだ持ったままの片手剣からそよ風が吹き、さっき俺が攻撃した金属塊に当たる。途端に金属塊はバラバラと崩れ始め、数秒後には金属で作られたブロックの小山になった。

「さて、先生？本物のメイジの魔法が、何でしたっけ？少しど忘れしてしまっただけなので、教授してはくれませんか？」

俺が嫌味つたらしく言うと、ギトーは目を見開いて小山を見ながら口元は歯を食いしばって悔しそうにする、という中々器用なことをやっている。

けけけ。自分で言った言葉が自分に帰ってくるのは所謂、自業自得というやつですよ。まあそうなるように誘導したのは俺だけだ。

「ほら、どうぞどうぞ。遠慮なんかしないで下さいよ。『高貴なる者の何たるか』ってのを教えてやって下さい。あ、それとも最初の予定通り、ご自分の『風』で証明されますか？どちらでも構いませんが。」

俺が嫌味にしかなくなっていない敬語を使うと、ギトーは一層強く歯軋りをしながら俺を睨みつける。

破壊力という面では完全に負けていること、そして俺が馬鹿でも判る挑発をしていることから、自分が激昂して迂闊な言動をすることこそが俺が最も望むものだということが理解できるのだろう。

先ほどまでのギトーなら、二つ返事で了承しただろうが、現実を知った今は意外と冷静らしい。

ま、キレて魔法を使ってこようとしたり腕の一本も刺身にしてやるうかと思っただが、その様子も無い。

ギトーは黙って杖を振ると、浮かび上がり、学院に向かって浮遊した。どうやら恥の上塗りを避けることにしたのかもしれないが、いささか遅きに失したな。

「ギトー先生！ありがとうございます！」「風」系統は確かに戦闘向きですが、自分の言葉も守れない貴族が馬糞まぐそにも劣る存在価値皆無の屑だということを身をもって教えて下さって感謝しています！！！俺もそんな生きていくだけで惨めな思いをするような生き物にならないように気をつけることにします！！！！！！」

両手をメガホン代わりにそう叫ぶと、怒りで精神集中が途切れかけたのか、ギトーはふらふらと落下しかけた後、こちらを振り向いた。俺の視力で見たその顔はまるで般若のように怒りを浮かべている。

それでもその杖を俺に向けようとしなのは、実力差に裏づけされた明確な勝者と敗者の関係からか。それとも奴が未だに俺の攻撃の射程範囲内にいるからか。

ともかく、教師としての威厳を粉微塵に粉碎されたギトーは煤けた後ろ姿で去っていった。

生徒たちは俺に恐怖の視線を向ける者、薄笑いを浮かべてギトーの後ろ姿を見送る者、最初から全く興味が無い者、人死にが出なくて安心して居る者と反応は様々だが、その中には、ギトーを心配するような顔は含まれない。さすがは慕われていない教師。

その姿が学院の方に消えた頃、さて、授業も中断したしそろそろ帰るかね、と思っていると、今度は誰かがこちらに走ってくる。ロールした金髪長髪な、眼鏡の中年男性だ。姿からしてメイジであることは確かだが、あんな教師いたっけ？なんか、見たことがあるような気がするんだが、かなり違和感が……。

誰だ？と思っていると、その人物は段々近付いてきた。

あ、コツパ……じゃなくてコルベル教諭だ。何故か鬘を付けている。それも、彼の残り少ない黒髪とはまるで違う色の鬘を。

しかもかなり長い距離を走ってきたせいか、サイズが合っていないこともあって一歩ごとに鬘が跳ねている。

本人は荒い息をしていっばいっばいになっていっているせいか、まるでそれに気付いていない。が、生徒の中にもそれを見て笑いを堪えているものがある。

おい、サイト。そろそろその頬袋を萎めておけ。

俺の近くまで来ると、彼は膝に手をつけて荒い息をついている。

あ、頭を下げたせいで鬘が落ちた。俺は音速で視線をそらし、彼の名誉を守った。他の生徒たちもそれに倣っている。まだコルベール教諭の復旧にはかかりそうだ。

「ゆで卵？」

タバサの声がそんな空気のなか、声の大きさの割りに皆の耳に届いた。

途端に、生徒たちが爆笑の発作に見舞われる。

いや、確かに鬘を卵の殻に見立てれば、判らなくもないが。

俺は自分のわき腹をつねり、必死に笑いの衝動に耐えている。サイトとルイズは早々に衝動に負け、腹を抱えていた。気付いていないコルベール教諭はまだ苦しそうな顔。タバサは相変わらず無表情。

「滑りやすい？」

タバサの追撃で俺は轟沈した。息が口からジェットのように吹き出、横隔膜が俺の意思とは無関係に痙攣する。意味を成さない音、笑い声が口から出てきた。

それは一分ほど続き、終わる頃には俺の体力を大いに削っていた。発作がようやく収まったところ、まだ笑っている者もかなりいたが、地面に落ちた鬘と生徒たちが笑っていることの因果関係に気付いたコルベール教諭が、大声で怒鳴ると、それも治まった。

「黙りなさい！ええい！黙りなさいこのこわっぱどもが！大口を開けて下品に笑うとはまったく貴族にあるまじき行い！貴族はおかしいときは下を向いてこっさり笑うものですぞ！これでは王室に教育の成果が疑われる！」

怒ったせいで血圧が上がったためか、コルベール教諭の頭頂部は真っ赤だ。それはあたかも空に昇る太陽のごとく・・・あ、いかん。また笑いそうだ。

平常心！平常心！俺はやれば出来る子！

俺はなんとか笑いの発作を押さえ込むと（口元は多少歪んでいたが）、コルベール教諭の方を見る。

「えーおほん。皆さん、本日はトリスティン魔法学院にとって、よき日であります。始祖ブリミルの降臨祭に並ぶ、めでたい日であります。恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリスティンがハルキゲニアに誇る可憐な一輪の花、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニア訪問からお帰りに、この魔法学院に行幸なされます。」

生徒たちがざわめく。王族の一人が来るというのなら、それなりに珍しいイベントではあるのだろうが、この盛り上がりようからして、中々に人気もあるようだ。

「したがって、粗相があつてはいけません。急なことですが、今から全力を挙げて、歓迎式典の準備を行います。そのために本日の授業は中止。生徒諸君は正装し、門に整列すること。諸君が立派な貴族に成長したことを、姫殿下にお見せする絶好の機会ですぞ！御覚えがよろしくなるように、しっかりと杖を磨いておきなさい！よろしいですか！」

コルベール教諭は誇らしげに胸を張ってそう言うと、生徒たちを見回した。

その頭の上の鬘が、頭を反らしたせいでまたグラグラと揺れているのは、見なかったことにした。

新手の魔法使いが現れた！！（前書き）

加筆修正中です。

終了するまで多少前後の展開がおかしくなりますが、お許し下さい。

新手の魔法使いが現れた！！

「トリステイン国王女、アンリエッタ姫殿下のおなーーーーーりー
ーーーーッ！」

俺は今、整列した生徒の列に混じって、正門から入ってきた王女の馬車を見ている。

ム力つくギトーに散々恥をかかせたので、気分良く昼寝をしようと思つて女子寮に戻ろうとしたのだが、途中でサイトを引きずつたルイズにがっしりと腕をつかまれて拘束された。

因みにサイトは鎖をつけられたままだが、平然としている。意外と大物なのかもしれない。紙一重でバカの公算の方が高いが。

眠いのでさつきから欠伸びが出てくるのだが、露骨にそれをやるとルイズが睨んでくるので口のなかでかみころしている。

しかし、いいのかねえ？周囲が同じ制服を着た人間しかいないから、どうにも目立っているが。

キーリを1段階しよぼくしたような角付き白馬が引く馬車から出てきたのは、やせぎすの中年男性だった。格好からして、割と位の高い人物のようだが、しかし生徒たちは皆一様に鼻を鳴らして顔を歪めている。

何故だ？

続いて出てきたのは、華美な白いドレスを纏った、俺やルイズと同年代の美少女だ。美少女、あ、王女か。は笑顔を浮かべ、周囲の生徒たちに手を振っている。生徒達は歓声をあげた。隣の中年男性の時とはえらい違いだな。

そして俺も、王女には別の部分で感心していた。

おお、支配階級だけあつて中々堂に入った作り笑いだ。

普段はどうかは知らないが、とりあえず表面を取り繕うことはできるらしい。

元々、貴族が平民をどう思っていて、それを衆人環視のなか堂々と

話せるような国の王族であるので、まともな精神性は期待するだけ無駄だと思っていたが、意外と普通らしい。

穿った見方なのかもしれないが、これまでがこれまでだからなあ。たしかに生徒たちが騒ぐ通り、美人ではある。で、あるが、政治家にとっては自分の顔の造型など切れるカードの一枚にしか過ぎないだろうから、意味は無いのだろう。

俺が低い水準での発見をしている頃、サイトはと言えば、ルイズがうっとりとしているのを見て面白くなさそうにしている。

一応、好意があるのは判るが、コイツの場合、アプローチの仕方が犯罪行為スレスレ、というかアウトなので同情もしにくい。

キョロキョロとルイズとキュルケの間に視線をさまよわせているのは、顔の表情からして、2人の両天秤にしているのか。コイツは相変わらず清々しいまでに馬鹿だ。

多分、死んでも治らないだろう。

因みにキュルケもさつきから誰かを見てうっとりしている。

2人とも誰を見ているんだ？と思ひ、その視線の先を辿ると、1人の羽帽子をかぶったメイジがいた。

見栄えのする格好で、馬の代わりに鷲とライオンを混ぜ合わせたような格好の獣にまたがっている。

顔は髭を生やした精悍な美男子だし、この典型的な封建主義国家で王族の護衛を務める以上、メイジとしての実力も折り紙付きなのだろう。おまけにメイジである以上、貴族。つまり資産家である可能性も高い。

外見、地位、実力、資産。普通ステータスとなるべきもの全てが圧倒されている。

可哀想だが、今のサイトに勝ち目はあるまい。

俺は後ろにいるし、他の2人は相手をしてくれないから少し疎外感を感じたのか、サイトは今度はタバサに話しかけている。本を読んでいたタバサはしかし周囲のことをちゃんと認識していたようで、サイトを的確な言葉で形容した。

「三日天下。」

タバサがサイトを指差してそう言うと、サイトはついにつくりと力なく頂垂れた。

ま、頑張れ。色々。

王女の出迎えが終わり、生徒たちも部屋に帰って数時間が経ち、そろそろ寝ようかという時刻、我等がルイズの部屋では紙一重の馬鹿がまたアホをやらかしそうな雰囲気醸し出していた。

ルイズは出迎えに出席してからずっと上の空で最低限の反応しかない。今もベッドに腰掛けて枕を抱きしめているが、動かない視線の先にある壁を見ている、というよりはそれとは別のなにかを見ているようだ。

昼間の男前メイジを見てからこんな感じである。

意外とミィハーなどところもあつたんだな、と特に感慨もなくそう思った。周囲にいた生徒たちも、女子生徒は概ねあの男前メイジに熱い視線を注いでいたようだったし。

まあ、ルイズも思春期の女の子だということか。

それが判るからこそ、サイトは面白くないのだろう。

自分の持つていないものを全て持つている相手を手放して認められるほど、成熟できた精神性を要求するのは酷というものだろう。

判り易い嫉妬だが、俺としても地雷踏みの仲間入りをしたくないので、今のところは伝える気は無いが。

サイトはさっきから目の前で手を振ってみたり、髪を引っ張ってみたりしているが、ルイズはいつこうに反応しない。

多分、いつものルイズなら、今頃無礼を見咎め、股間を蹴り上げてサイトが悶絶したところに、鞭を取り出して本格的な折檻を始めただろう。目を閉じるだけでその描写が精密に予想できる。考えてみると、中々ハードなプレイが日常的に行われていることになる。

サイトのアホな行動も、そのあたりで鍛えられた耐久力があるせい

かもしれないな。

そうして2人を見ている俺はというと、ミヅハ【真】シリーズを装備して藁たばの近くにいます。2人よりも先に帰ってきたし、サイトもルイズも俺の姿が見えないのでまた何処かにいったら思っているのだろう。いや、ルイズはそもそも居ても居なくてもわからなそうだが。

ルイズの折檻が飛び火することを恐れてこんなことをしているのだが、この状態なら大丈夫か？いや、慎重に状況を観察しよう。サイトがアホをやったせいですぐさま復旧する可能性もあるし、まあそうならなくてもサイトに対して有効な脅し・・・じゃなかった、取引材料が手に入る。

血迷ってまた押し倒そうとしたらぶん殴って気絶させりゃいいか。サイトは何故か一礼すると、恭しくルイズのブラウスを脱がして、キャミソール姿にした。元の世界でこんなことをやったら、下手すりゃ訴訟ものだな。相変わらず俺の弟子はチャレンジャーだ。そこだけは確実に俺を越えてるよ。

「ルイズお嬢様。この使い魔の生まれた世界には、『おっぱい体操』という文化があります。こう揉むとですな、なんと、なんと、大きくなるのであります。一種の魔法だったりして。」

何をしても反応の無いルイズに、ヤケになったのか、サイトは正面から抱きつくと、背中の、多分肩甲骨のあたりを揉み始めた。なにがやりたいんだ？こいつは。

相手にされないからといってわざわざ自分から折檻されるようなことをするとは。本格的にMな人に目覚めたのかもしれない。だとしたら、多少付き合い方を考えるべきか？

うーん、それはそれとして、とりあえず画的にはアウトっぽいがまだギリセーフかな？

「あれ？ないですよ。ないでございますよ？ってこっちは背中ですみました！いやあ、ペったんこだったもので……。」
「うわぁ……。」

わざとらしく頭をかいてそう言うが、それに答えるものはいない。反応して欲しかったルイズは相変わらずだし、俺も何も言わない。というか、なんかサイトが可哀想になってきた。

すべる芸しか出来ない芸人をみたら、同じような感覚を得られるだろうか？多分、俺の今の顔は慈愛に満ちたものになっているだろう。肩をたたいて「お前はよくやった。」と言ってやりたい。

「俺は！俺ってやつは！どうしてこうなんだあー！」

自分の姿をようやく客観的に見ることが出来たのか、サイトはそう叫ぶと、床に額をガンガンぶつけ始めた。イタい事をしたときにする発作だろう。多分。

多少、覚えがあるのでよく判る。

おーい、元々馬鹿な頭が余計に馬鹿になるから、そのあたりにしておけよー。

しばらく頭が床にぶつけられる音が響いた後、ドアがノックされた。ルイズの部屋に来る人間といえば、キュルケか？しかしノックは規則的に2回、3回とされている。まるで、暗号かなにかのように。

「誰だろ？」

サイトは不思議そうにしているが、その音に反応したルイズの行動は素早かった。急いでブラウスを身につけると、立ち上がり、ドアを開けに行く。とりあえずブラウスを脱がされていたことは気にしていないらしい。

ごく自然にサイトは九死に一生を得た。本人は多分、気付いてないんだろうけど。

ドアの向こうにいたのは、着ているものや僅かに見える身体のラインからしておそらく少女だろう。すっばりと頭巾とマントを被って顔を隠しているため、判り易いくらいに不審者だが。

「・・・あなたは？」

ルイズが言うが、お前、判らないのに反応したのか？いつの間にかここまで外面を気にするようになったんだろ？

サイトの折檻は人前で余裕で出来るのになー。

少女は何も言わず、口元に人差し指を添えて”静かに”とジェスチャーをしている。そのまま杖をとりだして呪文を詠唱すると、光る粒子が部屋の中に充満した。

危険信号。

危険信号。

よく判らないが、既に先手を取られている。これは拙い。

「・・・ディテクトマジック？」

「そいつ！」

ルイズが何かを言っていたが、確認する暇も無いのでその横を抜け、一瞬で相手の背後に回りこむ。

そのまま、無防備な首筋に手刀の一撃を加えると、能力を解除した。理由はよく判らんが、こんな時間帯にいきなり部屋にやってきて魔法を使うのは普通じゃないだろうし。

「え？ナナシ？なんで？」

突然倒れた黒ローブを抱える形で現れた俺に、目を白黒させているルイズを放ったまま、アイルー5匹を解放。

女子寮の外に捨ててくるように指示した後、扉を開ける。

「あ」

そこには何故か何かを覗き込むように中腰になったギーシュがいた。何故女子寮にいるんだ？

しかもルイズの部屋の前に。

もしかしてルイズに乗り換えるつもりとか？だとしたら節操が無えな。

・・・まあいいか。

何かを言う前に拳骨を落として気絶させると、ついでに捨ててくるように指示し、扉を閉める。後には静寂だけが残った。

「・・・で？なんであんたは姿を消してたの？」

というわけにはいかないか。

ルイズはこめかみをピクピクと痙攣させると、乗馬鞭で手のひらを叩きながら言った。

拙いなあ。経験上、これは爆発する直前の動作だ。

「いや、またサイトがアホなことをしてたからとばっちりを受けたくなかったので。」

可愛想だが、コイツには俺が助かるための生贄になつてもらおう。サイトがギョツとした表情になっているが、俺は『君の犠牲は無駄にしない』とかアイコンタクトで送ってみる。全く伝わっていないのが残念だ。

現実とは時に非情なのだよ。

「へええ？何をしていたのかしら、サイト？」

くるりと首の向きを変え、サイトを見ながら言うルイズの声はいつも優しげですらあった。

しかしそれが表面上のことに過ぎないのは恐怖の表情を浮かべながら後退りするサイトが証明している。

「そう。ご主人様が聞いているのに喋ることもできないのね、この犬は。・・・じゃあ、ナナシ？アンタが言ってみなさい？」

「えーと、具体的にはー。ルイズの身体を触ったりー。胸のことを馬鹿にしたりー、してみましたー。」

「ここここここ、くおの馬アア鹿アアアイイイイイイ又ウウウウウウウウー!!!」

今ままで最大級の雷が落ちると、そこからは折檻スパーSMタイムの時間である。

ルイズはサイトを蹴り倒すと、頭をゲシゲシと踏みながら鞭で殴り始めた。

今回に限ってはサイトの完全な自業自得なので特別助ける気も無い。まあやり過ぎないように適当なところでとめるけど。

鎧を紋章に戻すと、サイトの悲鳴をBGMに藁たばの上に座り込む。明日はどうしようかと考えていると、微かに足音が聞こえてきた。後ろ手に片手剣を出すと、自然な動作でそれを隠し、いつでも投擲できるようにしておく。

因みにサイトとルイズはプレイ中なので気付いていない。仲のよろしいことで。

足音が徐々に近付き、ついに部屋の前まで来ると、ドアが開かれた。そこにいたのはさつきと同じ黒いローブを来た人物である。ただし、走ってきたせいか息は荒く、フードも半分ほどがずり落ちて顔が丸見えになっていた。

ん？

あれ？

この人、どっかで見たような気がするんだが……？

「姫殿下！」

ルイズがその闖入者を見た瞬間、床を使ってサイトの頭をサンドイツチにしていた足を下ろし、膝をつく。

ああ、成程。昼間見たお姫様だったのか。

……はい？

俺は不覚にも理解不能な現状に、ただ呆然と流されるだけだった。

話すのがいきなりなんだよ、アホリエッタ！（前書き）

予想はしてたけど凄く書きづらいですね。王女との会話。

話すのがいきなりなんだよ、アホリエッタ！

何故かルイズの部屋にやって来た王女は、ルイズの幼馴染だったよ
うで、今、旧交を温めている。警備の問題とかはいいのか？

あと、そういうノリなのかもしれないが、2人共妙に話す言葉が芝
居がかつていて、聞かされる方としては、正直、ちよつとウザい。
サイトは話に入っていていけないので、ほとんど空気になっていた。多
少不憫だとは思うが、さつきまでやっていたことを考えれば、忘れ
てもらえてむしろ幸運なのかもしれないな。さて、明日の訓練の時
間にも俺が見ていたことを教えて、とりあえず一日奴隷・・・も
とい訓練をサボっていた御仕置きでもしようか。

サイトの為に素敵な未来日記をつけていると、話題が王女の結婚に
移った。しかし、あまり幸せそうには見えない。さつき、ルイズに
自由がどうか言っていたから、大方政略結婚なのだろう。まあ、
生まれつき衣食住を保障されている代わりに、こういった義務が発
生するのは持てる者の義務ノクレス・オブリージュだ。でなければ、民衆は一方的に搾取
るだけの王族など認めないに違いない。

貴族がどれだけいるのかは知らないが、メイジがそれ以外の人間よ
り多い、ということは無いだらう。数というのは大抵は他に勝る力
になる。

そして、魔法という暴力による恐怖支配は、短期的にはともかく、
長期的な支配には全く向かない。民を省みることの無い支配は、間
違いなく形を変えてその支配者本人に帰ってくる。それが支配する
べき民が失われることか、反逆者を育てることかは知らないが。

「あら、ごめんなさい。もしかして、お邪魔だったかしら？」

「お邪魔？ どうして？」

「だって、そのの彼、貴方の恋人なのでしょう？ いやだわ。わたく
しったら、つい懐かしさにかまけて、とんだ粗相をいたしてしまっ
たみたいね。」

王女が今頃サイトに気付き、それがルイズの部屋にいることを考え、男女が一緒の部屋＋時間帯は夜＝恋人同士の語らい、と判断したよ
うだ。

「はい？恋人？あの生き物が？」

「生き物っていうな」

「姫様！あれはただの使い魔です！恋人なんて冗談じゃないわ！」
王女の発想も判らんでもないが、ルイズがサイトを無視して全否定
すると、少し傷ついたような顔をしている。ま、事実なんだし、仕
方無いだろ。王女に一礼した後、壁に手をつけて沈んだ顔をしてい
るのを見ると、哀れにはなっってくるが。

王女は久しぶりに会った幼馴染が人間を使い魔にしていたというこ
とに少なからず驚いているようだ。しかし、心配してください、と
言わんばかりにこれ見よがしのため息をつくのはどういうわけだ？
そんなことをすると、またルイズが……。

「姫様、どうなさったんですか？」

「いえ、なんでもないわ。ごめんなさいね……、いやだわ、自分
が恥ずかしいわ。あなたに話せるようなことじゃないのに……、
わたくしつてば……。」

「おっしゃってください。あんなに明るかった姫様が、そんな風
のため息をつくってことは、なにかとんでもないお悩みがおりなん
でしよう？」

「やっぱり。あんな態度じゃ、ルイズの性格ならそう言うわな。この
王女は狙ってやってんのかな？また厄介ごとの匂いがするんだが。
杞憂であって欲しいが……。多分、この流れだと無理かな。」

「……いえ、話せません。悩みがあると言ったことは忘れてちよ
うだい。ルイズ。」

「いけません！昔はなんでも話し合ってたじゃございませんか！わた
しをおともだちと呼んでくださったのは姫様です。そのお友達に、
悩みを話せないのですか？」

「わたくしをお友達と呼んでくれるのね、ルイズ・フランソワーズ。」

とても嬉しいわ。・・・これから話すことは、誰にも話してはいけません。」

いや、あんたも話すのかよ！警備上の問題があることを平然としたり、子供のころの友達だからって今他言無用の秘密を明かそうしたり、この国は、突っ込みどころを多く持つのが国是なのか？

「席、外そうか？」

「いや、メイジにとって使い魔は一心同体。席を外す理由がありません。」

サイトが気を利かせようとしますが、アホ王女は一言で台無しにした。俺も席を外したいんだが、駄目だろうか？

それから王女が語りだした話は、ある意味俺の予想を斜め上で上回っていた。

王女が嫁ぐ先は、ゲルマニア（キュルケの母国だっけ。因みにそれを聞いた瞬間、ルイズは声を荒げて相手の国を非難した。王女さん、あんたも相手が嫌なのは判るが多少はたしなめるくらいしとけよ。）の皇帝で、それは同盟を結ぶためには必要なこと。そして同盟とは今アルビオンという国で起きている内乱が反乱軍の勝利を収めた場合、侵攻してくる反乱軍に対しての防備として必須であること。そして、その公算はかなり高いこと。

そんなことを一個人でしかないルイズに言っただけでもりなんだ？と思っていると、その答えはほどなくして王女の口から明かされた。

「・・・したがって、わたくしの婚姻を妨げるための材料を、血眼になつて探しています。」

「もし、そのようなものが見つかったら・・・で、もしかして、姫様の婚姻を妨げるような材料が？」

「おお、始祖ブリミルよ・・・この不幸な姫をお救いください・・・」

王女はそう言うと言わんとウザッたい仕草で床に崩れ落ちた。王族やめて役者にでもなれ。

始祖ナントカは飯の前のお祈りで言っていたような気がするが、取り合えずこの王女が不幸なのは自分の頭の悪さだろう。それが、うちのご主人様のいきすぎ忠誠心か？

「言つて！姫様！いつたい、姫様のご婚姻を妨げる材料つてなんなのですか？」

「・・・わたくしが以前したためた一通の手紙なのです。」
「手紙？」

「そうです。それがアルビオンの貴族の手に渡つたら・・・、彼らはすぐにゲルマニアの皇室にそれを届けるでしょう。」

「どんな内容の手紙なんですか？」

「・・・それはいえません。でも、それを読んだら、ゲルマニアの皇室は・・・、この私を赦さないでしょう。ああ、婚姻は潰れ、トリステインとの同盟は反故。となると、トリステインは一国にてあの強力なアルビオンに立ち向かわなければならぬでしょうね。」

「うへえー。この話の流れだと・・・あ、予想通りルイズが聞いてその手紙がアルビオンにあることをあっさりと答えた。なるほどねー。つまりルイズにその手紙をとって来いと言っているわけだ。しかも、ルイズにお願いするのではなく、自分から行くようにしむけて。」

現代人の感覚だとよく判らないのか、サイトは露骨に理解出来ない顔でふんふんと頷いているが、コイツはコイツで大丈夫か？

王女の話は言ってみれば、疎遠になっていた幼馴染が久しぶりに会ったらいきなり国の運営に関わることを話し始め、次には中東の紛争地帯に相手のミスで出来た有るか無いかよく判らないものを探しにいけ、と言っているようなものか。ついでに俺とサイトは將軍様のお国に拉致されてきた人かな。丁度拒否権は無かつたし。

そのことが可能かどうかというよりは、笑顔で肩を叩きながら病院に行け、と言いたい。

しかしルイズはそうは思わなかつたようで、王女の境遇に大いに同情している。これだと、行くことになりそうだな。はー。なんでよく知りもしない他人のために命の危険のある場所にいかなきゃなら

ないだろう。

ルイズは渋る演技をする王女にフーケを捕らえた功績を前面に押し出しているが、言いたくは無いがお前つてあのとき一番役立たずじやなかったっけ？

サイトは使い魔という身分を盾に連れて行かれることが既に決定しているようだ。多分、名前が拳がらないが、俺もなんだろう。

「アルビオンに赴きウェールズ王子を捜して、手紙を取り戻してくればよいのですね？ 姫様。」

「ええ。その通りです。『土くれ』のフーケを捕まえた貴方達なら、きつとこの困難な任務をやり遂げてくれると思います。」

簡単に言っているが、この2人は自分の言っていることがどれだけ難しいことなのか全く判っていないな。そもそも現時点でそのウェールズ王子とやらが死んでいる可能性だってあるんじゃないのか？ 王室派は劣勢なんだろう？ そこにこのこと他国の貴族が行ったりしたら捕縛されるだけだ。

だがそんな俺の常識的意見は聞こえないため、明日の朝には出発することになっている。このままずっと消えていようかな！

それから王女はサイトと二、三話すと手の甲を差し出した。多分、物語のお姫様が騎士にするようにそこにキスをさせるつもりだろう。されているサイトは全く判っていない様子だが。

「いけません！ 姫様！ そんな、使い魔にお手を許すなんて！」

「いいですよ。この方はわたくしのために働いてくださるのです。忠誠には、報いるところがなければなりません。」

「はぁ……。」

「お手を許すつて、お手？ 犬がするヤツ？ そこまで犬扱い？」

サイトは勘違いでまた落ち込んでいるが、しかし客観的に考えるとこの王女は手の甲に口付けを許すだけで初めて会った相手に命を張つてこい、と言っているのだ。なかなかのタマだな。

「違うわよ。もう、これだから犬は……、犬平民はなんも知らないんだから。お手を許すつてことは、キスしてもいいつてことよ。」

砕けた言い方をするならね。」

「そんな、豪気な……。」

そう言うと、サイトは王女の顔を見た。そこにあるのは俺が感心した、作り笑いだ。

しかしサイトは自身の持つ『基本的にあホ』のスキルを遺憾なく発揮し、王女が自分を好きになった、と勘違いしているようだ。大方ルイズの言葉で普通にキスしていいのだと思っっているのだろう。次にルイズに笑いかけるが、鼻を鳴らして顔を背けているから、どうせやきもちでもやいていると思っっているに違いない。清々しいまでに馬鹿だ。

「え？むぐ……。」

案の定、サイトは王女の手を取り、引き寄せると狙い違わずその唇に自分のそれを重ねた。俺は笑い出さないようにするので必死だ。

口付けが終わると、王女は例のウザツたい仕草でベッドの上に倒れこみ、白目をむいて気絶した。

「気絶？ど、どうして？」

「姫殿下になにしてんのよッ！いいいいいい、犬……ッ！」

「わん？」

激昂したルイズと状況が判らないサイトで乱闘になった。まあ、ルイズの言い方も良くなかったし、サイトも自分の感覚で物事を考えすぎだと思っがね。

とりあえず明日は早起きかなー。

話すのがいきなりなんだよ、アホリエッタ！（後書き）

山場ゼロのまま続きますー。

ギーシュ・ド・グラモン！貴様！見ているな！！（前書き）

王女の依頼がようやく終わりです。

ギーシュ・ド・グラモン！貴様！見ているな！！

「も、申し訳ありません！使い魔の不始末は、わたしの不始末です！つていうかあんたもほら！謝りなさいよ！」

「すいません。でも、キスしていいって言っから。」

サイトが自分の駄目スキルを發揮した後、ルイズはやたらと高いプライドを抑えて、ひたすら謝っている。サイトはその必死の表情に気圧されるかたちで頭を下げた。

今のは下手なくても罪にはなるだろうし、ルイズもそれが判るからこそ、今にも土下座しそうな勢いで謝っているのだろう。

こんな裁判というシステムがあるのかどうかも判らない中世の世界で王族にちよっかいを出したりすれば、良くて長期の懲役刑、悪ければ即刻死刑といったところか。

しかし、そこまで心配することも無いと思うが。王女もルイズに頼み事をしに来たということは、他に頼る相手もないのだろうし。無体なことは言わんだろう。言われても俺が助ければなんとかなるだろうし。

「唇にするやつがどこにいんのよッ！」

「コッ。」

「忘れてた。誰があんたに人間の言葉を許可したの？わんだろコラ。犬。ねえ、わんって言え。ほら、犬この。バカ犬。」

サイトの返答に瞬間湯沸かし機と化したルイズはぶん殴って沈めると、その頭をグリグリと踏みつける、という上級者向けのプレイを開始した。しかしルイズは全身のバネを上手く使ってるな。平均的とはいえ男子高校生を一撃で倒すとは。

「い、いいのです。忠誠には報いるところがなければなりませんから。」

王女は青い顔でそう言った。必死に平静を装っているようだが、声が震えている。

そのとき、突然ドアが開くと、金髪の少年が入ってきた。その男子生徒はやたらと激昂して手に持った造花を振り回している。あ、ギーシュだ。でもなんでコイツが？

「きさまーッ！姫殿下にーッ！なにをしているかーッ！」

「なんだお前。」

「ギーシュ！あんた！立ち聞きしてたの？今の話を！」

サイトは平然とルイズに踏まれながらギーシュに聞いているが、ルイズは動揺しているのか倒置法を使っている。というか、サイトは自分の状況の方にこそ疑問を向けるべきだと思うが。

「薔薇のように見目麗しい姫様のあとをつけてきてみればこんな所へ……、それでドアの鍵穴からまるで盗賊のように様子をうかがえば……、平民のバカがキス……、決闘だ！バカチンがあああああ！」

サイトは素早く起き上がると、ギーシュが何か言う前にど突きまくった。男が相手だと全く躊躇が無いな。ある意味判りやすいやつだ。「決闘だあ？ボケが！テメエはこの場じゃ発言権なんてねえんだよ！……で、どうします？こいつ、お姫様の話を立ち聞きしやがりましたけど。とりあえず縛り首にしますか？」

実際、首を締め上げながら言うサイトは、自分より立場の弱い相手にはかなり強いという駄目人間っぷりを披露している。ルイズから受けている折檻のストレスをぶつけているのだらう。あ、俺の訓練でのストレスもか。

「そうね……、今の話を聞かれたのは、まずいわね……。」

「姫殿下！その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せつけますよう。」

「え、あなたが？」

「お前は寝てる。」

どうにか拘束を振り切ったギーシュだったがサイトの容赦のない足ひっかけで再び床にキスする羽目になった。

「僕も仲間に入れてくれ！」

「どうしてだよ？」

「姫殿下のお役に立ちたいのです……。」

「お前、もしかして惚れやがったな？お姫様に！」

「失礼なことを言うんじゃない。僕は、ただただ、姫殿下のお役に立ちたいだけだ。」

「お前、彼女がいただろうが。なんだっけ？あの、モンモンだから……。」

「モンモランシーだ。」

「どうしたんだよ？」

「……。」

「お前、フラれたな？さては、完璧にフラれやがったな？」

「う、うるさい！きみの所為だぞ！」

やっぱりギーシュはあの一件でフラれたか。そういえば今朝のモンモンも変だったから案外引きずってるのかね？ま、サイトの言葉を否定しながらも王女を見て頬を染めているコイツには脈はなさそうだな。

目移りするのも結構だが、その軟派さが前回の騒動の原因であることを多少は自覚してもらいたいな。

「グラモン？あの、グラモン元帥の？」

「息子でございます。姫殿下。」

「あなたも、わたくしの力になってくれるというの？」

「任務の一員に加えてくださるなら、これはもう、望外の幸せにございます。」

俺が心配していることが一つある。醜聞を気にしてその回収を命令するにしても、王女は何故ルイズを頼ったのか？ということだ。王族である以上、使える部下など多々いるだろう。それを子供の頃の友人に任せるなど、正気の沙汰ではない。しかも、さっきから王女は本人たちが自発的に行くように誘導しているようにも見える。自分か命じた記録に残らないようにするかのようには、では、これらの事柄が何を示すかというと、最悪の可能性としては、任務に失敗

した場合の生け贄ではないだろうか？というものがある。ゲルマニアに対しては、それを解決しようとして犠牲を払ったことで誠意を、ルイズやギーシュの親に対しては、自発的な行為ということでも文句をつけられる心配もない。そもそも王女は命令したのではなく、ルイズたちが自分から勝手に売り込んだのだから。

おお、こう考えると、中々怖い可能性があるんだな。しかし、冷静に考えるとそんな感じだし……。

「ありがとう。お父様も立派で勇敢な貴族ですが、あなたもその血を受け継いでいるようね。ではお願いしますわ。この不幸な姫をお助けください、ギーシュさん」

「姫殿下が僕の名前を呼んでくださった！姫殿下が！トリスティンの可憐な花、薔薇の微笑みの君がこの僕に微笑んでくださった！」
でも、今何故か気絶したギーシュやさっきの様子で妙に忠誠心が高いことがわかってるルイズは言っても無駄っぽいな。

とりあえずコイツらは悪いやつじゃないんだが、放っておくと、自分から墓穴に突撃していきかねない。

「では、明日の朝、アルビオンに向かって出発するいたします。」

「ウェールズ皇太子は、アルビオンのニューカッスル付近に陣を構えていると聞き及びまします。」

「了解しました。以前、姉たちとアルビオンを旅したことがございますゆえ、地理には明るいかと存じます。」

「旅は危険に満ちています。アルビオンの貴族たちは、あなたがたの目的を知ったら、ありとあらゆる手を使って妨害しようとするでしょう。」

「ならなんで自称”おともだち”をそこに行かせようとするんですかねー？友情や忠誠に殺意をもって応えるのがこの国の慣わしなのか？王女は俺の疑問が聞こえるはずもなく、羊皮紙に手紙をしたためると、最後に蠟でそれを止め、何かの証印をその上に押した。」

最後の一文を書き加えるときに頬を染めながら「自分勝手な姫をお許してください。」だとか「自分の気持ちに嘘をつくことは出来ない

のです。」とか別の意味で不穏な言葉を呟いているので、もしかしなくても、俺の心配は杞憂だろうか？今度は違う心配事が出来てきたので、あまり俺の心労は変化が無いが。

というのも、さっきの心配事で最悪なのはルイズたちが生け贄である場合だが、次点で王女がまともではない、というものはあるからだ。ここでいうまともとは、頭がイカれている、というのではなく、政治家として、という意味だ。国や民の利益よりも自分の我が儘を優先するような人間がトップに居座る国がまともであるはずもない。平時ならそれでもいいのかもしれないが、今は残念ながら非常時だ。だとすれば、文字が読めない俺でも王女が最後に何を書いたかは予想がつく。

あー、俺たちは下手すりゃこの国を戦火に巻き込む手伝いをしに行くのか。

「ウエールズ皇太子にお会いしたら、この手紙を渡してください。すぐに件の手紙を返してくれるでしょう。母君から頂いた『水のルビー』です。せめてものお守りです。お金が心配なら、売り払って旅の資金にあててください。」

王女は自分のはめていた青い宝石のついた指輪を引き抜くと、ルイズに手渡した。さすがファンタジーの世界。ルビーも赤とは限らないのか。

「この任務にはトリステインの未来がかかっています。母君の指輪が、アルビオンに吹く猛き風から、あなたがたを守りますように。」
たしかにこの国の命運を左右する手紙のようだ。相手の皇太子が道理の判っている人ならいいが。

出方次第ではその相手を誰にもバレないように暗殺することも覚悟しておいた方が良さのかもしれない。俺の常識ではたかが2人の人間の恋愛ごっこのために一つの国が戦争に巻き込まれるのは異常事態だし。

それとも、自分が惚れた相手のためなら俺も似たようなことをするんだろうか？

今のところ、判らなげど。

ギーシュ・ド・グラモン！貴様！見ているな！！（後書き）

王女の話は勘繰ろうとすると、こうなるのでは？というのを考えてみました。そしてウェールズ死亡フラグが二つに。

震えるぞハート！燃え尽きるほど嫉妬！！（前書き）

風邪は治ったっぽいんですが、咳や痰がまだ出るのが鬱陶しいですね。そして子爵様登場です。

震えるぞハート！燃え尽きるほど嫉妬！！

翌日の早朝、ギーシュを加えた俺達主従は、学院の中庭に集まっていた。

当初、ギーシュは馬で行くことを考えていたらしいが、俺がいる以上、それは必要ない。どれくらいの距離があるのかは判らないが、とりあえず乗りなれない馬に長時間無理をして乗るよりは快適だろう。

レウを出して待っていると、やってきたギーシュは多少驚いていた。ギーシュにはレウに乗っていくことを伝え、その途中、魔法で風除けをしてもらうことを頼むと、快諾した。

因みに俺は昨夜、王女が退室した後、何食わぬ顔で部屋の外から入ってきたように見せかけ、鎧を脱いでから部屋の中に戻った。さすがにルイズは任務のことで頭がいっぱいになっているようだったので、俺が無断で行方不明になっていたことは有耶無耶になったが、あまり嬉しくはない。

それ以外に手段が無いってんならともかく、若いうちから鉄火場に近付くのはどうかと思うが。

ま、既に決定していることだし、ルイズは俺が止めても一人で行こうとするだろう。なら、墓穴を掘るにしても俺が状況を確認できる範囲でやってもらえば、助けようもある。

「お願いがあるんだが・・・。」

「あんだよ。」

「僕の使い魔を連れて行きたいんだ。」

「使い魔なんかいたのか？」

「いるさ。当たり前だろ？」

まあ、ルイズと同じクラスということはあの召喚の授業にも出ていただろうから、使い魔と契約しているのは間違いないだろう。使い魔の召喚や契約はスムーズに出来るのが一般的らしいし。

「別段構わないが、モノによるぞ？で、どこにいるんだ？」

「うん」

「いないじゃないの。」

ルイズとサイトが見回すが、確かにギーシュが指差した場所には地面があるだけで生き物の姿は無い。もしかして見えない使い魔なのか？それとも地面の下にいたりとか・・・。

はたして、ギーシュが地面を合図するように蹴ると、地面が盛り上がり、そこから巨大なモグラが現れた。サイトとルイズは多少驚いているようだが、これよりももっと派手な、それこそ噴出とでもいうべき勢いで地面から出てくる角竜や一角竜と渡り合っていた俺には多少迫力が足りない。

「ヴェルダンデ！ああ！僕の可愛いヴェルダンデ！」

ギーシュはそのモグラを抱擁し、頬ずりまでして可愛がっている。

あー、コイツも美形なんだが、どうにも3枚目なんだよな。アホなところもそうだが、今使い魔に抱きついているせいで体中が泥だらけになっているし。

「でかいモグラだな。」

「お前って、実は言うほどモテないだろ？」

俺が無難に感想を言った傍でサイトは呆れたように言っている。自分以外のことについては意外と勘の働くヤツだ。

「そのモグラってずっと地面の中にいなきゃいけないわけじゃないんだろ？」

「そうだ。勿論、居心地のいいのは地面の中だけど、なに、大丈夫だね、ヴェルダンデ？」

「なら、一緒にレウに乗っていけばいい。ギーシュが風除けするから、そうきつくはないだろうし。」

モグラについては問題無く決まったが、しかし当のモグラは話を聞いておらず、鼻をひくつかせると、ルイズににじり寄った。どうしたんだろ？と思っていると、そのままルイズを押し倒す。

押し倒されたルイズはもう色んなところを豪快に見せながら、抵抗

している。何故が始まったまないたシヨ（注：ルイズの身体の一部とは特に関係は無い）に、サイトとギーシュは助けもせず、傍観している。

「いやあ、巨大モグラと戯れる美少女つてのは、ある意味官能的だな。」

「そのとおりだな。」

実に頭の悪い会話をしている2人は、腕を組んで頷きあっている。俺はといえば、聞こえないフリをしてレウの頭を撫でていた。ルイズが悲鳴を上げているような気がするが、残念だ。今の俺にはレウのご機嫌をとるというじつに重要な任務があるのだから。

レウ、怒る、ない。いい子。

「その通りだレウ。けど人は時として嘘をつくことが必要になることがあるんだよ。」

俺が道理の判った大人の意見を言うと、レウはよく判らなかつたのか、首をかしげた。

モグラはルイズと格闘していたが、ついにルイズの右手の指にはめられた『水のルビー』を見つけると、そこに鼻先を寄せた。

「この！無礼なモグラね！姫様にいただいた指輪に鼻をくっつけないで！」

「なるほど、指輪か。ヴェルダンデは宝石が大好きだからね。」

「モグラなのにカラスみたいな習性でもあるのか？」

「イヤなモグラだな。」

「イヤとか言わないでくれたまえ。ヴェルダンデは貴重な鉾石や寶石を僕のために見つけてきてくれるんだ。『土』系統のメイジの僕にとって、この上も無い、貴重な協力者さ。」

見た目は毛むくじゃらなでかいボールに手足と顔をくっつけたようないでたちだが、中々溺愛しているらしい。まあ、今の姿からは想像がしにくいが優秀ではあるらしいな。ルイズの言っていた使い魔の仕事の3番目、”使い魔はその力で主人を守る”は微妙そうだが、それ以外については有能なのだろう。

そう考えていると、ルイズと未だに格闘を続けていたモグラを突然噴いてきた風が吹っ飛ばした！

敵襲か？いや、それにしては……。

その風が吹いてきた方向からやってきたのは、昨日王女の護衛をしていた羽帽子のメイジだった。

「貴様、僕のヴェルダンデになにをするんだ！」

「待て、今のは……。」

俺が静止を呼びかけるがギーシュは使い魔に手を出されたことで激怒している。いや、あれはモグラに攻撃した、というよりはルイズを助けたように見えたが。

ギーシュが怒りに任せて造花を振り廻すが、相手が素早く引き抜いた杖の先から再び風が通り、それを吹き飛ばした。なんか西部劇の早撃ちみたいだな。そう、場違いにも思ってしまった。

「ぼくは敵じゃない。姫殿下より、きみたちに同行することを命じられてね。きみたちだけではやはり心もとないらしい。しかし、お忍びの任務であるゆえ、一部隊つけるわけにもいかぬ。そこでぼくが指名されたってワケだ。」

メイジはそう言うのと、帽子をとって一礼した。昨日の王女やルイズのように芝居がかっているのではなく、しかし優雅な動作は、洗練されている、とでも言うのだろうか。顔も男前だし、さぞかしモテるんだろう。なんだか男として（ここ強調）激しく劣等感を感じる。ともすれば軟弱にも見えかねないトマ（いや、あいつも腕っ節はそれなりだったが。）のようなタイプとも違う力強さを兼ね備えた顔つきだ。

「女王陛下の魔法騎士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ。……すまない。婚約者が、モグラに襲われているのを見て見ぬ振りは出来なくてね。」

ふむ。今言った言葉にも多少疑問はあるが、それは置いておいてルイズの婚約者だって？少し年が離れていないか？いや、貴族同士の婚約なんてそんなモンか？

それより……。あ、案の定サイトが愕然としている。

まあ、好意をよせる相手にはあらゆる面で自分より上の立派な婚約者がいました、じゃショックを受けるわな。

「ワルドさま……」

「久しぶりだな！ルイズ！ぼくのルイズ！」

「お久しぶりでございます。」

「相変わらず軽いなきみは！まるで羽のようだね！」

「……お恥ずかしいですわ。」

ワルドはルイズに駆け寄ると、その身体を抱えあげた。おー、あんなことを言われながらされても、ルイズが怒らないどころか照れている。珍しい、というよりはサイトではまず無理な光景だ。こんなところでも差を見せ付けられて、サイトは既に不貞腐れている。

「彼らを、紹介してくれたまえ。」

「あ、あの……、ギーシュ・ド・グラモンと、使い魔のサイトとナナシです。」

地面に降りると、一人ずつ指差してルイズは紹介した。ギーシュとサイトと俺は、一礼する。

「君達がルイズの使い魔かい？人とは思わなかったな。ぼくの婚約者がお世話になっているよ。」

「そりゃどうも。」

「まー下着の洗濯から夜寝るときのお供まで色々ね。」

お供をしているのはアイルーたちだが、嘘ではあるまい。ルイズはワルドの手前、俺に罵声を浴びせることも出来ずにこっちを睨んでいる。

こいつは俺が今回の件で怒っていないとでも思ってたのかね？自衛のためならともかく事後承諾で死ぬような目にあって来い、などと言われたら多少言動にトゲが出るくらいは普通だろう。

サイトはワルドを見てため息をついている。大方全ての面で自分よりも勝っている（相手にされているかどうかはともかく）恋敵を間近で見て、その差を再確認させられた、といったところか。

「どうした？もしかして、アルビオンに行くのが怖いのかい？なかに！何も怖いことなんかあるもんか。君たちはあの『土くれ』のフーケを捕まえたんだらう？その勇気があれば、なんだってできるさ！」

ワルドはそう言って豪快に笑っている。性格も悪くはないらしい。サイトはさらに落ち込んでいた。忙しいヤツだ。

ワルドが口笛を吹くと、昨日の凱旋で乗っていた獣（グリフォンという幻獣らしい）が飛んで来た。ワルドの使い魔か？

「おいで、ルイズ。」

その背に跨ったワルドはルイズを優しい声で手招きした。なんていうかこう、行動全てが様になっていくことが逆にそれを出来ないヤツにとっては嫌味だな。

完全無欠のモテ男がなにをしたわけでも無いのに非モテに恨まれるようなものだ。

実際、サイトの顔もそんな感じに百面相をしてるし。

ルイズが恥ずかしがっていると、ワルドに抱き上げられてグリフォンに跨ったことも無関係ではないだろう。

俺はワルドとルイズの方を凝視したままのサイトの首根っこを掴むと、レウの傍まで引きずっていき、背中の上に放り投げた。その後、ギーシュと俺が背に乗り、出発準備が完了する。

「では諸君！出発だ！」

ワルドが杖を掲げて号令を下すと、グリフォンとレウは空へと舞い上がった。

どいてろ、お前は最初から舐められムードだ。(前書き)

今回は多少グロい表現があります。あと、ナナシの台詞に強調する点(名前を忘れました。ジョジョとかでもよく使われてるけど、名前なんだっけ?)をつけたかったんですが、携帯だとかなり変な表示になるため断念しました。中々難しいですね。

どいてろ、お前は最初から舐められムードだ。

出発してからも暫らく経ったが、未だに目的地には着かない。ギーシュの話によれば直接アルビオンに行くのではなく、途中にある港町によって、そこから船に乗ってアルビオンまで行くのが普通らしいのだがまだ海すら見えない。

後ろからついてきている青い影が一瞬見えたような気がしたが、今はルイズには言わないほうがいいだろう。半ばヤケになって監視するなら一緒にしたほうがいいか、と開き直った。

ギーシュは相変わらずモグラを撫で回しているし、サイトは少し離れた場所を飛んでいるグリフォンを凝視している。しかもワールドがルイズの肩を抱いたりする度、表情が怒ったり気落ちしたりと実に忙しい。

俺はというと用意したクッションの上に寝転んで、割と快適な空の旅を楽しんでいた。ギーシュが魔法で風圧を軽減してくれているため、普段なら乗っているだけで疲れてくる速度で飛行しているにも関わらず感じるのはそよ風程度だ。

うん。こういう風に風を抑える道具なんか無いかな？かなり便利だからぜひとも欲しい。

今度、王都にでも行って探してみよう。

ギーシュはサイトの百面相を見て笑っている。まあ傍目には面白いからな。

「ぷ、ぷぷ。もしかして、君……、やきもちでも焼いているのかい？」

「あ？どーゆー意味だ？」

どういう意味かってそういう意味に決まってるだろうに。こいつは自分を客観的に見ることが出来ないのか？しかしギーシュも暇だからってからかうなよな。サイトが機嫌悪げに返事をするから、多少空気が良くなってきた。

「あれ、当たった？もしかして凶星？」

「黙ってる、モグラ野郎。」

「ぷ、ぷ、ぷ。ご主人様に、適わぬ恋を抱いたのかい？いやはや！悪い事は言わないよ。身分の違う恋は不幸の元だぜ？っつかし、君も哀れだな！」

「うるせえ。あんなやつ、好きでも何でもねえや。ま、確かにちよつと可愛いけど、性格最悪。」

「お前は好きでもなんでも無い相手のベッドに潜り込もうとしたのか？俺には理解出来ない倫理観だな。」

俺が他意はなさそうに、しかし意地の悪い質問をすると、サイトはうぐつと口をつぐんだ。ギーシュはそれを見てなお笑っている。

「あ、キスしてる。」

ギーシュの言葉を聴いた瞬間、サイトはバツとグリフォンの飛んでいる方向を見た。しかし、2人共そんなことはしておらず、ただ顔を向け合って話をしているだけだ。かつがれたことを理解したサイトがギーシュに飛び掛ろうとするが、俺が鬼の形相でその首筋を掴みあげると、途端に大人しくなった。

「喧嘩するなどは言わんが、ここでやるとお前らを乗せてるレウに負担がかかる。あ・と・で・や・れ。判ったな？」

サイトと、あとなぜかギーシュも首が千切れんばかりに縦にふる。ルイズがなにごとかとこちらを見ていたが、サイトは首筋を掴まれたまま視線をそらした。素直じゃないやつだな。

それから数時間もすると、目的地に着いた。といっても海ではなく、山の中である。見える範囲に街はあるのだが、なぜ山のなかにか？

普通は海に隣接させるものじゃないのか？

「なんで港町なのに山なんだよ。」

「きみは、アルビオンを知らないのか？」

サイトも同じことを疑問に思ったようで、ギーシュに尋ねている。

因みにサイトとギーシュはあれ以降、借りてきた猫のように大人しくなっていたが、そろそろ目的地に到着することで、気が緩んでき

たのдарろつ。

「知るか。」

「俺も知らないぞ。」

「まさか！」

「この常識を、俺達の常識と思ってもらっちゃ困る。」

ギーシュは笑ったが、サイトは全く威張れることではないのに、何故か胸を張って言っている。

街中まで飛んでいくわけにもいかないの、地上に降りてそのまま進むことになった。サイトはまだルイズとは顔を合わせ辛そうだ。このへんでいいか。

「おい、そろそろ出てこーい！！」

俺が後方に向けて大声を出すと、かなり後ろのほうにあった木の影からシルフィが出てきた。その背中には青と赤の髪の毛見える。

俺以外のメンバーは尾行されていたのに気付いていなかったようで、驚いている。

「なんであいつらが？」

「多分、出発するときに見られてたんじゃないのか？」

かなり慌てて出発してきたのдарろつ。キュルケはいつも通りの色っぽい格好だが、タバサはパジャマ姿だ。それでも本を読んでいるところは流石だが。

「はーい、お待たせ。」

「お待たせじゃないわよ！何しにきたのよ！」

キュルケがいつもの調子で言うが、ルイズは食って掛かっている。ワルドの前なのがいいのか？

いつもの口論が始まるうとしていたとき、かすかな風きり音とともに、矢が飛んできた。俺のすぐ傍に突き刺さったそれを見て、ギーシュが「敵襲だ！」と喚いた。

それまで口論をしていたキュルケやルイズ、本を読んでいたタバサが顔をあげ、油断なく杖を構える。

暗闇から無数の矢が放たれ、それは俺達を確実に狙っている。多少

避けたとしてもこれじゃ当たるな。剣を出すか、と思っていると、ワルドが前に出て、杖を振った。その瞬間、小さな竜巻が現れ、迫っていた矢を全て弾き飛ばす。

視力を強化すると、暗闇の中には多数の人間の姿があった。手に手に弓を持ってこちらを狙っている。

風下からこつちを狙っていることや手際の良さからして、素人じゃないな。

俺はラビの鎧、グラビドZシリーズを身に纏うと呼び出したレアと、後で戻すつもりで解放したままにしていたレウに敵を一所に誘導するように指示する。

「俺がなんとかしてみる。子爵様、あんたは防御をたのむ。」

「構わないが、大丈夫かね？火竜が味方とはいえ、どうもかなりの数の敵がいるようだ。」

「問題無い。上手くいけばほとんどの奴を生け捕りにできる。」

俺はそのまま、二匹の火竜によって、誘導されてくる敵の近くに移動した。勿論、俺に向けて矢が放たれるがこの分厚い装甲には全く傷を与えることも出来ない。敵は荒事に慣れた様子だったが、さすがに空中から何発も火球を放たれて、かなり混乱しているようだ。

俺の風下から近付いてきた男達は口々に罵声を吐き出しながら、誘導された方向に向かってきた。

鎧から白いガスが吹き出、瞬間にそれは風下にいた男達に吹きかけられていく。ラビの睡眠ガスは事前に多少の耐性をつくっておくハンターならともかく、一般人には効果が高い。

数十秒もすると、そこには地面に倒れ伏して寝息をたてる男達がい

た。男達を魔法で造った縄で捕縛すると、ルイズはさっそくキュルケと口論をしている。元気な奴だ。極秘任務なので気合が入っているのだろう。まあ、キュルケ達はこの場で置いていくと無理にでもつい

てこようとしそうだし、そんな状態で内乱中の国に入国するなど、格安集団自殺ツアーを組むようなものだ。

だからこそ、ワルドもルイズに任せて黙認しているのだろうが、（話し合いで帰ってくれるならそれはそれで問題無いと思っっているのかもしれないな。）キュルケの様子からしてそれも望み薄だな。

それに、ワルドのことについても疑問がある。こんな任務にわざわざ騎士隊の隊長を出張らせることができるなら、他の人員も隊員から出すべきではないのか？少なくとも隊長一人だけを派遣して素人のお守りをさせるよりははるかに現実的だと思うが、しかしあの王女ならおかしくは無いのかもしれない、と思える部分もある。（別の部分でおかしくはあるが。）

サイトは口論を終えたキュルケがワルドを誘惑しているのを見て面白くなさそうにしている。元々本気じゃないことくらいはわかっているととは思っていたが、買いかぶりだったか？キュルケはワルドに拒絶されてサイトの機嫌をとっているが。

そんななか、ギーシュは黙々と敵の一人を目覚めさせ、尋問している。相手は顔からしてギーシュを舐めてるから、テキトウなことを言ってるな。俺が代わるか。

「ギーシュ、どんな按配だ？」

「ああ、ナナシかい。どうやらただの物取りらしいよ。」

「そんな嘘、信じるなんてお前も親切だな。」

「なんだって！それは本当かい！？」

「悪いが、尋問は俺が代わる。お前は皆のところに行つて、先に行つているか、耳と目をふさいでいるかささせてくれ。ここから先は18禁ゾーンだ。」

こういう尋問で「」ではないのか？」と聞くと相手は嘘をつきやすいからまずやっつてはならないんだが、ギーシュはそれをやっている。当然、相手は貴方がたを狙っていました、なんて言うはずも無い。

まあ本当に単なる物取りの可能性も無いでもないが、どうせなら万全をきしたい。

俺が言つてギーシュにベンケイを同行させて皆のところに行かせると、ワルドはこちらを向いて頷いてから、連れ立って街の方に歩いて行つた。

ここからはサイトたちには多少刺激が強いだろう。それに、ワルドも騎士と名がつくくらいだからこれから俺がやるうとしていることに反対するかもしれないし。

ルイズたちの後姿が見えなくなると俺は下卑た笑みを浮かべた男に向き直つた。

「へへ、今度はあんたがお話をしたいつてのかい、姉ちゃん？」

「お話つていうか、話したければ話したらいいぞ。」

「へ、そのでかい乳を揉ませてくれるんなら考えてやらなくも・・・」

俺はその戯言を最後まで聞かず、呼び出した夜刀【月影】で足を切り飛ばした。予想外の俺の行動に男はきよとんとした後、切断面から噴出す血に痛みを思い出したように、喚きだす。

「ぎ、あああああああ！！！！て、手前、お、お、お俺の脚をおおおおおおお！！！！」

「話したければ、話せばいいぞ？なにせ、代わりはいくらでもいるんだから、な。」

俺が笑顔すら浮かべて周りで未だに眠っている男の仲間を見ながら言うと、男はさらに顔を青ざめさせた。自分が死んでも特に俺は困らない、ということを理解できたのだろう。

結論から言えば、3人目の男が自分達が2人組のメイジに襲撃するよ用に言われて雇われたことを喋つた。

すでに動かなくなっている最初の2人は直接雇われた男のツテで集められたらしい。

2人組みの内、男の方は仮面を被っていたそうだからよく判らないが、女のほうは男が言つた顔立ちや刃物を土に変えたあたりからどうもフーケみたいだな。脱獄でもしたのか？

俺は失血死寸前で意識が朦朧としている男を放置すると、今度は力

イザーXシリーズを呼び出した。紅い鎧から朱色の粒子が噴出し、男達を包み込む。その中央で俺が右手を打ち鳴らすと、そこから火花が奔り、それが全体に到達し、粒子が大規模な爆発を起こした。轟音。

テオの粉塵爆発は、強固な全身鎧を装備していても、それごと吹っ飛ばす威力がある。

それを生身で受けた男たちは原型をとどめないほどに破壊されて絶命している。意識が無いまま痛みも恐怖も無く逝けたのだから、彼らはまだ幸せだっただろう。狩人の何割かの末路である意識があるまま害獣に喰われるのに比べれば、たいていの死に方は救いがある。そして、俺はそれを生業にしていた以上、生き物を殺すことは否定出来ない。ただ、自分や仲間を殺そうとした相手は無傷のまま解放することもありえない。こいつらは放置すれば、また向かってくるかもしれない。話せば理解しあえると言うものもいるのかもしれないが、俺に言わせればそんなものは安全な場所だから言える愚者の戯言だし、またそれに費やせる時間も無いし、そんな相手にかける情けも無い。

それに確実に安全な方法を取らなくてはならない。どうでもいい感傷のために見逃した結果、誰かがまた傷つけられることになったら目も当てられないし。

生まれて初めて人を殺したのに、何の感慨も無いままいくつもの物言わぬ屍が転がる場所から、俺は町に向かって歩を進め始めた。

どいてろ、お前は最初から舐められムードだ。(後書き)

まあ冷静に考えれば、命を狙ってきた相手を放置するとかありえませんがね。特にお荷物がある場合は。

もしかしてロリロリですかーッ!?(前書き)

なんかこう、自分が迷走しているのが少し判る回ですね。

もしかしてロリロリですかーッ!?

港町につくと、俺はベンケイに念話で誘導されながら、その宿屋にたどり着いた。

結構豪華なつくりの宿で、他人持ちでなければ一生来そうにもないところだ。しかし、さっき襲撃されたばかりなのに、こんな判り易く貴族が泊まってそうな宿でいいのか?とりあえずあの連中はもう俺達に向かつてくることは出来ないが。

フーケらしき女と仮面をつけた男の、2人組みメイジがまだ控えているわけだからまだ油断は出来ない。これはワルドには教えておいたほうがいいのかもしれないな。

もしかしたら、いや、このタイミングからしてかなり高い確率で2人は貴族派に所属しているだろう。さらにそんなことが出来るといふことは俺達の内情が流出している?

あの王女ならありえると思えるのは、逆の意味での信用があるからだろうか。

ともかく、敵は依然として俺達のことを狙っている可能性が高い以上、まだ襲撃があるかもしれないな。

そう考えて宿に入ろうとしていると、奇妙なものが見えた。二階の一室の窓にへばりついた人影だ。まさかまた賊か?と思つてとっさに剣を出そうとしたが、よく見るとそれは見覚えのある人物だった。それと判ると、納得すると同時に無性に情けなくなつた。こんな思いをするくらいなら賊のほうはまだ良かったかもしれない。

「何、やってるんだ?」

俺が声をかけると、その人影、サイトはこちらを見て器用にもデ尔夫を持った手で”静かに”というジェスチャーをした。

どうせへばりついていて窓の部屋にワルドとルイズがいるのだろう。一人ずつなら気まずいだけなのに、二人が一緒にいると途端に気になるみたいだし。

俺はそのまま宿に入ると、ギーシュ達が一階の酒場にいた。タバサはパジャマ姿のまま料理を黙々と食べ、ギーシュはもうベロベロになっている。ギーシュは多分、命を狙われたストレスが原因だろうが、こんな時に酔っ払ってどうするつもりだ？

俺はタバサにワルドの部屋を聞くと、酒を勧めてくるギーシュを無視して部屋に向かった。

二階の一室、多分サイトが窓にへばりついているであろう部屋の前まで来ると、ノックをして声をかけた。

「おい、ルイズ、いるかー？」

少し間があつてドアが開き、ルイズが顔を覗かせた。因みにドアの隙間から見える窓の外にはサイトと、あと何故かキュルケの顔が見える。

「どうしたの？」

「連中を尋問して厄介なことが判った。子爵はいるか？」

「・・・入って。」

俺が小声で言うと、ルイズはドアを開けて部屋の中に導いた。ふむ、一階の酒場もそうだったが中々豪華な内装だな。

ワルドは椅子から立って俺を席にエスコートしている。お優しいこつて。俺は（身体はともかく）男なので女扱いされても全く嬉しくないが。

全員が席につくと、俺は尋問の結果判ったことを簡潔に述べ、その後俺の推測をそう前置きしてから話した。ルイズとワルドは最初は驚いた顔をしていたが、徐々に深刻な顔を始める。

まあ、2人共今回の任務を達成する上でかなり大きな障害が見たかつたのだし、ワルドにしてみれば味方だと思っていた中に内通者が紛れ込んでいるのだから、内心穏やかではいられないだろう。

「明日の朝、いや、出来れば今夜中にでも出発できないか？」

「・・・それは無理だ。アルビオンに渡る船は明後日にならないと出ないらしい。」

「そんなこと言ってる場合じゃないと思うがね。王女殿下からの任

務なんだ。特権でゴリ押し出来ないわけじゃないんだろう？」

「ナナシ、あんたこの任務がお忍びだつて判つてる？」

「なら、また襲撃されることに怯えながら明後日まで待つのか？お忍び云々よりも自分の命の心配をしたほうがいいと思うがね。」

「それは・・・だつて姫様に迷惑がかかるじゃない・・・。」

俺達の現状がああ王女に迷惑をかけられている結果だというのに、健気なものだ。その健気さが俺やサイト達の命すら左右しかねない状況じゃなければ拍手の一つでもしてやるんだが。

「なに、他に手段が無ければ君の意見を採用するのも吝かでは無い。だがルイズの言っていることも尤もで、ことは政治的な駆け引きでもあるのだ。我々はトリステイン王国がアルビオンに関与した形跡を出来る限り残してはならないのだよ。そうでなければ、今度はそれが新たな醜聞になる可能性が出てくる。」

その台詞をあのアホ王女に直接言つて欲しいね。あんたが言った『新たな醜聞』の運び屋にさせられている身としては。

結局、ルイズがワルドの方針を支持するかたちで、それが決定となつたようだ。

俺はため息をついて退室すると、一階に降りて慣れない酒を呑んだ。しばらくしてサイトの喚き声が聞こえたが、無視して呑み続けた。

目が覚めると、そこは寝室のベッドの上だった。記憶は霞がかかったように曖昧だが、夕べ無力感から呑みすぎてしまったらしい。内臓も強化されているのか、酒は全く残っていないので二日酔いに苦しむことも無い。いつもの爽快な目覚めに、いつ着替えたのか判らないパジャマに若干の疑問を覚えながらも大きな欠伸をする。口に手をあてつつ部屋を見回すと、昨日のルイズたちがいた部屋と同じ造りだとわかった。

顔でも洗うか、と思いベッドから出ようとすると上着の端が何かに引っ掛かった。自然とそちらを向くと、服の端は掛け布団の中に伸

びている。疑問符を浮かべたまま掛け布団を少しめくると、俺はその体勢のまま凍りついた。

掛け布団の下から出てきたのは、小さな人間の手だ。それが、服の端を握っている。

設問 この状況として正しいものを答えよ。

回答1 酔っ払って誰かを連れ込んで放送禁止用語なあれこれをした
人間的にバッドエンド

回答2 酔っ払って誰かと殺し合いをして腕を戦利品として持ち帰った
法的にバッドエンド

回答3 酔っ払って誰かに腕そっくりの枕を作らせて一発ギャグをした
笑いのセンス的にバッドエンド

回答4 酔っ払って誰かが俺を救うために未来から人間型ロボットが
・・・ 脳内バッドエンド

どれを選んでバッドエンド！バッドエンド祭りだ！と少し現実逃避しかけるが、容赦無い現実が俺に認めると迫ってくる。

回答5として、何もなかったことにして二度寝する、というのは目が冴えてしまったので無理っぽい。

自分でも理解出来ない理由で興奮しているのか、自然と早くなる呼吸を鎮め、意を決して布団をはぐる。出てきたのは青い髪とトレードマークの眼鏡を外したあどけない寝顔だった。

回答1 人間的にバッドエンド

自分がタバサのように、いや、それとは少し違う虚無感の滲んだ無表情になっていくのが判る。不思議と混乱する脳裏には鮮明に『児ポ法』『児童回春』『条例違反』の文字が浮かんでいた。

きよ、今日から俺も、一端の性犯罪者か……。
そう思い、真っ白になってベッドの端にへたり込む。

起きて一分も経たない内に多大なる精神的ダメージを受けた俺は、試合後のジョーみたいに燃え尽きていた。

「ンツ……。」

タバサが目を覚ましたらしい。ああ、考えてみればここから逃げて

知らぬ存ぜぬで通す、という選択肢もあつたかもしれない。今更だ
けど。

タバサは俺の空洞になった目と視線を合わせると、特に驚いた様子
も無く、挨拶をした。

「おはよう。」

「・・・ああ、おはよう。そしてさよならだ。」

「何故？」

「俺は人間としてやってはいけないことをやってしまった最低のク
ズだ。だから死のうと思う。」

「昨日のことは仕方無かった。貴女がしたことは誰かがしなければ
ならないことだったと思う。」

俺の毒牙にかかったというのになんて優しい言葉を！

そのとき俺にはタバサが天使に見えた。俺は無神論者だが、今なら
タバサを救世主として祀り上げてても悔いは無い。

だが、被害者本人から許しを与えられても、俺自身が自分を許せな
いところがある。我ながら難儀な性分だが、それでも筋は通すべき
だ。

「だけど、俺は酔っていたからといって君に取り返しのつかないこ
とをしてしまった・・・。俺は、それをどう償っていいのか判らな
い。」

「・・・なんの話？」

「いや、夕べ酔った俺は君を無理やりベッドに連れ込んでその、筆
舌にしがたい行為におよんだらう？所謂性的な意味で。」

普段から自分が男であることを意識するようにはしていたが、それ
が結果として一人のいたいけな少女の純潔を汚すことになるうとは
俺がしていたことは間違っていたのだろうか。

「・・・ない。」

「え？」

「そんなこと、してない。」

タバサは少し顔を下に向けると、そう言った。少し頬が赤くなって

いるような気がしたが、そのとき絶望のどん底から突然希望を与えられていた俺には、気に出来る精神的な余裕が無かった。

もしかしてロリロリですかーッ！？（後書き）

別段HELLSINGネタをやりたいかったわけではないんですが、
なんか入りました。

予定通りは、気分がいい〜〜〜ッ (ワールド談) (前書き)

徐々に話のストックが少なくなってます。毎日更新できなくなる日も近いな！。

予定通りは、気分がいい〜〜〜ッ（ワルド談）

タバサの話では昨夜の俺はペースを無視してガンガン呑んだため酔いつぶれてしまい、そのままタバサとキュルケに運ばれて彼女たちの部屋に泊まったらしい。ベッドは二つあるが、タバサと一緒に寝ていたのは着替え終わった俺が何故か彼女の服をつかんで放さなかったからだそうだ。

多分、そのまま眠っているうちに、俺はタバサの服を放したが、今度は逆にタバサが俺の服を掴んでしまったのだらう。

我、性犯罪者ニアラズ！

事情が判り自身の潔白が証明できたことを内心で喜んでいると、話し声が聞こえたのか、目を覚ましたキュルケと一緒にタバサにタバベ呑みすぎた理由を尋ねられた。特に隠すようなことでも無いので、（ルイズの方針で、詳しい事情までは言わなかったが）まだ俺達を狙っている相手がいることとそれがメイジの2人組みであること、そしてその内の一人がおそらくはフーケで、それを伝えた結果、ワルドが決定した今後の方針を話した。

2人は思った以上に深刻な事態に驚いていたが、それでも途中退場するつもりは無さそうだ。俺は普段着に着替えると、タバサたちと一緒に一階で食事をとることにした。

一階の酒場は昼間は食事も出してくれるらしく、昨日タバサたちがいた奥のテーブルにつくと、店員に適当に注文する。

ほどなくして運ばれてきた料理は港町だからか、食材が豊富でかなり美味しい。なんか日本食に似たような魚の煮物（いや、スープか？）まであった。

久しぶりに故郷の味に近いものを味わいながら、しかし朝から煮物もなあ、と思っていると、階段から降りてきたサイトとワルドの姿が見えた。

そういえば、ワルドはルイズと同室だったか。さぞかしサイトは悶

々とした夜を過ごしたことだろう。さすがに今の状況で手を出そうとするほど馬鹿じゃないだろうからサイトの心配は取り越し苦労だろうけど。

手を挙げて挨拶をしようとしたが、その手を止める。2人共顔に微笑を浮かべているが、その割には纏っている気配がいささか剣呑だ。二人が俺達に気付かず宿から出て行った後、妙なことになるなればいいが、と思いつつテーブルの上に勘定を置くと、俺は2人の後を追った。

2人は少し宿から離れた場所にある、物置と小さな広場が隣接したようなところに入ると、向かい合った。話している内容からして、この場所がそれなりに歴史のある場所であることをサイトに講釈しているようだが、俺に言わせればただの見栄っ張りが何度も喧嘩ごっこをした場所だな。

そうしていると、背後から物音が聞こえた。因みにタバサとキュルケは俺と一緒にサイトたちを見ているので音の主とは別人である。振り返ると、そこには桃色髪のご主人様がした。

「あんたたち、朝からこんなところで何してんの？」

「いや、サイトとワルドと一緒に出かけたみたいだったから、どうしたのかわかって。ルイズこそ、どうしたんだ？」

「あたしはワルドがここに来いって言うから……。でも、なんでこんなところにな？」

「さあ？ 穏やかな用事ではないことは確かだよだが……。とりあえず本人に聞いた方が早いんじゃないか？」

俺の言葉に、ルイズは頷いた。ルイズと一緒にサイト達の前に出て行くと、2人共予想外の人間に驚いている。ま、そりゃそうか。

「ワルド、来いって言うから、来てみれば、何をするつもりなの？」
「彼の実力を、ちょっと試してみたくってね。」

「もう、そんなバカなことやめて。今は、そんなことしているとき

じゃないでしょう?」

「そうだね。でも、貴族というヤツはやっかいだね。強いか弱いかわからないともう、どうにもならなくなるのさ。」

「ワルドを止められないことを悟ったルイズが今度はサイトに命令するが、サイトはワルドを見たまま無視している。まー、ルイズの言い方も良くないな。サイトはワルドに対する対抗心からこの勝負を受けようとしているのに、その原因であるルイズがあんな言い方をしたら、サイトの性格では余計に意固地になるだけだ。」

「では、介添え人も来たことだし、始めるか。」

「オレは不器用だから、手加減はできませんよ?」

「サイト、勝負しても構わんが負けたらどうされるか判ってんだろ? うな? (どうなるか、ではなくどうされるか、なのがポイントである。)」

「俺が多少の怒気を込めて言うと、サイトは一瞬ビクリと震えたあと、こちらを見ないまま首を縦に振った。ルイズは自分の命令を無視したサイトが俺には返事をしていることに不満顔だ。とりあえず訓練メニューを二倍にする方向で検討しよう。」

「デルフが「お師匠さん怖え〜」と言っている。これでも優しくしたつもりなんだが。」

「ワルドの「始めよう。」という声とともに始まった試合は、サイトが不利なまま推移した。ワルドは初手から尖剣のように杖で高速の連続突きを繰り返す。」

「サイトはその対処で手一杯で悪態をついているが、ワルドはまだ喋るくらいの余裕が有る。」

「魔法衛士隊のメイジは、ただ魔法を唱えるわけじゃないんだ。詠唱さえ、戦いに特化されている。杖を構える仕草、突き出す動作・・杖を剣のように扱いつつ詠唱を完成させる。軍人の基本中の基本さ。」

「サイトも攻めに転じようとするが、まるでかすりもしない。しかも、言っていることは正論だ。同じだけの魔法の技量を持つもの同士で」

戦うなら、それ以外に優位な部分が相手に対するアドバンテージになつてくる。素早さ、力、技術。そのいずれもが自分を生かすためのスキルに繋がる。

そして、そのスキルを一線で磨き続けていたワルドに、つい先日まで剣を握ったことも無かつたサイトが勝てる道理は無い。

「きみは確かに素早い。ただの平民とは思えない。さすがはルイズの使い魔だ。しかし、隙だらけ。速いだけで、動きは素人だ。それでは本物のメイジには勝てない。」

ついにサイトはワルドに杖で殴り飛ばされ、地面に倒れた。まあ持ったほうかな。

魔法云々は抜きにしても相手が基礎のレベルで出来ることすらまだ出来ない人間を勝たせるほど実力という壁は低くない。

「つまり、きみではルイズを守れない。・・・アル・イル・ソル・ラ・ウインデ・・・」

「相棒！ いけねえ！ 魔法がくるぜ！」

デルフが言うが、サイトはワルドがダメ押しで放った魔法を避けることが出来ない。

ガツン、という音がして全身鎧を纏った俺は一步後ずさつた。

咄嗟にサイトの前に出て盾代わりになつたのだが、考えてみれば、

タイミング的に龍風圧を出せないクーラの鎧”クシャナメシリーズ”

”よりも対鋼龍スキルのあるミツハ【真】シリーズの方が良かったか？

ワルドの驚いた視線を感じながらそう考えていると、さすがにルイズが止めに入つて試合はワルドの勝利で終わった。サイトはへたり込んだままだ。恐らくは、危険が増していることを踏まえてサイトにお荷物であることを自覚させようとしたのだろう。

素人であることの自覚が無い弱者が味方だと、ときとして強大な敵よりも手に負えない。

サイトの心境を考えれば、同情すべき点もあるのだろうが、しかしワルドが今抗議しているルイズに言っているように、命を狙つてく

る敵はそんなことを考慮しないのもまた事実だ。

ルイズはサイトを介抱しようとするが、ワルドに止められ、一緒に立ち去っていった。

そこには、見物していた俺やキュルケ、タバサと、まだ動こうとしないサイトが残った。

「いやあ、負けちまったな。しっかし、あの貴族は強いな。気にすんな相棒。あいつは相当の使い手だよ。スクウェアクラスかもしらんね。負けても恥じゃねえ。惚れてる女の前で負けたのは、そりゃあ、悔しいだろうけれど、あんまり落ち込むなよ。おれまで悲しくなるじゃねえか。ところで相棒、さつき握られてるときにふと思いつ出したことがあんだけどよ……。うーん、よく思い出せねえ。なんだっけかな……。なにせ、随分大昔のことだからな……。」
無口になったサイトの代わりにデルフが喋っているが、サイトはそれに何の反応も返さないまま、立ち上がった。デルフを鞘に収め、そのまま広場から出て行くこととする、が俺がその肩を後ろからがっしりと掴んだ。

さつき俺が確認したことも忘れたのか？コイツは。

サイトは無言のまま鬱陶しげに肩を振って手を外そうとするが、俺の手は肉に食い込むくらいの握力が込められているので、当然離れない。

苛立った様子のサイトが振り向くと、途端にその顔が恐怖に歪んだ。サイトの涙がにじんだ目に映っている俺の顔は、例えるなら般若だろっか。

「負けたらどうされるか、判ってるっていつてたよナ。サ・イ・ト君。それなのになんだ？その糞偉そうな態度は？」

前々から疑ってはいたが、どうやらサイトはMな人になってしまっているらしい。でなければ俺にあんな態度を取ろうとするはずが無い。

「たかがルーン一つで最強にでもなったつもりか？実力差つてのはそこまでチープな単語じゃねえんだよ！」

俺はそう言っで片手で襟首を掴みあげると、手加減をして地面に叩きつけた。背中をしたたかにぶつけられたサイトは痛みに呻いている。

とりあえず、明日動ける程度に追い詰めておくか。そう考え、俺はタバサとキュルケがドン引きしている中、サイトの特訓（出張版）を開始させた。

ルイズは・・・俺自身の命令で護衛するッ！！（前書き）

風邪がぶり返してきました。

ルイズは・・・俺自身の命令で護衛するッ！！

容赦無く、しかし休めば回復する程度に、適度にサイトを痛めつけた俺は宿に戻っていた。

気絶したサイトを宿まで引きずっていくのは面倒だったが、寝室に放り込んでもう6時間は経っているのでそろそろ起きてくる頃か。訓練中、タバサとキュルケは若干引きながらも、俺を止めようとはしなかった。多分、2人共今のサイトは何かで気を紛らわすことが必要だと思ってくれたのだろう。思われているサイト本人は最初から拒否権など無かったしボロボロになっていたので、どう思っていたのかは知らないが。

因みに俺とタバサは今、一階の酒場で遅めの夕食をワルドの奢りで食べている。既に同席しているギーシュや今は席を外しているキュルケは酒に手を出している。襲撃を警戒して程々にさせているのでまあ大丈夫だろう。

ルイズやワルドとは朝以降会っていない。奢りというのも、事後承諾での予定だ。(宿の料金に上乘せして請求してもらおうように交渉はしてあるので問題無い。)

朝と同じく新鮮な具材を使用した料理はやはり美味い。タバサはさつきからやたらとクセのある味の葉っぱのサラダを食べているが、俺が「大きくなるためにも肉とか魚も食べたほうがいい。」とアドバイスすると、なぜか俺の胸のあたりをじっと見たあと、魚を食べ始めた。

なんだろう？

そうこうしていると、キュルケが階段を降りてきた。サイトと呼んでくる、と言っていたが案の定、一人だけだ。

「まだサイトは目を覚ましてなかったのか？」

「起きてはいたんだけどね、お酒は気分じゃないんですって。ダーリンったらちよっと傷ついてたみたいだったわ。」

「ま、自分の実力を勘違いしたままこれ以上危ない橋をわたるのも不味いし、いい頃合だったんじゃないか？」

「あら、冷たいのね。朝は負けたからってあんなに厳しくしてたのに。」

「あれはそういう理由じゃないよ。実際、あのアホが實力差つてものを理解するためにはまあマシな方かな、とは思っていたし。ただ、負けたからってあんなに不貞腐れるだけじゃ、進歩は見込めないからな。多少厳しい目の喝を入れてやっただけだよ。」

ただ力を与えられただけでは、ソイツは遅かれ速かれ腐る。停滞するということは腐ることと同義ではなくとも、その土壤になることは確かなのだから。

力に溺れ、自分を磨く努力を怠るものはいずれは朽ちていくしかない。なら、どうするべきなのか。

答えは簡単だ。自己を高める努力をすればいい。

朝の俺はその為の発破をかけてやった、というところか。

最初はそれでも不貞腐れたままで拒んでいたが、そこらへんに落ちていた木の棒で容赦無くぶん殴っていたので、嫌でもデルフを抜いて反射神経や剣筋を鍛えることになった。しかも途中からスピードを上げていったので、悩む時間も無かつただろう。

どこぞの漫画にも、『健全な精神は健全な肉体に宿る』とかなんとかあったし、人間、余裕があるからこそ無駄なことを考えたりもする。平時ならそれはそれで悪くはないのかもしれないが、刺客に狙われている状況でモラトリアムも糞も無いだろう。

そう考えていると、突然轟音と共に地面が揺れた。

ギーシュ以外の2人は素早く杖を握って宿の外を凝視する。状況が判らず辺りを見回しているギーシュに「敵襲だ。」と教えると、ようやく酒盃を杖に持ち替えた。

客たちが慌てて出て行くこうとしている入り口の傍から外を覗くと、いつぞやフーケが操っていたのと同じ、しかし材質が岩のゴーレムがいた。

フーケの声は聞こえる（二階にいるサイトやルイズと話しているようだ。）が、その割りに姿は見えない。どうやら飛び道具や魔法で狙われることを警戒しているのか。

まあ、前に壊れかけとはいえ、一刀両断したしな。しかも、周囲には夕べと同じような人相の悪い男たちが弓を構えてこちらを狙っている。

うーん、フーケとは一度やりあっているし、周囲の傭兵どもは数も昨日ほどはいないから全員殺すのはそう難しくなさそうだが、街中でスプラッターをやらかすのもなあ。

ワルドがしっかりと宿帳に本名と所属を書き込んでいる（後で圧力で抹消させるにしても、なぜ態々証拠を作るんだ？）せいであまり大きな騒ぎを起こしたくない。（既に騒ぎにはなっているが、人死に出たらその比ではなくなるだろう。）

それに、フーケたちに気を取られている隙をもう一人の仮面のメイジにつかれたら不味い。俺は鎧があるし、もし魔法を喰らっても致命傷くらいならなんとかなるが、他の人間は難しいだろう。

そう俺が悩んでいると、傭兵たちが店の中に入ってきた。すぐさま退避して店内にあったテーブルを倒し、即席の盾にする。

キュルケたちはそこから手だけをだして魔法を使っているが、狙いが上手く定まらないので効果が低そうだ。かといってテーブルから出ようとすれば、命を料金にしてハリネズミ風デコレーションを強要されるだろう。

「何故君は手を出さないのだね？」

「出しても構わんが、俺がやるとほぼ確実に人死に出るぞ？殺さないように捕まえるってのはかなり難しいんだから。実際、昨日の襲撃が見られてたんだろう。フーケの姿は見えないし、連中、眠らされないように散開してやがる。」

本当はまだ取れる手はあるんだが、あまり人前じゃ使いたくはないんだよな！。

俺の台詞にギーシュが顔をあおざめさせていると、サイトとルイズ、

あと出かけていたワールドがテーブル裏に避難しにきた。

「参ったね。」

「・・・やつらはちびちびとこっちに魔法を使わせて、精神力が切れたところを見計らい、一斉に突撃してくるわよ。そしたらどうすんの？」

「僕のゴーレムでふせいでやる。」

「ギーシュ、あんたの『ワルキューレ』じゃあ、一個小隊くらいが関の山ね。相手は手練れの傭兵たちよ？」

「やってみなくちゃわからない。」

「判るころには死んでるからやめとけつて。だいたい、サイトとの決闘のときに気付いたけどお前の『ワルキューレ』って中身は空洞だろ？そんなモンが出て行っても集中的に矢で射られるだけだ。」
俺やキュルケが現実的な意見を言っただけだ。俺は服を引つ張つてしやがませると、超手加減した秘拳でギーシュを額を弾いた。

「ぐおおおおおおお！！！」

かなり痛かったのか、ギーシュが器用にもテーブルの影から出ないようにのた打ち回っている。傭兵たちはその声で矢が当たったと判断したのか、余計に矢が射られ始めた。

「いいか諸君、このような任務は、半数が目的地にたどり着ければ、成功とされる。」

ワールドが弛緩しかけた空気に重苦しい声で緊張を取り戻すと、タバサは自分とキュルケ、ギーシュを杖で指し、「囧。」と呟いた。同様にそれ以外の人間を指して「棧橋へ。」と呟く。

それでメンバー分けが決まったのか、ワールドは短くタバサと会話すると、裏口に向かい始めた。促されてサイトとルイズもそちらへと向かう。

俺はそちらへ向かおうとして、足を止め、周囲にアイルーたちを呼び出すと、残り少ない閃光玉を渡してタバサたちのサポートに行かせた。

出遅れたせいか、三人はかなり先を走っていた。それでも差をぐんぐん縮めていくと、突然全員が立ち止まる。どうしたんだ？と思いつつも近付いていくと、次の瞬間、物陰から現れた男が、咄嗟にデルフを抜いたサイトと斬りあった！

相手をよく見ると仮面をつけているため顔立ちがよく判らない。

フーケと組んでいたメイジか！

一層スピードを上げて三人の下へ急ぐと、頭を割られそうになっていたサイトの前に片手剣を割り込ませた。

「よう、調子悪そうだな。（馬鹿なのに）風邪か？」

「来るのが遅えってば。あと、お前が原因だし。ついでに、馬鹿って言ったの聞こえてるぞ。」

俺が視線をメイジに向けたまま、サイトに笑いかけると、どうにか引きつったような声が返ってきた。

パニックをおこしてないだけマシか。

打ち合っている剣を腕力だけで強引に打ち払うと、向き直って正眼に構える。

相手も油断無くこちらを見ていた。サイトとワールドは退路を塞ぐように相手を中心に散らばっていく。

ワールドとルイズ、そして敵が詠唱を開始すると同時に俺とサイトが斬りかかった。

相手はレイピア型の杖で危なげなく捌いている。

うーん、スピードを上げたいが、上手くサイトが射線に入るように誘導しているな。正直、サイトは他の2人と同じように補佐に徹して欲しかったが、どうにも上手くいかない。

ルイズの詠唱が完成し、俺と敵の間に小爆発が起きる！

一瞬、俺と敵の距離が離れた。といっても精々が二メートル程度。

一歩踏み出せば届く距離だ。しかし、敵はそのチャンスを逃さなかった。

「相棒！構えろ！」

ルイズの魔法に驚いていたサイトは迂闊にも剣を下げていたが、デルフの叱咤でそれを慌てて挙げる。

敵は停滞無く杖を振るった。

「ライトニング・クラウド！」

相手は呪文しか言わなかったが、デルフはその魔法を知っていたらしい。敵の周囲から稲妻が伸び、サイトに直撃する。

サイトが悲鳴を上げて倒れこむが、今は無視だ。悲鳴を上げられることは即死したわけじゃないってことだし、今のルイズのように慌てて駆け寄ったところで、事態は好転しない。

サイトに魔法を当てたせいで他所を向いている敵の腹に、手にしていた片手剣を投げつける！

それは狙い変わらず腹に吸い込まれ、敵はその痛みと衝撃によるめいた。2歩、3歩と後退する敵に、ようやく完成したワルドの魔法が命中する。

魔法に吹っ飛ばされた敵は腹に剣を生やしたまま、近くにあった階段の下に消えていった。

俺は剣を戻すと、気絶したサイトの下に駆け寄った。服があるせいで見え難いが、魔法が直撃した腕は火傷を負っているが、命に別状は無さそうだ。

俺がため息をついていると、サイトが目を覚ます。

「な、なんだあいつ……。しかし、いてえ……。くっ！」

「多分、フーケと一緒に傭兵どもを雇ったメイジだ。状況からして、貴族派なのは間違いないだろう。」

「今の魔法は『ライトニング・クラウド』。『風』系統の強力な呪文だ。あいつ、相当の使い手のようだな。」

「くっ！つう……。。」

「しかし、腕ですんでよかった。本来なら、命を奪うほどの魔法だぞ。ふむ……。この剣が、電撃を和らげたようだな。よくわからんが、金属ではないのか？」

「知らん、忘れた。」

「インテリジェンスソードか。珍しい代物だな。」

「行こう、も、もう大丈夫だ。」

サイトがやせ我慢をして言い、俺たちは再び棧橋に向かって出発した。

お前らに俺の心は永遠に判るまいッ！（前書き）

借りてきたDVDが傷だらけで見れないときって何故か無性にイラッときますね。

お前らに俺の心は永遠に判るまいッ！

船着き場に着いた後のワルドの行動は迅速だった。

見つけた一艘の船に乗り込むと、すぐさま船長と交渉を始めたのだ。最初は燃料にあたる『風石』と航行距離の問題から渋っていた船長も、ワルドが足りない『風石』の代わりに魔法を使用し、かつ積み荷と同額の料金を支払うことで決着した。

今は時間が惜しい。あの仮面のメイジは深手を負ったが、まだここに伏兵がいるかは判らない。

一瞬飛竜を乗り継いで行くことも考えたが、距離や場所が判らない以上、それは奥の手にしておきたい。

レウを始めとする飛竜たちにしたって背中に人間がいる状態で戦闘機動は無理だろうし。

船長の指示で船員たちが慌ただしく動き回り、程なくして船が出航した。

おー、本当に飛んでるよ。感覚的には飛行船が近いかな？字面的にも。

さすがファンタジー（思考停止）。でもよく判らんが『風石』だから動くんなら、この帆はなんのためにあるんだろ？

もしかして『風石』では浮くだけしか出来ないのかなのか？

サイトは最初のうちこそルイズと微妙な雰囲気醸し出していた（そういえば今回いいとこ無しだったからな。）が、負傷や朝の強制訓練での疲れが出たのだろう。しばらくすると眠り始めた。

さっき回復薬グレートを飲ませたから、まあ心配はいらないだろう。ワルドとルイズは深刻これからのことを相談しているが、やたらと不穏な言葉が聞こえてくる。陣中突破とか正気で言っているんだろうか。

ワルドは自信ありげだが、もし既に終戦していれば俺たちは力モネギだぞ？

だいたい、そこまでこの船が付き合ってくれるはずも無いから当然、アルビオンについてからは別の方法で向かうことになるだろう。途中で上手く乗り物を手に入れることが出来ればいいが、出来ないときは刺客がどれだけ潜んでいるのか判らない場所をゆっくり進むことになる。

ルイズあたりは俺をアテにしているんだろうが、こんな危険な場所では正直、やりたくない。別に空を飛べる生き物を使っているのはこちらだけでは無いのだろうし。

「う・・・、うん。」

傷の痛みのせいか、サイトがうなされている。ルイズたちの話はまだ終わりそうには無い。

サイトを背負って甲板から船室に降り、腕の傷に包帯を巻いてやっ
てから、そこに寝かせた。苦悶の表情を浮かべるサイトを見て、苦笑する。

ま、コイツもコイツなりに頑張ってるんだよな。その方向性はともかくとして。

俺は再び甲板に戻ると深刻そうなルイズとワールドを尻目に、縁に肘をついて風景を楽しみ始めた。

数時間もすると、それは見えてきた。前方に見えるのは、宙に浮かぶ切り立った崖だ。

言っついて変だとは思うが、そうとしか表現出来ない。

巨大、と呼ぶのも馬鹿馬鹿しくなるような大きさの土の塊が浮遊し、そこから滝のように落ちた水が雲の一部になってその下半分を覆い隠している。

事前にタバサたちからそれとなく聞いてはいたが、それでもかなりの迫力だ。ラピュタを数百倍のスケールにすればこんな感じになるのだろうか？

「驚いた？」

「ああ。こんな物、初めて見たよ。」

「浮遊大陸アルビオン。ああやって、空中を浮遊して、主に大洋の上をさま迷っているわ。でも、月に何度か、ハルキゲニアの上に行ってくる。大きさはトリステインの国土ほどもあるわ。通称『白の国』」

いつの間にか近くに来ていたルイズが得意げに説明をしてくれた。

俺はというと、もとの世界ではありえない光景に目を奪われている。しかし、どういう原理で空を飛んでるんだ？あの底に巨大なプロペラとかジェット噴射口なんかあるはずがないし……。

いや、考えるだけ無駄かな？かくもファンタジーとは不条理だ。

そう考えていると、突然船内が慌しくなった。なんだ？と思っていると、見張りをしていた船員が声を張り上げる。

「右舷上方の雲中より、船が接近してきます！」

言われた方を見ると、確かに黒い船がラムをこちらに向けて、航行している。こちらの船よりも大きく、大砲が装備されていることから、戦闘艦なのだろう。しかも、大砲の先は見間違いでなければ、こちらの船にピタリと向けられている。

不味いな、貴族派か？

……最悪の場合、この船の船員たちは諦めるしかないか……。

ここが地上からどれくらい距離がある場所なのかは判らないが、少なくとも船を破壊されて地面に叩きつけられるまでの猶予はそう長くはあるまい。その間に飛竜たちで助けられたとしても、精々が半数。助けようとした相手が飛竜に驚いてパニックを起せば、もっと少なくなる。さらに相手の船が追ってきたりすれば、そのまたさらに半分生き残ればいいほうだろう。

眩暈がするほど悪い状況に冷静に好転させる方法を考えるが、どうも詰みっぽいな。複数の飛竜や古龍で囲んでも、上手く混乱してくればいいが、もし相手が構わずにこちらに砲弾を放ってくればそれで終わりだ。

どうしたもんかな。

白兵戦ならまだ分があるから、とりあえず相手の船に連行されたりすればどうにかなるんだが・・・。

状況を打開する案をどうにか考えていると、相手の船がこちらの船の針路に一発威嚇射撃をした。

『止まらなければ次は当てる』ってところか。ということは問答無用で沈められることはなさそうだ。これなら、なんとか生き残る目も無くもない。

ルイズが不安げに擦り寄ってくるが、そういう役目はサイトかワルドに代わってやれよ。あー、そっか、ワルドは操舵室で風石の代わり、サイトは船室でお休み中だったか。

騎士隊長のわりに又けているワルドあたりなら、もしかして無謀にもうって出る、とか言わないか？と内心心配していたが、程なくして俺たちの乗っている船は停船した。

「あんたなら、やつつけられるんじゃないの？」

「出来ないことも無い。相手を沈めるまでのこの船の被害を考えなきゃ、な。」

俺の能力を知っている以上、当然の質問ではあるが、そう答えるとルイズは顔を青ざめさせた。ま、そりゃそうか。

「空賊だ！抵抗するな！」

近付いてきた相手の船の乗組員が大きな声で怒鳴った。貴族派じゃなかったのか？たまたま運悪く見つかっただけ、とかか？

ルイズも内心でそう確信していたようで、空賊と聞いて驚いている。仕事が終わったワルドと、ようやく騒ぎに目を覚ましたサイトが甲板に出てくるが、事態は手遅れだな。

それでもデルフを抜こうとするサイトを、俺は手で制した。

「やめとけ。お前が相手の船に乗り込んで敵を全員叩きのめすまでどれだけの時間がかかると思ってる？その間、相手はずっといつでも点火できる大砲をこっちの船に向けてるんだぞ？それに、最近上には上がいることを教えてやったばかりだろうが。あの船にだって手練れがいるかもしれないんだぞ。」

俺の言葉で昨日の朝の訓練を思い出したのか、サイトは沈痛な面持ちをしている。そんなにシヨックをうけるようなことかなあ？たかが100回くらいブン殴った程度で。

空賊たちがこちらの船に乗り移ってきたが、抵抗するものはいない。いれば優先して蜂の巣にしてもらえることがわかっているのだろう。絶対的に戦力が違う相手に出来ることは、相手が全てを持ち去ってしまわないように、自分の命以外のものを全て差し出すことだけだ。それこそ、プライドも。

空賊たちは驚いて暴れだしたワルドのグリフォンを白い煙の魔法でつつんで眠らせると、こちらの船長相手に交渉を始めた。といっても、完全に拒否権の無いいわば命令なので、船長は命の代わりに積荷を全てを奪われることに歯を食いしばって耐えている。

しかし、それを命令している空賊の頭領は妙に若いな。それに、なんとというか、格好も変だ。

衣装が派手なのは別におかしくはないだろうが、なにか全体的に、ちぐはぐというか。紳士服用のマネキンに囚人服を着せて飾っているような違和感がある。他の三人は気にした様子も無いので、そう思っているのは俺だけか？

「おや、貴族の客まで乗せてるのか。こりゃあ別嬪だ。お前、おれの船で皿洗いをやらねえか？」

手下に船内の占拠をさせている間、甲板をぶらぶらと歩いていた空賊の頭領は俺たち4人に気付き、手下と一緒に近寄ってきた。ルイズに目をつけた頭領は見下すように顎を手で持ち上げると、そう言った。どう助けたものか、と思っていたのでルイズがその手を跳ね除けた瞬間、血が凍るような感覚を覚える。

「下がりなさい、下郎。」

「驚いた！下郎ときたもんだ！」

手を叩かれた頭領の方は大声で笑っているが、何考えてんだこの桃色ノータリンは!!!？

相手が自分とこの船に乗ってる皆の生殺与奪を握ってることくらい

考えたらわかるだろうが！！

てか考えなくても判つとけ！！

だいたい今からだって殺されないかどうかなんて判らないんだぞ！？
後ろではまたデルフを抜こうとしているサイトがワルドにたしなめ
られている。

うん、ワルドさん。サイトの迂闊な行動がルイズに累がおよぶのは
わかるが、今ルイズがまったく逆のことをしたことはスルーなのか？
「へっ。そっちの従者の姉ちゃんもなかなか別嬪じゃねえか。それ
に、ちよつとやそつとじゃ壊れなさそうな、丈夫そうなところが余
計にいいな。」

今度は頭領が連れてきた手下が俺たちを見て言うが、誰のことだ？
サイトやワルドのはずが無いし、俺たちの近くに女性の姿は無い。
俺は後ろを向くとサイトとワルドの方を向いて自分の顔を指差した。
二人が当然だろ、と言わんばかりの表情で頷く。

・・・そうか。そんなに死にたいか・・・。

俺の視線に殺意がこもりだしたことに気付いたサイトが必死の形相
で俺に抱きつき、剣を出そうとするのを阻止してくる。離せ。あい
つらは皆殺しにする。船が沈むとか沈まないとかは後で考える。

「てめえら。こいつらも運びな。身代金がたんまり貰えるだろうぜ。」

俺は動けないまま、殺意のこもった視線を向けていたが、結局空賊
たちはそれに気付かず、俺たちは空賊の船に乗せられることになっ
た。

ルイスったら、自分が何を言ってるか、判っているの！！（前書き）

最近買った漫画を見てみると、なんか系統がエロス方面に偏っていることに気がきました。少年漫画も好きなんですが、買っている単行本はHOTDとかマケン姫とか乱飛乱外とかなんですよね。これも加齢による嗜好の変化でしょうか。

ルイズつたら、自分が何を言ってるか、判っているの!!

空賊に捕らえられた俺たちは、黒い船の船倉に入れられている。

ルイズとワルドは杖を、サイトはデルフを取り上げられているので、抵抗出来ないとふんだのだろう。ロクに身体検査もせずに一塊にさ
れている。

貴族相手だからか？やたらと対応が甘いような気がするが・・・。
俺は壁に背を預けて座り込んでいる。

俺は特に何を取り上げられたわけでもないのに、船員とデルフを見
捨てれば脱出できないことも無い。ただ、そうしようとすると当然
反対する者（多分ルイズ。次点でサイト。）がいるだろうし、もし
そうなったら秘拳で気絶させるしかないか。

そんな、割と怖いことを考えている横で、ワルドは船倉に置いてあ
る火薬や大砲の弾を眺め、ルイズはサイトの怪我を見て悲鳴を上げ
ている。

そんなリアクションをするなら、もう少し早めに気にしてやれよ。
またぞろ騒ぎ出しそうだったので、その前に突っ込んでおくか。

「落ち着け。多少痛みはあるだろうが、もう治療薬は飲ませてるし
包帯も巻いてるんだから。死にはしない。」

「でも、酷い火傷じゃないの!どうしてほっとくのよ!」

いや、だから出来る範囲での治療はしてるんだってば。そう言いた
かったが、取り乱したルイズは俺の言葉を聴かず、ドアを叩いて看
守を呼んだ。

「水を!あと、メイジはいないの?」
「水」系統のメイジはいないの
!怪我人がいるのよ!治してちょうだい!」

「いねえよ。そんなもん。」

「嘘!いるんでしょう!」

「大人しくしてろ。俺たちは捕まったんだぜ。」

「いやよ!だって、あんた、怪我してるじゃないの!」

「いって言ってんだろ！」

完全に動転しているルイズだったが、サイトが怒鳴ったことで落ち着くのを通り越して泣き始めた。

主従そろって忙しいやつらだな。

サイトがルイズをなだめている間に俺はワルドと話してもしておくか。

「少しいいですか？」

「あ、ああ……。なんだね？」

「普通、空賊に捕まった場合、これからどうなるんですかね？」

「一般的にはその貴族の家と交渉して納得できる身代金と引き換えに解放されるらしいな。私も今回が初めてなので人伝に聞いたことがある範囲でしか知らないが。」

「人生で何度もこんなレアな体験はしたくありませんよ。それじゃあ、上手くいかなかった場合は？」

「……その場合、私達はあまり面白くないことになるだろうね。」

「男は殺して地面の染み、女は一通り味見をした後に同じく地面の染みってことですかね。」

「……そういうことだ。まあ、我々は姫殿下のご命令で動いている。最終的には国家が負担してくれるだろうから、そんなことにはなるまいさ。」

ワルドはそう言うが、相手はあの王女なので全く安心できない。大体俺の言葉に顔を青ざめさせているワルド自身、自分の言葉を信じているんだか。

そう思っていると、サイトがこちらに歩いてきた。ルイズは放ったらかしでいいのか？と思ったが、どうやらワルドに交代するようだ。立ち上がり、ルイズの方に進んでいくワルドの代わりにサイトが俺の隣に座り込んだ。もう傷の痛みもほとんど無いようだから、心配する必要も無いだろう。

「良かったのか？」

「あ？何がだよ。」

「それを言わせるほど無粋でもないだろうに。ナイト役（うわ、自分で言つてて寒気がしてきた。）は本職に任せるのか？」

「・・・オレじゃあ、ワルドには勝てない。ルイズを守れない。」
別段ワルドから守るわけじゃないと思うがね。試合に負けたことがそんなにシヨックだったのかねえ？ 案外、打たれ弱い奴だな。

「まあ、とりあえずルイズの相手よりは今の俺たちの状況を考えたほうがいいだろうな。」

「状況って・・・、火薬がゴロゴロしてるんだからそれを使ってここから出れないかな？ それとも、ナナシの武器を使うとか・・・。」

「脱出するだけなら大して難しくはないだろう。問題は、助けを求めるデルフや船員たちを無視していけるかどうかだな。俺は出来るし、ワルドもまあ出来ないことは無いだろう。けどお前とルイズはどうだ？」

「それは・・・。」

「そういうことだ。少なくとも、今は難しいな。助けられる可能性がある以上、ルイズは反対するだろう。解放されるにしろ、殺されるにしろ、どっちかに決着しない限り、お前ら2人を気絶させなきゃ俺は安心して脱出出来ん。」

自分とは危機感の抱き方の違う意見を聞いたためか、サイトは顔を引き締めた。とりあえず何の根拠も無いのに自分が死ぬわけがない、とか思っているような馬鹿じゃなくて良かった。

それとも、俺がやるというたらやる人間だということが判っているからだろうか。

その後、空賊の一人が持つてきた食事を4人で分けて食べ（ルイズは嫌がったが、嫌でも食べないとたないことをワルドが忠告するとしびしび食べた。俺とサイトにあんな飯を出しといてよく嫌がれるなー、コイツは。まあ律儀にそれを食ってから厨房に来るサイトと違って俺は一度も食べたことは無いけど。）ると、再びすることが無くなった。

とりあえず俺が出来ることは船員たちの無事を祈ることくらいか。

しかし、今考えると、今回の任務は王女のミスが原因なわけだが、そもそも、たかが手紙一枚を警戒しなくてはならないのは相手の不興を買いたくない、という事情があるからだ。

そう考えると王女の結婚相手のゲルマニアの皇帝ってのはやたらと嫉妬深いんだな。アレか？女は初物以外価値が無いとか妄信しているんだらうか？

それとも遺伝子証明なんか出来ない技術レベルの世界だから、世継ぎが自分の血を受け継いでいないことを恐れたのか。どちらにせよ、どこかに打算が見え隠れしているのだらう。

そうしていると、看守とも飯を持ってきた奴とも違う空賊がドアを開けて入ってきた。

「おめえらは、もしかしてアルビオンの貴族派かい？」

男は楽しそうに言っている。こいつを捕まえて人質にすれば・・・無理か。それ自体は難しくはないだらうが、相手も一人で済む損害を態々増やすほど愚かでもないだらう。

ここに閉じ込めておけば何も出来ないと思っっているんだし。

「おいおい、だんまりじゃわからねえよ。でも、そうだったら失礼したな。俺たちは、貴族派の皆さんのおかげで、商売させてもらってるんだ。王党派に味方しようとする酔狂な連中がいてな。そいつらを捕まえる密命を帯びてるのさ。」

「じゃあ、この船はやっぱり、反乱軍の軍艦なのね？」

「いやいや、俺たちは雇われてるわけじゃねえ。あくまで対等な関係で協力しあってるのさ。まあ、おめえらには関係ねえことだがな。で、どうなんだ？貴族派なのか？そうだったら、きちんと港まで送ってやるよ。」

男の話からすると、こいつらは貴族派が、自分たちに有益だから放置している空賊、ということか。

しかし、さつきからこの空賊の目が気になる。顔は笑っているが、その中で底冷えするような冷たい観察眼が俺たちから何かを探っている。

敵か味方かなら、口で言っているがこの目が意味するのは・・・なんだ？よくわからん。ただ、注意深いだけかもしれないが、気をつけたほうがいいかもしれないな。

「誰が薄汚いアルビオンの反乱軍なものですか。ばか言っちゃいけないムグツ！」

「いえ、貴族派です、俺たち。」

「いや、そのお嬢ちゃん、今明らかに違っつて言おうとしたよな？」

「空耳じゃないですか？」

空気読めないスキルを発揮しようとするルイズの口を俺が慌てて手で押さえ、代わりに真顔で答える・・・が、空賊は見逃したりはしなかった。さすがに無理があったか。

おまけにルイズが暴れて俺の手から離れ、せつかく俺が隠そうとしたことを一切合財叫んだ。

「なにすんのよッ！あと、わたしは王党派への使いよ！まだ、あんなたちが勝ったわけじゃないんだから、アルビオンは王国だし、正統なる政府は、アルビオンの王室ね。わたしはトリステインを代表してそこに向かう貴族なのだから、つまりは大使ね。だから、大使としての扱いをあんたたちに要求するわ。」

「前から馬鹿だ馬鹿だとは思っていたが、まさかここまでとは・・・」

「誰が馬鹿よ！大体あんた、ご主人さまに対して何よその態度は！？」

「尊敬されたいんなら、それなりの態度で示してくれ。俺だって生きるためならともかく、平時に犬の糞に頭を下げるのは多少抵抗がある。」

「なんですつてッ！！」

こめかみに右手の指を当てて天井を仰ぐ俺に、ルイズが激昂した。集団他殺されるための言葉を迂闊に喋るバカを他にどう形容しろと？

「正直なのは確かに美德だが、お前たち、ただじゃ済まないぞ。」

「あんたたちに嘘ついて頭を下げるくらいなら、死んだほうがマシよ。」

「俺も？」

「あんた達はわたしの使い魔でしょ。こうなったら、覚悟しなさいよね。」

「お前が阿呆な発言をしなけりや覚悟する必要も無かったような気がするんだが、それは気のせいかな？」

「それとこれとは別。嘘なんかつけるもんですか！こんな連中に！指で差された空賊は笑って部屋から出て行った。俺も笑うしかないなー、こりゃ。」

「俺たちは破滅だぞ！わかってんのか？」

「最後の最後まで、わたしは諦めないわ。地面に叩きつけられる瞬間まで、ロープが伸びると信じるわ。」

俺たちがこれから体験させられるとしたら、ノーロープバンジーだろうけどね。しかも怒鳴っていたサイトはルイズを切なげに見ている。あんなんで丸め込まれるなよ。

「いいか、ルイズ。」

「なによ。」

「いいことを言ったと思ってるかもしれないが、お前のミスと勘違いを指摘するぞ。」

「・・・言ってみなさい。」

「まず一つ目。この任務はそもそもお忍びなので、他人には知られてはならない。特に貴族派は命を狙ってくるほどこちらを妨害したいし、お姫様にも貴族派には知られるなって言われてただろうが。それに二つ目。お前は死んだほうがマシ、とか言っていたが、ただ死ぬると思ってるのか？」

「敵は・・・殺すものでしょう、普通は。」

「男はな。女は殺す前に色々使い道があるだろう、ほら、性的な意味で。」

俺の言葉に、ルイズは一瞬顔を赤くするが、次の瞬間には真っ青に

なつた。

「さらに三つ目。俺たちがいるのは内乱中の国で、いつ死んでもおかしくない場所だ。そんな場所で大使が死んだからってそのときに国の代表でもなかったお前の言う”薄汚い”連中が正直に自分たちが殺したことを白状するとも思うのか？薬でもなんでも使って吐けるだけ情報を吐かせてから有効利用するほうが後腐れも無いんじゃないか？」

ルイズの顔色は土気色になっている。

俯いて指を噛んでいるから、全く想像もしていなかったのだろう。幸せなやつだ。

ルイズが焦つたような顔をしているが、ことここまですれば、出来ることは少ない。まー不意打ちされないように気を張っておくか。そう考えていると、ドアが再び開く。

「頭が呼びだ。」

小さな悲鳴を上げているから、再び入ってきたさっきの男は、ルイズには死刑執行者に見えていたことだろう。

ルイズったら、自分が何を言ってるか、判っているの!!! (後書き)

『されど罪人は竜と踊る』は好きなラノベの一つです。

やれやれだ・・・状況がへヴィすぎるぞ！（前書き）

研修のレポートが死ぬほど面倒くさい。やたらと時間がかかります。だれか代筆してくれないかなー。

やれやれだ……状況がへヴィすぎるぞ！

呼びに来た男に連れてこられた部屋は、空賊の頭領らしく豪華な部屋だった。入り口の正面には大きなテーブルがあり、その向こう側では頭領が大きな宝石のついた杖を手で弄んでいる。

その周りにも手下が6人いるから、後ろにいる、俺たちを連れてきた奴を含めて全員で8人。

頭領の左右にいる2人は無表情に構えているが、その手が上着の内側に入れられているから、杖かナイフか、ともかく室内でも取り回しのいい武器をもっているのだろう。

しかし、俺を抑えるにはこの人数はとても足りないな。お荷物が三人いるとしてもそう難しいことでもない。ここを制圧できれば問題解決か。

任務を続行する目処もついたら、とりあえず話の流れを見守ることにしよう。

「大使としての扱いを要求するわ。そうじゃなかったら、一言だつてあんたたちになんか口をきくもんですか。」

「王党派と言ったな。」

「ええ、言ったわ。」

「何しに行くんだ？あいつらは、明日にでも消えちまうよ。」

「あんたらに言うことじゃないわ。」

「貴族派につく気は無いかね？あいつらは、メイジを欲しがっている。たんまり礼金も積んでくれるだろうさ。」

「死んでも嫌よ。」

顔色がかなり悪く、手も震えているが、まだルイズは気丈にも拒否している。

さつき俺が言った女としては最悪のシチュエーションが堪えているのだろうが、それでもこれだけの啖呵を切れるんだからコイツの鼻柱の強さは本物だな。出来ればその操縦をワルドかサイトに任せ

たいところだが、前者はそもそもそんなことする気はなさそうだし、後者は今のところ、役不足だろう。

勝手にこんな任務を受けたことでの苛立ちもあつたが、しかしどちらかと言えばルイズ自身に危機感を持つて欲しくて言っていたのだが、それもこのへんでやめておくか。

「もう一度言う。貴族派につく気はないかね？」

「・・・どうやらこいつらは耳が悪いらしいな。いいか、よく聞け。俺たちは貴族派につく気は無い。」

「なんだ、手前は？」

「人に名前を聞くときは自分からって教わらなかつたのか？教養の無い奴だな。いや、空賊にそこまで求めるのも酷か。まあいい。俺はナナシ。お前が話しかけていた美少女の使い魔だよ。」

「ハッ。その使い魔がなんだってんだよ。」

「いや、なに。この船を・・・乗っ取らせてもらおうかと思つてね。」

俺の言葉を聞いた瞬間、頭を含めた8人はそれぞれが持つていたナイフや杖を振ろうとし、次に自分の目の前、鼻先に当たるような位置に巨大な剣が生えていることに気付いた。それが視界を塞ぎ、俺たちに攻撃するために腕を振るうだけの空間を男達に与えない。下手に触れば、いつかの屑の二の舞になるだろう。

「耳が悪いところ、申し訳ないんだが、この言葉をよく聞いてくれ。わざと全員外したが、次はそこからほんの少しだけ、場所を移動させる。それが嫌なら、今すぐ手にしているものを離せ。・・・どうだろうか。心を込めて言つてみたつもりだ。因みに俺は有言実行タイプだとご近所でも有名だが？」

「・・・お前ら、言うことを聞け。」

気楽に言いながらも殺気を込めて喋ると、それが判つたのだろう。頭領は手下にそう命令し、自分も杖から手を離れた。時間を置かず、全員が武器から手を離す。教育が行き届いているようでよろしい。

「君は・・・、いったい何者だ？」

さつきも言っただろうに。というか、なんか頭領の言葉遣いが変わってるな。そんなに怖かったとか？

「人のことを尋ねるんなら、まず自分から、だろ。」

「あ、ああ、すまない。私はウエールズ・テューダー。こんな格好をしているが、アルビオン王国の皇太子だ。」

はい？・・・今、なんて言った？こいつ、いやこのお方様は？

嘘だろう、と思うが、頭領は俺達の見ている前で鬘と眼帯と付け髭を外した。現れたのは金髪の凛々しくも品のある美男子である。そう、皇太子と名乗っても遜色なさそう。まだ判らないことだらけだがとりあえず、俺は剣を戻した。

「アルビオン王国へようこそ。大使殿。さて、御用の向きを伺おうか。」

苦笑しつつ、皇太子（仮）が言う。

話の進行がいきなりすぎて、サイトモルイズも何も言えなくなっているがワルドだけは興味深そうに皇太子を見ている。意外と肝が座っているやつだな。

というか、これがかなり壮大な嘘であってほしい。やる意味が無いので、多分本当なんだろうけど。

「その顔は、どうして空賊風情に身をやつしているのだ？といった顔だね。いや、金持ちの反乱軍には続々と補給物資が送り込まれる。敵の補給路を断つのは戦の基本。しかしながら、堂々と王軍の軍艦旗を掲げたのでは、あつという間に反乱軍の船に囲まれてしまう。」

まあ、空賊を装うのも、いたしかたない。いや、大使殿には、誠に失礼をいたしました。しかしながら、きみたちが王党派ということが、中々信じられなくてね。外国に我々の味方がいるなどとは、夢にも思わなかった。きみたちを試すような真似をしてすまない。」

たしかにそれは相手の補給路を潰しつつ、注目もされない手だが、しかし皇太子が指揮をとる必要は無いんじゃないだろうか。それに、俺は戦略のことはよく判らんが、そういう手は籠城をする相手にこそ有効な手段だと思うが。

不利な立場でやったとしても、焼け石に水だろう。いや、だからこそ、なのか？

「アンリエッタ姫殿下より、密書を言付かって参りました。」

「ふむ、姫殿下とな。きみは？」

「トリステイン王国魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵。

そしてこちらが姫殿下より大使の大任をおおせつかったラ・ヴァリエール嬢とその使い魔の2人にございます。殿下。」

「なるほど！きみのように立派な貴族が、私の親衛隊にあと10人ばかりいたら、このような惨めな今日を迎えることもなかったろうに！」

皇太子は笑っているが、俺はどうにも居心地が悪い。さっきまで知らなかったとはいえ、自分達をお願いする立場にある相手に剣を向けて脅していたのだ。この感覚も当たり前と言えば当たり前か。

一応、頭を下げると、皇太子は鷹揚に頷き、「私達が原因だからね、主を守るためだ。致し方無いだろう。」と寛容さを見せた。どこぞの桃色頭にも見習わせたい。

ここで態々敵を増やしたくない、という打算もあるかもしれないが、中々話が判る人らしい。多分、俺がやったことって他国人とはいえ、平時なら即刻死刑が該当するようなモンだろうし。

「して、その密書とやらは？」

「あ、あの・・・」

「なんだね？」

「その、失礼ですが、ほんとに皇太子様？」

「まあ、さっきまでの顔を見れば、無理も無い。僕はウェールズだよ。真正正銘の皇太子さ。なんなら証拠をお見せしよう。」

そう言っつて皇太子はルイズがつけていた王女に渡された指輪に、自分の指につけていた指輪を近づける。二つの指輪から光が溢れ出し、それは虹色に輝いた。

よくわからんが、これも魔法か？なんでもありだな。

「この指輪は、アルビオン王家に伝わる、風のルビーだ。きみが嵌

めているのは、アンリエッタが嵌めていた、水のルビーだ。そうだね？・・・水と風は、虹を作る。王家の間にかかる虹さ。」

「たいへん、失礼をばいました。」

ルイズは今度こそ信用して、密書を渡す。それを読むこと自体は自然だった（書簡の封蝋に口付けをするのはどうかと思っただが。）が、最後の一文を読んだ瞬間、その表情が変化したのを俺は見逃さなかった。顔は笑顔のままだが、目に苦悩の色がある。

俺が想像するに、あの政治家としてまともではない王女が密書の一番最後に書いたのは、皇太子、もしくはそれに類する立場の人間にトリステインに亡命することを勧めることだろう。書いた前後の表情や発言から推測すれば、恋愛ごっこのために国の権限を私物化していることを推測するのはそう難しいことでは無い。

そして、それがもし実現してしまえば、俺たちが回収するように任務を受けた手紙も消し飛ばすほどの醜聞になるだろう。なにせ、トリステイン王国の王女が亡国の皇太子を囿っているのだから。

こんなことに俺たちを頼るくらいだ。ツテも無いから早晩ばれてしまうに違いない。

そうなれば当然王女が言ったようにゲルマニアの皇帝にもばれ、同盟は破棄。皇太子と王女、そしてトリステインは貴族派に侵略されてお終い、というコンボが決まることになる。

皇太子が手紙は居城にあることを説明してそこまで俺たちに同行を求めているが、俺はそれを聞きながらも、もし相手が血迷った場合、目の前の皇太子を誰にも知られないように暗殺する方法を考えていた。

知略なら、お前より上だッ！（前書き）

当直をするために寝る時間をずらしたんですが、家の前で工事が始まり、その音で目が覚めて二度寝も出来ないので寝不足のまま完徹になりそうです。

知略なら、お前より上だッ！

皇太子の話では王城は貴族派の船に包囲されている、という話だったが、俺たちが乗った船はその警戒網を縫うようにして雲の中を航行した。近くに大陸があり、視界ゼロの中でよくぶつからずに進めるもんだ。航海士と操舵手がよっぽど有能なのだろう。

だからこそ、敵にも盲点になっているのかもしれない。船はそのまま大陸の真下に移動すると、とある場所に空いた大穴から中に入っていた。

そうして危険と隣り合わせで王城までたどりついたのだが、所変わって今俺たち一行がいるのは皇太子の居室である。ルイズは皇太子から手紙を受け取っている。

「あの、殿下……。さきほど、栄光ある敗北とおっしゃっていましたが、王軍に勝ち目はないのですか？」

「ないよ。我が軍は三百。敵軍は五万。万に一つの可能性もありえない。我々にできることは、はてさて、勇敢な死に様を連中に見せ付けることだけだ。」

「殿下の、討ち死になさる様も、その中には含まれるのですか。」

「当然だ。真つ先に死ぬ心算だよ。」

「殿下……。失礼をお許しく下さい。恐れながら、申し上げたいことがあります。」

「なんなりと、申してみよ。」

「この、ただいまお預かりした手紙の内容、これふがッ!？」

話の内容がまた不穏なものになりそうだったので、慌ててルイズに鼻フックを決めて黙らせた。やれやれ、手間のかかるやつだ。鼻血は出ないようにはやったからありがたく思えよ。

「なんか、最近ナナシのルイズに対する扱いが雑になってきたような気がする……。」

サイトが言うが、しかし実際、『バカで可愛い娘』と『バカでも可

『愛い娘』の間には狭くて深い隔たりがあるとは思わないか？今のルイズがどちらかまではあえて言わないが。

ワルドが杖に手を持っていこうとするが、皇太子の御前なので不味いと判断したのだろう。俺の手から奪いとる方向に転換した。俺は皇太子に向き直り、膝をつくと丁寧な言葉遣いで謝罪する。

「うちのアホご主人がまたぞろ空気を読まない発言をしようとしたことは、出来たら聞かなかったことにしていただけじゃないでしょうか。」

「あ、ああ……だが、いいのかね？その、主人にあんなことをしたりして。」

「今のは一国の大使として自分の発言が国の、ひいては民草の不利益になることを理解出来ていないバカに対する愛の鞭です。」

「……愛の鞭にしては、いささか特殊かつ過激だったような気がするが……。」

そこまで皇太子が言うと、ルイズが視界の隅で何かを言おうと口を開こうをしたので、一礼した後ワルドから引つたくると部屋の隅まで連行した。

「ご、ご主人様になんてことすんのよ！！バカ犬！」

「バカは手前だ。トンマ貴族。どこの世界に自分の国のことで手一杯になってんのに余計な厄介ごとを背負い込もうとするアホな大使がいるんだ。手前が迂闊なことを言った瞬間、誰が一番迷惑を被ると思っただけだ？」

「そ、それは、姫様でしょう！だから、私は姫様の御意志を代弁しようとする……。」

「零点だ。ミジンコからやり直せ。民衆だよ。何時の時代のどんな世界だつて王族の失政にも、貴族の横暴にも、無駄な戦争にも、一番迷惑を被らされるのは民衆だ。」

「でもそれは、普段貴族に統治してもらっている平民の義務でしょう！？」

「ものには限度ってモンがあるんだよ。お前は自分の母国が戦場に

なつて、死んだ者やその家族たちに『貴方たちが不幸な目に遭っているのは、とある高貴な方々の恋愛のためです。』なんて寝言を言えるのか？」

俺がまくし立てると、ルイズは何も言えなくなった。まあ、今の俺の質問に躊躇わず首肯できるようなら俺が恐育・・・もとい教育してやるところだが、幸いルイズはそこまで話が判らない奴じゃなかったようだ。

確かに、王女と皇太子のロマンスというのは聞くものにとつても心地の良いものかもしれない。大抵の人間は悲劇よりは喜劇を好む。だが、それはあくまで事態がそれを許せば、の話だ。

そしてウェールズ皇太子とアンリエッタ王女には、それが許されなかった。それだけの話で、悲劇未満のお芝居は終わってしまったている。それに気付かない王女がまだ舞台に皇太子を連れ戻そうとして俺たちという道化を踊らせている。

ただ、それだけの話だ。

ルイズが道化に徹するのは結構だが、それは自分の役目に忠実でなければならぬ。観客民衆にそっぽを向かれた演劇役者王族や貴族など、何の価値も無いのだから。

「言っておくが、次に国民の命よりもたかが一人の人間の恋愛ごっこを優先させるとかワケの判らんことを口走ろうとしたら、その瞬間に気絶させるからな。それで、目を覚ます度にまた気絶させて、気がついたらトリスティンに戻っている、という素敵プランに強制参加だ。文句あるか？」

俺が本気の目で、かつ額に青筋を浮かべながら言うと、ルイズは頷いた。俺がやると言ったら本当にやることに判っているのだろう。部屋の隅から戻ってきた愛想笑いを浮かべた俺と、じつと下を向いて傷ついた様子のルイズを見て、ワルドとサイトはルイズに労わるような視線を向け、皇太子は戸惑ったような表情をしている。

なんだか収拾のつかない雰囲気のまま、俺たちは皇太子に誘われてアルビオン王国最後のパーティーに出席することになった。

俺は今、自分に割り当てられた寢室のベッドの上に座っている。

パーティーは盛況だったが、しかし同時にそれは、滅んでいく者たちの物悲しさを浮き彫りにしていたように思う。勝てないことを判っていて、しかし勇敢に笑いあう軍人たち。明日死んでしまうことを理解していて、なお「逃げよ」と言った王に「進め」と言わせた貴族達。

彼らは、自分たちの末路がどんなものか理解しつつも、しかし逃げて生き延びることを良しとはしなかった。ならば、客人でしかない俺たちに何が言えるのだろうか。

ルイズはその雰囲気能耐えられなかったのか、途中で会場から抜け出していった。ワルドもそれを追い、会場を後にする。

サイトと俺は最後までパーティーに出ていたが、奴も多少、辛そうにしていた。

そしてパーティーも終わり、今日はもう寝て明日トリスティンに戻る船に乗るために備えるだけ、というところだ。

雰囲気はともかく、料理は美味かったので居心地は良いのだが、なんとお腹の中が重い。あまり考えないようにしていたが死んでいく人間の、それでも持ち続ける意地を見て、俺にも考えるべきところがあったというのだろうか。

自問するが、あれがベストの選択のはずだ。危惧した内容が本当に現実となるか否かはわからないが、試してまでそれを知ろうとは思わない。

そう考えていると、ドアが開いた。ノックが無かったから、ルイズかサイトか、と思っていると、知らない子供だった。上等な服を着ているので貴族の子供だろうか？

「こんばんわ。」

「こんばんわ。どうしたんだ？こんなところに。」

場所が場所だから貴族派の警戒はしなくてもいいし、相手が子供な

ので声が自然と柔和になった。

「えつとね、僕、ナーワ・ド・イヴァンテ。他国から来られたお客様と、お話がしたくて。」

「俺はナナシだ。よろしくな。でも、こんな遅くに一人で来たりして構わなかったのか？」

「うん、爺やには止められたけど、どうしても話したかったんだ。

その、僕は明日には会えなくなるから。」

「そうか……。」

俺はナーワの言葉に、少し言葉のトーンが下がった。この城が陥とされれば、貴族派たちは王城に残っている者たちを一掃するだろう。そうなれば、パーティーのときにいた煌びやかな衣装を纏った女性達を始めとする非戦闘員も殺されることになるだろう。

そうさせないために俺たちが乗ってきた船を避難にあてること王は言っていたが、しかし脱出した先もそう平坦な道ではないだろう。

貴族派が存在する限り、彼らは追い立てられ続ける。戦争で負けた相手を生かしていても、禍根にしかならないのだから。

そして、この子もその一人ということか。俺の痛ましげな視線が判ったのだろう。ナーワは取り繕うように笑顔を見せ、俺のことを色々と聞き始めた。

俺も沈みかけた空気を追い払うように自分のことを話していく。貴族の従者ではあるが、同時に使い魔でもあること。以前いた場所では狩りを生業にしていたこと。俺が住んでいた（ということになっている）東方では、野生の竜が数多くいて、それを退治する仕事もあったこと。

言っている途中、多分、俺がやっていることは唯の自己満足にしかならないのだろう、という内心を隠したまま。

暫らく話していると、ドアがノックされた。ナーワは青い顔になって「爺やが来た！」と小さな声で喋りつつ頭を抱えている。

俺はナーワをベッドに潜り込ませると、布団をその上に掛け、外からは見えないようにしてからドアを開けた。はたして、そこにいた

のはワルドだった。皇太子の部屋でのルイズの扱いが気に入らなかつたのか、いつも以上に視線が冷たい。

「どうしたんですか？」

「いや、すまない。さっきもう一人の彼、サイト君にも言ったのだがね。君には何も言っていなかったことを思い出して、時間が遅いとも思っただが、部屋を訪ねることにしたのだ。」

そう言いつつ、ワルドはドアの中には入りつつも、部屋の中には入ってこない。なのでドアは開いたままだ。長話をする気は無い、ということか。

周囲を見回しているが、多分ワルドとかルイズが案内された客室と違って間に合わせのものだから、特に面白いものなんか無いと思うが。

ベッドの上にいるナーワは判りづらくしているので、まあばれないだろうし。

「なんです？」

「明日、ぼくとルイズはここで結婚式を挙げる。」

聞いた瞬間、俺は目の前にいる男が実は相当なアホなんだなあ、と納得した。思えば、態々騒ぎの関係者としての名前を残したりと、疑わせるような箇所も所々あったのだが、あまり考えないようになっていたのだ。しかし、今の発言で確信した。コイツは満場一致でアホだ。案外、今回の任務に就かされたのも、グリフォン隊内でホサれていたとかそんな理由があったのかもしれない。

「是非とも、ぼくたちの婚姻の媒酌を、あの勇敢なウエールズ皇太子にお願いしたくなってね。快く引き受けてくれた。決戦の前に、ぼくたちは式を挙げる。きみも出席するかね。」

俺は一応、お守りとしての立場から、頷いた。ワルドはほっとした表情で「サイト君のほうは、明日の便でトリスティンまで帰るそうなのでね。結婚式に出席者がいない、というのも締まらないだろう？」と言って笑った。俺も苦笑を返す。

その瞬間。

ワルドの笑顔が固まったように見え、次に俺の方に向けて崩れ落ちた。背中に血を噴出す傷を負った状態で。短い間とはいえ、一緒に旅をしてきた仲間が深手を負ったこと。そして、倒れたワルドを支えながらも、その向こうに白い仮面が見えた瞬間、俺の思考は一つの事柄に塗りつぶされた。

いつも無意識にやっている右の指を弾くことすらせず、その白い仮面に向けて数十の剣を呼び出し、ぶつけようとする。衝撃。

それは全くの予想外なことに、俺の背後からだった。俺の心臓の上から突き出た切っ先。

顔を後ろに向けると、その柄を握っているのは、ナーワだった。いや、ナーワだと名乗っていた別の何かだった。

そこには、俺の話しに表情豊かに笑っていた少年の面影は無い。ただ、伽藍洞になった人形の目が俺を見返していた。

何故、と言おうとして口から血が溢れる。そのまま身体に力が入らなくなり、俺は胸に光を纏ったナイフ、と呼ぶには少々長い刃物を生やしたまま床に倒れこんだ。

何故。

どうして、貴族派がここに。

何故、ナーワがこんなことを。

そんな疑問が頭に上るが、誰も答えてはくれない。ただ、低くなつた視線の先で白い仮面の男がそれを外し、その下から出てきたのは俺の隣で倒れているはずのワルドだった。

「・・・ずっと考えていた。どうすれば私の目的の障害物が確実に取り除けるのかを。私は君の戦闘をこれまで2度見せてもらった。傭兵どものときと、この私自身が相手のときと。その結果、判ったのはどうやっても正攻法では君に勝つことが出来ない、という無惨な事実だ。しかも『土くれ』からの情報ではまだ君には隠し玉まであるらしい。なら、そんな笑ってしまうほど大きな実力差がある相手にそれでもどうにかして勝とうと思うのなら、どうするべきなの

か。・・・これが、私の答えだ。そして、それは今倒れ伏している君の姿でもある。ああ、安心したまえ。ルイズたちには君が一足先にトリスティンに帰国した、と伝えておこう。明日、我らが王城に攻め込むまで、この部屋で過ごすといい。まあ、あと数分もすれば死んでしまうとは思うが、ね。」

俺はそれを、力が抜けていく身体から呆然と聞いていた。

ワルドが魔法を詠唱する言葉だけが、虚ろに響く。

知略なら、お前より上だッ！（後書き）

二巻分を始めたとき、こうしよう、と思ったところがようやく書けました。

あと、次のタバサの冒険編は本当にどうしましょうかねえ？無理に入れようと思えば入らないこともないんですが、その分駆け足になるような気が……。いっそ、三巻の序盤を風呂イベントあたりまでざっくり省略すべきか？それなら、戦争が終わって3、4日後と
いうことになりますし。

最近の貴族は、薄型軽量の割りには、頑丈に出来たぞ。(前書き)

ある一定のラインを超えると、眠くても眠れないんですよ。とい
うか、当直明けで3時間以上眠れたことが無い……。

最近の貴族は、薄型軽量の割りには、頑丈に出来てたぜ。

痛い。

胸が痛い。

全身が痛い。

痛みを感じるのは、生きているからだが、しかしそんなことはどうでもいい。

裏切られたことすら、どうでもいい。

ただ、貫かれた胸と、焼け焦がされた全身が痛い。

溺れているかのように思考が纏まらない。

頭は痛みしか伝えない。

痛みが、正常な思考を奪っていく。

痛い。

痛い。

痛くて痛くてたまらない。

もう何度気絶したことだろうか。

その度に、さらに増した痛みで覚醒させられている。

痛い。

時間の感覚はとっくに無くなっている。

痛い。

痛い。

理由と一緒に痛みを忘れてしまいたい。

痛い。痛い。痛い。

全身を掻き毟って血を流しきればこの痛みもきえるだろうか。

痛い。

痛い。

――だが。俺がここで膝をつけばどうなる？

――殺されるルイズ。

――素知らぬ顔でトリスティンに帰国するワルド。

――侵攻されるトリステイン。
――犯され、殺されていく見知った顔たち。
――それがまだ、止められるというなら。
――ここで終わってしまうわけにはいかない。

俺は、痛みに内面を切り裂かれた頭脳でどうにかワルドに対する怒りを燃やすことでアドレナリンを分泌させ、狩人としての痛みの耐性と合わせて、やっと思考を痛みの渦から退避させた。

ワルドは身動きの取れない俺にサイトにも使った電撃の魔法を当たした後、ナーワを連れて出て行った。

普通は死ぬような傷を負わされたので、その生死を確認しなかったが、そのおかげで俺はまだ生きている。

もつとも、ダメージが大き過ぎてまるで体が動かせない。

サイトのやつ、こんな魔法を食らって何故両手の火傷くらいで済んでるんだ？

突貫作業で傷の修復をしているが、さすがに明日の朝までに完全な状態に戻すのは不可能だ。

とりあえず、動いても傷が開かない程度を考えていた方が良かったらう。

そもそも、ワルドがこんなことをしたのは、奴の発言を信用するのなら、俺がその目的達成の妨げになると確信してのものだ。

そして、奴は貴族派。

なら、目的というのは手紙の奪取と王軍の司令官である皇太子の暗殺、といったところか。

仮にそれが出来ても敵地のど真ん中でどうやって脱出するんだ？と思ったが、そういえばルイズと結婚すると言っていたな。

しかも、皇太子の媒酌で。

あちゃー。

明日の朝にはワルドの望む物が2つとも式場に揃うわけだ。そして、

ワルドの言からすれば、結婚式の同席者はごく少数、もしくは皆無。目的を達成すればすぐさま城の外にいる貴族派に合流すれば無問題。サイトが俺と同じように片付けられたのかどうかは判らないが、少なくとも式場には現れないと思っただ方が良いだろう。ルイズも戦力としては問題外。皇太子は未知数だが、現役の軍人に不意を突かれれば、かなり旗色は悪いだろう。

拙いな。状況はほとんど詰まっている。

唯一、奴の予想外の俺にしたってまともに戦うことも出来ない。

数日もすれば傷痕すら無くなるし、せめて丸1日の時間さえあればほぼ完全まで回復出来るが、今のままでは、その頃には改めて殺されているだろう。

気が滅入るが、うんざりするほど現実的な想像に、とりあえず別のことを考えることにする。

しかし、ワルドはトリステインの貴族なのに何故アルビオンの貴族派についているんだ？

確かに内通者がいれば敵の情報が簡単に手に入るのだから有益だ。

だが、それを国の中枢に潜り込ませるとなると相応の労力が必要になる。

特に、トリステインは貴族と王族至上主義の国家。

単純な能力主義の組織よりもよほど難しいと思うが、現実にワルドは貴族派としての行動をしている。

そういえば、王女の話では貴族派が攻めてくる可能性を示唆していたか。だとすれば、ワルドは貴族派がトリステインを攻める時を見越して陣営に引き込まれた？

まあ今回の任務も、他全員が死亡するか現場を見なければ、確固たる立場を持つ貴族であるワルドを疑う人間などいないだろう。俺だって心臓を刺されて電撃で丸焼きにされるまでは気づかなかつたのだから。

してみると、ルイズは途中で手紙を奪われるか、殺されるかするわけか？

疑問は他にもある。

ナーワの存在と2人いたワルドのことだ。

ナーワが、あの子が操られているのか、それとも最初からブラフだったのか、あるいは人間ではなくなにか別の、それこそ人形のような物だったのか。それは判らない。

2人のワルドについても、奴が使用していた系統から、『風』の魔法であることが想像出来るだけだ。

おそらくは両方とも魔法が関わるような物だろうから門外漢の俺にはさっぱりだ。それでも、ワルドが両者をかなり有効に使用したことは判る。

奴はこの任務の道中で同行者の俺たちを見極めていたのだろう。そして、俺を強敵だと判断したからこそ、なりふり構わずあんな手を使用したのだろう。

そこまで考え、右手を床についてどうにか体を起こす。

たったそれだけの動作がひどい苦行に感じられた。それに、心臓の痛みがぶり返してうずくまりそうになる。

それでも、痛みを我慢して左肩を壁にぶつけるように預けると、そのまま足の力で立ち上がった。

うわ、痛くて泣きそう。

でも、今のうちに行かなくては。

俺がワルドにやられたと傷痕を見せながら言い回しても、この城内の人間やルイズでは信じるまでに時間がかかるだろう。サイトは信じるかもしれないが、しかしワルドの相手をさせるには少し不安が残る。

それに、刺された人間がそんなことをしていれば、当然小さくない騒ぎになる。

俺が説得をしているうちにワルドはルイズを確保し、出来るなら皇太子の首級を挙げて逃亡するだけだ。

先行きは不透明な上にかなり暗い。

それでも、今出来ることくらいはしておきたい。たればを言って

もしようがないからこそ、そうならないためにこそ、努力するべきなのだ。

そう考え、俺はドアを開け、ある場所を目指してヨタヨタと歩き出した。

「この旅で、きみの心をつかむために、随分努力したんだが・・・こうなっては仕方無い。ならば目的の一つは諦めよう。」

「目的？」

「そうだ。この旅におけるぼくの目的は三つあった。その二つが達成できただけでも、よしとしなければな。」

「達成？二つ？どういうこと？」

「まず一つは君だ。ルイズ。君を手に入れる事だ。しかし、これは果たせないようだ。」

「当たり前じゃないの！」

「二つ目の目的は、ルイズ、君のポケットに入っている、アンリエッタの手紙だ。」

「ワルド、貴方・・・。」

「そして三つ目・・・。」

ワルドの言葉に、相手の素性を察した皇太子が呪文を詠唱するが、遅い。ワルドは素早く皇太子の懐に潜り込むと、その杖の先端を剣のように貫こうとする。

が、その直前、何かに気付いたワルドは咄嗟に身体をそらし、直後頭があつたあたりを高速で通り過ぎた矢を避けた。

皇太子からは離れたが、しかし千載一遇のチャンスを逃したのはかなり痛い。

俺は身を隠していた箱の陰から出た。多分、夕べワルドが言った説明を信じていたのだろう、ルイズと皇太子が驚いた顔で駆け寄ってくる。

ワルドは鍍金の剥げた顔つきで、忌々しそうに俺を見、鼻を鳴らし

た。

「・・・これは驚いた。昨夜、念入りに殺したと思っていたのだが・・・」

「たかが、心臓をぶち抜いて全身を焼け焦げさせた程度で俺が死ぬと思つた時点で、甘いんだよ。」

俺は獰猛な笑みを返すが、状況は依然として不味い。今の俺は心臓の傷を契約した者たちの力を借りてようやく抑えている状態だ。

昨日皇太子に私室に行くまでの道すがら、城内を案内されたときの記憶をたどりながら、ここまで来たのは良かったが、しかしそれで力尽き、ワルドたちに先んじて皇太子が入ってくる直前まで気絶していたのだ。

あれから数時間が経ち、傷も大多数が癒えたが、やはり胸に刃物を突立てられた状態で電撃を受けたのが不味かつたらしい。特に酷いのが心臓へのダメージだ。

今も平然と立っているが、武器化するのは1匹が限度、しかも完全な装備は無理らしい。当然解放するのは不可能だ。無理をすれば、今は塞がっている心臓の穴を開くことになる。そのせいで、剣ではなく矢を使用したのだが、失敗した。

直前までナルガXシリーズを着て身を隠していたおかげで誰にも気づかなかつたが、矢を使用するために戻したせいで、今の隠行が不可能な俺の気配はワルドにバレてしまった。

真正面から今の状態で傷を負わせられるほど、簡単な相手でもないなら、出来ることは一つだ。

俺は皇太子とルイズの前に出ると、弓を戻しクシャナXシリーズを装備した。隙間無く全身を覆いながらも優美なラインを描く鎧は、実際のところ、今の俺には少々重いが、仕方ない。

ワルドが短く詠唱し、俺に向けて杖を振る。咄嗟に皇太子が俺の前に出ようとしますが、俺はその肩を掴んで自分の後方に押すと、龍風圧を発動させた。

俺に迫っていた不可視の風の塊が、乱数的に攪拌された風にかき消

される。

苦し紛れの策だったが、上手くいったらしい。

当たり前だ。たかが人間如きが我の風になうはずも無い。

クーラの偉そうな声が頭蓋内に響く。だが、俺にはそれに反応するだけの余裕が無い。

思った以上に龍風圧の負担が大きい。

「今の俺には・・・盾になるのが精一杯だ・・・。今のうちに、ワルドを・・・。」

俺が声を絞り出すと、瞠目していた2人は、ワルドに向けて呪文を唱え始めた。

最近の貴族は、薄型軽量の割りには、頑丈に出来たぜ。（後書き）

書き忘れていましたが、前回の皇太子の部屋でのルイズの発言は、「平民は貴族や王族の政策に従うべき」という意味で言いました。なんか改めて読むと、平民なんてどうでもいい！的なとり方をしそ
うになる発言だったので。

貧弱、貧弱ウ！（前書き）

今日は休みだったんですが、不思議と休んだ記憶がありませんね。もしかして健忘症でしょうか。

貧弱、貧弱ウ！

ワルドの攻撃は熾烈を極めた。

戦場になった礼拝堂は叩きつけられた魔法で、内装が滅茶苦茶になっ
ている。

いくつかの豪華なシャンデリアが落下し、床と長椅子は抉られ、入
り口の扉も切り倒されている。

相手が魔法と近接戦闘両方に長けたメイジであるのに対し、こちら
は、威力は高くても範囲が狭くノーコンなルイズ、強い風魔法を使
えるが戦闘者としては明らかにワルドより劣る皇太子、風魔法を無
効化できても攻撃に転じることが出来ない俺と、かなりきつい陣容
だ。

正直、俺が要所要所で龍風圧でワルドの魔法を防がなければ、2人
共あっさりと殺されているだろう。

そして、俺の体力の限界も近い。

鎧を纏っていることで傷や体力の絶対値が低下することに加え、龍
風圧を使用していることで余計にそれが削られていつている。普段
なら気にするほどでも無いのだが、今の状態では致命的だ。

ナルガ×シリーズの隠密スキルではこんなことは無かったから、発
揮するスキルによって、動的か静的かで消耗が違うのかもしれない。
そんな新しい発見も、このままだと無用の長物になりそうだ。

俺の足がふらついてきたところに、ワルドがすかさず接近し、皇太
子にそうしようとしたように、杖を突き出す。ム力つくことに、夕
べ刺されたのと同じく心臓の位置を狙っている。

コイツは俺が怯むとでも思ってるのか？

筋力はともかく、動体視力はそのままだから見え見えなんだよ！

俺は突き出してくる杖を持った手に自分の腕を絡ませながら前進す
るとクロスカウターの要領で、逆にワルドの頬をぶん殴った。

手甲をつけたままなので、素手でやるよりは効いただろう。

予想外の俺の行動に踏鞴をふんでワルドが後退する。そのまま畳み掛けたいが、あ、いかん。痛い。

思いつきり身体を動かしたせいで心臓に負担がかかったか。

クシヤナXシリーズは目以外は完全に覆われている鎧なので、下手な動きを見せなければ俺が傷の痛みに泣きそうになっていることは判るまい。

ワルドに向けて小さな竜巻のような風魔法と、爆発が放たれるが、その頃には数メートル後ろに後退している。

「どうした？一度殺したはずの相手をもう一度殺すこともできないのか？」

「・・・安い挑発だな。そんなことで私が乗ってくるんでも？」

「ハッ！頼に拳の痕をつけられて言っても格好がつかないな。なに、薄汚いあんたには、丁度お似合いだよ。」

俺が言つと、ワルドの視線からさらに温度が消え去った。羽帽子の下で、俺を射殺すために方策を考えているんだろう。

たとえ裏切り者になっても平民ごときに舐められるのは我慢がならないってか？

馬鹿馬鹿しい。裏切る以上はどんな汚辱や雑言も覚悟しとけつてんだ。

本当なら気分にかかせてガンガン攻めたいところだが、圧倒的不利なこの状況でそれをすれば、まず邪魔な防御役の俺を片付けた後に順次他の2人も死体にされるだろうから、無理に出ることも出来ないのも不完全燃焼だが。

「よかるう。そこまで言うのなら、貴様らに真に支配する者と打ち倒される者の違いを見せてやろう！」

ワルドがそう言い、詠唱を開始する。

「『偏在』を使う気か！」

ワルドの詠唱を聞いた瞬間、皇太子はそう言い、自分も呪文を詠唱を始める。相変わらずルイズの爆発魔法は当たらない。

偏在？何のことだ？風の魔法はどうでもいい授業しかないギトー

が受け持っているせいによく知らないのだ。

そう思っていると俺の疑問はほどなく解消された。

それも、最悪の形で。

詠唱が終わると、ワルドの身体がブレるように横にずれ、5人になった。

「分身か？なんでもありだな、魔法つてやつは！」

「ただの『分身』ではない。風のユビキタス^{偏在}……。風は偏在する。風の吹くところ、何処となくさ迷い現れ、その距離は意思の力に比例する。」

「道中で戦ったり、夕べ俺を襲ったときに囿につかったのはそれか。」

「その通り。一瞬でも虚を突く隙が欲しかったのだが、思った以上に上手くいったよ。」

ワルドはそういうと満足げな表情を浮かべる。皇太子の『偏在』が完成し、こちらは3人に増えた。

数の上では5対5だが、もしこの『偏在』が使用者と同等の能力を兼ね備えているなら、正直、拙い。というか、備えているんだろう。船着場の近くで戦った仮面のメイジは少なくとも並みの相手ではなかったし。

皇太子は防御主体で前衛を。俺はルイズを守りつつ、魔法で飛び散った瓦礫を指弾で弾き、牽制を。ルイズは後衛で、呪文を詠唱しているワルドを狙い打つ。

即席にしては的確な役割配分だが、やはり全体的な能力差が見る見るうちにそれを押し返し、皇太子の偏在が早くも一体消された。しかし、それと同時に敵の後衛で呪文を詠唱していたワルドの顔が爆発する！

顔を吹き飛ばされたワルドは崩れ落ちる前に身体が透けていき、最後には消えた。

くそ、偏在だったか。

「あ、当たったわ！私の魔法が！」

ルイズがやつと当たったことに喜んでいるが、こっちはまた皇太子の偏在が消されそうなんだぞ！

「おのれッ！」

消えていった偏在を見ていた、もう一人後衛で詠唱をしていたワルドが激昂すると、致命傷を負いそうになっていた偏在と、かなりの深手を受けた皇太子本体を置いて、三人のワルドがこちらにかかつてくる！

してみるとまだ残っているのが本体か。そう考えるが、しかし先にそちらを叩いている暇は無い。棒立ちになっていたルイズの前に立つと、龍風圧を展開し、魔法に備える。だが、偏在たちはそのム力つく顔を歪めると、体当たりを仕掛けてきた。避ければすぐに魔法を唱え、後ろで逃げ送れるであろうルイズを串刺しにするだろう。そう考え、俺は正面から体当たりを受けた。

龍風圧で偏在が吹き飛ばされるが、同時に俺もダメージからその場に膝をつく。鎧も装備していられなくなって紋章に戻ってしまった。俺はとうとう限界に達し、荒い息をついて両手を床についている。腹が立つが、向いている方向からしてワルドに許しを請うかのよう

に。
ルイズは俺に近寄ろうとして解除前の龍風圧を喰らったのだろう、壁の近くまで吹き飛ばされているし、皇太子は俺の視線の先で、倒れたまま同じく荒い息をついている。

孤立無援。助けは来ない。

「中々のしぶとさだったよ。だが、私の勝ちだ。・・・何か、言い残したいことがあれば聞こうか？」

嫌味ったらしく言うワルドを見上げると、俺は唇を片方だけ吊り上げた。

「いくらお前の背が高いからって便所虫を見上げるのは屈辱だぜ？足を切り落として俺に見下されるのが礼儀じゃねえのか？」

ワルドは無言で俺の頭を蹴り飛ばした。口の中に鉄の味が広がる。切れたか。

数メートルも転がりながら、いつもならびくともしないんだがなあ、と負け惜しみの思考が頭をよぎる。

「おいおい、呼び方が気に入らなかつたのなら、謝るよ。『糞虫』『蛆』『蠅の幼虫』。なんかもう生理的にダメな奴』なんでも好きな呼ばれ方を選んでくれや。」

ワルドの顔を見上げ、通じるかは判らないが中指を立てた下品なハンドサインをした俺が言うと、余裕の表情を消し去り、剣を振り上げた。それは一直線に俺の頭に向かってくる。今の俺じゃあ避けられないから、あー、こりゃ死んだな。

そう思つて、それでもその剣を睨んでいると、当たる直前、俺の頭と剣の間に影が割り込んだ！

「よう、調子悪そうだな。風邪か？」

パーカー姿で錆びた剣を持ち、偏在とつばぜり合いをしている後姿はそう言った。

「遅えよ、馬鹿鹿。」

いつかの焼き直しだな、と思いつつ俺が言うと、サイトは肩を揺らした。笑つたようだ。

「なぜここが判つた？ガンダールヴ。・・・そうか、なるほど、主人の危機が目につつたか。」

「よくもルイズを騙しやがったな。それに、ナナシまで・・・。」

「目的のためには、手段を選んでおれぬのでね。」

「ルイズは手前を信じていたんだぞ！婚約者の手前を・・・、幼い頃の憧れだつた手前を・・・。」

「信じるのはそちらの勝手だ。」

ワルドがそう言うと、サイトは飛び掛つた。

俺はルイズのついでか。まあいいけど。

サイトと斬りあっているあれは、多分本体か。偏在を使用するつもりは無いらしく、悠然と見守らせている。それでも、今ダウンしている俺たちが妙な動きをしようとすればすぐに殺しにかかるだろう。それに本体が相手をするような危険を冒すのも無理も無いか。サイ

トのことは格下だと判断していたからこそ、見逃していたんだし。剣技でも負けている上に、ワールドには魔法もある。

今も、サイトが壁のちかくまで風魔法で吹っ飛ばされた。

「どうした？ガンダールヴ。動きが鈍いではないか。精々、ぼくを楽しませるんだな。」

「思い出した！そうか・・・、ガンダールヴか！」

「なんだよ！」

「いやあ、俺は昔、お前に握られていたぜ。ガンダールヴ。でも、忘れてた。なにせ、今から六千年も昔の話だ。」

「寝言言つてんじゃねえ！」

「懐かしいねえ。泣けるねえ。そうかあ、いやあ、なんか懐かしい気がしてたが、そうか。相棒、あのガンダールヴか。」

ワールドと斬り合いをしているというのに、デルフののんびりとした声が響く。それを持って戦っているサイトも苛立っているようだ。声を荒げているが、デルフは気にした様子が無い。

「嬉しいねえ！そう来なくっちゃいけねえ！俺もこんな格好してる場合じゃあねえ！」

そう言つと、デルフの刀身が輝き始めた。突然のことに、サイトは思わず動きをとめる。

バカ、と俺が思わず悪態をついていると、ワールドがサイトを狙い、杖を振り下ろす。杖の先から生まれた風の塊は一直線にサイトに向かつていく。盾を出そうにも、今は無理だ。

「サイト！」

最悪の展開を想像し俺が叫ぶ先で、ワールドの風魔法は突然刀身に吸い込まれた。俺の龍風圧が消し飛ばしたのとは違う、刀身に触れた瞬間、そこに入り込んだのだ。

デルフ以外にそれを見ていた（そもそもデルフが人間的な感覚で”見て”いるかどうかは謎だが。）全員が虚をつかれ、立ち尽くす。

サイトの手に握られていたのは、鏝が全て落ち、輝くような、しかし飾り物とは違う鋭い輝きを持った剣だった。

貧弱、貧弱ウ！（後書き）

中途半端ですが、時間の都合上、今日はここまでということ。本当は今日中に終わらせる心算だったんですけどねー。本
負け惜しみにしかありませんか。

決着ウーーーーーッ!! (前書き)

今回はなにかとグダグダな上に妙に駆け足になっています。

それもこれも前に書いたレポートが全く進んでいないせいなんです

!・・・多分。

あと、ストックがついに切れました。

決着ウーーーーーッ!!

魔法を吸収されたワールドは、苛立たしげに、しかし冷静に自分は身を退き、偏在に戦わせ始めた。自分に危険が無く、相手の能力を測れるのだから、偏在とは実に便利だ。

デルフが魔法を無効化してくれるお陰でサイトも善戦しているが、すぐに偏在が魔法から剣技に移行したことで、押され始める。

サイトは魔法吸収以外に機能が無いデルフにクレームをつけているが、本来はそれだけでもかなりメイジ相手に優位に立てるんだがなあ。

俺はそのうちに、皇太子の元に四つん這いの状態で近寄った。ワールドはサイトと偏在たちの戦いをじっと見守っているので、それに気付かない。あるいは、気付いていて何も出来ないといふんでいるのか。皇太子は浅くない傷を負ってうつ伏せに倒れている。周囲の床には、じつとりと血が広がっていた。

「・・・大丈夫ですか？」

「し、正直、きついね。多分、君ほどではないと思うが。」

「俺は多少頑丈なつくりをしていますので。」

「心臓を貫かれておいて、多少、か。羨ましいかぎりだ。」

皇太子は自嘲気味にそう言った。まあ実際人間離れした生命力だが、怪我をすれば痛みはあるし、多分これ以上無茶をすれば死ぬだろうけど。

「ワールドがこんなことをしたということは、おそらく貴族派はそれほど時間をおかず、この城に攻め込んでくるでしょう。王党派は、貴方という司令官を失ったまま、それと戦うことになる。」

「ああ、そうなるだろう。業腹ではあるが、私がこの場所で死ぬことはもう間違い無いようだ。・・・ままならないものだね。せめて戦場で散って逝きたかったのだが。」

「生まれ方を選べる人間が居ないように、死に方を選べる人間も

また、居ない。』・・・俺が以前いた場所にあつた諺です。」

「含蓄の、ある言葉だね。実に、今の私に、相応しい。・・・使い魔君、いや、ナナシ君と、言ったね。君に、頼みたいことがある。」
「なんですか？」

「・・・この指輪を、アンリエッタに、届けて欲しい。なに、私がつけていても、どうせ逆賊どもに、奪われるのだ。なんなら、君が貰ってしまったても、構わんが・・・。」

「必ず、お渡しします・・・。」

俺は皇太子がのろのろと外した指輪を受け取ると、ポケットにそれを入れた。

皇太子は俺が指輪を受け取ったのを見ると、「ありがとう。」と言
い最後に満足したように、大きな息を吸い、そしてぐったりと寝そべった。俺は、手をあてて目を閉じさせてやると、受け取った指輪を握り締める。

暗殺することすら考えていた相手に、こんなことを頼まれるのはどんな因果があつたというのだろう。少なくとも、俺は彼に対して友好的な態度をとつた覚えは無い。恐らくは、最後の我俣を聞いてくれそうな相手が他にいなかったからなんだろう。頭の中の冷静な部分はそう判断するが、それでも不思議と俺とは相容れない価値観を持ちながらも、その誇り高さを貫いた皇太子の願いを叶えたいと思えた。

一人目の死者が出た礼拝堂での戦闘はまだ続いている。

サイトは三方から攻められて苦戦、と呼ぶのも憚られる有様だ。未だに傷らしい傷を作っていないのは、ワルドが弄っているからか。もうすぐ援軍が来るから、それまでの余興くらいに思われているのかもしれない。

苦戦するサイトに、助太刀しようとしたのか、ルイズが起きだして、杖を構える。呪文の詠唱を始めるが、さすがに二度の失敗は無いのか、偏在の一体が無造作に杖を振るった。

延長線上にいたルイズが、ゴムボールのように吹っ飛ぶ。今度は壁

に背中から強くぶつかり、ずるずると背を壁に預けたまま崩れ落ちた。

「ルイズ！」

「馬鹿野郎！前を見る！手前の敵はどっちに居る！手前の守りたい奴はどっちに居る！自分の向かう場所を勘違いするんじゃないやねえ！」それに気を取られそうになったサイトに慌てて叱咤すると、俺は多少は回復してきたお陰で、立ち上がる。当然、そうになると、ワールド本体がこちらを警戒してくるが、そこからが奴の悪夢だった。

「おおおおおおおおおッ！！！」

サイトは偏在たちの剣先を受け止めると、その怒りを込めた咆哮をあげながら初めて攻勢にたった。ワールド達は驚いたような顔をしてそれを捌いていくが、さっきとは逆に、サイトの剣に三人がかりでやっとなっている。

しかも、徐々にそのスピードが上がっていく。

動きは俺との訓練で多少はマシにはなっているが、今もサイトの剣術は素人に毛が生えたような腕前しかない。だが、そんな素人でも他人との体感時間が違えば、それは戦う上で絶対的なアドバンテージになる。それこそ、多少並以上の剣や魔法の腕前をもっていたからといって、易々と勝てないほどに。

サイトの左手でルーンが今までになく輝きを増している。恐らく、今のサイトの状態と無関係ではないだろう。

俺のはそうでもないが、ルーンというのは、持ち主の感情にその能力の増減をさせられるものなのだろうか。だとすれば、今のサイトはワールドに怒り狂っているのだろう。

「ふん、愚かなことだ。自分を認めぬルイズを助けるために自ら死地に戻ったか。けっして報われぬ想いのために！ああ、貴様は滑稽だな！同情を慕情と勘違いするとは！」

「言ってるよ、糞舐め野郎。手前には判んねえよ。」

「ほう、なら貴様は判るとも言うのか！それとも、同じ使い魔同士、恋愛ごっこでもしていたのか？」

ワールドが焦りを隠すためだろう、サイトに話しかけて心を揺さぶろうとしていたので、それを止めようとするが、思わぬところにおはちが回ってきた。言っている間にも、サイトは偏在たちを削っている。

それはともかく・・・、俺とサイトが、だと？

脳裏にベッドの上でサイトに組み敷かれている自分の姿が浮かんだ。何故か全裸で、恥ずかしげに胸を隠したりなんかした格好の。

次の瞬間にはその想像は抹殺滅却破棄して、自分の出せる、最大の殺気を纏わせた言葉が口から出た。

「・・・んだとコラ。もっぺん言ってみやがれ。」

「何度でも言つてやろう！貴様はその男に懸想ちゅベツ！？」

一瞬で距離を詰めた俺の右拳がワールドの顔を完全に陥没させ、ワールドは後頭部から脳漿を撒き散らしながら意味の判らない言葉とともに絶命した。そして俺は床に転がって怒りで忘れていた心臓の痛みに悶え苦しんでいる。

くおおお！痛い！痛い！

残ったワールドたち（俺が今殺したのは偏在だったらしい。）はサイトの剣に押され、徐々に傷を増やしていく。

「恋なんかじゃねえ！ただ、顔を見てるとときどきするだけだ！理由なんかどうだっていいい！だからルイズはオレが守る！」

「いいぞ！いいぞ相棒！そう！その調子だ！思い出したぜ！おれの知ってる『ガンダールヴ』もそうやって力を溜めてた！いいか相棒！『ガンダールヴ』の強さは心の震えで決まる！怒り！悲しみ！愛！喜び！なんだっていい！とにかく心を震わせな、おれのガンダールヴ！」

意味の無い、しかし意志の硬い言葉をサイトが言ったたび、左手のルーンが輝き、それと呼応するようにデルフの刀身も光る。そして、一層スピードを上げたサイトは、一人、2人と偏在を切り捨てていった。

「この程度でッ！！」

最後に残った本体に肉薄するサイトに、ワールドは消えかけた二体目を盾にして杖を振り下ろした。一瞬の停滞。そして次に切り裂かれたのは杖を持ったワールドの腕だった。隻腕になったワールドが床に崩れ落ちる。長かったワールドとの戦いが、ここに決着した。

「ふん、目的の一つが達成できただけでよしとしよう。この城は、程なくして我ら『レコン・キスタ』が占拠する。そうなれば、貴様らもお終いだ！」

ワールドは捨て台詞を言っただけで逃げていった。追撃しようにも、ルイズは気絶、サイトはルーンを長時間使いすぎたせいで身体に負担がかかり動けない、俺はついに心臓の傷と食道にあいた穴が開いたせいで吐血しているし、痛みで当然動けない。というかあと数分で本当に死ぬ。一時の怒りに身を任せた結果がこれだ。

それでも、サイトはデルフを杖代わりにして、立ち上がるうとしている。

あと数分もすれば、5万の軍勢がこの城に乗り込んでくるといっている。

痛みを堪えながらここから脱出する手を考えるが、どうにも詰んでいる。

3 - 3 = 0 か。

3 - 1 = 2 か。

迷うことなく俺は後者を選んだ。

俺は内心で今は見えない位置にある皇太子の遺体に謝る。約束は、守れそうにない。

「サイト、よく、きけ。もうすぐ、俺の、仲間を、全て、解放する。レウに、乗って、お前、は、ルイズを、連れて、逃げる。」

痛みのせいで、俺は途切れ途切れになる言葉で、それでも言った。この状況で一人でも多くこの場から生き残らせようとするのなら、

それは既に死ぬことが確定している俺を切り捨てることでしかありえない。

「・・・お前はどうなるんだよ。」

「知って、いるだろう、俺は、もう、助からない。決めて、くれ。早く。時間が、もう無い。」

俺の言葉を聞いたサイトは泣きそうな顔になっていた。俺の土気色になった顔は多分、見ていて楽しいものではないのだろうが、そのあたりは勘弁してほしい。

「・・・相棒、お師匠さんの言葉を聞いてやれ。」

「ハッ、お前、は。いつまでも、乳離れ、できな、い餓鬼じゃ、ねえんだろ？」

「・・・すまねえ。」

俺はその言葉をきくと、目を閉じた。あと数秒で俺の心臓はその機能を失い、そのさらに数秒後には俺という人格も完全に失われるだろう。そうすれば、仲間たちは一斉に俺の中から出て、貴族派と戦闘することになる。

2人が逃げ切る間だけだから、貴族派もしつこくは追撃すまい、そう考え、自分の終わりを待つ。

おかしい。

いつまでたつても終わりにならないんだが。というか、いつの間にか胸の痛みもほとんどなくなっている。何故だ？

息苦しさも無いから、吐血も止まったのか？

目を閉じているので、周囲の状況も判らない。少なくとも、死んではいないようだが。

命が助かったはずなのになんだか詐欺にあっているような気分で目を開ける。そこには相変わらず涙を浮かべたサイトがいる。

いや、なんかすまん。

「悪い、なんか死にぞこなった。」

「・・・よかった。」

「だが、どうする？ワルドの言葉は多分、本当だ。もうすぐ、この城に貴族派がやってくるだろう。」

「関係ねえ。」

サイトはそう言い、立ち上がった。もう、ルーンは光っていない。決闘のときと同じように身体が出来上がっていないのに無理をしすぎたのだろう。

それでも、入り口を睨みつけてデルフを構えていると、唐突にルイ

ズの近くの床が盛り上がり、そこから巨大な茶色い毛玉が現れた！
「敵か・・・、つてお前、確かギーシユの使い魔の・・・。」
名前はヴェルダンデだったか。道中、ギーシユがずっと撫で回していた記憶しか無いが。

ヴェルダンデは俺の声を聞かず、そのまま近くで倒れていたルイズに近寄ると、その服を弄り始めた。何故ヴェルダンデがこんなところ！？という根本的な疑問が放置されていたので、どうしたものかと思っていると、ヴェルダンデが出てきた穴の中から、今度はギーシユとキュルケがやってきた。

「・・・なんなんだ、この状況は。」

2人は俺たちを見つけると、驚いたように声を上げた。

「おや、君達！ここにいたのかね！というか、怪我をしているじゃないか！」

「大丈夫なの？」

「あー、今のところ、なんとかな。つーか、なんでここに？」

「あの『土くれ』のおばさんに勝った後、あたしたちはタバサのシルフィードに乗ってアルビオンまで来たのよ。でも、土地勘が無いから困っていたところをぎージユのモグラが穴を掘り始めたの。貴女の猫ちゃん達もそれを手伝って。」

猫？ああ！タバサたちのサポートにつけたアイルーたちのことか！しかし、周囲を見回すが、その姿は無い。どうしたんだ？

「でも、その猫ちゃんたち、さつき貴女がピンチだ、つて言った瞬間消えちゃったのよ。どういうわけかは知らないけど。」

その言葉を聞いて俺は所々穴の開いた服を捲り上げて脱ぐと、そこにアイルー5匹分の紋章があることを確認した。そうか、俺が死ななくてすんだのはこいつらのお陰か。

「ありがとうな。」

「・・・キュルケ、この穴はどこまで続いている？もうすぐ、ここに貴族派の軍勢がやってくるから、逃げなくちゃ・・・つてギーシユ？おい、どうしたんだ！？すっかりしろ！」

俺がキュルケに話を聞いてみると、唐突にギーシュが倒れた。しかも、鼻血を流しながら。

まさか、持病か？

「あー、いいから、貴女はまず服を着なさい。多分、それで治るから。」

「？」

キュルケが言った意味が判らないながらも、言われた通りに服を着ると、ルイズを背負ったサイトがやって来た。

「そういえば子爵は？それに、あんた達なんでそんなにボロボロなの？」

「ワルドは裏切り者だったんだよ。それと戦ってな。」

「そうなの？それじゃあ、任務は？」

「手紙は手に入れたよ。・・・それに、ここにいる人間で生きてるのは俺たちだけだ。」

俺が振り返りながら皇太子の遺体を見てそう言うと、キュルケは理解してくれたようだ。

まずルイズを背負ったサイトが、そして次に目を覚ましたギーシュと、キュルケが。そして最後に俺が穴の中に入るとき、壁に飾られていた絵画を穴の蓋にして、隠した。

かなりの距離を歩くのは、それなりに骨だったが、それでも、死にたくはないので、進まざるをえない。

幸い、俺はアイルーたちのお陰で日常的な動作は支障が無い程度には回復していたので、穴の中を降りていく最中、一番疲れたのは、ルイズを背負っているサイトだろう。ルーンをつかった影響でへとへとになっているはずだが、他の男には任せたくない男心ってところか？

よくわからんが。

穴は大陸の底に続いているようで、しかしヴェルダンデはどうやってここを掘り始めたんだ？という疑問が浮かんだが、その頃には突かれきって眠くなっていたので、深くは考えなかった。

ヴェルダンデを除けば元々そこで待機していたタバサも含めて6という、明らかに定員オーバーな人数にシルフィは嫌そうにしていた。「ラ・ロシエールまで滑空してくれ。半日もあれば、俺も回復してレウを出せるようになるから。」

と説明すると、機嫌を直したようだった。

狭い背中の上でスペースを稼ぐために、俺はいつかのように、タバサを自分の膝の上に乗せた。前と違うのは、俺がタバサの小さな肩の上に顎を乗せて、眠りそうになっていることだろう。

さようなら、アルビオン。

さようなら、誇り高き皇太子。

その思考を最後に、俺の意識は睡魔にさらわれていった。

ある日の服飾対決。(前書き)

ネタ不足に困り、最終的にいつぞや省略した買い物でのバトルを書きました。でも、普通に本編に入れたい方がよかつたんじゃないか？コレ。何故あのとときの私はここを省略したのか。

ある日の服飾対決。

俺は今、人生の無情と言うべきものを噛み締めている。

ルイズに召喚されてからはすっかりお馴染みになった感覚なので、今更な感が強いが、さて今回のコレはどうなんだろう。

そう、姿見の鏡に映った自分に問いかけた。

疲労は無いはずなのに疲れたような色をした自分の顔からは当然、答えは返ってこない。

視線を落とす。そこには、零れんばかりの胸に、申し訳程度の布を纏った褐色の”俺の”肢体があった。

………なんで俺、こんな格好してるんだろう。素になると、余計にきついものがあるんだが。

ことの始まりはルイズとキュルケの口論である。キュルケはサイトの気を引きたい、ルイズは代々の仇敵であるキュルケがそんなことをするのが気に入らない、という思惑があるのだろうが、何故そこに本来無関係であるはずの俺が巻き込まれるんだろう。

当事者であるサイトは目に諦念が滲み出していたが、しかし俺はそうはなりたくない。

勿論、最初は拒否した。そりゃあもう、男としての尊厳を守るために拒否した。だが、俺以外の四人の包囲網はそれを許さず、あれよあれよと言っているうちに、何故か服屋の一室に案内されている。因みに包囲網のうち、一人は面白そう、一人は不明、一人は味方になれ、一人は恥をかくのが自分だけなのが嫌、という理由からだ。観察眼は伊達では無いので、表情を見ていれば、多少は判る。

とりあえず、サイトは後で殴ろう。

「なあ、どうしてもコレ、着なくちゃダメか？」

「ダメよ。着なくちゃ、公平な審査が出来ないじゃないの。」

鏡をみたまま、そこに映っている桃色の頭に聞くが、その答えは俺の人権を一切認めていない冷徹なものだった。他に、赤や青の頭も

見えるが、それが縦に動いていることからして、味方にはなつてくれそうもないな。

俺はため息をつき、この部屋に案内されるとき、ルイズが見繕った服を手にとった。

赤や青の原色が眩しい、どちらかと言えば、というか完全に子供むけっぽい服だ。

なのに大きさは俺も入るフリーサイズなのはどういう異世界マジックなんだろう。それにこの勝負は、キュルケとルイズが服を選んでそのどちらを俺とサイトが選ぶか、という内容だったはずだが、何故ルイズは自分の趣味の服を選ぶのか。

お前は自分が良いと思うものは他人もそう思うと妄信している人なのか？

聞いても意味はないんだろうなあ、やっぱり。

着心地はいいが、何故か不思議と涙が出てきそうになる女モノのワンピースを着てみる。やはり、スカートは股の間がスースーするな。しかし存在しないマイサンには関係の無いその感覚が余計に悲しい意を決して鏡を見る（背中ボタンをとめるために胸を反らすと、何故かルイズに文句を言われた。イヤイヤとは言え、お前の要望を聞いているのに、何この仕打ち？）と、そこには顔色の悪い俺が居た。

服は子供なんかを着ているような色合いのワンピース。

うわ、きつっつー！

いい年をした大人が半袖半ズボンでランドセルを背負っていると変人にしか見えないが、今の俺の格好はそれに近いものがあるな。

当然、俺の顔は渋面になっているが、ルイズと言えば、改心の出来だ、と言わんがかりに笑顔を浮かべている。いや、これを見てそのリアクションを出せる感性を持った人類はお前だけだろ？

「どう、あたしの見立ては？」

「全く駄目だ。これを気に入れって言う方がどうかしてるぞ？」

「なんでよッ！！」

少々お待ちください。 . . .

俺がなでてやっただけで無口になったサイトを部屋の外に放り出して、対決は続けられている。サイトがあんな目にあつたのを直接見ていたというのに、多少引いただけで、平然としている。

女性というのは、男に比べて血に対する耐性というものが高い、と聞いたことがあるが、この三人もそうなんだろうか？

とりあえず、ルイズの用意した服を脱いで畳むと、そのままキュルケの選んだ服を手取る。

うわー、これはまた . . . 。

「なー、これも着なくちゃ駄目か？」

「ええ。なんてったって私が選んだんですもの。ヴァリエールなんかには負けないところを、証明してあげなくちゃ。」

「ふん、せいぜい頑張ることね、ツエルプストー。」

いや、それ俺の都合関係無いよね？

完全にお前らの都合だよな？

文句が喉のあたりまで出掛かるが、口では勝てそうも無いので妥協した。やはり、このあたりで生まれつきの女と、にわか女の差が出てくるな。まあ、俺は他はともかく心は男なので特に構わないんだが。

そうして現実逃避しても、状況は何も変わらずルイズたちに急かされるだけだったので、渋々そのヒラヒラした服を着た。

第一印象が『見た目重視で、機能性無視。』だったが、意外と動き易い。関節のあたりの生地に余裕を持たせているせいか？しかも、それが外から見たときに、不自然ではないように工夫が加えられている。

へー、こんな服一つでも、色んな技法があるんだなー、と感心するが、だからと言って鏡に映っている俺が着ているのが、白いレースやフリルがイヤと言うほどついたワンピース、所謂ロリータファッ

シヨンであることは変わりがない。

女装趣味のある男ならこんな状況は垂涎ものなのだろうが、生憎、俺にはそんな奇矯な趣味嗜好は無い。

一般的な趣味の男がスカートを穿くか？という疑問が出てきたが、考えないようにした。

多分、考えても誰も幸せになれない答えが出てくるだけだろうし。

「どう、あたしの選んだ服は？」

「・・・、今の俺を見て、どう思う？」

「どうしたの？」

「いいから、正直なところを言ってくれ。」

俺が曇りの無い目でキュルケの目を見つめると、彼女は褐色の頬をすこし赤く染め、俺を上から下まで眺めたあと「わ、悪くはないんじゃない？」と言った。言うんなら、こっちを向いて言っただけじゃないんだが。そんな、そっぽを向いて言われると、笑われているようにしか思えない。ルイズとタバサにも試してみたが、返事は2人とも同じような物だった。

そうか、そんなに似合わないか・・・。

俺は、キュルケの服を脱ぐと、元々着ていたアンダーウェアに着替えた。

着心地が良く、男女兼用（ここが最も重要）なこれが、やはり落ち着くな。

テーブルに置かれていた水差しをとり、付属しているグラスに注いで水を飲んだ。服を着替えているだけなのに、なんだか妙に喉が渴いた。緊張したせいだろうか。

「それで、どっちを選ぶの？」

俺が人心地ついていると、ルイズとキュルケがすぐに聞いてきた。コイツらには人を労わるという思考回路は存在しないのだろうか。助けを求めるようにタバサを見るが、やはり本を見ているため、援軍は見込めない。

観念して、本当のことを言うか。

「どつちも気に入らない。」

「「なんでよ？」」

「2人共、完全に自分の趣味で選んだら？サイトはそれでも気に入ったから良かったのかもしれないが、俺は自分の趣味を無視されるのは、好きじゃない。」

「なら、あんたの趣味って？」

「少なくとも、コレとかコレみたいな、ヒラヒラした服じゃないのは確かだよ。」

俺がさつき着た服を指差し、ため息をついてそう言うと、2人共が意気消沈した。

その後ルイズが二回戦の宣言をするが、今度はキュルケが挑発し、売り言葉に買い言葉（まな板、男漁り、プライド以外ゼロ、馬鹿女等々、男の口喧嘩がお遊戯に聞こえるほどの勢いである。）で二人が杖を抜くような事態にまで発展していく。

さすがに詠唱を始めたら、杖を奪い取るか、と思っていると、背後で本を読んでいたタバサがいつの間にか立ち上がり、俺の横をすり抜けて、赤と桃の戦闘地帯に侵入した。そして、そのまま2人に頭を寄せさせ、内緒話をする。

タバサが何を言ったのかは知らない（本当は聞こうと思えば聞けたのだが、それをする勇気が無かった。）揉め事はなんとか収まり、2人は自分の選んだ服を買っている。

しかし、何故だろう？

服のセンス対決の前にした悪寒がまだしているのは。もしかしたら、俺の受難はまだこれからなのかもしれない。

ま、気のせいだろうけど。

ある日の服飾対決。(後書き)

すいません。ストックも切れましてし、某レポートのせいで数日間投稿出来なくなるかもしれません。

とはいえ、一週間もかからないはず。というか、一応、書いている最中にも暇を見つけて書いていく予定です。

締め切りが目前なので、さすがに手をつけないとやばいっぽいので前回の分の流用で済む分もあるので、もしかしたら大してかからない可能性もあります。

とりあえず、全体的に手をつけるところから始めよう。

エンジントラブルは決定事項。(前書き)

なんだか、やっつけで一話書きあげました。とはいえ、レポートの方は全く進んでいません。なぜでしょうかー。

エンジントラブルは決定事項。

ルイズが自信満々に何かを言うときは、気をつけなければならない。それは、概ね勘違いだから。

俺が気付いたその大いなる真理は、ルイズの指示で王宮までレウとシルフィに乗っていった俺たち一行が杖をさげた騎士たちに囲まれたことで証明された。

いや、突然アポも無く飛竜に乗ってやってきた者に対する対応としては間違いでは無いので、それはいいんだが。

問題はそこで、理由を言わずに『密命』の一言だけで王族にお目通りを申し出たルイズの方にこそあるだろう。隣国の状勢が不安定で警戒心が高くなっていることを差し引いても、特に普段から親交があるわけでもない相手はいそいですか、と王族のところまで案内するような無能は生憎、騎士隊にはいなかったらしい。

おまけにサイトまで妙に好戦的になっていて、それを諷めるのにルイズがよりにもよって「ワールドを倒した。」などと口走るせいで、今、俺たちは拘束されそうになっている。

事情を知らない人間がそれを聞いたらどう思うかくらい、考えてくれ。

とりあえず、後で2人は1時間説教だな。

ついでに、サイトは妙に高くなっている鼻っ柱も折っておこう。主に肉体言語で。

俺たちを捕縛するために陣形を構える騎士達を見て、まあ、妙に抵抗しなければ生死に関わるような攻撃はしてくるまい、と思っているとそこに王女がやって来た。

……もう、突っ込み疲れたから何も言わないでおこう。警備の大切さは多分、身を持って悟るときがくるだろうから。運が悪ければ、それが死ぬ直前になるだけだ。俺には特に関係無いし。

王女は俺たちの姿を認めると、慌てて騎士たちに指示し、あわや戦

闘になりかけた（と思っっているのは多分、俺を除いた全員だな。もしそうなら後ろから気絶させていくつもりだったのでありがたくはある。）雰囲気、騎士にルイズが言ったことが本当であると説明することで霧散させた。

そして俺とルイズとサイトは王女の私室に案内され、他の面子は別室で待たされている。あれだけ世話になっておいてこの仕打ちはどうなんだろう、と思わなくもないが、一応、国家機密になるようなことも話されるだろうから、外国人のタバサやキュルケに聞かれるのは拙いし、女の前では何処までも口が軽くなるらしいギーシュに知られるのも宜しくない。

結果、俺たち主従だけが案内されたわけである。

「あの方は、わたしの手紙をきちんと最後まで読んでくれたのかしら？ ねえ、ルイズ。」

「はい、姫様。ウェールズ皇太子は、姫殿下の手紙をお読みになりました。」

「ならば、ウェールズ様は私を愛しておられなかったのね。」
ルイズが任務の内容の報告をした後王女がまず気にしたのはやはり皇太子のことだった。まあ、任務自体がそのためだったんだし、そのリアクションも仕方無いのかもしれないが、俺たちは平民だからともかく、命の危険さえあった自分の我侷を聞いたルイズの苦勞に対する労いとかを考えないあたり、この王女はズレてるな！。それとも、王族ってのはこんなモンなのか？

俺はため息をついて口を開いた。

「恐れながら、ご無礼をお許し下さい。姫殿下に、お聞きしたいことがございます。」

「なんででしょうか？」

「殿下は皇太子とこのトリスティンのどちらが大事ですか？」

「それは……。」

「僭越ですが、今殿下がおっしゃられたことも、それと同じことかと。個人の恋愛ごときを優先するものに、国の長たる資格は無く、

そしてそういった輩は容易に己を助ける者たちを殺します。すなわち、家臣や民草を。」

「ちよつと！あんだ姫様に何を……。」

「お前は黙ってる。……これは私の勝手な予想ですが、殿下は密書で皇太子にトリスティンへの亡命をお勧めになったのではないのでしょうか？」

「……その通りですわ。」

「ならば、その結果、この国が戦火に巻き込まれどれだけの人間が死んでいくのかもご理解いただけているかと愚考いたしますが、如何でしょうか。」

「ウェールズ様が亡命しようがしまいが、攻めてくるときは攻めよせてくるでしょう。攻めぬときは沈黙を保つでしょう。個人の存在だけで、戦は発生するものではありませんわ。」

「だから、ゲルマニアとの同盟を反故にしてまで自分の私情を優先しよう？そんなことが現実になれば、私たちが回収の任を負った手紙とは比べ物にならないほどのスキャンダルになるかと思えますが。その結果、この国が傾こうが知ったことではないとおっしゃりたいのですか？」

俺が言うたび、王女は顔を青ざめさせていった。だが、彼女の言っているのは狭い部分しか見えていない子供の視点だ。当然、王族がそんなものではこの国に明るい未来は無いだろう。

まあ、好きな相手じゃなくてオツサン（ゲルマニアの皇帝がどんな奴かは知らないが、なんかこう、そんなイメージがある。）に嫁がなくてはない部分は同情するが、それは民に養ってもらっている側の義務だろう。

この国の行く末については特別俺が気にするようなことではないのかも知れないが、一応、知り合いもいるので、国の権力者にはもつとシヤンしてもらいたい。

とはいえ、鞭ばかりでは良くないのも事実なので、飴も与えておくことにするか。

「姫殿下、コレをお納め下さい。」

「・・・これは!？」

「いまわの際に皇太子からお預かりした『風のルビー』でございます。殿下にお渡しするように、との言伝をまかされまして、卑賤の身ながらお受けさせていただきました。」

「そう、ウエールズ様が・・・。」

王女は俺から指輪を受け取ると、それを愛おしげに自分の指に嵌める。

「殿下、度々のご無礼をお許しください。私が以前いた場所では映画・・・戯曲にてこんな言葉があります。『大いなる力には、大いなる責任がある。』これはなにも、魔法や剣技だけではなく、権力という意味においても、同じなのだと思います。ゆめ、それをお忘れなきよう・・・。」

俺がそう言つと、王女は少し躊躇いながらも、頷いた。

それから学園に戻って一昼夜して、俺たちは日常に帰還した。とはいえ、俺やサイトにとってここは異世界なので、日常と呼ぶには若干の語弊があるかもしれないが。

しかし、ただそれだけでは無かったようで、妙にルイズの、俺とサイトに対する扱いが良くなっている。

具体的に言えば、食堂でも他の生徒と同じように椅子に座って食べることを許したり、といった具合である。

今日もいつも通りサイトには訓練をさせようと思っていたのだが、ルイズが反対したために、ナシになって一緒に授業に出ているし。何かあったのだろうか?と思っただが、サイトは妙に卑屈になっているし、ルイズは素直に答えないだろうから、よく判らない。

とりあえず、身に覚えが無いので、多分、サイトが何かしてそのオマケで俺の扱いもよくなっているんだろうが、そうなってくると、俺も他の部屋を用意してもらつことを考慮しておいたほうが良いの

かも知れないな。

2人がこれからどうなっていくのかは判らないが、とりあえず、常時甘ったるい空気とか、修羅場化するような場所では落ち着きにくいし。

今日にでも、学園長に頼んでおくか。なに、何も貰っていない今回の報酬の件を持ち出せば、そう難しいことではないだろう。さすがに王女から話を通っていない、ということは無いだろうし。突っぱねられたら、次にこんなことがあっても助けられない、と言えば多少は考慮するだろう。

まあ、完全にブラフなので、見破られないようにしなければならぬが。

そう思い、コルベール教諭の授業を受けているが、彼が教卓の上に乗せたあれはなんだろう？金属製のパイプや車輪の集合体のようだが、どこかで見たような……。

俺が頭をひねっていると、彼は講義を始めた。

「えー、『火』系統の特徴を、誰かこの私に開帳してくれないかね？」

「情熱と破壊が『火』の本領ですわ。」

「そうとも！だがしかし、情熱はともかく、『火』が司るものが破壊だけでは寂しいと、このコルベールは考えます。諸君、『火』は使いようですぞ。使いようによっては、いろんな楽しいことができるのです。いいかねミス・ツエルプストー。破壊するだけじゃない戦いだけが『火』の見せ場ではない。」

話を聞いていると、どうやら教諭は魔法の新しい使い道を模索しているようだ。そういったことは一般的では無いらしく、どうも生徒たちの反応は今一つだが。

しかし、次の説明に、俺は瞠目することになった。

「これは私が発明した装置ですぞ。油と、火の魔法を使って、動力を得る装置です。」

なに？それは、もしかして……。

あることに気付いた俺は、その装置をよく見る。

教諭は説明をしながら、操作を始めた。そのうち車輪が回り始め、八ト時計のように装置に取り付けられた箱から、蛇の玩具が顔を覗かせる。

その偉大さに驚いているのは、教室の中では俺とサイトだけだ。

むしろ、ルイズを含め、生徒たちは教諭がエンジンの有用性について説明しても、魔法を使えばいいのになんでわざわざそんな物を？と言っている。

中途半端に便利な『魔法』が存在する弊害かねえ？

それはともかく、すげえな。全くの独力でエンジンを発明するとは。天才ってやつかね？

他の皆の反応が悪いなか、サイトは興奮したように立ち上がり、声を張り上げた。

「先生、それ、素晴らしいですよ！それは『エンジン』です！」

「えんじん？」

「そうです。俺たちの世界じゃ、それを使って、さつき先生が言った通りのことをしてるんです。」

「実際、それは価値が判れば、勲章物の発明だよ。先生。」

「なんと！やはり、気付く人は気付いておる！おお、君たちはミス・ヴァリエールの使い魔の2人だったな。」

俺たちの絶賛ぶりに、しかし生徒たちはエンジンにどれだけの価値があるのか、まるで判らない様子だ。

まあ、この反応も仕方ないか。なにせ、陸上の移動に馬が現役の世界だからな！。

教諭は俺たちが自分の発明を認め、評価していることが嬉しい様子だが、次に俺たちが何者かが気になったようだ。ルイズが適当に誤魔化していたが、教諭は妙に感心した様子だった。

その後、教諭は実際にエンジンを動かすのを生徒に体験してもらおうとしているが、あまり生徒の側には積極性が無い。如何にも現代日本的な授業風景だが、ここは異世界だ。

そのうち、モンモンがルイズに押し付け、なし崩し的にルイズがする事になった。教諭はその不自然さに気付かない。

教諭は、アレだな。技術者としては素晴らしい才能を持っているが、教育者としての能力には疑問があるタイプかもしれないな。

ま、モンモンはルイズを挑発したときに殺気を纏わせた視線を向けてやったから、もう妙なちよっかいは出してこないだろう。

今もチキンのように震えていることだし。

俺は、サイトが不安そうにルイズを見守る横で隠形（数少ない、鎧を纏わなくても使用出来る能力。ナルガ系統を着用しているときよりも精度が低い。）を発動させると、ほとんどの生徒に気付かれな
いまま教室を出た。

ルイズが挑発のせいで妙にやる気になってしまったので、可哀想だがあの異世界産エンジンの寿命もあと数十秒だろう。

せめて教諭の傷が浅いものになることを祈ろう。

俺はいつかのように爆発 授業中止 後片付けのコンボが決まる前に、その場から逃げ出した。

俺が戦略的撤退をして、学院の中庭を散策していると、後ろの方から何かが爆発するような音が響いた。これほど離れておいてまだ聞こえてくるとは、中々威力が高かったらしい。

上を見上げると、空をバツクに笑顔でサムズアップするコルベール教諭の幻影が見えたような気がした。

そうか、逝ったか……。

俺は教諭の冥福を祈ると、散策を再開した。

もう昼前だから、食堂の方向に行ってみよう。

数分して、食堂の近くまで来た頃、視界の隅を青い髪がよぎった。

タバサが食事に来たのか？

声をかけようと思ひ振り返ると、姿が無い。不思議に思って建物の影まで行くと、そこで、普段以上に堅い無表情になっているタバサ

がいた。

位置のせいか、俺には気付かないようで手には何かの手紙を持って、それを読んでいる。

雰囲気からして少なくともあの手紙が恋文ということは無いだろう。そんな年頃の女の子な事情なら、あんなに強く握り締めたりはしないだろうし。

おそらくは、以前一緒にやった賭場潰しの類の指令かなにかか。

「よ!どうしたんだ?」

「……散歩。」

俺が急に話し掛けると、タバサはビクン、と体を震わせ、慌てて手紙を背後に隠した。

なんとなく、動作が小動物っぽくて可愛い。顔は無表情のままだけ。

「そうか。俺も丁度遠出したいと思ってたところだったんだよ。一緒に構わないか?」

「遠出じゃない。散歩。ルイズはいいの?」

「実は俺は記憶喪失になっていてな。都合が悪いことは不思議と思い出せないんだ。」

俺が笑いかけるが、タバサはにこりともせず、何かを諦めた様子で口笛を吹いた。

数秒後、青い飛竜が上空からやってくる。

さて、出発するでしょうか。

ナナシイヤーは地獄耳。 (前書き)

多少は進みましたが、まだまだですねー。
早くこの面倒くさいレポートを終わりにしたいです。

ナナシイヤーは地獄耳。

どうやら、今回もイザベラの元に寄った後、直接目的地に向かうらしいので俺は、マサムネとヨシツネを解放すると、ルイズとサイトの世話と学院長との部屋の交渉を任せ、出発した。

シルフィは彼女の主とは違い、俺の同行に賛成してくれている。

「ありがとうなのね！きゅい！お姉さまったら一人で大丈夫、なんつって言ってるけど、助けは多いのにこしたことはないのね！」

シルフィは今日も元気だ。

うん、タバサもこれくらい表情が豊かになることが出来ればいいんだけどなー。

タバサは相変わらず俺とシルフィがお喋りしている隣で黙々と本を読んでいる。当然、単行本など無いこの世界の本であるから、ゴツい装丁の大きな本である。それを、小さな身体で器用にかかえ、読みふけていた。

「何の本を読んでるんだ？」

俺が尋ねると、タバサは本の表紙を俺に見せた。達筆・・・なのは判らないが、なんだかアルファベットの筆記体に似たような文字がそこには書かれている。だが・・・。

「すまん。俺には読めないようだ。」

「『ハルケギニアの多種多様な吸血鬼について』。今回の標的。」

「へー、吸血鬼か。やっぱり大蒜とか十字架が苦手なのか？」

「そんなことは、聞いたことがない。」

「そうなのか？まあ俺がいたところじゃ、伝説の中の生き物だったからなー。んじゃ、ここの実在する吸血鬼ってのはどんな奴なんだ？」

「人間と同じ姿をしている。太陽の光が苦手で先住魔法を使用する。非常に狡猾な性格。」

「おまけに血を吸った人間を一人、手足のように操ることだってで

きるんだから！きゅい！」

「へえ、そりやなんとも……。血を吸われた相手も、普通の人間と変わらないのか？」

「この本には、そう載っている。」

つまりもし、俺たちの中の誰かが血を吸われても、他の2人は気付かないということか。しかも、それだけじゃなく陥れる手引きすらさせられるだろう。

正面から堂々と暴力を行使する相手ならともかく、そういう搦め手で来る相手は苦手なんだよな。とりあえず、なるべく単独行動はしないように、かつ警戒を密にしていくなさうか。

それと、もう一つ、気になったことがある。

「先住魔法って、なんだ？系統魔法とは違うのか？」

「シルフィが使う精霊の力のことなのね。」

「亜人や韻龍が使うと言われている魔法で、系統魔法よりも強力。」

「前途多難だね、こりゃ。」

つまり血を吸われること以外にも後ろからグサリ、といったりすることも警戒しなければならぬわけか。2日前の二の舞はしたくないしな。もう完治したとはいえ、あの時は死を覚悟しなきゃならなかったし。

「今からでも遅くない。帰った方がいい。」

「え？ヤダよ。」

俺の台詞を弱音ととったのか、タバサが言うが、笑顔で拒否した。タバサはため息をつく、本に視線を落とす。俺のことを心配してくれているんだろうけど、こっちは逆にタバサが心配なんだよな。彼女が並以上の魔法の実力や胆力を持っていることは、フーケやトマとの戦闘で知っているが、それでも彼女は一人の小さな女の子ではないという事実は変えようが無い。

エゴなのかもしれないが、たとえ状況がそれを許さなくても、出来る限りは助けてあげたい、というのが俺の本音だ。

イザベラから命令書を受け取った後、俺たちは目的の吸血鬼がいるらしいサビエラ村にやって来た。因みにイザベラは鉄面皮のタバサが恐怖に震えていると思いついていたらしく、いつも通りのタバサが顔を見せると、理不尽に怒っていた。

もったいない。素材はすごくいいと思うんだがな。性格がな。まあ、それはともかくとして、タバサに読んでもらった命令書では吸血鬼は暫らく前から数日おきに人間を襲っており、犠牲者はいずれも殺されているらしい。

他の目撃者はおらず、派遣されてきた騎士までも犠牲者に混じっているのだから、相当な難敵だということが判る。

残念ながらその騎士がどんな状態で見つかったかは（死に方がほかの犠牲者と同じだったことくらいしか）書かれていなかったが、それでも簡単な相手ではないことは確かだろう。詳しいことは村の間から聞けば判るだろうし。

村の近くの森で人間に変身したシルフィ（変身することも服を着ることもかなり嫌がってひと悶着があった。抗議している間は全裸だったので、多少目のやり場に困った。）と三人で到着したのは、昼をまわった頃である。

因みに俺はタバサのマントをつけて、杖を借りている。まあ、服も普通のやつなので、メイジに見えなくもないだろう。

つまり、俺が困になって吸血鬼の目を引き寄せているうちに、タバサとシルフィが情報収集をする、という段取りだ。聞き込みならシルフィよりは俺の方が上手く出来そうな気がするんだが、タバサの「見た目が重要。」という意見から俺になった。・・・シルフィがうっかり口を滑らせたり騙されたりする危険性もあるが、その意見は概ね、俺を納得させた。シルフィはむくれていたが。

「やれやれ、どうも視線が痛いね。」

村に入ってから、そこかしこに人の姿があるのだが、揃って活気が無い。まあ、人を殺す化け物が紛れ込んでいるかもしれないのに

澆刺としていたら逆に怖いが。

俺が一応、会釈をしても、不安そうな伏し目で挨拶をするくらいだ。しかも、小声で聞こえないと思っっているんだろが、葬式がどうの、あてにならないのどうの、とムカつく言葉もちらほらと聞こえてくる。タバサは聞こえているのか聞こえていないのか判らない無表情だが、シルフィは聞こえているようで、顔を怒りに歪めていた。

しかし、不穏なことも言っているのです、多少話しておくことも必要かな。隣人同士が疑心暗鬼になって罪の無い人間が殺されるようなことになるなんて、漫画じゃないんだし。

俺は言っていた村人たちを呼び止めると、声をかけた。

「君たちはさつき、老婆が怪しいと言ったね。なにか心当たりでもあるのかね？」

「は、はい……。その、さっきの話が聞こえたんですか？」

「俺の耳は多少、常人よりも良いのでね。あてにはならぬらしいので舐められることが多いが。それで？」

俺が先を促すと、村人たちはお互いの顔を見合わせてから、バツが悪そうに話し出した。まあ、同じ村の人間を疑っていることを聞きとがめられたのだから、当たり前ではあるが。

「へえ。村の外れに最近住み始めた親子がいるんですが、その婆さんが占い師ってふれこみなのに一日中家の中に籠りつきり出てきやしねえんで、その、なんというか……。」

「吸血鬼ではないか、と疑っていたわけか。」

「へえ。おっしゃる通りで。」

「最近、とはいつくらいだね？」

「三月くらい前でやすかねえ。とにかく、その婆さんは籠りつきりで、もっぱら外に出てくるのは、アレキサンドルっていうでくのぼるな息子だけでして。」

「ふむ。吸血鬼の犠牲者がでる前か。他に見た目がどうか言っていたような気がしたが？」

「その、見た目がしわくちやで、悪魔みたいな感じでして……。」

「木の木目だつてそうと疑つてかかれば幽霊の顔に見えることもある。君達は『吸血鬼がどこに潜んでいるか判らない』という恐怖に負けて同じ村の住人を生贄にしようとしているだけだよ。」

俺はため息をつきながらそう言った。とりあえず呼び止めておいて良かったな。このまま放つておいたらどうなつていたことやら。

俺に言われた村人たちは慌てて弁明しようとするが、正論しか言っていないので、どうも歯切れが悪い。

「そ、そんな、生贄だなんて……。」

「ならば聞くが、老齢の人間の身体に皺がよつたり痩せこけたりするのは普通のことではないのかね？それに、君たちは悪魔に例えたが、それを見たことでもあるのか？」

「それは……。」

「外に出ていないことだつて、老齢なら身体が悪いのも無理はないだろう。それを怪しい、吸血鬼だ、などと口走るとは短絡的にもほどがある。見当違いの相手を殺して喜ぶのは本当の吸血鬼ということくらいは理解してほしいね。」

「も、申し訳ありません。」

「なに、不安のせいそんなことを考えたということくらいは判っている。しかし、だからと言って疑われる方にとってはそれが悲しいことだということを忘れないことだ。」

俺は言い、村人たちを置いて足を進め始めた。タバサとシルフィもそれについてくる。

「意外。」

「ん？何がだ？」

「貴女が、態々あんな人たちを諫めたりするとは思わなかった。」

「まーな。だが、隣人が突然自分や家族を殺しにくるのかもしれない、つていうストレスの中で生活しているんだ。多少、考え方が乱暴になるのも、判らなくもないさ。俺がいたところにあつた漫画……
……絵草子にも、似たような場面があつてな。皆のために戦つた主人公の最愛の人を、主人公に対する恐怖にかられた民衆が私刑

にかけて殺してしまう、っていうお話があったんだよ。」

お話ならともかく、現実になんかあるのはちよつとな、と言つて俺は笑つた。タバサは無表情なまま、一言尋ねた。

「そのお話の最後は、どうなるの？」

「判らない。でも少なくとも、主人公は自分が守つてきた人間に絶望していたと思う。話は、主人公が敵の首魁の手にかかつて体を引き裂かれた後で終わるんだ。多分、どこにも救いなんて呼べるものは無いんだろう。」

俺がそう言つと、タバサは少しだけ悲しげに、そう、と言つた。

ナナシイヤーは地獄耳。 (後書き)

漫画についての台詞は6、7年前に文庫本を立ち読みしたときの記憶から書いていますので、かなりうる覚えな上に個人的な感覚で書いています。不快感を感じた方は申し訳ありません。

真実はいつも一つとは限らない。(前書き)

あと2、3日でレポートを終了させる予定です。

とはいえ、来月にはその検討会有一些があるので暫らくストレスが溜まる日々が続きますが。

「**真実はいつも一つとは限らない。**」

「ようこそいらっしやいました。騎士様。」

村人に尋ねながら村長の家につくと、そこで品の良さそうな老人が俺たちを迎えてくれた。

彼は挨拶をすると、俺の顔を見た。多分、俺が名乗る番なんだろうけど、本名（といっても、記憶喪失の俺に、ポツケ村での生活をさせるために村長が暫定的につけた名前だが。）を言うわけにもいかないから、どうしたもんかねえ？知り合いの名前を名乗るのも、迷惑がかかりそうだしなあ。

あ、迷惑をかけても文句を言われない相手がいたっけ。

んじゃ、あいつの名前を借りることにしよう。どうせ偽名だろうし。

「ガリア花壇騎士、ロングビル。『風』系統の使い手だ。」

俺が言った名前にタバサは片眉をあげ、シルフィはどうもなぜ偽名を使ったのかもよく判っていないような顔をしている。

まあ、俺が知る範囲で迷惑をかけても構わない相手の名前なので、せいぜい有効活用させてもらおう。

「それでは、吸血鬼とその犠牲者について教えてもらいたい。無論、それを調査するための許可も頂けるかな？」

俺が言うと、村長は頷いたあとぼつりぼつりと話し始めた。

当初、夜に外出していた人間を狙った吸血鬼は村人が警戒しだすと、今度は家の中で眠っている人間を襲うようになったらしい。吸血鬼が村に紛れ込んでいる可能性は考えていないので、村長は吸血鬼の操り人形である屍人鬼ゲールが手引きをしているのだろう、と言った。どうやら姿の見えない吸血鬼よりも、身近な分、顔見知りかいつの間にかそうなっている屍人鬼が怖いのだろう。

それから先日派遣された騎士の殺され方についても聞くが、特に死体の周囲で争ったような形跡は無かつたらしく、どうやら無抵抗な状態で殺されたらしい。

それが、大きすぎる実力差によるものか、眠っていたところを襲われたのか。それとも眠らされたのか。あるいはもつと別の理由か。それは判らないが、少なくとも無策のままでは俺たちも先の騎士の後を追うことになるだろう。

とはいえ、奇策ばかりが結果を出せるわけもないので、屍人鬼の判定をするために定番の身体検査から始めた。事前にタバサから聞いておいた話では屍人鬼は吸血鬼とは違い、日の光は平気だが、その身体には血を吸い取られたときに付けられた傷があるらしい。

まあ、他の傷との判別など難しいし、実際村長もそのように言っていたが、これはなにも検査することだけが目的ではない。こうして調べていけばこのことを知った吸血鬼にとつてはプレッシャーになるだろうし、あるいは検査を受ける前になんらかのアクションを引き出すことが出来るかもしれない。

屍人鬼は限界を超えた筋力を行使できる意外は基本的に人間のスペックと大差ないので、そのあたりは問題無い。そして、屍人鬼を失えば味方の居なくなった吸血鬼はどこかでボロを出す。いや、むしろ優先的に俺たちを新たな屍人鬼にして他の二人を排除しようとするだろう。なにせ、俺たちが近くにいる以上、村を捨てて出て行くことも出来ないのだから。

手始めに村長から始まり、次に同居していた少女（エルザと呼ばれていた。）を行う。村長は自分とはかく、エルザがすることは拒否していたが、俺が強く要求すると渋々従った。

結果としては、2人共何の傷も無い。とはいえ、幼い子供には要求するレベルが高すぎたのかエルザは泣き出し、部屋から出て行った。俺は後姿を見送りながら、後頭部を？いた。どうも、5年前からずっと子供の泣き顔は苦手だ。見ていると不安になってくるが、どう慰めればいいのかは判らないのだから。

因みに、シルフィが話しているのが聞こえるので判ったが、エルザは村長の養子らしい。成程ねえ。メイジに両親を殺された、か。それじゃあ俺は勿論、従者役の2人も好かれるのは無理だろう。

むしろ逆恨みをされないだけマシなのかもしれない。

「それじゃあ、私達は犠牲者のお宅を訪ねて情報収集を試みます。なにか問題があれば、連絡を。」

俺が言くと、村長は頼みます、と言って頭を下げた。

当たり前かもしれないが、いくつかの家を回って見たが、今一つ情報と呼べるようなものは見つからない。見つければ、それは即ち吸血鬼が自分の墓穴を掘ったということであるが、さすがにそこまでは甘くはないか。

住民も、身体検査を口に出すとしり込みしたり怒り出す者もいたが、結局全員シロ。

家によっては吸血鬼を警戒して窓に戸板を打ち付けていたところもあったのだが、それでも入り込まれたらしい。勿論、戸板は破壊されていない。まるで推理小説によくある連続密室殺人事件だが、あいにくと俺は探偵役ではないので、よく判らない。

真実はいつも一つとは思わないし、懸けるほどの名前も持っていないせいかな？違うか。

タバサが聞いている話では住民が忍び込まれるときには決まって眠ってしまうらしいのだが、それについてはシルフィが”眠り”の先住魔法の可能性を示唆している。

密室を崩す点を上げてあげるなら煙突くらいだが、こんなところを通れるのはよっぽど身体が小さくないと無理だろう。

……あれ？これが正解か？

なんかあっさりしてるな！。

推理力は無くても論理的に考えれば、強行突破をしていないのならなにかしらの進入路を持っていることは予想できる。屍人鬼が、あるいは素知らぬ顔をした吸血鬼自身がそれを探ろうとしてもそれが毎回違う場所だった場合、多大な手間がかかるくらいだろう。

反面、煙突は大抵の家にはついている。しかも、家の中と外を繋ぐ

一直線の道。

勿論、次の犠牲者が現れるまでインターバルできちんと調べている可能性も無いではないが、その場合はより犯人の割り出しが簡単になるから、あまり高くないだろう。

タバサの後に同じように火の消えた暖炉に首を突っ込み上を見るが、穴は相当に狭い。血を吸う以上は吸血鬼はここに入らなくてはならないが通れるのは精々が小さい子供、あるいは老人程度だ。

おお、なんかテキトウに考えただけだったが、それを否定する材料が無い。

では、村長に頼んで、子供たちを集めてもらおうか。いや、待て。屍人鬼の存在を忘れるな。犠牲者のいる場所までは本人が来るとしても、そんな便利なモノを造らない理由が無い。

ということとは、俺が妙に動くと、攪乱するために動かれるか。

シルフィが住人から話を聞いている間に、タバサの肩を叩いて部屋の隅を親指で指す。出来るだけ目立たないように、内緒話をすることにした。

「多分、吸血鬼は子供か老人だ。それか、シルフィみたいに魔法で小さくなっているか。」

「・・・まだ可能性でしかない。魔法については、吸血鬼はそういう先住魔法は使えないらしい。」

「だが、忍び込んでいるのが屍人鬼だったとしても、血を搾って主のもとに運ぶ、なんて真似は出来ないんだろう？」

俺の質問に、タバサは頷いた。シルフィの背中で散々吸血鬼と屍人鬼についての話を聞いていたのだ。あの時間は無駄ではない。

「だとしたら、家が壊されず、遺体が生前と同じ場所にあった理由は限られてくる。」

1、物体をすり抜ける魔法を使用した。だが、これは無いらしいので×

2、家族を屍人鬼にする、あるいは催眠術のようなもので犠牲者自身、もしくは家族を操り戸を開けさせた。これはありえなくも無さ

そつだが、毎回屍人鬼を造つていては目立つし吸血鬼よりも先住魔法が使えるシルフィにも、特定の記憶を消すことはできないらしいので、
x

3、2とやや被るが、偽りの記憶を植えつけられ、戸を閉める前から死んでいたのを判らないようにされていた。これは2と同じ理由、それから、そんなことが可能ならもつと別の利用方法があることから
x

4、屍人鬼とか吸血鬼自身が探ることで各家の侵入路を発見、もしくは構築する。これはありそつだが、時間がかかる上に、顔を覚えられるというリスクがある。過去一年間に行方不明者なんかはいないから、一度造つた屍人鬼はそのままなんだろう。それじゃあ、使い捨てに出来る旨味も無い。当然、相応にリスクが上がるので、

5、各家に共通の侵入路を使用する。リスクは少なく、屋根にいるところさえ見られなければ問題無い。実行は夜だから、それも些細なことなので

という感じだが、どうだ？」

俺が言つと、タバサは少し驚いたような顔をした後、頷いた。推理小説を読んだ記憶があつたお陰でありえる可能性を全て口に出しただけなのだが、実際、これ以外に方法があるとすれば、俺の知らない魔法や道具を使用している場合のみだろう。そうなると推理できる要素が無くなるので探偵役はお手上げだ。

「だが、俺たちがそれを大つぴらに口に出せば、もし吸血鬼が村の中にいた場合屍人鬼を攪乱のために使うだろう。仮にいなくても、村の中にいると思わせるために同様に使う可能性もある。」

俺が言つと、タバサは考え込んでいる。彼女はどこそこの竜と違つて頭が悪い（というか、無垢というか）わけではないので、これだけ言えば俺が言わんとしているところも判るだろう。

「屍人鬼を倒せば、今度は私たちを狙つてくる？」

「そーいうことだ。」

俺がにやりと笑うと、何かに気付いたタバサは立ち上がり、窓の外を覗いている。俺もそれに倣って外を見ると、そこには松明を持った村人たちが鍬や鉋を持ってどこかに向かう姿が見えていた。自然とため息が出る。

面倒なことにならないければいいんだが、無理そうだな。

容疑者は夜型。(前書き)

現実逃避してレポートを書く時間を削って書いています。
学生の頃のテスト前と同じだよ、これじゃ。

容疑者は夜型。

明らかに物騒な雰囲気、村人たちに、俺達は探索を切り上げると、気付かれないようにその後についていくことにした。

まあ、状況から考えれば彼らは吸血鬼か屍人鬼と疑われている人物の元に行つて向かつているのだろうが、それが穏やかに出来るかどうかは著しく疑問がある。

冷静に話し合いだけで解決できるならそれに越したことはないが、人間、一方の手に武器があると中々それも難しくなるものだ。

そして、それが判るのはいつだって切つ先を向けられる側なのだ。向けている者はそれが相手との間にどれだけの距離を作り出すかを理解しない。

俺の隣でブツブツと文句を言っているシルフィを無視しつつ、周囲を警戒しておく。はつきりと言えば今の俺たちはとても襲いやすい状況にある。

時間帯は夜だが俺の感覚で接近してくる者がいれば判る。だが、それでも後手に回るのは違い無い。相手はこちらを一咬みすればいいだけだし、そのために使い捨てに出来る駒も用意出来るのだ。おまけに騒ぎが起きれば前方のアホ共がパニックを起こして逃げやすいいざというときに守るために、タバサとシルフィは俺のそばを歩いているが、どうしたモンかな。

とりあえず、前方の村人たちのことは諦めさせてもらうか。名前も知らない他人よりはタバサの方が大切だし。

無論、彼らも死ねば悲しむ家族がいるのだろうが、生憎そこまで俺の手は広くない。後先を考えない行動は自分自身で責を負うべきだ。手助けくらいはしてやるが。

普通以上の能力を持っていることは自覚しているが自分の能力の限界は判っているつもりだ。

シルフィはそんな俺を見て何故か得意顔をして「ナナシのこともし

ルフィがちゃんと守ってあげるのはね。」と言っているし、タバサは無表情なままだが妙に張り切っているような雰囲気があるが。何故だ？

なんか俺が神経を使っている様子が怖がっているようにでも見えたのだろうか？

なんだか認識の違う他の2人の様子に頭をひねりながらも、村人たちはとある家の前に到着した。

襲撃は無かったので、吸血鬼は今回のことを知らなかったのだろうか？

ま、簡単な分にはありがたいが。

それはともかくとして、村人たちは家から出てきた男（アレキサンドルと呼ばれている。昼間に村人たちに疑われていた奴が。俺が説教した奴以外にも疑っている村人がいたらしい。）と言いついていいる。男は見たところ、気の良さそうな中年男、といった感じだが、しかしさすがに武器をもった村人に囲まれば多少動揺もするか。対して村人たちは冷静ならここまで来てはいないから、自然、話はすぐに決れ始める。

今も村人が言っているがアレキサンドルの首筋に付いている傷が屍人鬼だと思われている原因なのだろう。それに、村人を家に通そうとしないことも疑いを深める理由の一つでもあるのだろう。

まあ、あんな連中を「はいそうですか」と家に入れるような阿呆は存在しないからアレキサンドルの言っていることはごく当たり前なんだが。

ここで見守っているのもナンだしとりあえず、仲裁しておくか。

「はい、はいはい、ほれ、散れ、アホ共。」

俺が手を叩きながら村人達の前まで出て行くと、全員が^俺闖入者に視線を向けてくる。その視線に含まれているのは揃って「こいつ誰？」という疑問だ。

数人が俺の言葉に反応して顔に怒りを浮かべているが、俺の格好をみたものが「貴族？」と言うと反応が一変した。

「お城からいらつしやった騎士様じゃねえか。」

「そーいうこつた。んで？夜に、今この瞬間も襲われているかもしれない家族を放っておいて吸血鬼や屍人鬼から高確率で襲われるようなところを闊歩していたあんたらはそういう性癖のお歴々？それとも新手的集団自殺志願者か？」

俺が言うと、村人たちは急に不安げな表情を浮かべた。月明かりで見える程度なので判らないが、多分顔色を変えている者もいるだろう。

それでも、俺が貴族だとは信用していない奴もいた。

「ほんとに貴族なのか？あんた。」

「違うなら、なんだってんだ？態々従者を連れて吸血鬼の出る村に貴族を騙ってたかりにくるってか？」

「だったら何か魔法を使って見せてくれ。」

俺の一般的な思考での返答はあくまで信用しないらしい。というか、今のは普通の貴族に言ったりしたら無礼討ちなんじゃなかるうか。

中々チャレンジャーな奴だな。

それはそれとして、屍人鬼や吸血鬼が混じっているかもしれない場所で剣や鎧を出すのもなー。メイジが魔法を使うのには不自然だろうし。

ま、誤魔化すことにしようか。多少印象は悪くなるだろうが、なに、俺の村人に対する印象は既に低空飛行しているのでお互い様だろう。「なぜ、俺が平民魔法ごときにそんなものを見せなければならぬんだ？」

俺の、傲慢さを交えた言葉にすぐに村人たちは怒りを顔に浮かべ始めた。

そのまま押し切れないかなー。無理かなー。

「なんだよ！魔法が使えないのか？」

「そんな騎士さまがいるものか！」

「役に立たないなら、黙っている！女がでしゃばるな！」

聞き逃せない言葉が俺の耳に届く。村人たちが俺に詰め寄ってくる中、最後に言った奴の額に向けて右の握り拳を持ち上げる。

村人たちが何だ？という表情を浮かべる中、俺は人差し指を弾いた。ベチン、と地味な音を響かせ秘拳を受けた村人は後ろにいた奴ごと吹っ飛んでいく。

「・・・いいことを、教えてやろう。貴族は請われたからといって容易く杖を抜くものではない。そして、俺がすすんで魔法を見せるのは、俺に殺される相手だけだ。」

俺が多少殺気まじりに言うと、村人たちは悲鳴をあげて後ずさる。ま、こんなモンかな。

村人たちと同じく驚いていたアレキサンドルに近付くと、俺は一応、村人が納得するためにも母親を検めさせてもらえないか頼んでみた。勿論、乱暴なことはしないし村人たちが居並ぶのは論外なので俺たち三人だけで行うことを約束する。

村人の対処に困っていたアレキサンドルはそれなら、と言って俺たちを家に招き入れた。拒否すれば余計に疑いの目が増えるだけだし、今回は俺たちがいるが、それがいないときを見計らって来ようとするかもしれないだろうから、その判断は妥当だ。

村人たちはまだ何かを言いたげにこちらを見ていたが俺が額に血管を浮かべてそちらを向くと、その足をとめた。俺は集団で凶行におよぶようなアホに価値を認めることは無い。

アレキサンドルにドアのところ立ってもらい、村人が近寄るようならすぐに呼ぶことを言い含めてから、奥にあったベッドに近付いていく。

村人達の声が聞こえていたのだろう、ベッドに寝そべった老婆は哀れなくらい怖がっていたが、俺が順を追って話していくと、次第に落ち着き一応は納得をしてくれた。外からは見えないように配慮しつつ、年季を感じさせる身体を検分するが、見たところ異常は無い。ついでにアレキサンドルも調べさせてもらったが、こちらも村人が

言った傷以外に異常は無かった。

「山蛭に噛まれたと言っていましたね？」

「ええ。このあたりじゃ、何をするにも森にはいらんと話にならないので……。」

資源の少ない場所では致し方無いか。しかし、あんなに牙で噛まれたかのように同じ方向から同じくらいの大きさで、しかも丁度人間の犬歯くらいの間隔で並んで付けられる傷など、ありえるのか？

それに、触ったときの体温が妙に低かったことが気になる。

夜なので空気が肌寒いことを抜きにしても、これほど体温が下がっているのに鳥肌ひとつたないのは、不自然だ。勿論、そういう体質で尚且つたまたまそういう風に蛭に噛まれたということも考えられるが、やや苦しいだろう。

傷のことで村人に疑われていたアレキサンドルだが、図らずも当たりか？

妙な動きが無いようにタバサに目配せをすると、俺は外に出て村人たちに宣言した。

「この親子は屍人鬼でも吸血鬼でもないことは、俺が保障する。」

「ですが騎士様、確か吸血鬼は、血を吸う寸前まで牙をしまっておけるんでしたね？」

「そうだが、それがどうした？その部分を疑うんなら、お前達全員もその候補にあがることを理解して喋っているのか？それに、あの婆さんの足は長期間歩いていない者特有の萎縮があった。とても出歩ける状態ではない。」

俺が至って平静に反論すると、村人は口を噤んだ。相手を論破するときは正論を言い続ければ割と容易だ。勢いなんかもあるのでそれが通用しない場合もあるが、今回はそうでもなかったらしい。

村人たちは顔を見合わせると誰からともなく踵をかえた。そのまま来た道を帰っていくがコイツらは俺のさっきの言葉を聞いていなかったのか？

ま、いいか。俺は茂みまで行くと、ナルを解放して村人の護衛をさ

せるように指示した。ナルの陰密スキルなら見つかることもあるまい。

俺が何事も無く家の前まで戻ると、タバサたちはほっとしたような顔を見せた。その横で同じような顔をしているアレキサンドルに、話しかける。

「悪いが、吸血鬼が倒されるまで今回のことだけで終わらないかもしれない。一応、村長を通じて村人たちに言い含めておくから、手数をかけるが一緒に来てもらえないだろうか？」

「ええ、それはかまいませんが。」

アレキサンドルは家に帰り、母に言伝してから俺たちと一緒に村の方まで歩き始める。

暫らく歩き、家と村の中間あたりまで来ると、俺は指を打ち鳴らした。上空に剣群が現れ、アレキサンドルの周囲に檻のように突き刺さる。

「い、いったい何をなさるので!？」

驚くアレキサンドルに、俺は無表情のまま炎神剣アグニを構えた。

化け物を倒すのはいつだって人間だ。(前書き)

なんというか、今までで一番出来が悪い気がします。やたらと駆け足で、グダグダですし。

なら投稿せずに書き直せっていう話ですが、すいません。

やっぱり時間がどうか言う前に、書きながら全然雰囲気の違い音楽を聴いていると良くないですね。具体的にはヤラナイカとかサンゴットVとか。

化け物を倒すのはいつだって人間だ。

「残念だが、人間のフリをしても意味は無い。お前が屍人鬼であることは既に確信出来ている。」

俺の突然の行動に啞然としていた3人だったが続く台詞で空気が凍りついた。アレキサンドルは慌てて否定している。

「でも、さっきウチで違うと言っていたじゃないですか!？」

「あれは足手まとい共を離れさせるための方便だよ。それに、お前は俺が見た目通りだと思っていたのか？以前派遣した騎士が殺されているのに？だとしたら、おめでたい奴だ。悪いが俺は花壇騎士の中でも、巫人の研究にかけては専門家スペシャリストなんだね。戦闘は苦手だが、マジックアイテムの開発とそれによる探知で俺以上の奴はいない。」俺がにやりと笑うと、アレキサンドルは悲しげに呻いた。どう見ても人間にしか見えないが、しかしそれを顔に出すわけにはいかない。「違う、違います。オレは屍人鬼なんかじゃねえ。どうして判ってくれねえんだ……。」

「言っていないかったか？お前は俺のマジックアイテムに人間の反応が出ていない。」

そんな物、持つてないけどね。

「故障かもしれないじゃねえですか!？」

「ありえんよ。あー、シルフィ。杖をくれ。手近にあったから持つてみたが剣で刻むのは骨が折れる。第一重いし。」

俺が言いながらシルフィに促すと、呆然としていたシルフィがタバサに背中を抓られてようやくこちらに杖を持ってきた。シルフィは俺がやっていることの意味が判らないのか、やや表情を硬くしているが、それでもいらんことを言ったりキョドることなく持ってきたのはありがたい。

「はい、騎士様。どうぞなの。」

「おー、ありがとよ。」

俺がその杖の方向を向いてそちらに手を伸ばした瞬間。

アレキサンドルを閉じ込めていた剣群が倒され、そこから目を爛々と光らせた顔色の悪い中年男が出てきた。そして、間髪いれず、俺に襲いかかってくる。

驚いて固まってしまうているシルフィの胸を柔らかく突くと、屍人鬼に向き直る。

俺は右手の持ったままだった炎神剣アグニを振り、一瞬で爪が伸び擬態していたときよりは明らかに血色が悪くなった腕を斬り飛ばした。そして、返す刀、というか熱線で逃げようとしていた足を焼き切る。

いくら人間以上の筋力を誇るとしても、これでは発揮出来まい。立っていられなくなった元アレキサンドルは無事な右腕をバタつかせていたが、ついでに残った腕を踏み砕き、完全に無力化する。

人間なら確実にシヨック死するような損傷を与えられた屍人鬼だが、それでも俺の方を見て歯をガチガチと噛み合わせている姿は率直に言って気持ち悪い。

一瞬で尋問からバラバラ殺人事件（既に死んでいたので死体損壊事件のほうが正しいか？）に様変わりしたのを間近で見て、シルフィは気絶寸前だが、タバサは至って平静に俺に話しかけてきた。

「いつ屍人鬼だと思ったの？」

「さつき、身体検査したときだな。山蛭に噛まれたって言うたがあんなに噛み傷でござい、てな感じの傷跡じゃ、説得力は無いしな。他にもいくつか疑問があったが、確証までは無かったから、鎌をかけてみたんだよ。」

「納得。」

「え〜！？それじゃあ、ナナシが言っていたのは嘘なの？きゅい！」
「俺が平民だつてことを知ってるんだからそこは気づいとけよ。」「騎士でも戦闘が苦手」「油断している」「杖を持っていない」とくれば反応すると思っただが、大当たりだったよ。」

実際、あそこまでやらなければ判らなかつたのだから相当な難敵で

ある。意図して隙を作らなければ、俺でも反応が遅ければ、傷を負わされることになるだろう。

「じゃあ、あのお婆さんが吸血鬼なのね？」

「いや、違っただろうな。むしろ、あのお婆さんは隠れ蓑として利用されているだけだ。馬鹿じゃない限り、自分の身近な者を屍人鬼にしたりはしないだろうし、吸血鬼は一般に狡猾だ。恐らく、出歩けない婆さんに疑いの目をそらすためにアレキサンドルは屍人鬼にされただろう。」

「そんな・・・酷い・・・。」

「どんな理由だったとしても、殺されるってことはそいつにとつては酷いことだよ。それに、吸血鬼についてもある程度は目星がついている。」

「きゅい？どういうこと？」

「恐らく、吸血鬼は子供の姿をしている。犠牲者の家には煙突を通って浸入したんだろう。最初は老人も候補に入っていたが、あのお婆さんをスケープ生贖の羊ゴートに選んだということは暗に自分は違うイメー

ジの者だという証拠でもある。」

「なに、そう難しいことじゃないさ。疑われる相手を選ぶのに、それを自分に近い条件を持った者にするのは無意味を通り越して自滅願望が無ければしないことだからな。あるいはより深い考えがある場合だが、一所で殺しを繰り返したりするところからは、そんな風には思えない。」

「でも、まだ吸血鬼は誰だか判っていないのね・・・・・・きゅい。」

「だから、今回はコイツらを使うことにする。」

俺が指を打ち鳴らすと、ブラン（ドドブランゴ）、コン（ババコンガ）、ラス、ゲーネ、イーオ（ドスイーオス）、ギア（ドスギアノス）、ファン（ドスファンゴ）が現れる。

それから俺が説明した作戦に、タバサとシルフィは目を丸くしてい

た。

数時間後、俺は森の中にある切り開かれた広場にいた。俺が寝転んでいる辺りは赤々と燃える松明のお陰でかなり目立っていることだろう。それこそ、近くまで来ればすぐに判る程度には。

アレキサンドルを灰にしてやった後、村長宅まで行き、村中の子供を守るという名目で1つの建物に預けさせた。

そして、俺たち三人は『森に潜んでいると思われる吸血鬼』の討伐のために手分けして捜す、と言い残して村を出てきた。

実際はシルフィとタバサは屋根裏で待機しているし、吸血鬼が新たな屍人鬼を造ろうとしたら、無防備な背中を狙うだけだ。仮にその必要が出来ても殺すか殺されるかの場面で名誉がどうのと考えるほどタバサはおめでたくないから、大丈夫だろう。念のためにタバサたちのサポートとしてオーナとアイルー達も残してきているし。

それに、吸血鬼は俺たちを殺すつもりはあっても自分の正体が村人たちにバレることは忌避するだろうから、子供達の中から屍人鬼を造れば俺たちとの戦闘で壊されて、状況的に一緒にいた自分が疑われることくらいは考えているだろう。

多少の不安要素はあるが既にサイは振られているので、俺は待つだけだが、正直暇だ。

寝てしまうと拙いが、さりとてここにモンスター達が吸血鬼を誘導してくるまでするようなことも無い。

考えてみれば、ルイズに召喚されてからずっとあっち行ったりこっち行ったりしているよな。ま、狩人をしていた時期もずっと村と外を行き来していたから特別苦でも無いが。

色々行き来するということはそれだけ危険が増える、ということだが俺のところの主従は著しくそのあたりの危機感が足りないような気がする。

サイトは弱いくせに調子に乗り易いし負けん気が強いから、もうち

よつとキツ目の訓練をしてやったほうがいいのかもしれんなー。そういえば、ルイズが訓練に反対したせいで王宮に行ったときのお仕置きがまだだったし。

ルイズは妙な使命感を無くすあたりから始めさせたいが、こちらは力でもうにか出来ない分、難しいかもしれないなー。とはいえ、数日前のアルビオン行きみたいに、あの王女の鶴の一声で死亡確定の泥舟に乗らされるのは勘弁願いたい。この世界では王家に尊崇の念を持つのは当たり前のことらしいので、程度の問題なんだろうけど。あの王女によつぽど無能なところとか、あるいはルイズがよつぽどの痛手を受けない限り、変化は難しいだろう。

そんなことを考えていると、森の中に散っているモンスター達から連絡が来た。吸血鬼は順調にこちらに向かっていているらしい。オーナに思考を繋いでも、村長の家にいる人間たちは眠らされているだけで屍人鬼にされた者もないとのことなので、問題無い。

立ち上がって数分ほど準備運動をしていると、その人影は広場までやってきた。

あれ？

あの、息を切らせてこっちにやってくるのはたしか、村長の家にいたエルザじゃないか？

タバサたちの処にいるアイルーたちに、村長が屍人鬼にされていなか確認するように指示しつつ、松明に気付いてこちらに歩いてくるエルザに声をかける。

「よう、たしかエルザちゃんだったか？こんな夜中に、どうしたんだ？」

森の中で追いかけられたモンスターたちがよつぽど怖かったのか、エルザはしきりに後ろを警戒しながら俺の近くまでやってきた。念話で知っていたが、多少魔法で抵抗しても、いくらでも湧いて出てくるモンスターたちにはさすがに恐怖を覚えたのだろう。松明の光に照らされたエルザの顔色は身体検査をしたときよりも明らかに悪かった。

「その、もし吸血鬼がもし来たら、って思ったら怖くなって……
……。騎士様なら、きつとやつつけられると思っただから……。で
も、森の中に入ったら、一杯怪物がいて、怖かったわ。」

エルザは涙目で言っているが、家を出てきた理由としては少々苦し
いな。だが、俺はそんなことはおくびにも出さず、さもエルザを心
配しているかのような表情を作った。

「それは怖かったね。吸血鬼は従者がここまで誘導してくれること
になっているが、なに、私がいれば心配無い。大船に乗った心算で
いたまえ。」

「ありがとうございます。」

俺と一緒に座り込んだがおそらくは、今この吸血鬼の脳内ではどう
にかして俺を屍人鬼にしてタバサとシルフィにけしかけようと算段
しているところだろう。あてどなくさ迷わせている視線が時折俺が
持っている杖に注がれているところからして、間違いではあるまい。
ゴジローから村長は人間であることを報告されながら、そう考えて
ため息をつく。

同時に、森中に放っていたモンスターを紋章に戻した。

さて、ここまで詰めば吸血鬼の勝ちは万に一つも無いが、どうやっ
て畳み込んでいくかな。問答無用で殺してもいいんだが……。

「騎士様は、どうしてこの任務をお受けになったの？」

「ん？手っ取り早く言えば、本来この任務を受けるはずだった俺の
知り合いが少し不憫でな。代わりに俺が受けた、というところか。」

「そうなんですか。でも、吸血鬼だって人間と同じように生きるた
めに行っていることなのに、どうして殺したり殺されたりになっちゃ
うんだらう……。」

「人間ってやつは怖がりだからな。人間同士ですら判りあえないこ
とが多いのに、異種族なんかとはさすがに難しいんじゃないか？で
も、どうして？」

「人間だって毎日お肉やお魚やお野菜を食べているのに、どうして
吸血鬼は駄目なのかなって。」

よく言うわ。アレキサンドルを含めて10人も殺しておいて。

村長の話信じるとならコイツは一年前に養子になってこの村に住み始めたのだから、それから二月前までは血を吸わなくても生活できていたということになる。そして、アレキサンドル親子がきてから屍人鬼を造り、そちらに疑いの目がいくようにしてから犯行を繰り返していたことを考えると、こいつの言葉は調子のいい自己弁護にしか聞こえない。

反吐が出そうになりながらも笑顔を保っている俺は割りと頑張っているんじゃないだろうか？

「吸血鬼がしていることだって生きるためにしていることですよね？なら、どうして邪悪だなんて呼ばれるんだろう？」

「あくまでそれは、人間の持つ定規の中での話だ。俺の定規と君の定規が違うように、人間と人間以外の定規は違う。そんなことを嘆いても仕方が無いと思うがね。」

なにか意味ありげな問いに俺が返すと、吸血鬼はそうですか、と言うにとどめた。いい加減に”真剣十代喋り場”みたいな寝言も聞き飽きたので不自然に見えないように肩にかけていた杖を転がせる。

エルザのいる方向へ。

俺に対する害意があるならこれでアクションがあるだろう。

「おっと、エルザちゃん。悪いが俺の杖を……。」

「枝よ。伸びし森の枝よ。彼女の腕を掴みたまえ。」

エルザは杖を持って後ずさると、そう呪文を口にした。次の瞬間、近くにあった木の枝が俺の身体を締め上げ、拘束する。

「ふーん、それで？次の手品はなんだい？エルザちゃん？」

「あら。驚かないのね？それとも、強がりかしら。どっちにしる、貴女はここで私に血を吸われるんだけど。」

「他の犠牲者みたいに邪悪な吸血鬼に、かい？エルザちゃん？」

さっき言っていた言葉を返してやると、吸血鬼は顔をしかめた。付け。

「そうだよ。吸血鬼は私。煙突から忍び込んで、女の子たちの血を

吸っていたの。あの大きな人を使つて、捕まえさせたこともあつた。んー、でも、最初の一回だけだったかな。」

俺は自慢気に言う吸血鬼を見ながら欠伸をしている。もう深夜だからな。少し眠い。

「もう！ちゃんと聞いてよ！それでね……」

「俺を怖がらせたんなら、無駄だよ？薄汚くつて邪悪な吸血鬼のエルザちゃん？」

俺が言うと、表情豊かだった吸血鬼の顔が急に漂白されたように無表情になった。凶星を指されるのは人間以外も嫌うわけね。大発見かもね！。

「……助けが来ると思っているなら、無駄よ？貴女はこれから私に血を吸われて操り人形になるの。そしたら、従者さんたちを殺す手伝いをさせてあげるわ。それに、今は強がつてるけど、皆私が血を吸い始めると顔を恐怖に歪めるのよ。貴女だつてきつとそうなるわ。」

「無駄だと思うがね。よ……」

俺は全身の筋肉に力を込めると、拘束している枝を引き千切った。常人なら充分なんだろうが、たかが木の枝程度の硬度の物で俺を拘束できると思っているんなら、見当違いだな。

すかさず近付いてきた吸血鬼の首を掴み、持ち上げる。どうやら先住魔法つても喋れなければ使えないようだから、こうすれば吸血鬼も無力な子供だ。

「あー、そういえば、さつき何故吸血鬼が邪悪なのか、とか言っていたな。根本的な疑問を返すが、そう思われるのが嫌ならなぜ人間と関わって生きている？吸血鬼としての生を望まなければ、俺が派遣されることもなかったし、これから殺されることも無かった。吸血鬼としての生を望むのなら、人とは違う場所で生活するべきだった。子供だから、なんていう自己弁護はするな。お前は安易な道を選んだ拳句、行き止まりにたどり着いただけだ。」

そのまま親指に力を込め、喉を潰すと、地面に投げ捨てる。直後、

その上空に数本の剣が現れ、痛みに身動きの取れない吸血鬼の身体に吸い込まれた。

突き刺さる度に小さく痙攣した吸血鬼は俺の方を向くと、必死に顔を上げ、口をパクパクと開ける。喉と肺を潰されたせいで喋ることが出来ないのだろう。

あ・う・え・え。

「たすけて」か。

「お前はそう言った相手を助けたことがあるのか？因みに俺はあんまり無い。これは、お前が言っていた邪悪とか邪悪じゃないとかは関係無い。ただ、「殺してきたから今度は殺される番になった」というだけの屠殺劇だぞ？」

俺が言うと、吸血鬼の顔が絶望に染まる。俺は太刀「軍刀【獅子皇】」を出すと、その切っ先から火炎を放ち、最後まで何かの救いを求めていたかもしれない少女を焼却した。

最低の気分だった。いつぞや傭兵たちを虐殺したときはこんなことは無かったのだが、今回は酷く気分が悪い。腹の中がムカムカする。原因は吸血鬼を殺したことか。相手が外見だけとはいえ、子供だったから？

いや、そこまで簡単な感傷では無いだろう。その程度のことなら、ここまで気分が悪くなることは無いだろうし。

どこか、殺意はあっても迷いがあつた少女を斬って捨てたからか。俺を拘束してからの言葉が偽悪的なものだったとは思わないが、ただそれだけでも無かったのかもしれない。

それが今の不快感の理由だとすればなんとも脆弱な精神だ。自分の行為が全て納得のいくものでは無いことくらいは、判っていると思っていたがそうでもなかったか。

草むらに横になると、夜空を見上げる。そこには、相変わらず大きな月が二つあつた。

魂というものが存在するかは知らないし、はつきり言ってあまり信じてもない。それに自己満足なのも判っている。けれども、自分が消し炭にした少女とその犠牲になった村人たちのために、俺は信じてもない神に祈った。

せめて、彼らの魂の安らかならんことを、と。

空気は見えないもの。(前書き)

仕事の帰り道に財布を落としました。コンビニに寄って初めてそれに気付き、半泣きで来た道を帰ってみると、2キロほど離れた場所に落ちてました。

幸い、中身はそのままでしたが、リアルな危機は意外とすぐ傍にあるんですね。

空気は見えないもの。

シルフィに乗って学院に帰る道中、俺はほとんど何も話さなかった。元々喋らないタバサと、もう一人の俺がそんな有様だったので、その2人を乗せていたシルフィはどうにも気まずかったようだ。ちょっと罪悪感を感じるな。

吸血鬼のことに關しては後悔はしていないし、あれ以外の結末があったとは思えないが、しかし後味の悪さが残っていた。

それでも、あの後タバサたちが俺の元まで来ると、普段通りの顔は出来ていたと思う。まあ、少なくともタバサにこんな思いをさせるよりはマシか、と一応は自分の中で妥協できる点もみつかったので、腹の中のムカつきも無くなってきてはいるし。

どうにか学院につく直前に再起動をはたした俺は、とりあえずタバサの頭を撫で（本人は無表情のまま本を読んでいた。残念。）癒しを得ながら、もし次に任務を言い渡されたら必ず俺を連れて行くことを言い含めた。タバサは少しの間のおと俺の目を覗き込み、そこに何かを見たのか、なにかを諦めるようにため息をついた後頷いた。

そのまま撫で続けているうちに、学院に到着する。もう時間帯は夕暮れ時だ。

「延長は駄目か？この撫で撫でサービス。」

「ない。」

「そんな、殺生な！」

俺がその癒しの強力さに離れ辛く思い、そんなことを聞くが本人は全く頓着せずに地面に降り立った。俺も、それに続いてシルフィの背から飛び降りる。

前と同じように2人に挨拶してから、学院内を女子寮に向かって歩き始めた。

紋章に戻したマサムネとヨシツネによれば、俺の部屋はルイズと同

じ階に用意されているらしい。もしかしたら、ルイズが文句を言うかもしれないが、その場合は学院長を通してもらうことにしよう。あいつが頭越しに俺に使い魔としての立場を強要しようとしても、俺は（この学院では、という制限はつくが。）それよりも上の権限をもつ人間から部屋を与えられているわけだし。

そんなことを胸算用しつつ、いつかの決闘が行われた広場の近くに差し掛かったころ、前方からメイドが駆けてきた。よく見るとシエスタだったので手を挙げて挨拶しようとするが、彼女はそのまま俺に気付かず走り去っていった。

なんだ？顔を押さえていたような気がしたが、怪我でもしたんだろうか？

顔についた傷は女性にとってはデリケートな問題だろうから、追いかけるのも配慮が足りないか、と思い、彼女が走ってきた方向に歩を進める。

相変わらず日当たりが悪く、人があまり寄り付かないその場所には、数日前最後に見たときは僅かに様変わりしている。隅の方に置かれた大きな調理鍋と、それに浸かっているサイトが違和感の権化だった。

鼻歌をうたっているサイトはいかにも上機嫌そうだ。

こいつは……。

俺が、外国で心理的に妥協したり成長したりしていた頃、こんなことをしてやがったのか……。

若干理不尽な怒りが生まれかけるが、そこはそれ、すぐに風呂に対する興味にとつて換わられた。

「よう、湯加減はどうだ？」

「あれ？ナナシ、帰ってきてたのか？」

「さつきな。これ、どうしたんだ？」

「マルトーの親父に貰ったんだよ。日本人はやっぱりサウナよりはこっちだろ。」

サイトの言うことも、判らなくもない。個室風呂なんて気の利いた

ものがあるはずもないし、平民用の共同風呂は所謂サウナ風呂なのだ。この五年間で毎日風呂に入る習慣など持ちようが無かった俺はともかく日本から直輸入されてきたサイトには浸かれる風呂が無いのはつらいだろう。

俺はサイトが言うのを聞きながら、風呂を見回してみた。ほう、石の竈を作ってその上に鍋を乗せているわけか。ドラム缶風呂みたいだな。底に足をつけると熱いから、浸かるときは蓋を沈めてしまうわけか。

なるほど、正に五右衛門風呂だな。

検分は終わったから、さて、体験してみるか。俺は着ていたアンダーウェアを脱ぐと、全裸になった。

唐突に服を脱いだ俺に、サイトは目を丸くしてこちらを見ている。

そのまま、大股開きで風呂の縁に足をかける（このへんで何故かサイトは焦ったように後ろを向いた。）と、中に入り込む。

ふ。いい湯だ。

自然と吐息が出るが、それが気に入らなかったのか、サイトが抗議の声をあげた。

「ナあんで服を脱いで入ってくるんだよ!？」

後ろを向いたままのサイトが俺に聞いてくる。何故か裏声になっていたのか？

だいたい、風呂は服を脱いで入るモンだろう？

アレなゲームに出てくるような、水着を着て風呂に入る、なんてことは個人的嗜好から許さんぞ？

「なんだよー。こんなイイ物独り占めする気か？断じて許せん。い
いか、サイト。昔の人も言っていただろう？『俺のものは俺のもの。お前のものは借金以外俺のもの』って。」

「いや、そんな微妙にクレバーなジャイアニズムを披露されても！
？」

サイトが突っ込むが、俺は鼻歌まじりに無視していた。

結局、俺が入っている間は何故かサイトは風呂から出ようとはせず、

俺が服を着てその場から立ち去るまでずっと風呂に浸かったままだった。

何度かもう出たらどうだ？とは聞いてみたが、その度に妙に悟ったような声で「いいか、ナナシ。立ち上がるためには座っていないければならない。つまり、立っただけでは、立ち上がることは出来ないんだ。」と謎かけみたいなのを言うだけだった。

あれはなんだったんだろう？

俺もこの身体になってしばらく経つから、男だった頃との感覚のズレで判らないんだろうか？

よく判らないまま、俺は自分の部屋に帰っていった。

確かに貸してくれたものの、家具1つ無い部屋に、学院長への呪詛を思い浮かべながら慌てて貰ってきた藁たばで一晩を過ごす、俺は翌日、ベッドと数点の家具を買いに行くことにした。

最初は作るうかと思っただが、何でも魔法で出来る連中の学び舎に大工道具なんかがあるはずも無く、俺の武器は斬ったりすることは出来ても、表面を滑らかにしたり、精密に切断したりすることは難しい。

集中すれば出来なくもないが、買ってくるときの労力と比較した結果、こちらになったわけだ。

藁たばで障りがあるわけでもないのだが、俺だってどちらかと言えばベッドの方がいい。

レウの全速力で一時間強程度飛行した後、到着した王都は前に来てからそれほど時間が経っていないせい、今日も人で混雑している。一人で来たので、そういえば寝具の店の場所なんて知らなかったな。と今更ながらに気付いたのは王都に着いた5分後である。

案内板なんかはあるはずも無いし、多分あっても読めない、どうしたモンかな？と考える。

以前、来たときはルイズがサイトの質問に答えて、いくつかの看板

の表している内容を教えていたが、そのときも寝具店については言っていないかったしな。

日本ならこういう場合交番に行くので、衛兵の詰め所に行ってみるか、と名案を思いつくが、問題はその看板と場所が判らないことだった。

結局、道行く人に尋ねていると、有り難いことに教えてもらえることになった。しかも、場所まで案内してもらえらしい。

「助かりました。ありがとうございます。」

「いや、構わないよ。私もそっちに用事があったからね。それに、あのあたりは治安が悪いからね。若いお嬢さんが出歩くにはあまりお勧め出来ない場所だ。」

俺が言うと、カーゴンと名乗ったその小太りな中年男性は汗を浮かべながら薄い頭をかいた。

『お嬢さん』と言ったあたりは聞き流して頷いておく。人間関係を構築する秘訣は、相手の間違いに寛容であることだと思う。行き過ぎれば無関心にもつながるので、あくまで一要素として捕らえるべきものだが。

そして、そのままカーゴン氏の後ろをついて、路地裏を進んでいく。前に武器屋に行ったときも思ったけど、一步表通りから裏に入ると、途端に人が少なくなるし、妙に汚いんだよな、ここ。

道の端なんかには酔っ払いの反吐らしきものまであるし、どこことなくすえた臭いがする。

正に見栄っ張りの代名詞である貴族^{王族}の元締めが収める街だ。主の性格を忠実に再現しているのだろう。

段々表通りから外れた道に俺たちが進んでいくと、そこは行き止まりだった。

道を間違えたのか？と思って道案内をしていたカーゴン氏に声をかけると、彼は歪んだ笑みを浮かべた後、身体に似合わない動きで脱兎のごとく、後方に駆けた。

そして、さっきから後ろをついてきていた三人組みの男がいる所ま

で忠犬のごとく摺り寄る。尾行のつもりなら、随分とお粗末だとは思っていたが、その姿を見て少し納得した。

俺と同年代くらい全員が一樣に粗末な服を着て、手にはおそろいの光物を持っている。これは、アレだ。出せるものは命以外全部出せ、のノリだな。カーゴンはその客引きといったところか。

内心の失笑を隠したまま、俺はとりあえず、話しかけることにした。「よう、今日はお揃いで刃物の品評会か？」

「ハア？なに言ってるんだ？このアマ？」

「おい、カゴちゃん。面はいいけど、もうちょっとマシなの居なかったのかよ。」

「いえね、丁度道を聞かれまして、これは渡りに船だと思ひましてね。」

「や、むしろいんじゃない？これからシテもらうことはちよーっと頭足りてない方がイイじゃん。」

言葉の端々から頭の悪さを滲み出させている三人組みと、それに相槌を打っているカーゴンをどうしたものか、と思っている（俺の中ではとりあえず股間から棒と椰子の実が行方不明になるAコースと全身の骨の関節稼動域が360度になるBコース、A、B両方をする欲張りCコースがあるが。）と、4人の男は俺を見て揃って下種な笑みを浮かべた。

「そうそう。どーせ壊れちまうんだから、丁度いいか。」

「だべ？この前の女なんか、ケツサクだったしな。俺なんか、調子乗って瓶二本もねじ込んだし。」

「あー、あれな。捨てちまったけど、頭緩くってサイコーだったな。餓鬼が出来たら、必死に腹を守ってさ。誰が父親かも判んねーのに。」

「うわ、それ蹴ってたお前が言うかね。」

馬鹿丸出しの笑い声と想像以上に不愉快な話の内容に殺意が湧きかけるが、9割殺し程度にするつもりなので、それを抑える。

「そーいうワケで？オネーさんはここでちょっと気持ちいいことを

させてもらうから。運が無いよな、ホント。」

「ああ。運が無いな、本当に。」

俺は言いながら、拳を構えた。とりあえずCコースにしておくか、と考えながら。

いってみよう、やってみよう。(前書き)

当直明けはやっぱり眠いです。自分が何を書いているか判らなくなるし。

投稿したときは書き忘れていましたので書き足しますが、今回、人体が破壊される描写がありますので、そういったものを不快に思われる方は読み飛ばすことをお勧めいたします。

多分ストーリー的にはそれほど齟齬は生まれなはずですので。

いってみよう、やってみよう。

俺はまず、向かって左側の男に目をつけると、そこまで一跳びで移動し、「は？」と間抜け面をさらしている本人の腕からナイフを絡め取ると、それをそのまま股間に刺し込んだ。

一瞬何が起こったのか判らなかつた男は、恐る恐る視線を下に向け、そこに異物が生えていることと、それが俺の手に持たれていることを確認する。次によくやく認識した激痛に、口を大きく開け、悲鳴を挙げようとするが間髪いれず、喉に正拳を叩き込み、不可能にした。

そのまま喉と股間に手をやったまま崩れ落ちる仲間に、他の三人は心配よりも理解不能の表情を浮かべている。

俺は次に、ローキックで近くにいた屑の膝を粉碎すると、同じく喉を潰し、さらにナイフを取り落としかつたところで力比べをするように両手の指を絡めると、それをそのまま相手の方に傾かせ、へし折る。乾いた木の枝が折れるような音が連続して響き、屑は声にならない声を上げて、痛みにした打ち回っている。

腰を抜かしたカーゴンを見捨て、一人逃げようとしていた男には、落ちていたナイフを放り投げた。

狙い違わず、右足に命中し、バランスを崩して倒れこむ。足に突き刺さったナイフを必死に抜こうとしている男に追いつくと、悲鳴をあげながら持っていたナイフを振り回して抵抗しようとする。が、頓着せずその顔を蹴り飛ばす。下の方に当たったので、鼻は陥没し、前歯が全滅したようだ。ついでに喉を潰しておく。そして、倒れた男に馬乗りになると、その肋骨を一本一本丁寧にへし折っていく。

4本折れたところで気絶したので、仕方ないから残りは一撃で全部折ってやった。

それから、恐怖を浮かべたままこちらを見ているカーゴンを無視し、二人目と三人目の股間に去勢手術を執刀したあと、三人とも手足の

関節を三倍くらいの数に増やしてさしあげた。

こうすれば手足が使えないから、もうちょっと頭を使って生きることが出来るだろう。生きるだけ、だけど。

一生後遺症に苦しめられる傷を与え終わると、一人残ったカーゴンの方に向き直る。

惨劇をじつと目の前で見せられていたカーゴンは途中で失神していたが、俺が顔を蹴ると、目を覚ました。俺の顔を見るとパニックを起こしていたので、もう一回蹴りを入れて、正気に戻させる。

「も、申し訳ありませんでしたッ！！実は、その三人に脅されて、それで仕方なく……」

「んで？俺を狙った理由は何だ？嘘をついたら指を一本ずつ切り落とすから、よく考えて答えるよ？」

「そ、それは、その……」

「何も言わないのも、消極的な嘘と判断するからな。」

「……その、女を輪姦まわして、それから客をとらせようとしていました。」

さつき屑共が言っていた言葉から予想出来ていたとはいえ、気分の悪さに顔が歪んでいく。

「なあ、他人を不愉快にさせたら、謝罪するにしても相応の誠意ってモンが必要だと思わないか？」

「ヒツ！？せ、誠意ですか？」

「ああ。誠意だ。具体的には金銭的な価値があるものかな？」

こういう奴にはこれが判り易い罰になるだろう、と思い俺が言った瞬間、カーゴンは急いでポケットから布袋を取り出し、震える手で俺に渡した。俺は無言でそれを受け取ると、口を縛っている紐を緩めて中を見る。数十枚の銀貨と、何枚かの銅貨が入っていた。

ま、それなりの金額にはなるか。この金を作らされるために犠牲になった人間のことを考えると、胸糞が悪くなるが。

「他の連中のも取って来い。血で汚れてたら、手前が綺麗にしてかな。」

カーゴンは俺の命令を聞くと、再び忠犬ぶりを発揮しまだ地面の上で呻いている三人の服を弄って、布袋を取り出していく。血に汚れたものもあつたが、奴は言いつけを守り自分の服で拭いて綺麗にした。

次に犠牲者について尋ねるが、カーゴンは俺がスクラップにした連中しか知らないと言っている。3本ほど切り落としてやったが、泣きながら繰り返し言っているので、本当なんだろう。それでも、今監禁されている女性はいないらしいのでまだ不幸中の幸いだ。

最後に寝具店の場所を聞き出すと、用済みになったカーゴンは自分が解放されると妄想していたようだが、俺はゴミはちゃんと分別するタイプだったので、他の3人と同じくゴミらしくなってもらった。具体的には、二度と女は抱けないし、それどころか死ぬまで他人に助けてもらわなければ、食事をとることすら出来ない状態だ。

脅されていた？

そんな寝言を真面目に聞くほど俺は馬鹿ではないし、人間の善性を信じてもない。

基本的に屑はどこまでいっても屑でしかない、と思っっている。だって屑なんだし。

仮にここで見逃してもまた同じようなことを繰り返すだろう。だとすれば、未来の犠牲者を助ける意味でもこの判断は妥当だろう。

3人目の悲鳴が聞こえたのか、人の気配が近付いてきたので、俺はミヅハ【真】シリーズの不可視状態を使用すると、三角跳びで近くにあつた石造りの家の屋上に上がる。そのまま、屑共が発見されるところを確認してから、その場から立ち去った。

寝具店でベッドと布団を買った（店員は俺が平民であることに露骨に落胆していたが、見せ金すると、矢鱈と愛想が良くなった。あれで接客業が成り立つのだから、異世界の商業とは悪い意味での実利主義なんだろう）後、時間を指定して街の外に持って来ることを指

示すると、する事も無くなったので、俺は2時間ほど街をブラブラ歩くことにした。

丁度、腹が減ってきたところだったので、どこかに食べ物屋は無いかと見回していると、とある店の前で客引きをしている少女に目が止まった。

黒く長い髪に、太い眉の快活そうな雰囲気少女である。しかし、俺の視線は顔の造作よりはその胸元に引き寄せられていた。中々のモノをお持ちで。

見れば、周囲を歩いていく者たちの半数、つまり男は例外なくそこを見て鼻の下を伸ばしている。

イカンイカン。男としてどうかという前に、相手に対する気遣いくらいは出来る人間でいなくては。

まあ、さつき4人の人間の人生に、限りなくエンドマークに近いものを着けて来たので、気遣い云々は手遅れかも知だが。

とはいえ、少女は食事も出来るらしい店の宣伝をしているようなので、丁度いいから話し掛けることにした。

「なあ、飯屋を探しているんだが、ここ、軽い食事も出せるのか？」

「ええ。欲しいならお酒も出せるけど、まだ昼前だからね。」

「へえ。んじゃ、案内頼むわ。」

「毎度あり〜。はい一名様です。」

少女に案内されて入った店内は石造りの建物であるためか、まだ真っ昼間だというのに薄暗く、その中を小さな照明が照らしている。

そして、何故か店員が全員十代くらいと思われる少女だった。それも、客引きの少女と同じように、大きく胸元の開いた服を着た。しかし、そのときの俺はそんな事を気にしている場合ではなかった。

「あつら〜。美しいお客様ね〜。妖精さんたちが霞んじやいそ〜。わたくし、当『魅惑の妖精亭』ミ・マドモワゼルのスカロンと申します〜。どうぞ宜しく願いますわ〜。」

何故か押し強いオカマに迫られていたからだ。何の拷問だ、これは？もの凄く精神的な重圧があるんだが。

スカロンは見た目高身長筋肉質で外見もゴツイ男性である。それが野太い声で喋りながらクネクネとした動作でしなを作っているところを想像してほしい。

それも、自分の間近で。子供が見たら確実にトラウマになるような物体に若干（いや、かなりかナー。）引きつつ、奥の席に案内されて、そこで料理を注文する。

とはいえ、メニューの字が読めないし、説明されてもどんな料理か判らないので、適当に軽い食事を見繕ってもらうことにした。

この店では店員の少女が同じテーブルについて接客をするらしく、その相手は指名が可能らしいので、とりあえず外で客引きをしていた少女にした。そういえばなんかキャバクラみたいだなー、ここ。

ジェシカと名乗った彼女は話上手らしく、本人の性格もあってか人氣らしい。

料理をある程度食べて空腹感がなくなってきたせいか、ふと疑問に思ったことがあったので、尋ねてみることにした。

「なあ、ジェシカってなんでこんな仕事してんの？」

「あれ？職業差別？」

「あーいや、違う。俺の聞き方も拙かったけど。その、なんだ。別にこの仕事しか無いわけじゃないのになんでわざわざ客商売とかしてんのかなって。」

「ん〜。しいて言うなら、稼業だからかな？・・・あたし、店長の娘なの。」

それを聞きながらお冷やをあおる。

へ〜。店長のね〜。つまりあのオカマが父親な訳だなー。

そこまで考え、俺は口からブツと音を発して氷水を吐き出した。ジェシカがもう、汚いわよ、と言いながら、お冷を注いでくれる。

俺はそれを見ながら当然の疑問に捕われていた。

はい？スカロンの娘？

アレの種からこんな可愛い子が生まれるの？

遺伝子ってどうなってんだ？本当に。
そんなことを考えながら、俺は早めの昼食を食べ終えた。

お酒は二十歳になってから。(前書き)

中学生の頃、ルパン(一世の方)とホームズが対決する、とくいう内容の小説を読んだ記憶があるんですが、その内容が微妙にルパンをよいしよするようなものだったような気が。うる覚えですし、別段ルパンの作者をけなすつもりは無いのですが、当時の私はその本を書いたのがルパンの作者であることを見て、妙に納得した覚えがあります。

因みに、この前書きは基本的に本編の内容とは関係ありません。なんか思い出したので。すいません。

お酒は二十歳になってから。

学院に戻り、買ってきたベッドで寝るようになってから数日が経った。なんだかんだで挨拶をしそびれているので、未だにサイトにもルイズにも会っていない。その間、俺が何をしているのかというところについて買ってきた机と筆記用具一式を使って本を書いていた。

所謂同人誌というやつである。絵心は無いので、記憶をたどって知っている小説を堂々とパクっているだけだが。異世界に著作権法が適応されるかはよく判らないが、とりあえず暇つぶしとしては最適である。

買ってきてからこっち、知っている推理小説を思い出しつつ内容をこちらの世界にあわせるのが面白くなつてずっと缶詰なので、暇つぶしの領域はとつくに超えているような気がしないでもないが、まあ、それはともかくとして。

幸い、ベッドを搬入する際には生徒にはあまり見られなかったので、暫らくルイズには知られることはないだろう。

あいつ、友達少ないみたいだし。キュルケたちをカウントしない場合、もしかしたらゼロかもなー、と考えて苦笑する。それを聞いて顔を真っ赤にして怒る桃髪の姿が容易に想像できたからだ。

それが、友達ゼロに対するものか、キュルケを友達としてカウントしていることにたいするものかは判らないが。

思えば、ルイズと出会ってから、怒り顔ばかり見ているような気がする。それが澄まし顔か。

本人がコンプレックスの塊なので、それも致し方がないのだろうけど。

サイトの今後の活躍にこっご期待というところか。

それはともかくとして自分もベッドで寝ることが出来ることに素直に喜びながら、その上に寝転ぶ。

藁たばと違い身体を包む柔らかな感触が心地よい。まあ、アレはあ

れで悪くはないが、やはり布団に勝るものではないだろう。

すぐに眠気が襲ってきたが、今はなんとなくそれを拒否することにした。

疲れが溜まってるのかなー。

一緒に買ってきた筆筒なんかも既に配置してあるが、そちらは最低限のものでしかないので、部屋の中には空きスペースがまだたくさんある。

ルイズあたりにこの部屋のことを知られたら、「使い魔のものは主人のもの」とか言って早晚物置代わりに使われそうなので、どう説明したものか。やはり、教諭のほうから釘を刺しておいてもらったほうが得策かな、と小一時間ほどうんうん考えた結果、方針を決め、ベッドから立ち上がる。

日課になっている散歩に出かけるため、俺は部屋から出ることにした。

俺がいないお陰で部屋でサイトといちゃいちゃしているのか、女子寮を出た後、生徒の姿は時折見かけるものの、ルイズたちの姿は見かけない。

腹も減ってきたし、いい加減食事を摂った後でもに顔を見せておくか、と思って厨房の方に歩いてみると、声をかけられる。

「おい、そこにいるのは、ナナシじゃないかい？」

後ろを振り向くと、そこにいたのは気障な格好をした金髪の少年である。

「どうしたんだ？ ギーシュ。」

コイツは基本的に権威以外には物怖じしない性格なのか、決闘の後も俺に普通に話しかけてくる数少ない人間の一人だ。他の奴は大抵俺と目があうと視線を逸らす。たまに湿度の高い視線を向けられることもあるがその理由もよく判らない。

「ボクの使い魔の、ヴェルダンデを知らないかい？ 捜しているんだが、どうにも見つからないんだ。」

「あのモグラか。見ていないが、何かあったのか？」

俺が問うと、ギーシユは考え込んだが、特に思いつかなかった様子で「何も無いはずだが……。」と言って首を振った。

まあ、ルーンだか魔法だかの力で知能が高くなっているとはいえ、使い魔というのは基本的に元は野生動物だ。主人の思い通りにいかないところもあるか、と思つて納得する。

「解つた。けど用事があるから、捜すのは多少後になるな。見かけたら、お前が心配していたことを伝えておくよ。」

「すまないね。それでは、ボクはもう少し捜しているから。」

そう言つてギーシユは学院の敷地を歩いて行つた。初めて見たときはナルシストで二股をやらかす馬鹿だと思つていたが、案外使い魔想いのいい奴なのかもな、と思いつつ、俺は再び厨房の方へと歩いて行つた。

それから半日ほどして本の草稿がようやく完成し、さて作つてみたものの、これをどうしよう?と考える段になつて、はたとこのままではこの世界の人間には読めないことに気付いた。

日本語で書かれたこの異世界時代劇風シャーロックホームズとでも名付けるべき小説を読めるのは、俺以外にはサイトくらいだ。ようやく気付いた初步的なミスに、この三日の努力が無に帰すのかと脱力しかけるが、ルイズかタバサに音読して聞かせて翻訳してもらえればあるいは、と思ひ持ち直した。

まあ、これが面白いのかどうかはまだ解らないんだが。

とはいえ睡眠不足気味の頭ではそれくらいしか考えられなかった。とつくに夕食は終わつている時間だったがまだマルトーの親父は翌日の仕込みをしている頃だったのでとりあえず厨房で飯を貰つてから、腹ごなしに、ヴェルダンデを捜してみるか、と思つて散策を始めることにした。今は机に戻りたくない。

とはいえ、特にあてがあるわけでもなく、大つぴらに契約の力を使えない以上モンスターたちを使つたローラー作戦をするわけでもな

いので、ただ歩き回っているだけである。

第一、土の中にいたら、見つかるはずもないし。

何も収穫が無いまま、まだ起きているだろうし暇なようならサイトにも手伝わせるか、命の恩人なんだしと思ひ女子寮の近くにさしかかったころ、前からキュルケが歩いてきた。

「よう、夜の散歩か？」

「あら、久しぶり……、ってほどでもないわね。昨日、姿を見かけたし。ちよつと用があつてね。」

キュルケは巻いた羊皮紙を十枚ほど持っている。見た目はともかく彼女もこの学院の生徒なのだから、課題かなにかだろうか。しかし、こんな夜中に？もしかして新しい男を引き寄せる手管だろうか。

「何日か前まで見なかったけど、どこかに行つていたの？」

「あー、ほら。俺とサイトは今のところ、ルイズの世話になつてるけど出来るなら故郷に帰る方法が無いかと思つてね。ちよつと調べ物をしに出かけてたんだ。」

「ふん。タバサと一緒に？」

「うえッ！？あ、な、なんのことかな？」

「タバサが時々居なくなるのは以前からあつただけど、少なくとも、数日前からと舞踏会があつた日からは、貴女も一緒にいなくなつていたわね。気付いたのは今回だけだ。」

「いや、偶々だろ？キュルケの言つた期間は丁度ゴタゴタが無かつた頃のことだし。」

「ふん？……ま、今はそれでいいわ。でも、あの子のこと、絶対守つてあげてね？」

「おう！任せとけ！……つていやいや俺は何も知らないぞ？」

「そういうことにしておくわ。」

俺が焦つて言うと、キュルケは意味ありげにそう言つて笑つた。タバサの任務はあきらかに部外者に知られたら拙い類のことだ。それは他国の貴族であるキュルケには必要が無い限り、友達とはいえ知らせない方がいいだろう。

彼女自身が善良であることはあまり疑っては（多少不安な部分があるのはまあ、この際見ないことにしよう。）いないが、それでも彼女からそれを聞いた人間がどう思うかは解らない。

人間の善良さと秘密の大きさを飲み込めるかどうかはまた別の問題だと思ふ。その意味では俺はキュルケのことを信用していないのだから。それが、信じあぐねているのか。

彼女自身がタバサのことを大切に思っていることは短い付き合いとはいえ、理解しているが大事だと思っっているからこそ、言えないこともあつてしかるべきだと、俺は思ふ。自己弁護なのかもしれないけど。

「それじゃ、あたしはダーリンのところに行くから……。」

「あれ？サイトのやつ、女子寮にいないのか？」

「貴女、知らないの？」

「何を？」

俺も用があるので、サイトのところに行く道すがら、キュルケに教えてもらった話では、どうも何日か前の午前中サイトがシエスタをベッドに押し倒しているところをルイズに見られたらしい。

それを聞いて俺は嘘だろう、と言ったが現実として、キュルケはルイズからそのように聞いたらしい。

あいつにそんな度胸があるようには思えないのだがともかく、サイトはその場を見られ、激昂したルイズに使い魔をクビにされ部屋も追い出されたらしい。

そして、キュルケの使い魔の情報では数日前風呂に入った（そういえば、あれつきり行ってなかったな）。また行こう。）広場でテントを作って寝泊りしているらしい。

キュルケが嘘を言う理由は無いが、しかし何かの間違いではないかと半信半疑のまま広場まで行くと、はたしてそこには確かにテントのようなものが風呂釜の隣に作られている。

「そうらあ！おまえの言うとおりら！おんにゃはバカばかりら！」

「ボクはねー、モンモランシーにだって、あのケティにだってなに

もしていないんだ。ケティは手を握っただけだし、モンモランシーだって、軽くキスしただけさ！それなのに・・・、それなのに・・・。ボクはねー！」

中から聞こえてきたのはサイトと、あと何故かギーシユの声である。声の様子からして、どうやらベロベロに酔っているらしい。

ムシャクシャするようなことがあったとはいえ10代で酒に逃げているとは、先が思いやられる。キュルケの方を見ると、肩をすくめていた。

ため息をつきつつ入り口から中を覗くと、そこにはさらに惨状がひろがっていた。

サイトはキュルケの使い魔、フレイムの首に腕を廻し、瓶を振り上げて誰にとも無く赤ら顔で怒鳴っている。安酒場の隅っこにいてもなんら違和感の無い有様だ。対してギーシユは使い魔のモグラに抱きついて泣いている。探し物が見つかって良かったとは思うが、とてもそれを口に出せるような状況ではないな。

「あー、お前ら、とりあえず頭冷やしとけ。悪いことは言わないから。」

「楽しそうね。あたしも交せてくれない？」

俺が事態を收拾しようとしているのに、何故キュルケはそれに乗っかるようなことを言うんだらうな！。

「2人共、そのでっかいおっぱい、見せてくれたら、入れてあげてもよい。」

「断然同意だ！トリスティン貴族の名にかけて！断然！同意であります！」

俺とキュルケに対して、二人は言った。

まあ、酔っ払ってるからな。

仕方無いよな。

前に言ったとき、ボコにして土下座させたことをもう忘れているのも、次に言ったらもつと痛くするって言ったのも。

酒に酔って忘れてるからな・・・・・・無理だ。

精一杯自己欺瞞で誤魔化そうとしたが、自然と湧き上がる怒りは隠しようが無い。

とはいえ、2人共正気ではないのだから、手加減しておこう。具体的には後に残らないように3割殺しくらいで勘弁してやるか。そう考えて俺は指の骨を鳴らし、キュルケは胸元から杖を取り出す。数秒後、テントの中から絶叫が響いたのは、言うまでも無い。

すれ違ったりかみ合わなかったり（前書き）

上司に再三急かされどうにか数日でレポートを仕上げたんですが、その翌日に強制イベントが発生。今度は我が家から100キロほど離れた場所で農作業を手伝うことに。連休が見る間に溶けていきました。多分、車の中で聞こえていたあの耳鳴りのような音はドナドナでしょう。

というわけで（どんなわけだ。）1週間以上更新が出来ませんでしたが、また投稿していきたいと思いますので、宜しくお願いします。

すれ違ったりかみ合わなかったり

サイトとギーシュが迂闊な発言をした後「どんなときでも冷静さを失わないことが人間関係の上では必要になるときがある」ということを物理的に教えてやって数分後。

何故か表には正座させられた状態のサイトとギーシュがいた。不思議なことに、テントは半壊している。

2人はそれぞれ顔を赤や紫に彩色されたアンパン男のように張らせたり、高熱であぶられたかのごとく服と髪がチリチリになっているが、それらは概ね、些細なことだ。

こいつらの人権と同じく。

それがために俺もキュルケも一切気にしていない。

さて、それで何を始めたかというところ、キュルケが宝探しを提案したのだ。持ってきた羊皮紙には何かの絵や図形が描かれている。確かに彼女の言っている通り、羊皮紙には何かの絵や図形が描かれている。

しかし、これって信憑性はどうなんだ？

俺たちが行く以前に盗掘者が訪れた可能性云々よりもテレビ番組でやっているような徳川埋蔵金とあまり変わらないような気がするな。いつ出てくるとも判らない財宝をあてにするのは、賭け事で生計を立てようとする以上のも愚行だと思っただが。

一攫千金を夢見るものは大抵、それを掴む前に挫折するのが常だろう。

俺と同じくギーシュは懐疑的だが、サイトの方は意外にもキュルケの提案に乗り気である。

そんなにキュルケが言っている彼女の国で貴族になる、ということに魅力を感じているのだろうか？

それか、ルイズを見返してやりたいのか。

比重としては後者が多そうだな。

懐疑的だったギーシュもキュルケが王女の気を引くためとかありえ

ない可能性を助言したことで賛成派に移り、その後何故かやって来たシエスタも参加することになっている。

そういえば、シエスタを押し倒したところを見られたからサイトは追い出されたんだっけか。

下手に隠そうとして余計にこじれなかった部分は良かったと思うが、とても本人には言えそうにないな。

サイトはキュルケとシエスタに取り合いをされて夢見心地のようだし、ギーシュはモンモンのことを諦めていたのか、王女にアプローチするためにも、やる気のようなだ。

どうにも俺の周囲の人間は夢見がちな奴が多い。少しはフォローする身にもなってくれ。

「んじゃ、行くのはここにいる面子だけか？」

「あと、タバサも一緒に行く予定よ？」

「それじゃ、ルイズは「フンツ」。あー。無理そうだな。」

「そうね。それに、セレモニーでの大役があるそうだから、今はそれどころじゃないでしょうし……。」

俺がルイズの名前を出すと気分を害したのか、サイトが判りやすいくらい大きく鼻を鳴らした。

お前のさっきの姿を見たが、そんなことが出来るような状態には見えなかったんだがなー。

灯台下暗し、というところか。

それに気づくのがルイズかシエスタに刺される時でないことを祈っておこう。

まーこんな状態のサイトと同じく不機嫌であろうルイズを連れて旅にでるのはご免被りたいので丁度いいが。さっき気付いた翻訳については何日になるかは解らないが、旅に出ているうちにタバサに聞かせてそれからしようか。

それは置いておくとして、今、キュルケの発言に少し聞き逃せない部分があった。

「セレモニーってなに？」

「・・・ギーシュに言っちゃ駄目よ？同盟のために、トリステインの王女とゲルマニアの皇帝が結婚するのよ。」

「あー、なんだ。そりゃ、ご愁傷様だな。」

キルケが耳打ちした言葉に、俺はギーシュに生暖かい視線を送った。幸い本人には気付かれていないが確かにそれを知ったらギーシュはシヨックで旅に行くどころではなくなるだろう。それを言わないということは確信犯か。知った以上、俺も共犯だが。

心配要素は非戦闘員であるシエスタを何があるか判らない場所に連れて行くことだが、本人はサイトに守ってもらつつもりのようだ。

ま、危なくなったらレウあたりに守らせるか。というか、全員サブイバル経験なんか無いだろうから、今から凄く不安だ。

「じゃあ準備して。そうと決まったら出発よ！」

何事もなければいいが、無理なんだろうなあ、と思いながら空を仰ぐ。

そこには相変わらず二つの大きな月が俺たちを見下ろしていた。

夜のうちに旅立った俺たちは、日が昇る前には近場にあつた一枚目の地図の場所に来ていた。近場と言っても、飛竜に乗って数時間かかる場所である。当然、トリステインでもかなりの僻地なので、近くには村など無い。よって探索は日が昇ってからにして今は見張りを置いて持ってきた簡易寝袋で仮眠をとっている。

「なー、実際のトコ、どうなんだ？」

「あ？なにが？」

俺が声をかけると、同じく焚き火を囲んでいたサイトが片眉を上げて尋ねた。せつせと燃料を絶やさないようにさせているので、片手間になるのは仕方が無い。

「いや、お前が使い魔をクビになった理由。ルイズは決定的な瞬間を見たらしいけど、（いい意味でチキンなお前がそんなことをするのは）俺にはそうは思えなくてなー。」

「ああ。・・・あれは、ルイズの勘違いなんだよ。」
どこか疲れたような顔でサイトはこのあらしを話し始めた。
その日、サイトは掃除を終えた後、ルイズの部屋でシエスタに料理を振舞われていたらしい。彼女としては、好意を持っているサイトが最近厨房にこないから心配だったのだろう。そして話している内に（このあたりは言葉をにごしたので、内容までは判らない。）シエスタが脱ぎ始め、それを止めようとしたサイトともつれ合い、ベッドに押し倒すような格好で倒れ、間の悪いことにそこにルイズがやって来たと。

それを聞いた俺の感想は1つだった。

「お前つてありえないくらいに運が悪いのな。」
俺がしみじみと言うと、サイトは大きいため息をついた。そのあたりは自覚があるのだろうか。

それから、サイトは焦りながらも事情を説明しようとしたが、ルイズは聞く耳を持たず部屋を追い出されたんだとか。

まー、そんな場面を見たら、何を言おうとしても、言い訳にしか聞こえなくなるだろうしお互いの頭を冷やすことも必要だろうから顔を合わせないようにすることも悪くはないか。

それにサイトの話では使い魔に対する独占欲からそんなことを言ったと思っっているらしいが、だとすればキュルケが言っていた傷ついた様子だったという部分と齟齬がある。

多少なりとも憎からず想っているからこそだと思うが、それを言うサイトがまた煮詰まりそうなので、言わないほうがいいだろう。

調子こいてまたポカをやらかしても良くないし。

そう考えていると、微かに音が聞こえた。
聞き間違いかと思ったが、まだ聞こえてくる。草を何かか撫でていくような音。

このあたりはほとんど風が無いので、気のせいというわけでもないだろう。

しかも、拙いことに聞こえてくるのは1つではないし、同じ方向か

らでもない。

狼かなにかだろうか。近寄って来るということは火を恐れていないのか。

厄介だな。

持っていた水を火にかけて消すと、眠っている連中を起こしにかかる。

「急にどうしたんだ？」

「ナニかは判らないが、囲まれてる。」

「なにかあって？」

「逃げ場が無いように取り囲んでいるから、友好的じゃないのはたしかだよ。」

俺が言っているとサイトは急いで全員を起こし、次にシルフィとレウに乗せ始めた。

「戦わないのか？」

「暗所で囲まれた状態は、未経験者にはきついだろう。俺がモンスターで追っ払うから、見学してな。」

そう言つて二頭を舞い上がらせると、ラージとブランを解放する。

白と黒、対照的な大型の猿のような獣（まあ片方は角とか生えているが。）が現れる。二頭は周囲を見回すと、お互いに背を向け合い直立した。

俺はミツハ【真】シリーズを装備すると、高級耳栓スキルを発動させてから合図をする。

二頭は大きく口を開けると両手を振り上げながらかなりの距離まで響く咆哮をあげた。衝撃波すら伴いながら、二頭の咆哮が夜の闇に溶けていく。

途端に周囲にあった気配が蜘蛛の子を散らすように霧散していった。これで退かなかつたら各個撃破しなければならなかったので、運が良かった。それが怖いわけではないが、今は空の上で大人しくしている連中が痺れを切らさないと限らないし。特にサイト。次点でギーシュか。

出来ることならキュルケたちに抑えてもらいたいが、彼女たちも常にストッパーになれるわけではないのだし難しいだろう。

サイトはフーケ戦は逃げていただけだから暗い中での戦闘はほとんど未経験だろうし、また、集団に襲われるという怖さも判っていないだろう。ギーシュはワルキューレを攻撃されて頭に血がのぼったらアウトだな。

そういうわけであいつらは背中を任せるには少々以上に危ない。

実際、負けん気が強いのは悪くはないかもしれないが、それが不安要素たりえるのにいつまでも改善しないまま持っているのは阿呆のすることだ。

丁度いい機会だし、今回の旅で実戦を経験させてやるのもいいのかもしれないな、と結論する。

学院に戻ったらモンスター達を相手に訓練することも視野に入れてその前に今みたいな敵と命をかけたやり取りをすることで判つてくるものもあるだろう。俺がそうだったように。

それに治安が良いとは言えない国で杖や剣を持つ以上はいつかはあることだし何かしらの形で割り切らせることも必要だな、と考え、二頭を戻すと、俺はレウとシルフィに終わったことを合図した。

狩人の課外授業（前書き）

自宅の本棚を片付けていて、ドラクエ？の攻略本が出てきたので懐かしくなって読んでいたんですが、それで思ったことが、「ビキニアーマーを考えた人って天才じゃなかるうか。」です。誰が聞いてもオッサンですねー。でもアレはいいものだと思います。

狩人の課外授業

旅に出て数日後。俺たちは都合7つ目の目的地に来ていた。

初日に襲われてから、全体の方針として決まったのが夜間の野営は危険なのでなるべく近隣の村に泊まれるように交渉しておくことと、俺以外の人員による訓練を兼ねた野生動物との戦闘だ。

前者は狩りに慣れた人間でないと難しいので、特に反対はしなかったが後者は俺のリクエストで追加された。

隣国の状態がきな臭い以上はもしものときのために自分の身くらいは守れるように、かつそれに酔わない程度の自制心を持ってもらうことが目的だったが、意外にも一番乗り気だったのはそのあたりについては問題無さそうなタバサだった。

若干反対意見を出したのはギーシュくらいだったが、それも毎回の目的地に野生動物がいるかどうか判らない、という消極的なものだったので、特に問題は無かった。

考えてみれば至極当然のことではあるが、人間の住居というものは人間以外にとっても快適な住環境である。加えて俺たちが持っている宝の地図に載っている場所は大抵人里離れたところにある。

そして、それが捨てられたままになっていけば、いつの間にかそこには動物や亜人が住み着いているものらしい。

勿論、それが全てでは無いだろうが、今のところそれを証明するように目的地近くにあった村は全滅していた。恐らくは近くに住み着いた亜人たちに襲われたのだろう。

家々につけられた多数の血痕を見たあとでは住民は逃げたのでは？という希望的観測はさすがに出来ない。

とはいえ確かに毎回、望まれない先人がいるとは限らないので、「その場合は俺か、俺のモンスターが相手をするよ。」と言うと、ギーシュは青ざめた。

心配しなくても死なない程度には手加減するのに。

そんなにラージとブランが怖かったのか？

でも「その場合は是非モンスター相手の訓練にしてくれたまえ。」とか言っていたいなあ。

なんでだろ？ま、いつか。

飛竜を使用しての移動は基本的に数百メートルは離れた位置までそこから徒歩で向かう。今、俺たちは森の中から息を殺してその遺跡を見守っていた。

観察を始めて数分後。視線の先にある廃墟の扉から、数人の亜人が出てきた。

二足歩行をしているところや道具を持っているところは多少は知能が高いことを伺わせるが、しかしお世辞にも文明的とは形容しづらい。

外見的には国民的RPGドラクエに出てくるトルルに豚の鼻をくっつけたような外見の彼らはオーク鬼と言っらしい。

習性としては、人間の子供が大好物、というものがあるそうなので今までと同じく妥協の余地はないだろう。

俺は近くで同じく木に隠れているタバサの方に向き直って頷くと、弓を出して構えた。ここからなら出入り口とその周囲が見渡せるので、フォローがしやすい。

さて。他の面子のお手並み拝見、といこうか。

寺院の入り口の近くまで、人間のような影が走っていく。

全身の表面に金属の光沢のあるそれは、ギーシュのワルキューレだ。本体から離れているせいか、いつも以上に動作がギクシャクとして一歩ごとに大きな金属音を立てている。当然、オーク鬼たちがそれを聞き流しているはずもなく、入り口にたどり着く前に、そこから出てきたオーク鬼たちに囲まれた。

数は6。まだ寺院の中には多数のオーク鬼がいるだろう。手早く済ませないと、その全てを同時に相手にすることになる。

ワルキューレは手にした剣を振り回そうとするが、その前にオーク鬼が持った棍棒でグシャグシャに叩き潰された。

青銅の残骸を作った後も、オーク鬼たちは周囲を警戒していたが、やがて一匹があることに気付くと、見ているものを指差した。

ぴぎいいい！と正に豚のような鳴き声で指差されたのは100メートルほど離れた位置で突っ立っている一人の少年、ギーシュである。ギーシュは杖を持ったままだ立っただけだったが、オーク鬼たちの行動は迅速だった。

雄叫びのような泣き声を上げると、手に武器を持ち、そちらの方に走っていく。

恐らくは、メイジに魔法を使わせないために迫っているのだろう。そして、それはメイジを相手にするのなら概ね正しい戦法だ。力では人間よりはオーク鬼の方が上だし、そんな敵が近寄ってくれば、焦って魔法に集中できなくなる。そうなればオーク鬼の独壇場だ。
……それだけ、なら。

ギーシュまであと数メートルと迫ったオーク鬼たちの姿が突然消えた。

より正確には、その直前に掘られた穴に落ちた。

ギーシュの手前の地面には半径10メートルくらいの大穴が空いている。周囲の木立との間にはほとんど間隔が無く、ギーシュに向かってこようとすれば、大抵引っ掛かるだろう。

事前にヴェルダンデが掘ってギーシュが底にスパイクを設置した狼^{ろう}奔^{せい}だ。下からのリアクションが無いから、落ちたオーク鬼たちは巧いこと串刺しになったらしい。

上手くいったことでギーシュは安堵しているようだが、続いて入り口から出てきたオーク鬼は10。しかも、血の匂いで仲間を殺されたことが判つたのだろう。かなり興奮状態だ。

それを見たギーシュが急いで造花を振ると、彼を守るように左右の地面からワルキューレが生み出された。

だが、いかんせんオーク鬼が相手では頼りなく見える。落とし穴の

両側から回りこんで迎撃しているが、手数も力も違うため、押されっぱなしだ。

そろそろ手助けをしたほうがいいか？と思っていると、一方の落とし穴の外縁にヒビが入り、次の瞬間崩れた。その上に乗っていたワルキューレごと、オーク鬼たちが落ちていく。

崩れた断面には巨大な茶色い毛玉が覗いていた。ヴェルダンデだ。なるほど。ワルキューレを囿にしてさらに罠にはめたのか。

もう一方に残ったオーク鬼は木陰から現れたサイトとフレイムに挟撃されている。おまけに穴の反対側からは火と風の魔法が飛んでくる。キュルケとタバサは砲台に徹したか。

フレイムは相手の攻撃を喰らわないように火炎で確実に仕留め、サイトはルーンの力で押し切っている。

進退窮まったオーク鬼たちは意外なほどあっさりと倒され、穴に落とされていった。

「ん、85点かな。」

「おお！初の80点越えだ！」

「相変わらず辛口ね。じゃ、評価をお願いするわ。」

オーク鬼を全滅させた後、俺たちはシエスタに食事を作ってもらいながらさっきの作戦の内容を吟味していた。

因みに地図にあったお宝はこれまでと同じく、外れだった。まあ、近隣の村から退治の料金としていくらかは貰っているので、損にはならないんだが。というか、これって頭割りしても一財産なのではないか？という量の金貨が麻袋に収められている。

「そーだなー。まず俺のフォローがいらなかったところも良かったと思う。それに落とし穴とヴェルダンデの追撃は評価が高いな。予想しない攻撃ってのは大抵の奴にはかなり有効だし。あと、挟撃したのも悪くなかった。追い詰められた奴には考える時間を与えないのが基本だからな。」

まずは褒める部分からだ。言われたギーシュは嬉しそうだが、ラ・ロシエールでのことを思い出すと、あそこまで細かい作戦をコイツが考えたとは思えない。

多分タバサかキュルケあたりが考えたんだろーな。あの作戦。

「逆に、サイトは落とし穴の周囲での戦闘は足場の悪さから、いつも通りとは言えなかったな。多分、落ちかけてもタバサとキュルケがフォローするつもりだったんだろーけど、フレイムとサイトのどちらかがそうなるってことは、オーク鬼が後衛の所まで来ることが出来るってことだからな。連中はメイジの厄介さをよく知っている。ギーシュは一人だったから慎重さをもつて全員で向かってこられたんだろーけど、あんな状況じゃ、ワルキューレを守りに置いていても、少々つらいだろうな。」

実際、作戦というのは複雑にすればする分だけ、あそびが無くなり些細なミスも許されなくなっていく。より綿密が調整が必要になっていくのだ。

さっきの作戦にしても、仮定として、少しでもタバサ達の読みが外れていれば少々以上に拙いことになっていただろう。

結果が全て、と言ってしまえばそれまでなのかもしれないが、出来るなら、そこで思考停止するのではなく、次のリスクを減らすためにも、よく考えておいたほうがいい。

「みなさーん、お食事が出来ましたよー！」

シエスタがそう言って皿を配っていく。話はそこで終わり、とりあえず食事をすることにした。入っているのはシチューだった。

「おお、美味そうだな。」

「実際美味いよ。これはなんの肉なんだい？」

「皆さんが宝探しをされている間に獲った野うさぎの肉ですわ。」
へー。流石は田舎育ちということか。俺も調理が出来ないわけじゃないが、問題なく出来るのは基本的に肉を焼くくらいだからな。

「これはなんていうシチューなの？ハーブの使い方が独特ね。あと、なんだか見たことも無い野菜がたくさん入っているわ。」

「私の村に伝わるシチューで、ヨシエナヴェっていうんです。父から作り方を教わったんです。食べられる山菜や、木の根っこや・・・父は、ひいおじいちゃんから教わったそうです。今では、私の村の名物です。」

キユルケが聞くと、シエスタが懐かしそうな表情で答えた。

ふむ。伝統の料理ということか。微妙に名前が引つ掛かるが、多分偶々だろう。それよりは美味しい料理を喰うことの方が大切だ。

俺は、とりあえず三杯目のおかわりをすることにして、シエスタに皿を渡した。

一人作戦に参加していなかった俺がよく食うことにギーシユは呆れているようだったが、特に気にしない。

雰囲気はいつの間にか、和やかなものになっていった。

出張お宝発見隊。(前書き)

一ヶ月以上も間が開いてしまい、申し訳ありません。

いえ、投稿してはいませんでしたが、書いてはいたんです。以前と比べると亀の速度でしたが。意欲なんかはまだちゃんあるんですけどねー。

リアルでショックを受けることがあったり某掲示板の評価を読んだりと色々あったことはあったんですが、言い訳にしかありませんね。申し訳ありません。

休んでいた間に特に文が良くなったわけでも無いですがまだまだ続けていくつもりですので、さらに遅くなった更新にお付き合いましたら幸いです。

出張お宝発見隊。

タルブ村の外れにある寺院。どことなく懐かしさを感じさせるその内部。

そこに鎮座されたものを見て、俺とサイトは言葉を失っていた。最初に感じたのは疑問。そして次に驚愕。最後には再び疑問が俺を支配していた。多分、サイトも似たようなものだろう。口をぽかんと開けてそれを見ている。

模型や、映像としては見たことがあっても、博物館にでも行かなければ実際に見ることはないものが目の前にあるからだ。

大きなプロペラは力強く空を飛ぶことを予想させ、無駄を省かれたシャープな輪郭はその身軽さを主張し、機体と両翼には赤く染められたお馴染みの日の丸が輝いていた。

ギーシュやキュルケはこれが飛ぶ、ということが信じられないためか、ハナからインチキ扱いしている。まあ、シエスタが前もってそう言っていたこともあるから、判らなくもないが。

唯一、タバサが好奇心を刺激されたのか、珍しく本から視線をあげ、しげしげとそれを覗き込んでいた。

俺もそれと同じように近付き、機体を見つめてみる。

長年メンテナンスする人間もいなかったらうにほとんど傷らしい傷もなく、錆も浮いていない。ただ放っていただけではこうはならないだろうから、魔法か。

科学の落とし仔が魔法によって保存されていることには若干の皮肉を感じなくもないが、それは今考えることでもない。

それは半世紀以上も昔、俺たちの祖国で使用されていた戦闘機。

零式艦上戦闘機。

俗にいう、ゼロ戦だった。

確かに『破壊の杖』という前例は有ったが、それにしたってなんでこんなものが？と考え、はたとコレがシエスタの曾祖父の持ち物だ

ったことを思い出す。

そして、彼女が案内してくれる前に言っていたことも。

今日の昼、オーク鬼を全滅させ食事を終えた後、俺たちは次にどうするのかを検討していた。

旅に出て数日経っているものの、俺たちは幸運なことに今のところ毎日ベッドで寝ることが出来ている。とはいえ、連日、実戦兼訓練を行っているせいで全員疲労が蓄積している。

本来の目的であるお宝は今のところ全く見つけられていないし、これまで亜人たちを討伐する依頼料として受け取ってきた金貨はそれを諦めても損は無程度には溜まっていた。

さらに魔法学院の生徒の三人は今回の自主休暇をいい加減に終わらせなければ拙い、という理由もあるらしい。長期のサボりがよろしくないのは異世界の学校も同じか。

今回のことは学院に許可をとったわけではないので、アルビオン行きるときと違って何らかのペナルティはあるかもしれないし、俺や、恐らくはタバサも宝探しが目的ではなかったし、サイトも旅に出てからはどちらかと言うと、実戦を多く積むことのほうが目的になっている。ギーシュはそろそろ学院に戻ったほうがいい、と主張している。

現時点でも宝探しに乗り気なのは発案者のキュルケだけだ。

とはいえ彼女も他の面子が乗り気ではないのに無理やり旅を続けさせる気は無かったようで、出発する前に約束した通りシエスタを彼女の村まで送ってから学院に帰ることになった。

そして訪れたタルブ村の名前を宝の地図で見たことを思い出したキュルケがシエスタに質問し、ここに案内されて来たわけだ。

シエスタの話では、ゼロ戦は既に故人である彼女の曾祖父が持ってきたものらしい。

ということは、太平洋戦争中にこちらに召喚されたのか？
しかし、いったい誰に？なんの目的で？

破壊の杖のときにも散々考えていたが、今もよく判らない。それが

顔に出ていたのだろう。シエスタがこちらをのぞきこんでいた。

「サイトさんとナナシさん、ほんとに……大丈夫？」

「シエスタ。」

「は、はい？」

「お前のひいおじいちゃんが残したものは、他にないのか？」

「えつと……あとほたいしたもの……お墓と、遺品が少しだけですけど。」

戦地に赴く人間の持ち物が多いわけは無いが、何かの記録があれば何かしらの発見があるのかもしれない。それに、まだ何かの間違いだという可能性もある。

「可能なら、で構わんが見せてくれると有り難い。」

先人の知識が手に入れば、あるいは元の世界に帰還する手掛かりが見つかるかもしれない。俺はサイトと視線を合わせ、同じことを考えていることを確信し、頷きあつた。

そうして数分後。案内されてきたのは村の共同墓地らしき場所の一角。用があつたのは俺とサイトだけだったので今この場にいるのは三人だけだ。

他の三人は村長の家で一足先に歓待を受けている。

明日には学院に帰る予定だから、ギーシュもハメを外しているだろう。後で混ぜてもらおうか。

そう思い、一歩前に進む。

洋画に出てくるような白い石造りの墓が並ぶ中、俺たちの到着した場所には明らかな異物があつた。

そこにあつたのは周囲にある西洋風に墓石とは明らかに違う、見覚えのある形の墓石だ。

「……海軍少尉佐々木武雄……」

「『異界二眠ル』、か。昔の人にしては随分と洒落た言い回しだな……いや、それ以外に言い様が無いか。」

俺は軽口を叩いたが、顔色は冴えない。ほぼ確定していたが、これで完全に間違いなくなつた。この墓石の下で眠っているのは日本人

だ。

恐らくは戦争していた頃の日本からこちらの世界に召喚されたのだろう。そう考えれば、曾祖父はある日突然この村にやって来た、というシエスタの説明にも辻褄があう。

まだ誰が、と何故、が解決していないがそちらについては最初からほぼ絶望的なので、気にしない。せめて知っていることとの類似点があればまだ思考材料はあるのだろうが、『破壊の杖』のときは時代も状況も違う。

しいて『破壊の杖』との共通点を挙げるなら、それをこの世界に持ち込んだ人間が既に故人であることくらいだろう。

そんな事が他の何かに繋がるとは思えないが。

サイトは難しい顔をしてシエスタを見ている。おそらくは、どこもなく彼女から懐かしさを感じていたのだろう。それは、彼女の黒髪だったり雰囲気だったりするのかもしれない。

サイトの視線にシエスタは照れていたが、俺はぎこちない2人に気をきかせて、村長の家に向かうことにした。

ルイズがそれを知ったら俺を責めるのかもしれないが、個人的な意見としては、サイトが誰を好きになろうとそれはアイツ自身が決めることで、俺がとやかく言うようなことではないだろう。

早いもの勝ちが全てだとは言わないが、とはいえ口に出さなければ伝わらないこともあることは間違い無いのだから。

それに、俺は他人の恋路に口を挟むほど身の程知らずでも、無粋でもないつもりだし。

村人たちからの歓待を受けたあと、先に村長の家で休んでいたタバサ達の部屋に訪れたのは墓地を出て一時間ほどしてからだ。旅人、それも貴族が来るのは珍しいのか、色んな相手から酒を勧められたのは少し困ったが、皆、気のいい人たちばかりだった。

部屋に入ると、長旅の疲れからかキユルケは既にベッドに入ってい

だが、タバサはまだ本を読んでいる。

ギーシュも別室で軒をかいている頃だろう。

予想通りの光景に、俺は苦笑して傍まで歩み寄ると話し掛けることにした。

「何の本を読んでいるんだ？」

「マジックアイテムについての考察本。」

言いながら背表紙を見せてくれるが、相変わらずそれを読むことが出来ない。いい加減、この世界の文字を覚えたほうがいいのかもしれないな。なにかと不便だし。

「ああ、あの『竜の羽衣』が気になるのか？」

俺が問うと、タバサはこくりと頷いた。やっぱり気になるか。

「貴方はアレが何か知っているの？」

「あゝ、まあ、な。あの反応を見てれば判るわな。んー。あれは、俺やサイトがいた国の乗り物なんだよ。」

「空を飛ぶ？」

「そうだよ。シエスタの曾祖父さんは嘔吐き呼ばわりされていたらしいけど、実際、アレは飛ぶ道具だ。」

「どうやって？」

どうやって説明したもんかね？と思案した後、俺は人差し指を立ててそれをくるくると回した。プロペラのイメージなのだが、自分でやっていて、どうにも幼稚さを感じなくもない。

「この前の授業でコルベル先生が”愉快なへびくん”とかいう玩具を作ったろ？あんな感じの動力機関で動力を作って、その力で前にあったプロペラ……風車を回して、推進力を得て飛ぶんだ。」

「興味深い。」

「でも、今はガソリンが無いから動かないだろうしなあ。うーん。

あ、でもあの人なら……？」

「がそりん？」

「動力機関を動かすためのものだよ。うーんと、たしか……大昔

の生き物の死骸が地中深くに埋まって、それが時間をかけてなる油。

「どれくらい？」

「百万年くらい、だったっけ、かな？多分それくらいだったと思うんだけど。」

俺の拙い説明に、それでもタバサは驚いていたようだ。

寝る前に、少し話してもしよう。ついでに、いい加減荷物の中にある同人誌を聞いてもらおうか。

そう思い、俺は容易されていたベッドに腰掛けると、タバサの方に向き直った。

それぞれの家路。(前書き)

連休明けは出勤するのが億劫になってきますねー。

あれ？学生の頃も同じようなことを言っていたような気が。

十年以上経って何の変化も無いとは、なんと云うか、駄目さが炸裂していますねー。

それぞれの家路。

タルブ村で思わぬ発見をした翌日、俺たちは学院に帰還していた。シエスタは休暇なのであのまま村に残り、その代わりに俺たちはゼロ戦を運んできている。

後で聞いた話だが、シエスタの曾祖父の遺言で『墓の文字を読める人間にコレを託す』というものがあつたらしい。勿論拒否も出来たのだろうが、サイトなりに思うところがあつたのか、それを素直に受けたのでレウとレアがロープと網を使って運ぶことになった。

今は動かないが、予想が当たっていれば、いずれゼロ戦が空を舞うこともあるかもしれない。

そう考えて学院に戻ってきたわけだが、呼びに行くまでもなく、予想していた人物がゼロ戦に近寄ってきた。

彼は走ってきたためか、荒い息をつきながらも、大きく見開いた目でゼロ戦を凝視している。トランペットに憧れる少年もかくやという勢いだ。

因みに俺とサイト以外の三人は教師陣にしばらくられるために既にこの場にはいない。

判り易くゼロ戦に魅入られているコルベール教諭に接近すると、俺は頭を下げた。

「お久しぶりですね、先生。」

「おや、久しぶりだね！それはそうとこれは君達の持ち物なのかね？構わなければ、これがなんなのか、私に教えてもらえないだろうか？」

「あゝ、これは、ですね。俺やあそこにいるサイトの祖国で造られた”飛行機”という機械です。」

「ひこうき？それはいつたい、どういう物なんだい！？」

コルベール教諭は興奮のあまり俺の腕を掴んで顔を引き寄せ聞いてくる。予想はしていたが、それ以上の食いつきだな。正直、勢いが

ありすぎてちよつと怖い。

「つまり、空を飛ぶ道具ですよ。」

「空を！はあ、素晴らしい！つまり、所謂「風」系統のマジックアイテムということかね？しかし、実に興味深い形状をしているな！」

「あゝ、いや、こいつは魔法の力は使用されていないんです。状態の維持には使用されているみたいですけど。この前の先生の授業で見せてくれた……何でしたっけ？『愉快な蛇君』？アレと同じ理屈で動く物ですよ。」

「ほう！ますます素晴らしい！たしか、ナナシ君といったね。ちよつとこの”ひこうき”を動かしてみせてくれないかね？」

「いや、それが動かないんですよ。コイツ、燃料が切れているみたいで。」

「燃料？それは、いつたいなんだね？」

「コイツが動くために必要な油の一種です。……あゝそれと、先生。頼みがあるんですけど、いいですか？」

「なんだね！？なんでも言ってくれたまえ！私に出来ることなら相談に乗ろう！」

そう言つて教諭は胸を張つた。既に何人かの生徒はゼロ戦を遠巻きに見ているので、彼の管理下に置いてもらったほうがいいだろう。

このまま放置しておく、俺やサイトに悪感情を持つものが余計なことをしないと限らないし。

場所は学院の塔に挟まれたところに建てられた教諭の研究室。

レウに引かせてゼロ戦を教諭の案内で移動させたあと。

相談をするために研究室に入った瞬間、俺とサイトを迎えたのは原因不明の悪臭だった。思わず顔をしかめ、鼻に手をやる俺の目の前では教諭が自虐的なジョークを交え、自分の研究室がこんなへんぴな場所にあることを説明しているが、正直それに返答する余裕が無

い。油断していたせいで思いっきりこの臭いを吸い込んでしまったので鼻が半ば利かなくなっているし。

サイトに相談を任せ、なんととはなしに室内を見るが、訳の判らないものが訳の判らないように置かれているようにしか見えない。埃とか黴のような臭いもするが、それらに混じって全く知らない臭いもある。例えるなら、オッサンが一週間履き続けた靴下にくさやの干物とドリアンの臭いを足したような、意味不明でありながら一際存在感のあるなにかだ。

換気をしようにも、窓は嵌め殺しになっているしこんな部屋を使用しているのだから、教諭の鼻はとづくに使い物にならなくなっているだろう。自業自得とはいえ、可哀想に。

とはいえ本人は俺が同情しているのに気付かず、サイトに渡されたガソリンのサンプルを検分している。

ま、本人が気にしていないなら、いいか。

ほとんど賭けみたいなものだが、物質を組み換える力のある魔法なら、ガソリンを作ることが出来るのでは？という結論から頼んでみているのだが、勝算としては5分5分といったところか。

この世界の魔法の原理はよく判らないが、サイトから聞いた話では授業で真鍮を造ったこともあったらしいし、混合物を作るのが難しい、というわけではないようだ。

話が済むと、臭いから逃れるために、足早に俺とサイトは退室することにした。

因みに、ガソリンの簡単な組成も教えておこうと思っていたのだが、それは教諭に断られた。どうも、自分の力で解き明かしたいらしい。急ぎの用事も無いし、さて部屋に帰って寝ようかね、と思っていると、ふとサイトのことが気になった。

考えてみれば、コイツってルイズに追い出されてるんだよな。そろそろルイズも頭が冷えてきてるだろうから、問題無いだろうけど、もしまた喧嘩することになったらテントも無いしな！。

ま、大丈夫だろ。多分。おそらく。

考えるほどにルイズの気性とかサイトの頑固なところとかが不安になつてきたが、そう考えて思考を切り上げる。なるようにしかならないだろうし、俺がうんうん考えても仕方無いだろう。

フオロー出来る部分はするが、結局どうにかするのは本人たちなんだし。

別段2人のことが嫌いなわけではないし、むしろ自分に近い人間だと思つていのだが、相談に乗るくらいはしても、進む方向まで指示するのは少し違つたろう。

2人には2人なりの解決方法があるだろうし、それに俺が口を挟むべきではない。

そう考えて、ゼロ戦の方に寄つていくサイトと分かれた。

女子寮まで歩いていくと、ふと見知つた人影が前から歩いてくる。

不思議なもので、それまであちらも気付いていなかったようだが、どうも俺と同時に気付いたらしい。

一瞬、逃げるべきか?と思つたが、後が怖そうなのでやめておいた。その人影は短いスカートを豪快にはためかせながら、こちらに走ってくる。

「よう、久しぶりだな。元気か?」

「あ、あんた、ずっと何処に行つてたのよ!!!?それに、あのバカ犬は何処!?」

興奮したルイズは顔を真っ赤にして俺の胸倉をつかんで聞いてくる。とりあえず人にものを聞く態度じゃないよな、これ。

俺はため息をつきながら口を開いた。

「部屋に引きこもつてたから気付いてなかったみたいだが、一回学院に帰つてたんだぞ?3,4日くらい。」

「でも、私の部屋には戻つてなかったじゃない。」

「俺も色々ツテがあるんだよ。それと、サイトならコルベール教諭の研究室の方にいるよ。」

「なんでそんなとこにいるのよ?」

「今回行つたところでちょっとした発見があつてな。教諭に協力し

てもらってそれを使えるようにしてるんだ。」

「ふうん、マジックアイテムかなにか？」

「ま、そんなところだ。それより、サイトを捜しているってことは多少は頭が冷えたか？」

俺が聞くと、ルイズはきよとんとした表情になった後、一瞬で顔を紅潮させた。なんだか器用なやつだな。

「な、なんのことかしらね！！私は、飼い犬の面倒を気にしてるだけよー！」

「そーかね。ま、俺が一夕口出するようなことでもないが、一つだけ助言、というか忠告をしておくよ。」

「………なによ？」

「人間の意志つてのは言葉で言わなくても通じることがあるが、反面言葉で言わなければ通じないこともあるってことさ。相手のことを理解したいなら、その言葉に耳を傾けることも悪くは無いんじゃないかな。」

「それくらいわかってるわよー！」

無然とした表情のルイズに俺は頭を撫でてやる。ルイズは煩わしげに俺の手を振り払った。残念。

頭では判ったいても心がそれについていけない所もあるから、仕方が無いこともあるんだろうけど。

「ま、そんなら頑張りなさい。」

俺は苦笑すると、ルイズの背中を押してやった。彼女はそのまま、肩をいからせて歩いていく。

元が誤解なんだし、お互い時間をおいたことで相手の話を聞く余裕も出来た頃合だろうから、問題は無いだろう。

そう考えて後ろ姿を見送っていると、今度は誰かの足音がまっすぐに近付いてきた。声をかけもしないし、誰だろう？と思っ振りと向くと、視界に入ったのは青い頭髪だ。

「どうしたんだ、タバサ？」

「労働力の確保。」

「？」

そう言うとタバサは俺の腕を掴む。よく判らないままタバサを見るが、彼女はそれで説明は終わり、と言わんばかりに混乱した俺を引きずって行く。

なんでせうか、これ？

助けを求めて視線をさ迷わせると、何故かモップや雑巾を持ったキユルケとギーシュが見つかった。

「なあ、どうかしたのか？」

「ふ〜ん。なるほど、ね。確かにナナシなら手伝ってくれそうね。」俺が問いかけるが、キユルケは答えず、なにか意味ありげな台詞を口にするだけだ。とりあえずギーシュに視線を向けるところからは素直に答えてくれた。

「無断で旅に出ていた罰で、学院内の窓掃除を命じられているんだよ。人手が足りないから、手伝ってくれないかね？」なるほどね。しかし、この広い学院で、か。

見捨てるのも可哀想かな、と考え手伝うことを承諾する。数分後には、今日中に終わるのか、不安になってきたが。

戦火は友に忍び寄る。(前書き)

十年振りくらいに歯医者に行きましたが、相変わらずドリルが苦手ですね！。

戦火は友に忍び寄る。

ここ数日は何事も無く、日々が過ぎていった。

とはいえ、それは俺の感覚の内だけの話で、サイトにとっては連日ギーシュと共にイアン（イヤンクック亜種）相手の実戦形式での訓練。ルイズにとってはサイトが訓練とゼロ戦でいっぱいいっぱいになっているので、もやもやとする毎日。コルベール教諭にとっては完成したガソリンのレシピを元に、量産中で忙しい日々と感じ方はそれぞれだったが、それらに1つだけ共通する部分があったとしたら、それが嵐の前の静けさだということだったのだろう。いつだって、望まれていない事態は急にやってくるのだ。それが、さも当然のことであるかのように。

その日、俺とルイズとサイトは学院の玄関先で待ちぼうけをくらっていた。

アンリエッタ王女とゲルマニア皇帝の結婚式。

数日前にキュルケに聞いたその式に、何故かルイズが出席するためであるらしい。

しかも、式の最中に祝詞をよむ役を任されているんだとか。

よく判らないが、貴族としてはかなり名誉なことだと思うのだが、しかしルイズの表情は冴えない。好きでもない相手に嫁ぐ王女に同情でもしているのかもしれないな。

式の最中に妙な事を口走らないなら、別段ガミガミ言ってもりも無いので、構わないが。

因みに俺とサイトはルイズの使い魔、ということに従者扱いで式にも出席するらしい。警備の問題とかそもそも一学生に過ぎないルイズが何故そんな重要な役割なのか、とか考える部分は多少あるが、それも俺が気にすることでもないだろう。

というか、1つずつ考えると最終的に頭痛がしてきそうだし。

結婚によって締結される同盟にしたところで、トリステイン、ゲルマニア、アルビオンの正確な国力、軍事力の差を知らない俺にはよく判らないし。まあ、これまでの王女や他の人間の言っていた言葉からして、三つの国の中ではトリステインが一番の小国なのは間違いないようだが。

結局考えても仕方が無い、という結論に達し、思考を自分の周囲のことにシフトする。

ルイズは数日前学院に戻ってきた日に一応はサイトと仲直りをしていたようだったが、しかしまだどこかギクシャクとしているように見える。

多分、自分の役割のことではいいいっぱいになっているのだろうが、相談相手としてサイトが役に立たないせい（連日の訓練でズタボロにしている）、俺が原因でもあるのだが。）で、ストレスが溜まっているのだろう。

もしかしたら、まだ祝詞が決まっていけないのかもしれないな。だとすれば、生真面目なルイズのことだ。かなり困っていることだろう。まあ、ゲルマニアまでは馬車で行くことになっているから、まだ猶予は多少ある。

今ならサイトも相談に乗れるだろうし、俺も手伝うから三人寄れば文殊の知恵、とかなんとかで出来ないことも無い……..よな、多分。

希望的観測をしていると、人影が近付いてきた。

ようやく馬車が到着したのか？と思っていると、その人物に話しかけられる。

「その生徒！私は王宮からの勅使だ！火急の用件があるため、オスマン学院長の執務室の場所を教えてください！」

男は簡素な服を着ていながらも、ベルトに頑丈そうな杖を挟み、明らかに暴力に慣れた雰囲気醸し出している。それが、顔を真っ青にしてそんなことを尋ねたのだ。

なにか、歓迎できない何かが、ろくでもない何かが起こったと考えるべきだろう。

そして、それはこの学院にも関係しかねないことなのか。

明らかに尋常ではない様子の相手に、それでもルイズはジーサンの執務室の場所を教えた。男は礼を言うと、足早に駆けて行く。

俺たちは顔を見合わせると、男の後を尾行することにした。

俺たちが執務室の前までたどり着いたときには、さっきの男は既に部屋の中に入り、ジーサンと話をしているようだった。それでも、大声で報告をしているため、なんとかその内容を盗み聞くことが出来そうだった。

「……………ビオンがトリステインに宣戦布告！ 姫殿下の式は無期限延期になりました！ 王軍は、現在ラ・ロシエールに展開中！ したがって、学院におかれましては、安全のため、生徒及び職員の見守りを願います！」

「宣戦布告とな？ 戦争かね？」

「いかにも！ タルブの草原に、敵軍は陣を張り、ラ・ロシエール付近に展開した我が軍とにらみ合っております！」

「アルビオン軍は、強大だろうて。」

「敵軍は、巨艦『レキシントン』号を筆頭に、戦列艦が十数隻。上陸せし総兵力は三千と見積もられます。我が軍の艦隊主力はすでに全滅、かき集めた兵力はわずか二千。未だ国内は戦の準備が整わず、緊急に配備できる兵はそれで精一杯のようです。しかしながらそれより、完全に制空権を奪われたのが致命的です。敵軍は空から砲撃をくわえ、我が軍を蹴散らすでしょう。」

「現在の戦況は？」

「敵の竜騎兵によって、タルブの村は炎で焼かれているそうです……………。同盟に基づき、ゲルマニアへの派遣を要請しましたが、先陣が到着するのは三週間後とか……………」

「……見捨てる気じゃな。敵はその間に、トリステインの城下町をあつさり落とすじゃろうて。」

交互に話すジーサンと男、その台詞にサイトもルイズも真つ青な顔をしている。多分、俺も似たような顔色をしているだろう。

いつかはあるかもしれない、とは思っていたがアルビオンでの戦争が終結してまだ半月も経っていないというのにここまで早いとは。

それに、1つ聞き逃せないことを言っていた。
タルブ村。

数日前、行ってきたシエスタの故郷で今も彼女がいる場所だ。そこが、焼かれている？

脳裏に浮かぶ笑顔のシエスタが、親切にしてくれた村人たちが炎に包まれて燃え尽きていくイメージ。

そんな、最悪の想像が、現実到现在起っているかもしれない、だと？
鼓動が速くなる。

舌が乾き、口腔内に貼りついて気持ち悪い。

多分、見知らぬ誰かが同じことをされていても、俺はそう動じない。

『可哀想だ』とか『痛ましい』とか通り一遍の感想を持つだけだ。

けれど、それが近い人間に置き換わるだけで、ここまで動揺している。

矛盾だし、エゴなんだろう。

けれども、だからといってそれを否定は出来ない。特に本人がすすんでその場に立つのならともかく、ただ圧倒的な暴力に巻き込まれようとしているだけなのだから。

俺は急いで外に出ると、レウを呼び出した。付近にいた生徒達が突然現れた飛竜に何事かと騒いでいるが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

その背に飛び乗ると、タルブ村に向けて出発しようとする。が、何故かレウは首を後ろに向けたまま羽ばたこうとはしない。

「待ってくれ！」

苛立つて強く命令しようとした瞬間、サイトの声が響いた。

声に振り返ると、サイトがレウによじ登ろうとしている。近くにはルイズもいた。

余裕の無い俺は努めて感情のこもらない言葉を紡ぐ。最後通牒のため。

「……………一回しか言わん。さっさと降りろ。」

「なんでだよ！タルブ村に行くつもりなんだろ！？俺も連れて行ってくれよ！」

サイトが口にした言葉は何処までも俺の想像の範囲でしかなかった。そして、それは俺に何の感動ももたらさず、ただイラつかせるだけだ。

たしかにさっきの会話を聞けば、トリステインが劣勢であることくらいは判るだろう。そして、完全に敗北すれば自分たちがどうなるのかも。或いはシエスタのことに気付き、なんとか助けたいと思っているのかもしれない。だが、だからといってコイツは何の覚悟も、俺のような諦念も無く戦場に行こうっていうんだらうか。

たまたま常人に無い力を持っていたからといって、心まで常人離れしているはずも無いのに。

だとしたら、相当に勘違いをしているとしか思えない。十全に剣を使えるようにさせるため、旅先で亜人とはいえ意図的に命を奪わせるように仕向けたが、それが良くない目に出たか。

ため息をつき、ようやくよじ登りかけたサイトに近付くと、その顔を蹴り飛ばす。

啞然とした表情のままサイトはレウの上からずると滑り落ちて行った。尻から地面に落ちたが、怪我はしていないようだし問題は無いだろう。

「ちよつとあんた！何するのよ！？」

ルイズが痛みに呻いているサイトに駆け寄り、俺に抗議するが、俺は氷点下の視線を返す。

「言っただはずだ。一回しか言わないと。これから俺が行く場所は鬼の遊び場じゃねえんだよ。」

「だったらあんた一人が行ったって同じことでしょう!?!?」

「俺は何の勝算も無しに行くわけじゃねえ。それに、お前には自分の手で誰かを殺す覚悟があるってのか? 誰かの命を諦めることを受容できるのか? 出来ないんなら、お前達は来るべきじゃない。」
それに、出来るべきじゃない。少なくとも、今の日常を大切にしたいのなら。

最期の言葉は羽ばたきの音に溶け、呆然とこちらを見送る二人を尻目に、レウは飛び立った。

戦火は友に忍び寄る。(後書き)

次回から少々バイオレンス描写がありますので、ご注意ください。

つかの間の戦争。(前書き)

今回、グロテスクな描写や婉曲的な殺人の描写がありますので、そういったものが苦手な方は読み飛ばすことをお勧めいたします。

つかの間の戦争。

タルブ村に到着したときには、既にそこは焼き払われようとしていた。

戦艦の方からはギリギリ見つからない距離で、尚且つタルブの近くの森の外れに降り立つが、数日前に歓待を受けた村は所々で火の手が上がっている。

しかし見える範囲には遺体が転がっていないから、村人たちは逃げているのか。だとしても開戦がいきなりだったからそう遠くまでは逃げられていないだろう。

可能性としては今俺がいる森の中がいかにもそれっぽいな。

視界の端には民家に火を吹きかけている飛竜もいる。背には鎧を身につけた騎士が乗っているから、あれはアルビオン軍か。

竜騎士たちも民家の後は森に矛先を向けるだろう。急がなければ。内心のショックと怒りを抑えつけ、まず先日吸血鬼を追い詰めるときに働いてもらった布陣を解放することにした。

「^{出ろ}解放。」

俺の言葉と共に、どことなく映画で見たヴェロキラプトルを思わせるシルエットのラス、イーオ、ゲーネ、ギア、マンドリルの毛皮を真っ白にして牙を伸ばしたようなブラン、大猪のファン、桃色の体毛のゴリラのようなコンが現れる。

彼らは俺の中で事情を聞いていたためか、静かに俺の指示を待っている。さっきまで感覚を共有していたせいか、俺が相当に殺気立っていることを理解していることもあるのかもしれない。

俺はモンスターたちに右の手のひらを向ける。

「^{増えろ}複製。^{導け}統率。」

次の言葉を口にする、モンスターたちの背後によく似た姿の小型モンスターが現れた。

鳥竜種のランポス、ゲネポス、イーオス、ギアノス。牙獣種のブラ

ンゴとブルファンゴ、コンガ。

一種につき、およそ百頭程度。元々が群のボスだったことがあったためか、この七頭とガレス（ドスガレオス）だけが使用できる本来そういう生物として持っている機能以外のスキルだ。

とはいえ、子分たちはあくまでボスの一部ということらしいので、本体が死亡すると全部消えてしまうらしいが。

本来なら俺が解放出来るモンスターは精々が四十前後だが、これなら効率的に村人たちを発見出来る。ついでに人語で会話することが出来るアイルーたちも同行させ、村人の保護を手伝わせることにした。

モンスターたちはほとんどが強面なので、スムーズな行動のためにも人語で話せることと相まって期待したいところだが……。

村人たちの保護と避難誘導、加えて追撃してくる敵の迎撃を命じ、モンスターたちを森の中に放つ。

その後、空を睨んだ。そこには、依然としてアルビオンの軍艦が浮かんでいる。

「それじゃあ、戦争を始めようか。」

片眉を上げると、投げやりにそう言った。

介入するにしても、一部の兵士たちを相手にするだけでは意味が無い。大多数の相手に強制的に俺を注目させる。しかも、できるだけ素早く。

それにはどうすればいいのか。

相手に俺が脅威であると教えればいい。

彼らの大きな損害をもって。

ミヅハ【真】の不可視化状態を起動。そのまま平原の真ん中を走り、
ターゲット
目標まで近寄る。

相手はここに来たときに民家に火を着けようとしていた竜騎士。三軒目に向けて口を開かせようとしていたところに、隣の民家の屋根

から飛び移る。

出来る限り体重を殺した完璧な着地。飛竜の背、目の前に騎士の背中がある。

当然その間も不可視化しているが、自分が足場になっているものを伝わる振動、自分の背後の気配に気付かないはずが無い。

「なん、ぐツ。」

手綱を持ったまま腰の杖を抜こうとする騎士を羽交い絞めにする、口を抑えて呪文を妨害する。そのまま首の限界稼動域を強制的に超えてもらった。

ベキン、と地味な音の後、ぐったりとした騎士の腋から手を通し、2人羽折りの要領で手綱を引っ張る。飛竜は違和感を感じているようだったが、手綱を通した命令には忠実に、上昇し始めた。

ふむ、多少は変だがこれで上手く戦艦のところまで行くことが出来る。

そう思っていると、一騎の竜騎士が近寄ってきた。大方、作戦に無い行動をとろうとしている同僚に注意をしようとしているのか。

迅速な無力化のために確実に死んでもらう必要があるが既に結構高い位置まで舞い上がっているので、風が邪魔で熱線や水は当てにくい。弓やボウガンは両手を使わなければならないので、今持っているものを捨てなければならなくなるので不適合。なので彼には片手剣でダーツ盤になってもらった。

スコン、と小気味良い音と共に理解不能そうな表情のまま、額に剣を生やした騎士が地面に吸い込まれていく。

不可視化状態のいいところは手に持っている武器まで見えなくなる、ところだろう。勿論、手から離れれば見えるわけだが、その時点で避けられない速度で投げれば問題無い。

背から騎士が落ちたことで混乱している竜にも同様に眉間に片手剣をぶち込む。竜は騎士に命じられて破壊活動をしていただけだが、しかし再びアルビオン軍のもとに渡れば、向こうの戦力になる。それはよろしくない。

ようやく戦艦の一隻にたどり着くと、甲板に着陸する。途端に船員たちが近寄って来た。

拳動は妙だが見た目は味方なので負傷したと思っているのだろう。既に物言わぬ軀と化した騎士を竜の上から投げ捨てると、不可視化を解いて片手剣の先から噴出した熱線で切り刻んでいく。

「や、やめてくれッ!」

「助けて!？」

悲鳴や懇願が聞こえてくるが、全て無視して甲板上に死体を量産した。

今の俺は機械だ。ただただ犠牲者の血を搾り取るだけの屠殺機械。

そんなものに助けを求めたところで、殺されるという事実は何も変わらない。

所々小火が発生しているが、そのまま鎧竜、ラビを解放。途端に船体の高度がガクツと下がる。

なんとか持ち直してくれたが、今度は異常を察した軍人メイジが数人船室から出てきた。

面倒くさいので扉の前に大剣を二本蹴りこみ、通行不可能にしてからティガ（ティガレックス）を解放。

「好きに遊べ。」

用が済んだのでそちらを見ることすらせずに、そう命令する。

さらに高度が下がるが、メイジたちはそれどころではない。目の前に牙だらけの口が迫っているからだ。

足場が定まらない中でそれでも杖を向けようとした者もいたが、たかが数秒で完成する呪文でティガは止められない。

ティガレックスはほとんどの飛竜と違い口から何かを吐き出すことも、特殊なスキルも無い。刃を通さない分厚い甲殻があるわけでもない。前腕とわき腹の間にある翼膜がかるうじて飛竜としての名残だと判る程度だ。

だが、他の飛竜と比較しても目立つ、高い耐久力と異常なほどの闘争本能、そして純粹に敵の殺傷を目的とした高い攻撃力を持っている

るのだ。

こんな隠れるところも無い狭い場所では、悲しいかな彼らはティガの餌でしかない。

ものの数秒もかからずに命乞いをしたものも抵抗したものも同じ末路をたどることになった。

甲板上の半分ほどの面積が赤と黒の彩色を施されると、ようやく静かになったのでティガを戻す。次いで、ラビに目標を差して指示する。ラビは俺の命令に忠実に、一番近くに浮かんでいる戦艦の方を向くと、口を開けた。

「放て。」

数秒後、そこから赤い奔流が迸り、狙い変わらず戦艦の横腹に命中する。

それが当たると、相手の戦艦はよろよろと高度を下げた後、船室の火薬に引火したのか、大爆発を起こした。

これでほとんどの敵がこちらを狙ってくるだろう。その間に村人たちを保護させなくては。

地上のモンスターたちと連絡をとっていると、小回りの利かない戦艦よりも早く竜騎士たちが包囲してきた。

全部で十騎か。

おそらくはこちらの攻撃が届かない距離に浮かんだまま四方八方から火炎と魔法で俺を殺しつくすつもりだろう。だが、少し遅いな。

リース（ゲリヨス）を解放。

奇妙な鶏冠のついた鶏、のような外見のリースはそのままヘッドバッキングをするように頭を前後に振りはじめ。

竜騎士たちは唐突に出現した奇怪な姿の敵の謎の行動に驚いているようだ、お楽しみはこれからだ。

数回頭を振ったリースが足を置き換える。俺は目を閉じた上で、両手で完全に眼球をガード。

リースの頭部で弾けるような音が聞こえた後、何か衝突するような音が響き、同時に地面が揺れる。目を開けるとさっきまで竜騎士

たちがいた場所には何もいない。

その代わりに、甲板の上に三人の竜騎士と彼らの騎乗していた竜が転がり、呻いている。

目潰しか、落下の衝撃による痛みか。

原因には興味は無い。どちらにせよ、彼らの運命が変わるわけでもない。

俺は、機械的にギロチンの刃を落とすだけだ。

しめて6つの生首を作成した後、甲板の縁から下を覗くと、ほとんどの騎士が転落し、魔法で落下スピードを緩めることも出来ずに地面の染みになっていた。飛竜も似たようなものか。

閃光を喰らいながらもなんとか姿勢制御していた2名の騎士には解放した片手剣、ゴールドイクリップスの剣先から火球を放つ。

彼らは自分が死んだことにすら気付かずに戦場どころかこの世から退場した。

リースを戻すと、今度はレアとガルガ（イャンガルガ）、テオ（テオ・テスカトル）を解放。

レウに乗り、レアとガルガがそれに並んで甲板から飛び立つ。

甲板に残ったテオが雄叫びを上げ、さっきまで乗っていた船全体が朱色の粒子に包まれる。

その中央でテオが歯を打ち鳴らすと同時に粒子が爆発。

俺が戦場に立って二度目の爆発で正しく二隻目の船が沈んでいく。すでにこの場で俺が殺した人間は三桁を上回っているだろう。

だが、もっと増えることになる。

なぜならまだ、この戦争は始まったばかりなのだから。

誰がために鐘は鳴る（前書き）

展開を色々考えていたんですが、一度今回の話を完成させた後、自分で読み直すと、明らかに某SSさんのパクリになっていましたので（主人公の暴走とか、それを制する形での新キャラ登場とか。）急遽書き直しました。

パクリ駄目。絶対。

とはいえそれで良くなっているのか、と言われると首をひねりそうですけど。

誰がために鐘は鳴る

船を爆発させた後テオを戻すと、俺はレウとレア、ガルガに一番近くにいた戦艦を襲わせた。

三頭が連続で口から火球を放つ。着弾した火球はただ甲板や外壁に火をつけるだけでなく、そこで爆発してさらに被害を拡大させていた。

船は炎上し十秒と持たず緩やかに落下していく。さらに三頭に命令し、攻撃を続けさせると、やはり火薬を積んでいたのだろう。その船の内側から爆発が始まり、地上につく前に爆散した。

同じ方法で他に二隻を潰すと、今度は竜騎士たちが集まってくる。既に冷たくなっているご同輩とは違い、四方から急速に近寄ってきているから、一気に仕留めるつもりか。

まあ、いいさ。どうせ、誰一人として逃がすつもりは無い。

レウに命令し、急上昇させる。眼下では、俺を追ってこようとした竜騎士たちがレアとガルガに妨害されている。うん、ここからなら丁度よく見下ろせるな。

装備を変更。ミヅハ【真】からキリン×シリーズへ。

「電撃。」

争っている竜騎士たちを指差し、レアとガルガを戻すと同時にスキルを発動する。俺の二メートルほど上空の空間が発光したかと思うと、そこから真っ直ぐに光が落下する。

はたして、その雷は竜騎士たちが密集していた場所に命中した。

バラバラと、騎士も竜も、気絶して落ちていく。

一撃では死なないかもしれないが、これで身体が痺れて数十秒は行動が出来ないだろう。そして、魔法が唱えられない以上、彼らは数十秒も空中にいることは出来ない。

まあ、雷が落ちるような場所で飛行している方が悪い。

旦那さん、報告ニヤ。

『どうした？』

村の人を見つけたニヤ。ちょっと怖がってるけど、皆怪我は無いニヤ。

『よし、それなら、今すぐ森から出る。敵は混乱してそれどころじゃ無いから、襲撃もされないだろう。』

ようやくきたゴジローからの朗報に、どうにか胸をなでおろす。これで心配事が1つ減ったか。

しかし、これ以上各個撃破していくのも効率が悪いな。さすがに守りを固めているだろうし。なら、ここらで、大部分を消してしまうか。丁度おあつらえ向きに、戦艦もほとんど動いていない。

クーラを呼び出すと、レウの背から飛び乗り、そしてレウを戻す。

これから呼び出す奴には一度酷い目に合わされているから、直接対面するのは少々酷だろう。

「出る。」

俺の言葉と同時に、クーラの前方に純白の龍が現れる。全身を覆う鱗は一樣に曇りの無い白さで、比喻ではなく輝いていた。神々しくも荒々しさを感じさせるその龍を見て、クーラが身体を強張らせたのが判る。コイツを見て警戒心を持たなければ、逆におかしいけどその龍は羽ばたきながら周囲を見回すと、クーラの頭の上の俺に気付いた。

私を呼び出すとは、どういう風の吹き回しだ？小さきものよ。

「さてな。茶飲み話のためじゃないのは確かだよ。」

ふん。戦か。どれだけの年月がたとうと、小さきものの世は変わらぬな。

状況が判っていないなかったのは、コイツが常時感覚を遮断しているせいだろう。だが、それを補ってあまりある知性が、コイツにはあるラル。

祖龍、ミラルーツ。

古龍種特有の高い知能と、絶大な攻撃能力の高さを持つ太古から存在する龍。

運命の始まりという名を持つ、俺が契約した竜の中でも最強の頭。本来なら、一番最初にコイツを出していれば、ここまで俺が苦勞することも無かったのだ。

だが、その力の強さ故に扱いが難しい。

「改めて話す必要が無いのは有り難いね。それじゃあ、俺が何でお前を呼び出したのかも判るだろう？」

はん。大方、そこらに浮かんでいる木船を壊したいのであるろう？その程度のことを、私が判らないとでも思っているのか？

ラルが呆れたように首を振る。

そんな、変に人間臭い所作が、妙にカンにさわる。

まあ、よかろう。一度は貴様を主と認めているのだ。契約を履行することに、否は無い。

だから、ラルがそう言った瞬間、思わず聞き返していた。

「・・・妙に素直だな。何か、悪いものでも拾って食べたか？」

くくく。格別意図することなど無いわ。小さきものには小さきものの、私には私の尺度しか無いのだから、な。

そう言ってラルは器用にその場に浮かんだまま、周囲を見回す。

現在残っている戦艦はおよそ二十隻程度。そのどれもが俺たちから距離をとって遠巻きにこちらを見ている。

「先に言うておくが、絶対に撃ちもらすなよ。特に下の森に落とすのは最小限にしろ。」

ふん。注文の多い主だな。さて・・・。

ラルが雄叫びをあげる。急に、割と至近距離からそれを聞いたせいで、鼓膜が破れそうになった。

文句を言う暇も無く、視界内の戦艦に変化が訪れる。

そのどれもが、白く発光しているのだ。甲板も、船首も、船尾も。

俺以外の人間がそれを見ていれば、魔法の光に例えたかもしれない。だが、それはそんな大人しいものじゃあ、ない。

確実に訪れる死と破壊の刻印だ。

ほとんどの船が自分が墓穴に入れられていることに気付かず、その

場で停滞し、終わりを待っていた。

戦艦を照らした白い光へと落ちてくる赤い光。

それは、確実に明確な破壊の意思を自らに触れたものに伝え、その力を執行する。

戦艦が次々と赤い雷に撃たれ、爆音をあげながら落ちていく。

その全てが甚大なダメージを受けており、火の手が上がっている。数秒後地面にたどり着く前に火薬に引火して自分に乗っている船ごと爆発四散した。

おそらくは、雷に直撃した瞬間、その船の船員たちは全滅したのだろう。煙をあげる船は例外無く沈んでいく。

物理法則に従わない、ラルの赤い雷。それは一瞬にして十数隻の戦艦を潰し、数百人単位の人間の命を奪った。

それを命令したのは俺で、それを決定したのは俺だ。とはいえ戦場で命の価値を論じるほど阿呆ではないつもりだが、しかし薄ら寒いものを感じずにはられない。

それが、俺の良心と呼べるものではないことだけは、確かだけど。

それで、主よ。これでよかったのか？

「……ああ。これで、この戦争の大局は決した。生き残ってる船も……まあ、何隻かあるみたいだが、もし俺が逃がしてもこのままじゃトリスティンまで進軍出来ないだろう。」

なんなら残りも潰してやろうか？

「いや。構わない。俺が、直接やるよ。」

そうか。なら、急ぐことだ。

「?……何故だ？」

ふん。私のせいで耳があまり利かなくなっているのか。まあいい。後ろを見ることだ。

ラルの言葉に疑問符を浮かべたまま、振り返ると爆発した船の煙の向こうに、何かが見えた。より正しく表現するなら、見覚えがあるが、あまり考えたくないなにかだ。

それは、ようやく元に戻ってきた聴覚に、聞き間違えようの無い爆

音をあげながら、空を滑空してこちらにやってくる。

目を閉じて瞼を擦る。目頭を押さえてマッサージを施す。そして改めて目を開けるが、視界の隅にあった影が言い訳のしようが無い大きさに変化しているだけだった。

やっぱりゼロ戦か。しかも、操縦席に桃色の何かが見えるから、ルイズも乗ってるのか。

なに考えてるんだ？あいつら。

怒りがこみ上げるようなことは無かったが、それとは別に大きな失望が俺にのしかかってきた。

どうも、あいつらは俺の言ったことが理解出来なかったらしい。

ラルを戻すと、クーラに爆音の音源に接近するように命令。加えてモロス（モノブロス亜種）とディア（ディアブロス亜種）を解放。

黒いトリケラトプスに翼をつけたような外見の角竜と、体色を白にして角の数を少なくしたような一角竜は地上に降り立っていく。

落ちた船の残骸を完全に破壊して船員を確実に全滅させるように命令したから、後で問題が起きることも無いだろう。

早速生き残っていた竜騎士たちに襲われているゼロ戦を見て、さらに近寄らせる。そして、ゼロ戦と竜たちの間に割り込ませると、竜騎士たちはクーラにぶつかるまいと避けさせようとするが、しかし風鎧の圏内からは逃げられなかったらしく、きりもみ状態で空に投げ出された。竜の方も予想外の風の動きのせいで姿勢を制御するの
で精一杯だ。

間髪入れず、武器を叩き込み、完全に沈黙させてから、自由落下するの
に任せた。

数秒もすれば赤い染みになっていることだろう。

ゼロ戦が大きく弧を描いてこちらに向かってきたので、クーラをそれに平行して飛行させる。

サイトはなんとかこちらと意志の疎通を図ろうとしているようだったが、俺が無表情のまま親指を立てた握り拳で首を搔っ切る動作をすると、明らかにエンジンの振動とは違う理由で振るえ始めた。

俺が笑顔でその無駄な行動力を褒めるとでも思ってたのか、コイツは。

俺はため息をつくと、前に集まりつつある戦艦を見た。

どうやら、逃げるつもりは無いらしい。

さて。そろそろこの戦争の、幕引きといっつか。

突然の結末

俺の主観では戦争が始まってもう、一時間以上になるだろうか。

そのほとんどを俺やモンスターたち沈めてしまったので、未だにタルブ上空に浮かんでいる戦艦は既に5隻まで減っていた。

だが、それでも彼らは逃げようとはしていない。

逃げようとしていない以上は、俺たちと対決することを覚悟しているのだろうか。

あるいは、何か逃げられない理由でもあるのか。考えても仕方が無いことだが、しかしここまで味方を減らされていながらそれでも向かってくるのは少しおかしい気もする。

ただ、元々逃げたとしても、生かして返すつもりは無かったから、丁度いい。

視線の先では生き残りの五隻が紡錘の陣形でこちらに向かってくる。周囲には竜騎士たちが浮かび、残存兵力をまとめていることが判る。サイトたちが乗ったゼロ戦はいち早くその迎撃に向かっている。まあ、アイツのルーンがあればゼロ戦の機能を十全に能力を引き出せるだろうからあまり心配はいらないだろうが、しかしまだ『人間殺し』をさせるには不安がある。俺も参加したほうが無難だろう。

「さて。そんじゃ、幕引きといこうかね。」

俺がそう言うと、クーラは風鎧の密度を高めた。魔法で強化されているとはいえ、所詮は木で出来た船だ。このまま体当たりをすればすぐにでも片がつくだろう。

そうすれば、あとは地上のモンスターたちに任せればいい。

「ほう？それは、貴様の死をもってして、か？」

だから、そんな予想外の台詞が想定外の場所から投げかけられたとき、俺は不覚にも思考停止していた。

何故なら、俺たちの周囲にはその瞬間まで敵は存在していなかったからだ。

戦闘区域にいなから付近の索敵を行わないのは自殺志願者だけだから、そこは間違いない。

死角も無いわけじゃないが、戦闘状態の俺とクーラの感知圏を誤魔化しながら、尚且つ声が聞こえる位置まで近寄るなど、人間業ではない。いや、大抵の人間以外の者にも不可能だろう。

だが、現実として声がかげられた以上、声をかけたモノが存在する。錆びた歯車のようにぎこちなく声の主の方向に首を向ける。焦りが不必要な力を関節に込めている。落ち着け。冷静になれ。

視線の先にいたのはとりあえず人間に見えた。豪華な服を纏い人間のものと思えない四肢と胴体を持ち、不遜な視線をこちらに向けている。勿論、背中から生えている黒い蝙蝠のような翼の存在を無視することが出来れば、であるが。

「………何者だ。手前。」

「ふん。あやつらの謀りを妨害をするものがいるというから見に来てみれば、これが。オレの名を訪ねるのなら、自分から先に言うのが礼儀であろうが。それとも、卑小な者はそんなことも理解出来ぬのか？」

とりあえず味方ではないことは確実だろう。言葉の端々にこちらへの嫌悪や悪意が垣間見えている。

視線をその男に向けたままトン、と乗っているクーラの背を踏みつける。

クーラは俺の合図に忠実に、口を開くと一切の停滞無くそこから高密度の風の塊を吐き出した。

それは確実に、男に直撃する。人間が鎧もつけずにアレを喰らったら、間違いなく身体が千切れるから、俺はそれを確認するだけのはずだった。

……だったのだが、男は風が収まった後もそこに平然と何も変わらずに浮かんでいる。

いや、翼が一回り以上大きくなり、盾にしている右腕はバースが狂ったかのように巨大に、かつ獣のような体毛に覆われている。一瞬

で何をしたんだ？

「何の心算だ？オレに対する無礼を許可した覚えは無いのだがな。」
男はそう言うと、俺を見て口元を歪めた。あれは、どうしようも無い駄々っ子を見るような目だ。

「ふむ。良からう、許す。礼儀を解さぬ野人であつてもオレの言葉を聞くことは許可したのだ。だが、二度は無いと思え。」

そう言うと、男は膨大な殺気を放ってきた。正直、冷や汗が止まらない。

なんなんだ、こいつは。まるで正体が判らない。

この五年間、人間、人間以外含め色んな奴と出会ってきた。だが、その中のどんな奴とも決定的に何かが違う。

敵であることは間違いない。

だが、明らかにメイジではないし、翼と変異した右腕を考えるとそもそも人間であるのかも怪しい。

アルビオン軍に従軍していた人間の姿に化けられる幻獣、というのが一番納得の出来る解だが、本能的にそれが違うことは判っているなら、眼前のコレは何だというのか。

今は、少しでも情報が欲しい。

「………ナナシだ。」

「ほう？ナナシだと？それはまた、珍妙な名前だな。よからう。では礼儀として答えてやろう。オレの名はゼイル。ゼイル＝ローグリード。魔王の名を頂いたものだ。」

ようやく相手の名前が判ったが、俺の口から出てきたのは安堵の吐息ではなく、恐怖の悲鳴でもない。

魔王？アホかコイツは。普段なら、自然と口を突いて出るはずのそんな言葉も今は欠片も見つからない。

それは、言外に俺がゼイルの与太話を認めているからなのか。

「ふむ。戦場で言葉を交わすのも無粋ではあるがいたしかたなし、か。答えよ。貴様はトリステインとかいう小国のものか？」

「……だとしたら、どうだって言うんだ？」

「なに、だとしたらここで殺しておいたほうが良かるうと思つてな。それ、今雑兵共と戯れておるあの小僧共も貴様の仲間なのだろう？」その言葉を聞いた瞬間、俺のなかで何かのスイッチが入ったかのよう
に意志とは無関係に周囲に無数の武器が現れた。

別段サイトを殺すとかルイズを殺すとか言われて怒つたわけではない。うん。冷静だ。だから。だから。だから。死ねよ、

そのままでは当然重力に従つて落下するか、今も展開しているクーラの風鎧に弾き飛ばされるはずだったが、俺の身体は自然と動き、それらを正確に、精密に蹴り飛ばす。勿論、ゼイルを標的にして。都合19本の大剣と太刀を蹴り飛ばした後、ようやく武器を収めるが、しかしゼイルには傷1つ無い。

一本ずつ、手足を使つていなしていたのだ。いつぞや考えた、俺の投擲速度は人間には捉えられない、という自覚。その実証例が、ここにいる。

「中々面白い手品だな。それに、一振り一振りがかなりの業物だ。……だが、言つたはずだぞ？二度は言わぬと。どれ、礼にオレの力も見ていくがいい。」

そう言つと、ゼイルはまだ変化の無い左手を突き出し、その手のひらを俺に向けた。

「あ」

まずい。

死ぬ。

死んだ。

頭からサツと血が引き、何の確証も無いのにそう確信する。あそこから出てくる何かは、きつと俺の身体を貫くと。

慌てて盾を召喚するが、コンマ数秒間に合わない。

おそらくは無意味だと思つが、それでも両腕のガードを持ち上げる。

「『エルン・テウス・アラ嘆きの杭』。」

ゼイルの言葉と共に俺は唐突な死を受け入れる。

いや、受け入れざるをえなかった。

多分初めてのことだが、しかしそれは決して間違いでは無い。生きていれば最悪でも相打ちくらいは狙うが、身体の真ん中を貫かれれば、それも難しい。

それに、確証は無いがいくら俺の生命力が常人離れしていても、首を飛ばされたり臓器の全てを潰されたりすれば死ぬだろう。

そして奴がしようとしてしている何かはそういった類である公算が高い。だが、いつまで経っても俺には何の衝撃も伝わらない。

頭部をガードしている腕を恐る恐る下ろす。視界一杯にクーラが首を持ち上げ、その中央から少し左を黒い、直径50センチくらいの杭が貫いていた。

む………、これは……。

「ほう、主を守ったか。よく出来た下僕だな。褒めてやろう。」

急いでクーラを紋章に戻し、自分が落下する前にレウを呼び出す。

俺の前でクーラに刺さっていた杭が重力に従い、落下していった。

一瞬しか見えなかったが所々反しがついて一度刺さると外れないようになっっていた。

俺は警戒したままゼイルを見るが、思考が空転しているのが判る。

どうすればコイツを倒せる？どうすればコイツを殺せる？

考えても全く具体的なビジョンが思い浮かばない。

そして閃光。

「え」

視界の外から俺の目を刺した光は、丁度真下から来ていた。そして、そこはさつき杭が落ちた場所だ。

そこだけ、森がぼっかりと消失している。更地、というわけではなさそうだ。

そこだけが綺麗な半球型にくりぬかれたようになっていた。

あの杭は、爆弾なのか。それも、半径10メートルほどの空間にあるモノを完全に消滅させるほどの。

「もう少し遊んでやろうかと思っていたが、もう幕切れか。あっけないものだ。」

杭の威力に青くなっている俺の耳に、そんな言葉が響く。

視線を向けると、ゼイルは右に身体の向きを変えていた。自然とそちらに視線が誘導され、同じものを見る。そこにあったのは、戦艦の上空に飛び上がって行くゼロ戦だった。

何度か整備するときに立ち会ったことがあったが、アレには爆弾なんか積んでいなかったはずだ。なのに何をするつもりだ？

そう考えていると、次の瞬間、小型の太陽が現れた。それは丁度ゼロ戦が旋回していた戦艦を中心として発生し、徐々にそのサイズを大きくしている。

あれがどんなものかは判らないが、しかし見掛け倒しということはないだろう。それは、光の中に包まれた戦艦が燃えていることから推測できる。

アレをアルビオン軍の人間がやる意味は無い。だとしたら、アルビオン軍以外で唯一あの場にいるメイジ、ルイズがやったというのだろうか？

「ふむ。確かに大局は決したか。ま、よからう。契約は破綻したし、ことここまですればオレが手出しをするのも面倒だ。」

「……お前は、何者なんだ？」

「貴様と同じだよ。異世界からの来訪者。そして、本来存在しないはずのモノだ。」

「なんだと!？」

こいつも、使い魔として別の世界からこのハルキゲニアにやってきたのか!？それに、『存在しないはずのもの』とはどういう意味だ？

「己のことが知りたければ、まずは此度の戦争を生き残ることだな。生憎、オレはもうこのような些事に関わる気は無いが、あの狂人共は違うであろうからな。」

「狂人共？」

「さて、な。その答えも貴様が生きていれればいずれ、知ることになるだろう。」

そう言う時風がゼイルの髪を弄り、そこに隠されていた何かの文字

を見せる。

ゼイルは翼を翻し自分を完全に包み込むと、文字通り消えて無くなつた。

物理法則に真正面から喧嘩を売るような理解不能意味不明な能力だ。

そして戦争は終結した。

俺たちに大きな損害は無い。クーラの傷も時間が経てば消えるだろう。

なのにこの場に残されたのは、勝利の美酒を味わっているであろう、とある主従と。

敗北感と無力さに打ちひしがれている俺だけだった。

突然の結末（後書き）

すいません。

なんかやっちゃった感が半端無いですね。

一応、オリキャラは主人公含め3人（他はバタフライ効果的なアレ）の予定をしていたんですが、最初っからこんなキャラだったっけ？
コイツ。

まあとりあえず、3巻終了ということ。

追伸：多少加筆しました。とはいえ元があんまりにもアレなので焼け石に水ですが。今回は特に自分の中で悪い部分を切り貼りしたような内容になってますね。 『唐突に登場して退場するキャラクタ

ー』 『見え見えの伏線』 『厨二病くさい自分設定の最強キャラ』

閑話・狩人生活（前書き）

今回はナナシが召喚される前のお話です。

閑話：狩人生活

「いやあああああああああ！！」

何処までも青い空の下、片手剣を持った少年の声が響く。

因みに情けないことにこれは気合の声ではなく悲鳴である。

俺はそれをなんとも言えない気分の中、見守っていた。

「どーすんですか！？どーなるんですか？僕達っていうかボク！」

ああ、もう五月蠅い。舌打ちが出そうになる。

ここはポケ村の近隣では割と有名な狩場だ。大型のモンスターは生息しておらず、ある程度見通しが良いので、ハンター初心者訓練所として使われている。勿論、俺も新人時代はここを使用していた。既にギルドのクラスも最上級になってしまった今では、もう使用する事も無いだろうと思っていたのだが、そうではなかったらしい。

なんについても因果というのは巡る、ということだろうか。

大仰に言ったところで、俺が子守をしていることに変わりはないのだが。

「ナナシさんはいいですよ！明らかに身体能力が人類を越えてるんだから！でもボクはいたって普通の常人なんですよ！」

叫んでいるのはさっきから同じ人物だ。喧しいことこの上ない。というか、俺にキレてどうすんだよ。

「エイル、少しは落ち着いたらどうだ？この程度でオタついてたらハンターになんかなれんぞ。」

俺が言うが、パニックを起こしかけている人間にとってはそれは逆効果だったらしい。

「落ち着く！？どうやって落ち着けていうんですか！この状況で！」

四度彼が叫び、手を振って周囲を指し示す。

そこにいるのは、青い体色の小型肉食恐竜のような何か達。

それが、俺と少年の周りにずらりと並んでいる。

端的に言えば、俺たちはランポスの群れに包囲されていた。

そう。ここは大型のモンスターは生息していない。だが、その代わりに小型モンスターの宝庫になっているのだ。

「・・・普通だろ？これくらい。」

「それはナナシさんだからこそ言えることです！少なくとも、素人がいきなり相手を出来る数じゃありませんよ！」

「そか？ああ、因みにこいつらの鱗や牙は武器の強化や鎧の作成なんかに使ったりするぞ？」

「知ってますよ、それくらい！」

俺はため息をつきながら背負っていた大剣、ブリュンヒルデを構える。名前とは違い、巨大な斧と剣を融合させたような無骨な拵えのそれは、静的な威圧感とでも表現するのだろうか、不思議な色彩を放っていた。

「んじゃ、とりあえず、静かになったら授業再開だ。」

片手剣を構えたまま動くことが出来ないエイルをその場に残すと、先ずは正面にいたランポスに突進する。ランポスは俺が予想外のスピードで動いたせいだろう。何も出来ないまま切れ味の悪い大剣で叩き潰された。

グチャリ、という嫌な手応え。頓着せずに次のランポスに駆け寄り、再び大剣を振り下ろす。骨を砕く音と皮膚と筋肉が磨り潰される感触。それを続けると、わずか数分で20近くの死体が転がり、群れはこれ以上の犠牲を出さないために、逃げ去っていった。

「・・・ランポスに限らず小型の鳥竜種は絶命すると、個体差はありますが概ね数分以内には身体が崩れ始めます。残念ながらこのあたりに関する文献は少ないですがこれは、食べたものを溶かすための消化酵素が自分の身体自体を溶かしてしまうのかもしれない。敵が去ったことでどうにか再起動したエイルは、今度は落ち着いたせいか、醜態をさらしたこの名誉挽回をするために頼んでもいない講釈を垂れ始めた。忙しいやつだな。」

しかし、全て真つ二つ、しかも押し潰して切った死骸は検分するには不適當だったのだろう。早々に諦めたようだった。

素材の方もエイルが落ち着くのを待っていたせいでそのほとんどが剥ぎ取れなくなっているし。

「だとすれば、彼らは常時相当量の食事を必要としていることが伺えます。なにせ、食べなければ自分の腹に文字通り穴が空きますから。」

「まー、ここは天敵もいないし、繁殖もしやすいだろうしな。」

「ええ。このあたりは一年を通して気候も安定していますし、獲物に事欠くことも無いのでしよう。恐らく僕達が襲われたのも、切羽詰った理由があったわけではないと思います。」

狩ることが出来れば良し、狩れなくても次の獲物を探せばいいから群れ全体としては差し迫った問題は無い、というところか。

「で？どうだった？初のモンスターとの遭遇は？」

「・・・正直、怖かったです。本を読んできましたからどんなモンスターかは知っていたんですが・・・、やっぱり実際に間近で見るのは違いますね。」

「うん。そんなトコだろうな。ま、これから慣れていけばいいさ。」予想通りの答えに、俺は苦笑しつつ応じた。アレで怖くなかったとか言ったらもう一回ランポスの群れに放り込むところだったか。

なにせ、完全な素人だからな。確認しなかった俺も悪いんだけど、コイツなんでこんな腕前で他所の村まで来て見習いやってるんだらう？

疑問が浮かぶが、しかし考えても仕方無い。聞いても現状が変わるわけでもないだろうし。先日受けたギルド構成員の査問会に比べればまだマシか、と妥協することにした。

そして、そもそもこの新人、エイルに同行することになった2日前の出来事を思い出す。

「はあ？新人のお守り？なーんで俺がそんなことを？」

場所はポツケ村の集会所。クエストから戻って数日、再び新たなクエストを受注するまでの骨休みをしていた俺のところによつてきたのはギルドマネージャーだった。後ろには見かけないハンターを伴っている。

普段から世話になつていいるから一杯奢ろうと思つたのだが、それを断り彼女が口にしたのが、よりもよつてそれだった。

「そうなのよ。今、訓練所の教官さんが体調を崩しちゃつて。普段なら、断るんだけど、一人、遙々ココット村から来てる子がいるのよ。」

ココット村といえば、たしか高名なハンターが興した村だったか。ポツケ村からはかなり離れた位置にあるところだったと思うが。

ハンターというのは、1つ所で腰を落ち着けるものは少数派だ。大抵の者は狩りに便利な地域、または標的にしている害獣の出易い地域に越していくもの、らしい。俺はその少数派に入るらしいが。本来なら俺もそちら側（な）にせ、この世界を見て回るためにハンターになつたのだから。ににいるはずなのだが、しかし契約した奴らから話を聞くことが出来るお陰で、基本的にはこのポツケ村を峙に行動している。

大方マネージャーが言つていいるのもその類か。なら、この地域の植生やモンスターの生息地を把握するためのガイドといったところか。態々他所の村に来る以上は当然、実力の問題も無いだろうし。

断れないわけじゃないんだろうけど、契約したせいで害獣が行方不明になつた件で色々と迷惑をかけていいる。なるべくなら協力したい。「ま、そんなに長い間じゃなきゃ構わないですけど。んで、いつですか？」

「あら、ありがと。じゃ、早速紹介するわ。」

そう言つと、マネージャーは後ろにいた人物を手招きした。ああ、コイツだったのか。てっきりマネージャーに用があるのかと思つてたんだが。

多分、10代の半ばくらいだろうか。今の俺よりも少し下くらいか。黒い髪に鳶色の瞳が印象的な少年だった。それが、身体を力チコチに強張らせて俺の前まで歩いてくる。お約束なのか、足と手を同時に振っている。

「そ、その！ココット村から来ました！自分はエイルって言います！宜しくお願いしましゅー！」

あ、囁んだ。てかなんでこんなに緊張してるんだろう、コイツ？

「あら、緊張しなくても大丈夫よ。彼女、口は悪いけど、とってモいい子だから。」

マネージャーがとりなすが、なんだろう。なんか釈然としないものがあるんだが。

「あー、ナナシだ。ま、気楽にやってくれ。」

「了解しましたッ！師匠！」

「はい？師匠？」

いきなりそんな単語で呼ばれたせいで思わず聞き返す。呼んだエイルの方はそれがなにか？と言わんばかりの表情だ。

微妙な雰囲気の中、助けを求めるようにマネージャーの姿を捜すが、彼女は残像を残すような勢いで走り去り、すでにカウンターの隣で通常行務にもどっていた。

「……厄介ごとを押し付けられたか。」

なんとなくそう確信し、ため息をつく。

見るからにおのぼりさんだ。この調子じゃ、実力云々は少し不安だな。

それなりに経験のあるハンターというのは良くも悪くもふてぶてしいものだから、年齢的にも彼が全くの素人である可能性もある。

少し早まったかな、と思うが一度了承してしまったから断ることも出来ない。

ま、なるようにしかならんか。そう考えて妥協する。

「とりあえず、『師匠』はやめてくれ。」

そう言っておくのは、忘れなかったが。

閑話：狩人生活（後書き）

続く、かどろかはまだ考えてません。とりあえず続くにしても4巻の分が終わってからですな。

後始末は放置予定。

今の時間は深夜。

場所は学院の女子寮にある俺の部屋である。

戦争が終結して、俺は学院に帰っていた。

サイト達はタルブで歓待を受けているようだったが、俺はあの後モンスター達を回収してすぐに戻ったのだ。

とはいえ何か目的があったというわけではなく、単純に誰かと一緒にいることに抵抗があったただけなのだ。

初めてのことがどうも今の俺は、多少心が弱っているらしい。

負けたことや、死にかけたことはどうでもいい。クーラが傷を負ったことはともかくとして。

そんなことは戦場に立つ以上は当たり前のことだし、死ぬような目に遭うのも、あそこまで圧倒的ではないがハンターとして生活していた頃は何回かあったことなのだ。

実際あの場で俺は4桁を越えるであろう人間に死を振りまいたのだから。

そのことに後悔は無いし、またすべきでもない。それは、自分が奪ったモノに対する侮辱だからだ。

だとしたら、何に困惑しているというのか。

正直に言えば、よく判らない。自分の内面をいくら解体してもそんな要素は見つからないのに、現実として何故か気分が沈んでいるのだ。

そのせいで自分の部屋に戻って小一時間、こんな風にうんうん悩んでいる。

こんなことをしている暇があるのだろうか、と問いかける内なる声もある。

考えるべきこともいくつかある。あの男が言った意味深で意味不明な言葉。

『異世界からの来訪者』

『本来存在しないモノ』

それが真実何を意図した言葉なのか、判らない。仮に俺が召喚されたことを知っていたとしても、何処で知ったのか。それを知るのは極少数のはずだ。学院長からの緘口令も出ている。

それにルートから考えてもルイズのクラスメイトはたしか、他国からの留学生は2人しかいないはず。その2人共がそんなことを吹聴する人間とは思えない。

そしてルイズが使用したと思われるあの、どの系統とも判らない魔法。

そういえば、ロクに話す間も無く戻ったせいでそのことを聞くのを忘れていたか。

帰ってきたら聞くことにしよう。

とりあえず今は情報が少なすぎるし、思考力も落ちているから良い結論が出そうにもない。

そう自分に言い訳して、思考を停止する。

自分のことは自分が一番判る、とかいうがアレは俺には当てはまらないようだ。

「ていっ」

べちん、と音をたてて自分の頬の平手をかます。衝撃と熱。そして微量の痛み。

今ので気合が入ったとも思えないが、まあ気付けくらいにはなっただろう。

気にしても仕方が無いことはいくら考えても無駄だ。

自分と向き合うことで何かが見えてくるわけでも、記憶が戻るわけでもないし。

嫌なことは忘れるに限る。

そう考えると、俺はとりあえずベッドに横になり、寝ることにする。
・・・が、眠れない。

よく映画や漫画の帰還兵がPTSDになっているような血と臓物の

臭いを感じているわけでもない。

後悔や記憶に苦悩しているわけでもない。

だとしたら、何が原因なのか。

帰ってきたばかりで時間が中途半端なせいもあるんだろうが、しかし違和感がある。

なにかに見られているような気配がするんだが・・・「あ、やつぱり起きてたのね!」・・・ってうおい! 実際窓からなにか入ってきてるよ。でかい口だけ。

月明かりによく目を凝らして見ると、それは青い鱗に包まれている。

「・・・なにやってんの? シルフィ。」

「なにつてまたお姉さまのところにあのいけ好かない従姉妹から、手紙が来たのね!」

俺が当然の疑問を口にすると、シルフィは早口にそう言った。

お姉さまっていうと、タバサのことだよな?

その従姉妹? 誰のことだ? 俺が知ってるタバサに手紙を送る相手っていったら・・・。

ああ、イザベラか。そうか、タバサの従姉妹だったのか。

道理で髪の色が少し似ているわけだ。

というか、それって言ってもよかつたんだろうか。またタバサに怒られなければいいんだが。

後でそれとなく注意しておくか。

それに、なんとなく今のことでタバサの背後関係が推測出来てきたから、どうしたもんかね。

とりあえずは知らない振りをするしかないんだけど。

ま、それはともかく、前回俺も連れて行くように言ったから呼びに来てくれたんだろう。

自分が言い出した我俣だし、せつかく来てくれたのだ。

まずは用意をしなくては。

翌日の朝、いつもの城にやってくると、シルフィは庭園でお留守番。俺は透明人間になってタバサに同行する。

既にここに来るのも三回目だが、やはり大きいな。

名前も何も知らないが、妙に立派な城だから、爵位の低い木っ端貴族が建てられるものじゃないだろうし、相当に位の高い貴族の居城なのだろう。

そして、あのイザベラがタバサの親類であることと彼女に対して浮かべていた嫉妬と恐怖の感情を考えれば、答えはそう難しいものじゃない。

・・・おそらくは家督が原因の骨肉の争いか。だとすれば、彼女の現状にも説明がつく。

多分、イザベラの親なり支援していた人物なりが家督を受け継いだのだろう。

そして、その人物は当然のごとく自分を支援しなかった相手や敵対していた者を冷遇、あるいは暗殺したというところか。

タバサの場合は彼女の年齢から考えて少なくとも直接的に死なせることはよろしくないから、危険な任務を宛がうことで結果死ぬことを期待されているわけか。

俺の予想は完全に当たりではないかもしれないが、さりとて全くの外れというわけでもないだろう。

封建社会の権力争いとしてはあまり珍しくもないことなのだろうが、実際それが身近な人物に降りかかっていると考えるとどうにも気分が沈んでくる。

「・・・どうしたの？」

気が滅入ったせいのため息が出たのだが、それが判ったらしい。

タバサが不思議そうに誰も周囲にいないことを確認してから聞いてくる。

彼女は聡い子だ。迂闊な行動をしていたら、俺が気付いたことに気付かれかねない。出来ることなら、そういうことは彼女自身の口から聞くべきことだ。

自分の秘密を知らないうちに他人に知られることが嬉しい人間などいないのだから。

喋る代わりにポンポン、とタバサの頭を優しく叩くと、どうにか彼女も不思議そうな顔を引っ込めた。

そしていつもの謁見室の前まで来ると、カーテンを捲って中に入ろうとする。が、その場で無理やり俺が前に出た。

部屋に入る前から複数の人間の気配には気付いてはいたが、殺気なんかは無かったので直接刺客を雇った可能性については排除しておいたが、何かを投げつけようとしているのなら、話は別だ。

本人に害意は無くても自分が投げているものが何なのか知らなければ意味が無い。

とはいえタバサに向かって飛んできていたモノを見たあとではそれも早合点だったことに気付いたが。

こちらに放物線を描きながら向かってくるのは割れた卵やソーセイジ、しかもありや肉の代わりに泥が詰められてるな。端から茶色いドロつとしたものが垂れている。

糞便でないだけマシかな、とは思ったが年頃の女の子が被せられたら辛いのはどちらも同じだろう。

とりあえずそれらはタバサや俺に当たらないように空中で軌道をそらす。叩き落しては明らかに不自然だし、貴人の前で魔法を使用した疑いでタバサに迷惑がかかるかもしれないので、僅かに触れることで角度を修正した。

周囲の床にビシャビシャと音をたてて投擲されたモノたちが着地する。中に入っていた黄や茶色の液体がぶちまけられ、前衛的な模様が施された。

改めて部屋の中を見回すと、正面の椅子にはポカンと口を開けたイザベラ。その周囲にはメイドたちが立ってこちらを見ている。

さて、どうしたもんかね？

「あんた達、私の命令に逆らうとは、いい度胸だねえ……。」「イザベラは穴が開くほどタバサを見つめた後、どうにかそう喉から

搾り出した。

一応、俺の存在やタバサが魔法を使用したことは疑われなかったらしい。

その代わりにメイドたちがイザベラの命令に逆らったと思われているようだ。

なんとなく、後ろにいるタバサが無言でありながらも俺に視線を向けているような気がする。

気のせいであってほしい。

周囲のメイドたちは、揃って顔色を蒼白にしている。なるほど。いつもの嫌がらせか。

それからイザベラは年頃の少女がそんな言葉遣いはどうなんだ？と言いたくなるような罵声でメイドたちを一通り叱責すると、部屋から下がらせる。

完全に勘違いなのだが、使用人に歯向かわれたことがよっぽど腹にすえかねたのだろうか。

これがルイズあたりなら、拳骨を落とした後に小一時間ほど説教をするんだが、さすがにこの場でそれは出来ないしな！

「シュハリエ・ド・ノールバルテル北花壇騎士七号のあんたの任務よ。さっさと片付けてきな！！」
それでも怒りが収まらないのか、書簡を投げつけると、いつもはする嫌味のこもった話もしないままタバサを追い出した。

傾いた天秤（前書き）

なんか最近ちょっと古いゲームにはまっています。

とはいえファミコンをするほどの気合の入ったレトロゲーマニアでもないので精々が7〜8年前くらいのPS2のソフトですが。

中古店なんかを捜すと割りとリーズナブルなものも有り難いですね。

傾いた天秤

「翼人？」

イザベラから書簡を受け取った後、シルフィの背に乗って目的地に向かう途中。俺が尋ねると、タバサが頷いた。どうやら今回の任務は、その相手らしい。

「聞いた事の無い種族だな。どんな奴らなんだ？」

「外見は人間の背に鳥の翼を加えたようなもの。人間と同程度の知能を持ち、先住魔法を操る。」

なんか物語に出てくる天使みたいな形なりの種族なんだな。やっぱりフアンタジーなんだな、と意味も無く感心する。とはいえ。

「先住魔法ってこの前の吸血鬼も使ってたアレか？」

俺の質問にタバサは無言で頷いた。

翼があるから飛ぶことが出来るのか聞いてみるとあっさりと首肯したため、どうやら飛ぶらしい。魔法とあわせて考えると、厄介な相手のようだ。

少なくとも、素人が相手を出来るような連中じゃないだろう。

「で？その翼人とかいう奴らは何をしたんだ？」

「近隣の村の者が森の木を切ることを妨害している。」

「なんで？」

「その森が、彼らの壻であることが推測される。」

タバサは書簡を眺めながらそう言うのと丸めて鞆の中に放り込んだ。俺はというと、タバサの話聞いて題名は忘れたが、人間が土地を開発したせいで住処が無くなった妖怪の話を出していた。

何処の世界も持つものと持たないもの、奪うものと奪われるものの構図は変わらないか。

平行線な価値観は容易に争いの火種になる。

妥協できないものを無理にそうさせようとするれば、戦争になること

は火を見るより明らかだろう。

さて。どうやら吸血鬼のときとは違って話し合いの余地はありそうだが、しかし急いだほうがいいかもしれないな。

タバサに読んでもらった内容では、今のところ村人と翼人の間に死人が出るような争いはないらしいが、しかし互いに不満は溜まっているだろう。それがいつ爆発するとも限らないし、仮にそんなことになったら先住魔法を使える翼人が圧倒的に有利だ。

ある程度実力というものが拮抗していれば迂闊な行動はむしろ避けるものなのだが、しかしそれすら理解出来ないレベルでは自分から死地に飛び込もうとするかもしれない。

そうなつたら、お互い引くこともできずに潰しあい、いや、一方的な蹂躪になるだろう。

冷静になってほしいところだが、しかし血を見てからではそれも難しい。

どうしたモンかねえ。

「今回は、出来れば穏便にいききたいとこだな。」

俺が忌憚の無い意見を言くと、タバサが頷く。

とはいえ血生臭いことになっても俺は、多分躊躇せずに殺すことができる。相手が人間であれ人間以外であれ悩まずに刃を振り下ろすことができる。

でも、それは多分俺だけの話だ。

いくらタバサが年齢に不相応なくらいに冷静な性格であったとしても、それはあくまで不幸な生い立ちが彼女に演じさせている仮面に過ぎないのだ。

彼女の心は彼女が装っているほど、完璧には凍り付いていない。

だが、俺が失敗すれば彼女はその仮面を本当の自分と錯誤していくことになる。

他ならぬ、自分を守るために。

あの吸血鬼を始末した後、俺はそれを思い知らされることになったのだから。

俺に刃を振らせたことを悔やむ人間がいるかもしれない以上はそうならないように考えなければならぬ。

武器を取ることは別に最後にだつて出来るのだから。

自分出来ること、しなければならぬことを間違えないように。

そう、何があつてもあんな風に矢と魔法を向け合つてはならないのだ。

………つて待て。

今、何か見えたぞ？

瞼をよく擦つた後、視力を強化して前方を覗き込む。

木々が邪魔で見え難いが、ここから一時方向に直線距離で8キロほどのところで木の葉が不自然な動き。

風の魔法か？矢も同じように舞い上げられている。

魔法を使用しているのは恐らく翼人か。

そして、それを相手に矢を放つておいたら、近隣の村の住人で間違いないだろう。

「……シルフィ。ちょっと急いでくれ。もう小競り合いが始まつてるみたいだ。」

俺はため息をつく、そうシルフィに頼んだ。

一応、最悪の事態は避けられたようだ。

その場に降り立って一番最初に確認したのは、村人と翼人双方の死者の状況だ。

幸いなことに、どちらも傷を負つた者はいないらしい。

「ガリア花壇騎士、ロングビルだ。双方、矛を収める。」

どちらにも牽制出来るように双剣を構えたままタバサから借りたマントを翻し、俺は言った。

本来なら俺が騎士役をするのは前回だけだつたのだが、我俣を聞いてもらったのだ。

俺自身が彼女のような子供が鉄火場に立つことを嫌つたためだが、

しかし代わりに彼女が俺の従者として同行することは認めさせられた。

勿論、タバサもなんの理由もなく応じるはずもないから、タバサの外見では子供だと思われるから、舐められるとか色々と言いつくすることになった。

そういえば、言い訳していたとき、タバサの目が妙に怖かったのは気のせいだろうか？

無表情でありながら、凄み、とでもいうような空気を醸し出していったような気がしたんだが。

特に怒らせるようなことを言った覚えは無いから、気のせいだろうけど。

突然登場した俺に対し、二つのグループの反応は対照的だった。

村人たちは希望と困惑、翼人たちは敵意と嘲りか。

「騎士さま！来てくださっただんですか！？」

村人たちが問うが、しかし俺は村人と翼人、双方に向けた剣を下ろさない。

俺が村人に味方すればパワーバランスはいっきに逆転するが、それでは極端から反対側の極端に代わるだけだ。

それじゃあ、意味が無い。結局血が流されることになる。

それしか選択肢が無いというのなら、ともかく。今はまだ話し合える余地は残っているだろう………、と思いたい。正直、書簡に載っていた以外に手遅れになるような事態が起きていないことを祈るばかりだ。

この世界の神様の名前なんて知らないし、格別信じてもないから効き目は薄そうだけど。

「勘違いするな。俺は確かにこの地での任務を受領したが、とりたててお前達の味方というわけじゃない。」

俺が厳しい顔をしたまま言うと、村人たちの不満が爆発した。

「そんな！」

「あんた、なに考えてんだ！？」

「鳥野郎の手下にでもなるつもりか!？」

今の俺は一応貴族の役なのだがそれに対して結構な台詞を吐くものだ。

頭に血が昇っているせいだろうが、物理的に血を抜かれないだけマシだと思つて欲しいんだが。

「なら、お前達は何故ここにいる?それも態々殺しに来ました、とても言わんばかりに全員が武器を持って。相手を殺傷出来る得物を持って話し合いの席に立つのがお前達の村の流儀か?血を見たいのなら俺はこの場にいる全員に等分に血を流させるが。」

俺がそう言つと、凶星だったのだろう。何人かは顔を背けた。

人間、誰しも後ろめたい部分に触れられればそれがいかなる意志に基いたものであつたとしても途端に口が重くなるものだ。

過程がどうあれ、結果彼らがしようとしたことに変化は無いのだから。

しかし、どこにでも馬鹿はいるものらしい。いや、むしろここで引いたら自分たちは破滅だと思つているのかもしれないな。

「ヘッ!口だけならなんとでも言えらあな。だいたい、騎士様だつてこと自体が怪しいぜ!！」

「そうだそうだ!それにアンタだつて貴族とはいえ人間だろうが!」ある種、自分たちの危機に敏感で、過剰な反応をとつていると思えなくも無いがしかし開き直るのもどうかと思う。

つまるところ、彼らは俺に翼人たちを皆殺しにするか棲家から追いつ出すかしろと言つているのだから。

それに、言つているのは総じて粗野な雰囲気を持った者たちだ。ほとんどのが男性で、女性も多少は混じつているがいずれも険しい顔つきをしている。とりあえず、お近付きになりたい類の人物ではなさそうだ。

とはいえここまでゴネていたら、話し合いの席に着かせるのも難しそうだ。

首根っこを掴んで無理やりテーブルに頭を押さえつけて交渉をさせ

ること出来るが、それは後々面倒なことになりそうだし……。

「だからどうした？お前達が先に武器をとったことは間違いないだろう？それに、自分を助けた相手に噛み付くとは、何を考えているんだ？」

「ふざけるな！あいつらが、おれ達に木を切らせないから、おれ達はおまんまの食い上げになってるんだぞ！悪いことは言わねえ。ねえちゃん、役に立たねえならどっかいつてくれびゅっ！？」

とりあえず、NGワードを口にした村人Aに対し、持っていた双剣を二本とも投げつける。

一応加減はしたため、剣は彼の真後ろに立っている木の幹に突き立ち、ビイイイイイインと振動しながら音を発ている。

本人は自分の顔の左右で音を発ている剣の存在に気付き、恐る恐る頬に手をやると、そこにべったりついた血を見て悲鳴をあげた。左にも右にも逃げられないまま、その場にへたり込む。皮一枚切れたくらいで大げさな。

「どちらかが全滅するまで殺し合いがしたい阿呆は前に出る。俺が、全力でひき肉にしてやるから。」

全く抑揚の無い声で俺が言うと、村人も翼人も黙り込んだ。

さて、ようやく話し合いだ。

穩便に……出来た、かな。なんかタバサの視線が痛いような気がするのは気のせいにしておこう。

追求しても、愉快的答えは出てきそうにないから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3689p/>

旅立ちはある日突然に

2011年7月7日18時06分発行